女子文壇

第一増刊

六年第三號



若き婦人

明治四十三年[illegible]月廿四日印刷納本（毎月一回廿六日印刷納本）
明治卅七年十二月十九日第三種郵便物認可

女子文壇 五月十五日 第二增刊



▲原稿募集の大要

都會の趣味、都會の情調、都會の印象等凡て婦人を中心とし、都會を背景としたる文章、及び都會の生活、都會の女學生、都會の風俗等凡て記實を旨とし、都會を觀察したる文章を募る。原稿は二十四字詰、二百行内外とし總て假名を附ける事、

報酬は一等正金二拾圓、二等正金拾圓、三等正金五圓を呈す

投稿締切 三月卅一日（最終便）

別に小說（二十四字詰百五十行迄）散文（二十四字詰百行以内）詩、和歌、俳句の五種の創作を募る、**報酬**は五種を通じて一等十圓、二等五圓、三等三圓、四等二圓、五等一圓の價格に相當する品物にて寄贈す、小說は總振假名つき、和歌と俳句は一人十首限りとす。

（但し創作は都會の意味を含ませる必要なし、題材凡て自由なり）

紙上の匿名は自由なれど、原稿の一端には住所氏名を明記すべし、原稿には『都會の婦人原稿』と朱書すべし。▲賞品贈呈は發表翌月末の事。

募集發行所 **女子文壇社** 東京市京橋區大鋸町

女子文壇第一増刊 若き婦人 目次

早春



三好トシ子筆

文學士 久保天隨先生編述 （最新刊）

評註細評 現代才媛文範

全一冊 菊判總クロース頗美本 紙數參百六拾頁 正價金壹圓 小包料八錢

紫姫清女等平安朝時代才媛頗る多く、梅櫻桃李一時の盛を極むと雖も其の文は純右華麗に過ぎ、直に移し來つて、今日の模範となすを得ず、本書は特に此點に注意し主として現代に盛名ある**女流小說家、教育家**等の作品を擧げ、**詳註**を施し**細評**を加へたるものにして**周匝親切**殆んど其の比を見ず**詞藻の美**を増すのみならず亦た以て**優媛**の**才情**を**涵養**するに足る加之數頁に亘れる叙說は串貫、詳備議論新警一部の**日本女流文學史**として優に價すべし。

本書揭載の才媛 井上通女、正親町町子、弓屋倭子、荷田蒼生子、鈴木武女、荒木田麗女、只野綾女、大塚楠緒子、三枝斐女、小川直子、若松賤子、棚橋絢子、田澤稻舟、中島湘煙、小金井喜美子、税所篤子、北田薄水、三輪田眞佐子、三宅花圃、下田歌子、樋口一葉、

文學士久保天隨先生編述 ●詳註細評 **現代名家文選** 全一冊 正價壹圓四拾錢 小包料金拾貳錢

糸左近先生著

作文の教へ （訂正再版）

全一冊 菊判洋裝美本 紙數貳百五十頁 正價五拾五錢 包料八錢

本書の特色 （一）上手に文を作る方法を理論的に說いてある。（二）其の例を擧げた名家の作でも一々意義を解釋し且つ其の善い理由を詳かに示してある。（三）例文は實用文裝飾文詩歌發句俳諧小說何んでも選べてある。（四）篇頭には新らしい熟語を載せてある。尙文體は古文近世文言文一致體何れにも通ぜらるゝこと等。

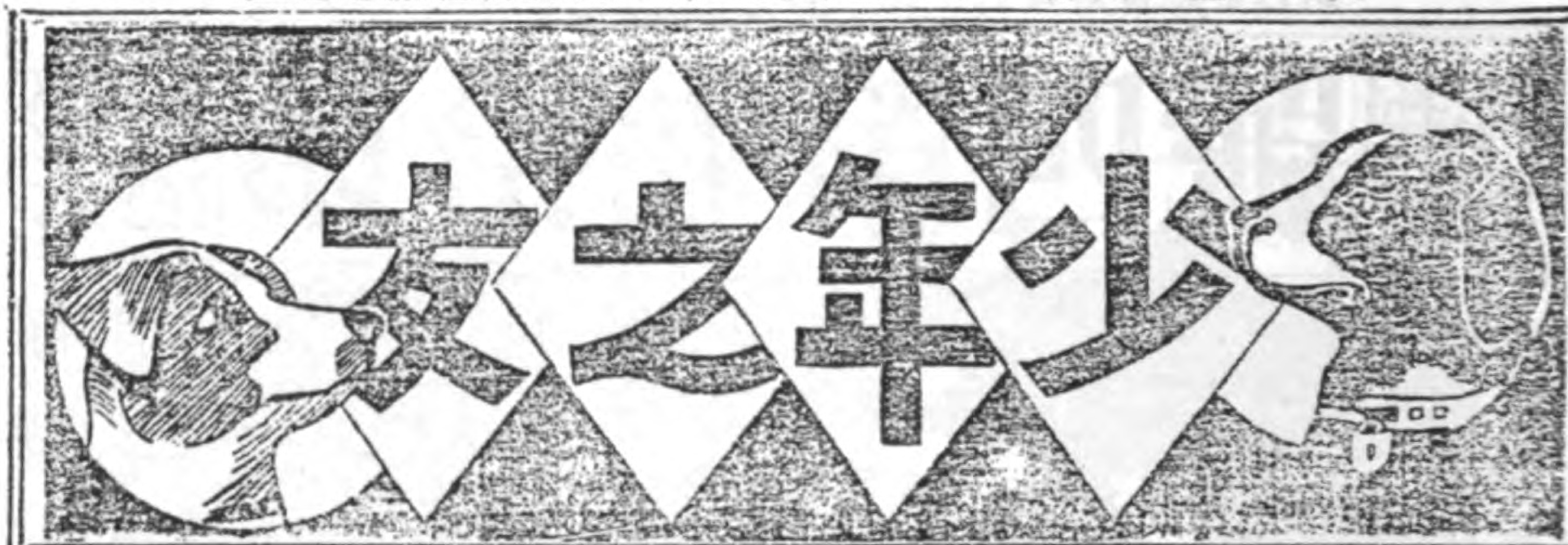
京都大學教授文學士 島文次郎先生著 ●**演劇十講** 全一冊 正價四拾五錢 郵税八錢

發行圖書目錄入用の諸君は郵劵二錢又は往復葉書に限り進呈す

發行所 東京神田今川小路 **金刺芳流堂** 賣捌 東京堂●武藏屋●芳進堂●大阪 吉岡●三宅



女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ



◀二月一日發行 五巻貳號（價）一册郵稅共金拾壹錢 六册同金六十三錢▶

美麗な口繪

◉悽絶快絶 獅子吼……（原色寫眞）

▼淺間山上より▼犬之種類▼變な顏▼諸國風景寫眞帖（其二）

◎新作お伽 魔法の木の葉（繪入色刷）……水野葉舟

◉少年小說 ジヨンの行衛……矢部白雨

▲川中島の一騎打 村田犀川 ▲二つの袋……加藤白光

◎淺間山大噴火に遭遇したる實驗談 木村思水

◉面白い蜘蛛の研究……太田秀峰

▲野ざらし……草村小枝女 ▲蓄音機の歌……夕ぐれ

▲畫ばなし……竹久夢二 ▲お伽芝居 犬のてがら……石井愕堂

▲朝鮮人はなぜ白い衣服を着てるのでせう？ 海老沼雨華

◉冒險實話 鰐が仇……掬芳散史

▲動物と鏡……一白生 ▲世界奇聞……思水漁郎

▲寫眞解說 ▲お歌會始め ▲少年新聞等其他面白い記事

◉少年文壇

△普通文△短文△和歌△俳句△短詩△笑ひ話△考物△少年クラブ△懸賞披露

（中付の三）

發行所 東京神田旅籠町一丁目 文光堂（振替口座一九五五）

賣捌 東京堂○北隆館○上田屋 東海堂○良明堂○至誠堂

花冠

篠田華水子君

鈴木春子君



石渡敬子君

松田梅子君

花冠



藤田白浪君

玉島せき子君

普門こう子君

工藤野ばら君（七年前撮影）

早川花子君

齋藤志満子君

細野鈴蘭君

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

二巻第貳號 二月號要目 一日發行

（後付の二）

發行所 東京京橋區大鋸町 女子文壇社 （振替口座第壹七弐九番） 最寄書店になくば直接御申込を乞ふ

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

大好評



少女



（毎月一日發行）定價一册拾錢 送壹錢 半年郵税共六拾三錢（口繪挿畫澤山）

一月元旦發行 二巻壹號 新年號要目

新年附錄 宮崎與平氏筆『本誌二倍大の額繪（原色密刷）少女犬に戯る圖』を添ゆ▲外皇族、名門、名士の少女寫眞六頁

少女文壇（二）
◎文章 ◎詩 ◎少女實驗談 ◎日記 ◎筆蹟 ◎世事問答 ◎手紙文 ◎圖畫 ◎少女くらぶ ◎和歌 ◎笑話 ◎繪さがし ◎俳句 ◎少女料理 ◎繪探し答案

發行所 東京京橋區大鋸町 女子文壇社（振替口座第壹七貳九番）最寄書店になくば直接御申込を乞ふ

女子文壇第一第二第三増刊（好評嘖々）

新美文

全一冊美裝 定價金貳拾錢 郵稅壹錢五厘

口繪 入選作家十二人寫眞 及石版彩色樂譜三隅錐 密刷

現代の若き女子は如何なる感情を抱きつゝありや又如何なる趣味を持ちつゝありや之を窺んとする者は本書を見よ、或は家庭を材とし或は自然を描き或は人事を歌ひ或は都會を寫す百人百様の觀察は讀者をして送迎に遑なからしむ、選擇の嚴正にして批評の痛切なる蓋し最新式の文章を學ばんとする者には無双の寶典たるべし

附錄

◎小寒日記……薄田泣菫
◎裏の家……吉江孤雁
◎憧憬……小川未明
◎一轉機……高須梅溪
◎女床屋……兒玉花外
◎拾て犬……岡田八千代
◎火葉……澤村胡夷

短篇小說

全一冊二百卅頁美裝 當選作家十一人肖像原色版

定價金貳拾錢 郵稅壹錢五厘

懸賞傑作

▲奉公人……島崎藤村作
▲水死……森田草平作

◎破疊……秋葉清子
◎女容……加藤貞子
◎町の出水……赤崎愛子
◎桃代……佐藤増子
◎朝顏……吉田駒子

其他美文、書簡文、新躰詩、日記文、和歌、俳句、論文、小說總評等豐富滿載

女子名文 新作家



口繪 原色名畫頗鮮麗 入選作者十七人寫眞光澤紙密刷

全一冊美裝 定價金貳拾錢 郵稅壹錢五厘

若き女子が大懸賞應募の小說、美文、詩歌俳の文藝を興味ある新式編輯法にて統一せるもの。別に日課表あり登載各自の住所年齡家庭等作物と對照し其人物を一目瞭然たらしむ。

附錄

◎闇の夜……服部貞子
◎敗者……加藤菊子
◎火事……永代美千代
◎氣まぐれ者……太田樂子
◎新粧……尾島菊子
◎六月……山田くにえ
◎姉……故田中久子

東京市京橋大鋸町十二番地 女子文壇社出版 （振替口座東京第壹七貳九番） 賣捌全國書店

作文之最良材

女子文壇社編輯局選

女子懸賞文集 第二

中判五百頁 特賣價金貳拾錢 郵税六錢

（各殘本は僅少なり賣切れると絶版す）

懸賞文集 文壇の光

大判二百四十頁 特賣價金拾錢 郵税一錢五厘

世に作文書多しと雖も、妙齢花の如き少女の手に成りし生きたる作文作歌の良書は此等を推して其優なるものとす、女子平生の心掛として優しき文章を學ばんと欲する者は來りて本書に親しめ、新時代の新文藝に接觸せんと欲するものも亦本書を繙け、此の如く廉價に此の如く容易に、作文作歌の道に入るの法は殆んど他になし、敢て之を提供す

美文作法

大判二百卅頁 特賣價金貳拾錢 郵税四錢

東宮侍講本居豐穎先生題詠、文學博士小杉榲邨先生序文
下田歌子先生題歌 國學院學士小森松風君編

殘本僅少 賣切れると絶版す

美文の作り方を最も明瞭に解説し、加ふるに大家の名文を模範として擧げたれば、文章を作り、文章を愛する者には寸時も座右を離すべからざる良書なり

報知新聞記者 中村木公君著

實地精査

女子遊學便覽

女學校長寫眞肖像入

特賣價拾五錢 郵税四錢

殘本僅少 賣切れると絶版す

子女を東京に遊學せしめんとする父兄も之を讀め自ら學校の選擇に迷ふ諸孃も之を讀め、一讀釋然として東京女學校の消息を知悉するを得む

東京市京橋區大鋸町十二番地 女子文壇社出版 （振替貯金口座東京壹七貳九番） 賣捌 全國書店

文學に親まざる女子は品格低し

女子文壇

毎月一日發行 外に年四回増刊

（口絵十枚鮮麗）

定價一冊拾五錢 郵税壹錢五厘

二月號 第六年第二號 一日發行

本號要目

其他青春の女子が熱血を注げる

懸賞應募

の詩文百餘頁は雜誌界唯一の奇觀也

内容充實

實物に就て見よ論より證據

各號好評

發行元には取揃あり

發行所 東京京橋區大鋸町 女子文壇社（振替口座東京壹七貳九番▲電話本局六〇七番）最寄書店なくば本社へ注文を乞

（後付の八）



此一冊を現代の若き婦人に薦む

記者

若き婦人

女子文壇

第一増刊



二十才の聲

筆子

咲子様に

咲子様、免職ぐらゐに悲観しちや可けませんよ、だが世の中を渡る武器は健康といふ事ですね、貴女は實にこの武器が鈍かつたのだと、染々御同情しながら私も又、健康なるが爲め、日々の努力に知らず〳〵元氣を消耗してる、私等事務員の境を脱した貴女は、反ッて幸福て被入るかも知れません。私も相變らず江戸橋を渡つて行きます。冷たい風、濁つた空、汀の枯柳は折ふしの盛衰を默示します、赤煉瓦や白壁の土藏が丁度、芝居の書割の樣に連る下を、紺碧の水が流れて居る、落日の影は此邊にまばゆい。共同便所の傍の屋臺て、おでんを食べてる車夫、もやつた舟から細々と立つ烟、捨石にぐつたり寄つた、立ン坊の勢のない顔がこの夕暮を代表して居ます。かくて私は物思はず居られませうか、來年は二十才になりますに、依然として袴姿、恥しいてはありませんか、「人はパンのみに生くるものに非ず」と聖書にありますが、私等の樣に現

實の生活難に當りましては、精神の修養、意志の鍛錬より、何よりかより、如何にして增給されるべきかの問題に頭を費さねばなりません、だから照魔鏡に掛つた私の心はまあ！修羅の炎、餓鬼の爭ひ、而してお金が慾う御座います。此年末決算て三千圓ばかり餘得が出來たから、何か事務員の娛樂の方法に費消しやうと話がありました時、異口同音に現金てほしいと、云ひ出して、大笑した事がありますが、可笑しいどころか深窓のお孃樣なら、夢更這麽智惠は出ますすまい、けれど、私達とて神樣が、同じ少女にお作りなさいました而已ならず、私も一度は深窓の下に生長つたものてす思へば〳〵、煩悶せずには居られません、私の心は日々に荒んて行くのてす。噫生存競爭、貴女も私も到底この語中の人たるをまぬかれません私は寂しう御座います。朝早く、葭町の口入宿の混雜を見まして、一人前の男てさへ、求職の爲めに苦しんて居るのだな、と思つて私は辭職する勇氣は更にありませんのてす。あゝ飛んだ愚痴を申上ましたね…。どうか御病氣を御大切に。

日記帳

九月二十三日。食堂會議が始まつてる處へ、私が這入と皆の視線が、一齊に此方を向ひて、「今貴女の事を同情してたのよ」と云ふ、「さう、奈何して？」と何げない顏はしたが、乾度Nさんの昇給の事だなと知つた、果して「だつてね、Nさんは貴女と一緒に這入つた癖に、ずん〳〵昇給するんてすもの」とAさんが云ふ、「そりやあね…」と水呑へお茶をつぎながら、Sさんが意味ありげな微笑をした。「口惜しいぢやありませんか、貴女本當に復が立つてせう」と皆が私の心をそゝり立てる樣に云つた。それも眞の同情か、其塲のお世辭か…私には侮辱せられた樣に感じた。弱者は人の同情に生きるかも知れないが、私は弱者になりたくない、然し、強者たらんと欲しても、此一件に同情され一同の眼から憐れむべき人間に、見られたのは如何にも心外だ。實の處Nさんに對して、私はいゝ心持はし

て居ないのだけれど、扨こうなつて見ると、勢私は、「何有、口惜しくも何とも無いわ」と云はざるを得なかつた、私は斯くて感情を僞つて、殊に頓着せぬ風を裝つては居るもの丶、自ら心の動搖をどうして鎭め得やう、私は這麽夢を見た。洋々たる青海原に二人て船を浮べた、早くも空の雲ゆきを悟つて、うまく楫をまわしたのはNさんだつた、と俄然雨が降る風が荒れる——私は眼が覺めた。あ丶敗者！實に世渡りの下手なかわりに、私は善人なのだ、芝居なら幕毎に、人に押し退けられては悲慘な運命になる、主人公て、觀客に手巾を絞らせる役てあらう……と秘かに苦笑を洩らすのてあつた。

十一月二十九日、　上役又は友人間の、不平や懷疑をあからさまに曝露し得ぬ私の餘憤は、遂ひに家庭に於て破裂する、一躰に鋭くなつた神經は、たとへどんな幽かな響でも、偶と胸にふれる、さあ、くら〳〵と動いて來る、動いたが最後どうにも斯うにも自制力ては追ひつかぬ、結果は涙だ、無理を云つて、母を怒らせては一人て泣く、氣嫌をとられ丶ば蒼蠅く、と云つて、放つて置かれ丶ば猶腹が立つ、何と云ふにえきらぬ性分だらう。丁度正午の事、用達から歸つて來た母は鐵瓶に障つてみて、「おや、ちつとも湧いて居ないぢやないか」と火をほじりながら「螢の樣な火、仕方がないね」とやをら消炭を採りにかゝる、どうしたのだか、私は無性に疳癪が起つて「善く湧いてたんですよ」と苛々して怒鳴つた、「何、湧いてるかね」と母は薄笑ひするので「私つかやあしませんよッ」と云つて了つた。果して母はむつとして「誰も使つたとは云ひませんよ、又使つたッて可いぢやないか、何故お前は那麽妙な根生を出す人だらう」と歎息する。

こんなくだらぬ爭ひから、私はぷいと飛び出した。權現社内の空林には落葉焚く烟りが靡く、近い生垣の中から、ホロ〳〵と寢ぼけた樣な尺八の音は、おぼつかなく六段を吹いて居る、だん〳〵と感情が鎭まつて來ると、突としてあの老ひたる母の面影を、ひしと胸に畫き出した、「あ丶お母さん」私はいはれぬ寂寥を覺

えて、聲を呑んて慟哭した。

印象記

四日市を通る、先づ鼻につくのは鹽鮭の香て北海道商會から、輕子がせつせと積荷を運んて居る、棒手振りの天秤棒、笊が籠が一寸觸つても喧嘩腰にわめき散す河岸の雜踏を、文明の利器の自働車が凄しく、本局へ横付ける、門松〆飾縁喜物の小屋掛した商人は、向鉢巻て景氣をつけるが、不景氣の餘波は論なくこゝにも及ぼして居る。世間が奈何でも、給金の取りはぐれのないのは務の人だと、誰やらの蔭口を私は思つて苦笑した。水色に澄んだ師走の空を響かせて、日本橋際の、氣送鉛管の原動機が轟々と鳴つて居ます、私は未だ、鮭や鱈の相場より、三越や松屋の陳列品の花やかさに眼もくれて、慾望の念やみがたく、大通りの賣り出しに、旗燈灯、大安賣りの立札を有頂天に眺めて居る位、否私ばかりじゃなく、誰しも女の身は恐らく此念は絶えぬてしやう。女子の罪惡、品性の墮落、原因は金剛石の光、錦繍の袖に虚榮の瞳を輝かしたいばかりてしやう、新聞て叩かれた女優の某の記事は痛切に私の胸に泌みました。「もう決して女に生れませんと不如歸の浪さんが最後の叫び、私もまたこゝに繰り返します、本當に弱い〳〵感情の脆いもの、女一生はどうで、「誘ふ水あらばいなんとぞ……」浮草の迷ひ安いものて御座いましやう。私は最近の二つの事實を得まして、又更に悲痛なる感にせまりました。從姉のお靜さんは、突然病氣と云ふてお邸を下つて來ました、其後伯父伯母の顏は俄に暗愁の色に閉されました。伯母樣がわざ〳〵手兒名樣へお腹帶を頂きに行つたので其病氣とは……感附いた私は餘りの意外に、あつとばかり仰天しました、一日訪問しましたら、あの兄弟にそつけなかつた、小兒嫌なお靜さんが、末の子のお相手して、お面をかぶつて、踊つて見せてるぢやありませんか、私は何だかそれが身に泌みて、可哀相に感しました、弱いものです、人生婦人の身となる勿れとは何かの言葉てしたね、お靜さんは、「私が惡るいんてす

けど……いくら家でも肩身がせまくつて……」と泣きました。

も一つは親友のTさんの事て……。Tさんは随分嚴格な人と思つたのです、例の男女七才にして席を同じふせずと、主義の様に、異性の噂なんかには、ぷいと傍へ反れたもんてしたが、それを悉く虛僞の行爲でありました、私はうまく欺かれて居たと思ふと口惜しくてなりません、Tさんがある鐵道驛員と親密な關係は爭はれない事實が上りました、私は憤然として、絶交狀を書きかけましたが、あゝTさんも脆い女てあつたと思ひかへし、同時に寂寞なる印象は胸中に深く廣がりました。寂れた中にこんな幻影が浮び上る。

雪の原野、青い燈火が明又滅、荒涼たる滿洲の宿舍に、彼の人の妻として在つた方が、私は現在の境遇より幸福てありましたろうか、否、否、それは執着、迷ひの絆、冷然としてあの人の戀を容れなかつた身も、思へば淺墓なものて御座います。仇し野の露、鳥部山の烟となるまては、矢張り消え殘る煩惱のほとぼりてす、日々の生活難て、阿字の關をも透徹せず、キリストの洗禮にも浴さぬ私は、すさむだ靈荒びはてたる心氣、眼に映じた近しき異性は、川崎樣、松村樣、けれ共其缺點ばかりが見えるのです、母なぞは、誰でも裸體ていゝと云ふ人があるなら、私を直に嫁にやるなんて云ひますのが、私の自尊心を甚だしく害します、私は輕々しく、あの人の妻とならなかつたのを誇と致します、必ずしも滿洲の生活は、私の理想ては御座いません、結婚が戀愛の墓とはよく云つたものです、處女らしい羞恥は、結婚後の女性に到底見る事が出來ますまい急に世帶染みた因循姑息、一定の鑄形にはめられた女房氣質、それに私は滿足しては居られません、けれども、前申す通り私の心はすさんて居ます、あゝ花爛慢の季を埋れた身一つは、紅葉を散す凩の蕭々として終に、私は戀しらぬ人として終るのかも知れません

いつぞや、窓下を通る職人の連が高調子に、「だが何だなあ、女も二十才の聲を聞いちやおしまひだなあ」と話して行きました。而して私も既う二十才てす、果して、もうお了ひなのてしやうか……。潮の樣に悲哀は高く低く寄せて來て、吾が行く道は寂しう御座います

朝に霞夕べの霧に聳えて高い三層樓を、通勤の行歸りに振り返つては、私の一生を葬る墓場の樣に、感じられました。（寂）

若き婦人



（一等）　氷戸市　玉川すま子



時代に覺まされたる一人

なのりそ

女、と言ふ觀念を抱く樣に成つてから、こちら、一日として心の晴れた日は御座いません。時には瞳が重たくて、物見るのすら物うい有樣、頭の中がたゞぼんやりて、物事に、兎角深く思ひ入るのがわづらはしい樣な、一種の苦腦をおぼえます。

雪が降るのも風が吹くのも面白くて、雪だるまに夢中に成つたり風に落ちる木の果をひろつて食べるのを此上もない樂しみとした幼い時代――男とも女とも思はずにあつた幼い時代――あの樂しい心には成れる日はありません。

紅の血がめぐつて居るのを知る樣に成つてからこちら、道を行くのにも何となく瞳のやり塲がない樣で、……私はどんなに驚いたで御座いませう、思ひもよらなかつた此變化を――。ものうい味を知り、暑さ寒さも烈しく身にこたへる……こうした變化に觸るゝたび自然の力に曳かれて居る、自分と云ふものに驚ろかされてなりませんでした、……けれど今はその感じやすい、驚き安い所を通りこして、心は日に日にかたまつて、暗い所に落ちてゆく樣な氣がいたします。

人の持つ子は持つても見たく、持てば人並みに白乳も出ようし髮もぬけませう。人並に經て來た女の心持ち、やがて人並に滅びてゆくので御座いませうか……私にはそれが又なく淋しう思はれます。

山の上に登つて見ますと、高く澄んだ空の境ひに、そばだつた山の巨大な起ち居、裾をとらへて靜に輝く湖の水と、並んで平らかな野は今秋の終りを燒く煙が、かしこにこゝに立ち登るすが〳〵しさ、好ましく群をなして森や丘や、みな丈高き木の簇を保存るやう

……たゞもう宇宙の奥の奥に、深く、こうした幽玄な天地がおかされずして有つたのだとまで、我故郷をなつかしみますがそれて都にあくがれぬ日は御座いません、心はいつも二重にもどつて、どちらもはなれがたき力と力を爭ふて居ります。

二十と成つた今日此頃かしこに嫁げ、こゝはいかに聞かれるたび暗い心に成つて、「イエ」とばかり答へておきますのを、人は何と思ふてか、つまらぬ取沙汰さへすると聞きます。

嫁入するには時がある、海の潮がさして來る樣に、「くれ」と促される聲に程よく乘らなければ生涯の婚期をとりはづしてしまひます、是ばつかりは時をとらへなければ、後で泣てもくやんでも、どうする事も出來ませぬぞ！さあ何が氣に入らなくてそういやなのか、わかる樣にお答へなさい、」

確たる父上の重いお聲、私の心は甲斐なくみだれます。人の力で左右されない潮の滿引を思ふと、はかない心だのみの影は虹の樣に消えて、暗く淋しいゆくてにふるへますけれど、それても目をつぶつて、迫りくる潮にとびこむ事は出來ません――わかる樣に答へろと云はれたつて、型にはまつた樣な、確たる信を持つて起つて居る人に、何と答へてよいのやら、よしんば牢に入れられたつて、私には答へる答がありません。立派な主義や理想が有つて、それによつて動かないのではないのですもの、たゞかすかに遠く、はかなき幸福の樣なものを感じて居る樣て、此まゝ目をとじ耳を掩ふて暗い暗い今の家庭に、囚はれてしまう事が出來ないのですもの、どうしたつて……。結婚するのを厭ふのじやないのですけれど、……私は我儘な子と云ふのてせうよ、きつと！不孝な子て御座いませうよ、きつと！けれどこれらのなやみを忘れて、たゞ「父」の名を思ふ時、なつかしさ戀しさに胸がふるへて、熱い涙が流れます――。

キリストでもない、孔子でもない！あゝこうした田舍に住て居る、はかない少女で御座いますもの、綾錦まばゆき衣ものぞましく、寶石のかゞやきは希望の光てあるかもしれません――エヂプトの尊い寶をのぞんて居る事は、並の人より深くも御座いませうか――けれど若もマッチのさき程の、燃ゆるものと並べて「どちらを」と示されゝば、私はマッチの燃ゆる生命をにぎります。

思ひなやむ此頃のわづらはしさ、一日として明るい

日を仰いだ事は御座いません、涙はあまり流れなくなりましたが、心はいつも悲しう御座います、何日癒されるともなく思ひなやんで、何物かに了解らぬ事を問ひかけられて、どうしても答へられない樣な、重い苦しい一日一日、……我知らず弟や妹の中に立ち交つて大きな聲して笑つたあと、或は縫物に氣をとられて、ぽつと成つて暮した日の夕方、堪へられぬ强い力に壓迫されて、慰めがたく許されぬ心になやみます。暗い沼のなかに住む、蠑螈の瞳の樣な痛いもだへ――退化――退化――追はれます、追はれます――此！此！心が……心が……。

山の奥に家をしつらへて、一生の食物をあてがはれ、起きて食て寐て、これで安まる心なら安いてせうに……今は世の中がおそろしい故に、なやまされる心では御座いません――。二度と生れぬ惜い此世に、二度とかへられぬ青春の時代――二十の年もゆかんとして、私のなやみの深さ大さ……たゞに生命を惜しんでなら得ようとすれば今、得られる、富と名譽の高い人に嫁いて、親を喜こばせ自らもほゝえんで、やがては自分に雛の樣にまつはつて來る、可愛いをさなごの慕ふものと成つて、かうして安心して死に就ませうに、――生物として意義あるらしい生を送ろうと致しますには今は大い犧牲の壇に、血を捧げてほろびなければならぬ時代で御座います――…あゝ、私は何となく筆をとつて、尋常四年の時敎を受けた女先生に長い手紙を書きました。或る日●

……………時代の進歩につれて夢の樣な世の中から、一人一人覺されてゆく悲しさ、……あゝあの小學校の廣い庭で、美しい花を握りもつて、「たれにか賣らん、我此花を――」とよねんなく歌つたのはもう二度と見られぬ夢の國で御座います、夢の國――夢の國――消えてしまつた夢の國のなつかしさ。覺めた私は再びあそこへ行く事は出來ないので御座いますけれど、はかない追憶の絲をたどつて、思ひがそこに至りますと、涙のこぼれるのを止め得ません。

あゝ先生の厚き御惠を頂いて、敎へらるゝまゝ直ちに胸にうけ入れた幼い時代がなつかしう御座います。絕え間なくたつてゆく時、かぎりなく進んでゆく世の中……あゝもう二十に成りました、大きい責任を双肩に荷つて、彼岸に渡らうと憧憬て居る青春の時代、たえず何物かに追はれてゐる樣な氣がいたします。いたづらに左右出來ない心の權威、眞面目になつて

新らしい時代に新らしい道を開いてゆかねばならぬ若き人々の重いつとめ……

先生！も一度昔の樣に小さく成つて、先生のお袖のかげにかくれたう御座います。

どんなわからぬ事も心配な事も、たゞ〳〵お袖にすがつて安んじた幸福な時代……なつかしう御座います心から。

あゝ私たちのゆくての遠いけはしい道!!思ふと心が覺まされます……

あゝ先生はこれを何とおよみに成つたてせう、父は永き眠りに入りました——あゝ！

あゝ何物にも慰められぬ此心、人に縋るとも充たされぬ此心、親はらからと共にあつても、都會のどよめきの中にあつても、どこへ行つてもかしこへ行つても、唯孤りでやるせない此心、此心を抱きつゝ年があけて、二十一になつて飄然と、都のなかへ迷つてきました、あゝ!!あゝ!!（貫）



女

はる子

静かな室に女が獨り居る。

窓の外、壁の外、軒の外、屋根の外に多くの耳が彼女の言葉を聞いてゐる、多くの眼が彼女の表情を見てゐる。

女はたゞ動搖してゐる、一つの眼は美くしくないと言つて去つた。一つの耳は同じことだと云つて去つたまた一つの耳はつまらないと云つて去つた、また一つの眼はわからないと言つて去つた。

まだ澤山の眼と耳とが殘つてゐた、それ等は互ひに批評しだした、其一つは沒交渉だと叫んだ、其一つはまあいゝから見てゐやうと云つた、其一つは面白いと云つて躍り上つた。

前に行かうとしたり、後に行かうとしたりする度に外の眼と耳とは共に動いた、動いたものは互に分つてゐた、けれども静かな室にゐる獨りの女が分らないと云ひ合つた。

もうよさうじやないかと云つて、皆去つて了つた、室には冷たい空氣が流れ込んだ。



ひとりごと

さつき

一度岡澤さんに行つて置けといはれたのにいまだに行かぬ、是非行く筈になつて居た佐田さんの園遊會、「其折お目にかゝつて、」と岡澤さんは仰しやつた、それも其朝になると何だか頭が重くて行く氣になれず、失禮とは思ひながらつい行かずにしまつた、それならばなほの事、此日曜には上れといはれて、ハイと承知はしたものゝ、あゝ、また、何とも云はれぬ厭な氣がさして、私は其朝、常に行く處にも缺席して半年許りおめに掛り度いと思つて居たまだ知らぬ御方を訪れ、いろ〳〵のお話しにせめて午前は嬉しく樂しかつた。けれどもいづれ一度は行かねばならぬのだと決心して、午後は岡澤さんをさして出掛けた。

二三時間奥樣と對話して歸宅したが、……厭な心地何ともいはれぬ心地。

根ほり、葉掘り、今の生活、平常の嗜好、學科のすき不好から、雜誌の種類、朝起の時間、料理はどんな事をするの、裁縫は縫ふだけだらうの、しまひにはお丈夫さうだが何も持病はないかだの、まあよく〳〵あれだけ調べられたものだ、腹が立つたけれども構ふ事はないと思つて少しは思ひ切つた事をスラ〳〵云つてのけた。

一體岡澤さんが伯母の家に私の事について云つて來て下さつたので、伯母は久しくお逢ひにもなりますまいから一應親しく逢つて話して、本人の樣子を御覽下さいましと云つたさうな、それで此間からやかましく云はれて行つたのだけれど、もとよりほんの御つとめに行つたに過ぎない、どうせこんな話、成立されてたまるものかといふ考へがあるから。

それにしても仲人つてあんなことを云つても失禮ではないものかしら、まあ莫迦らしい、そんな事は如何てもいゝとに角一應此問題について考へてみなければならない、どつちかと云へば、少し順は早い○○縣の醫者の方がまだいゝ、が、それにしても今度のやうにしてもなる事なら斷り度いけれど、もしこれを二つとも斷ればあとは來年廿一、はまだ〳〵習ふ盛り、決して急ぐ氣はないけれど、こういつまでも自分で自分をもちあつかう樣な境遇、つまり御心當りがございましたら願ひますと云はれて居る境遇に在るのは厭だといつてこのまゝつまらぬ（いろ〳〵の意味から）人にかしづいて、自分を沒却して了ふので…胸はさま〳〵に亂れる、ふと机上の「家庭日記」を手にとつて梨花さんの「二三日に定まる運命」といふのをしみ〳〵と讀んださしも熱烈な感情を抱いて若き誇にかゞやいて醉ふた樣に美しかつた君、漸々に實際生活に近かれて、（といふと少しおかしいでせうが）、其激しい變化、何故か私はホロリとなつた、此君今は嫁いで新らしい生活に入りたまふたと聞いては一入にいろ〳〵の事が思はれて私はつく〳〵羨ましかつた、憚るところなく詩に醉ひ文に熱を捧げて、忽ち醒めて庖丁とる事の出來た幸ひな方、あゝ、私は、つく〳〵羨ましかつた。

もとより全き心をつくして詩によふ事の出事ぬ私、さりとて醒めきつて捨てはつる事もかなひませぬもの私は獨身論などゝいふもの耳さへ傾けた事はありません、おとなしく緣づくものと知つて居ながら、緣のあるたび、あれてもない、これてもないと、擇り散らかして、はて此のさきを如何するつもりでせう、私はいま迷へる理性といふ樣なものを有つて居るのではなからうか、地位も教育もさして不足といふてはない、いえ〳〵、むしろ私には過ぎた人を云はれてもたゞ悲しくなると云ふのは、何故か、疊をほじつて顔を上げ得ないといふ樣な時代に歸り度い、見合の前日の轟く胸、眞に轟く胸を、も一度もつて見度い、結婚を重く重く考へてあまり大事をとつた結果が、今の此大膽さ男の寫眞を笑ひ乍ら批評するやうなものになつて了つたのか、と思ふと眞にりう子さんの樣な方が羨まれてならぬ。

職業によりこのみする氣はなかつたが、軍人だけはどうあつてもいやといふ事はかね〳〵思つて居た、其軍人だけれど、嫁からうか、人さへたしかなら、何も軍人でも、――元より何故といふ深い理由てきらふので

も何でもないのだから――恐れる事はない、あゝ、しかし。如何いふものか今まで醫師に縁深く、あの時も、あの時も、あの、あの忘れ難い記憶のも、

醫者は望まぬでもない、ならう事ならと思ふけれどいゑ、それも、これも縁だから、致方はない、もうあきらめて、‥‥

派手に交際して喜ばうといふ氣もなし、美しい衣服でぞろ／＼して居度い事もない、たゞひとつ、私の望は凡俗ならぬ氣慨ある人、世にあらはれてもかくれても何か事を成しとげやうとする人、眞から敬して事へる人に此まごゝろを捧げ度かつた、何が上手、何が得意、少しばかりの藝を吹聴してもらつて、財産幾何、月收何程、兄が何々、妹は何夫人、よさそうな事の交換て月並文句で私の運命を定められたくはなかつた。

どうせ、幸福な結婚をしやうといふには私はあまり多く考へすぎて居るか、淺薄に迷つて居るかのどちらかであらう、いゑもう構ひません、不幸な結婚に終つたら其時の事、格別失望もない、落膽もない、それに應じて程よくやつてはゆきますが。

ならう事ならまだ定まらぬ運命、やつぱり自分は可愛いのですもの。（眞）

男

きく子

男はたばこ入れをそつと手にもつた。中へ紫色、外がはへ黄色のもようの繻子をあはして不細工に縫ふてある黄色いたばこの粉がその口についてゐる。男は厭味のありたけをならべて一寸話のつづきを切り、ふとい指をさしいれてたばこの粉をつまみだして古い銀ぎせるのあたまにおし入れた。火をつけながら

ふふふふ‥‥

と鼻のさきで笑ふた。その眉毛は濃く太くへの字にしかんで、眼はその下におろりと冷酷な光を放つてゐる。細い白眼がちの眼ほど凄いのはあるまい。この男はそれて、ものをいふごとにいつもまじまじと對手を見すえて、鎌首をもたげた蛇の眼のあはやすきあらばの有樣である。眼につれて凹形のわに口がぐじぐじとふるふて人をぶべつする。

一體あなたはこの私を何と思ふとる

と口をきつてはつしと睨めつけてきせるを自暴に一つはたいた、もう色は青ざめはてゝ女は涙を流してゐる、一室は靜に暮れてゆく。

風が吹いてゐる。



樂に受けたる文部省檢定試驗

つゆ草

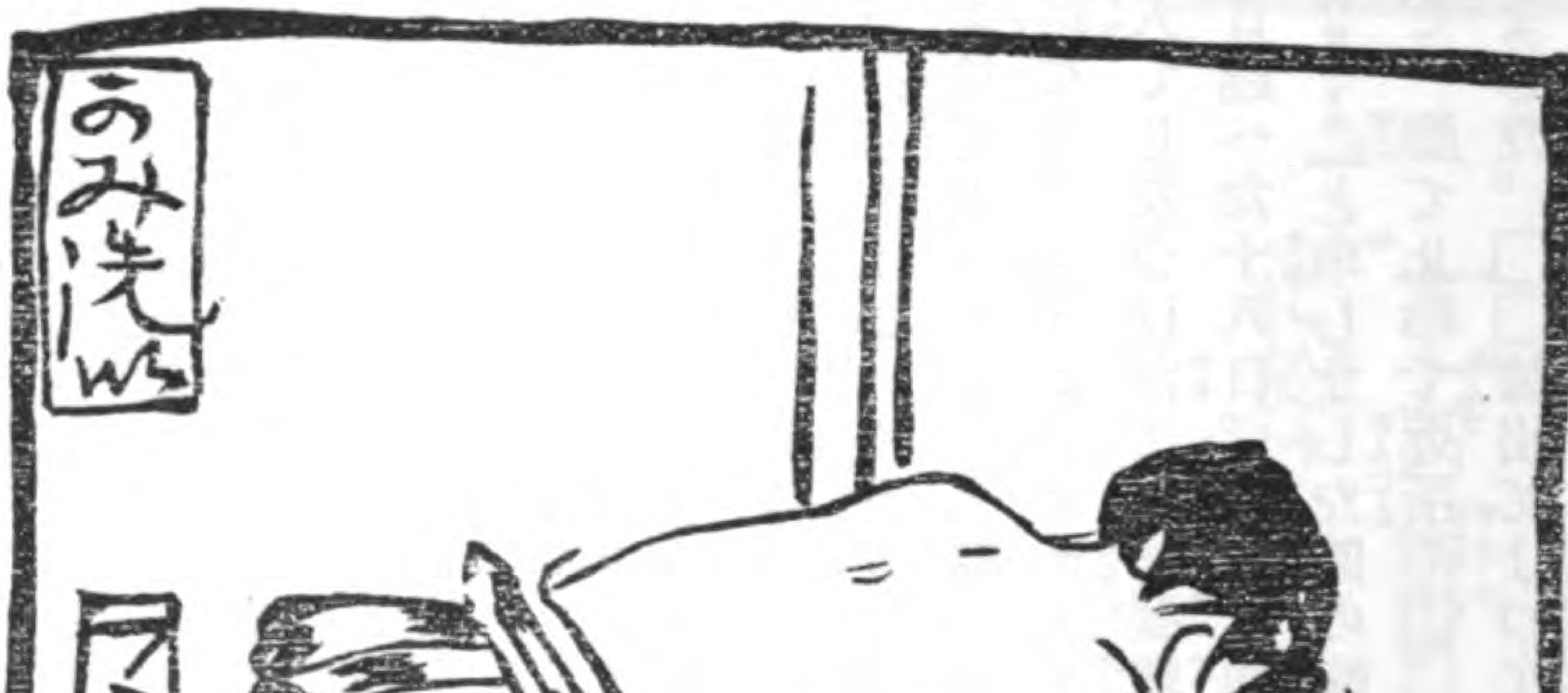
文部を何の目的で受けたかつて仰しやるの、オホ、、、御大相ねェ。目的も何も有つたものぢや御座ませんよ只如何しても逃れられない際で致方なしに……始めから教壇に立つ氣などは毛頭御在ませんの。第一此樣恥かしがりがどうして〳〵。最一緒に受驗遊ばした××樣ね。あの方はお年も組も上てしたしお自分から受驗るつてお心組で被入つたのですから、ちやんと目的が御有だつたかも知れませんが、後の三人は暇さへあれば遊び度い連中ですもの、夫に皆な女教師が大嫌ひなんで御在ますよ。未お若い獨身の先生は御姿も斯う滋味のあるハイかつた風て、御ものごしなり御講義なり活々して居て快く嬉しい物ですけれど、最早御子樣の三四人もお持ち遊ばす先生は。どうしても振つて被入ら無わ。御講義だつて千篇一律、つまらないんて御座いますわ。逐伺ひ乍らお舟を漕ぎ損ねて困るつて皆樣仰しやいます……アラ、オホヽヽまさか——漕ぎは致しませんよ。『あの色褪せた袴、生活に疲れた目、可笑な束髪、折目の無い着物、泣いてまつはる子を無理に殘して被入るのねえ可憐相に……おゝ嫌〳〵先生なんて嫌ねつて△樣がよく仰しやいましたつけ……全くねえ！

ですから、×樣がお受驗遊ばすとの御噂をちらつと耳に致た時も、物好きな位て氣にも止めませんでしたが——左樣て御在ますねえ、何ても卒業試驗が漸と終て是で輕々したと大悦して居た時でしたわ。○樣——と先生に呼ばれて御机の處に參りましたら『此度×樣が檢定を受けるから貴女も受けて御覧。△樣も□樣もするから——思ひ懸けない仰に困つてためらつて居り

ますと、恐がる事は無いよ。八月迄には充分準備も出來るし……諄々と御諭し下さるので――ぢやあ父に聞いて見ますから……とやつと血路を開いて御座に蹄つて△様達に相談すると――『嫌と云ふと意久地なしだと思はれて口惜しいから受けるとにしたのよ』と斯うなのです。ぢやあ私も奮發しませうかねと云ふ譯……。さうは決めながら、元々餘望まないので御座いませう如何して止す口實は無いかしらんと馬鹿な、考へ〳〵致しましたの。四月からは氣樂に成ると喜んでたのにとか、教員志願に付なんて願書出すのは見つとも無いとか、つまらない事を三人寄ればさはれば愚痴たらてしたの。願書も×様は早く御出し遊ばしたのに私達は何の彼のと、一日逃れを云つて先生に叱られ、最早二日で日限の切れる程に差迫つた五月二十三日に漸く……え〳〵。眞實にやんちやんて御在ましたの。其代に夫は無邪氣な罪の無い者揃で面白い組でしたわ。他組て羨しがつて居りましたつけ……どんな風か？つてオホヽヽヽ、まあ天機洩す不可……さうお安くは……ホヽヽ私？構ませんとも申上たつて……けれど花嫁様て澄して被入る方に御氣の毒だわ。昔のおいたを素扱いては……オホヽヽヽ。獨て思ひ出笑ひは罪だつて

宜うございますよ。お話が横道にそれて仕舞つて失禮豫備試驗は八月の二十七日。忘れも致しません。蟬のおぢい〳〵啼いた暑い〳〵日。今迄學校出の人て不合格の者は獨もないのですよ。もう〳〵そんな事があれば最早私の子にしないよつちや先生に云れるので氣が氣ぢや御在ませんてした。學校の名譽を落したらと考へると　四人揃つて文部の門をくゞつた時、わけもなく胸がどき付いて控室に待つ間足ががた〳〵戰慄へて……そんなに御笑ひ遊ばさないだつていゝわ。是て答案が書けるかしらと心配てした。何を受驗なさるのか男の方が大分見えましたつけ。未肩揚して五吋幅のりボン懸た私達が不思議だつたのでせうね。幾十の目がじろりつと四人に注がれて。何しに來たのでせうあんな子供が……と囁き合ふのが耳に入るので眞赤になつて端に片まつて居りましたの。其中時間だからと案内爲られた所は廣い階上の室。入口で『佛語科誰某』と自書した紙片を渡して席に付くと妙なもので御座いますね。しやんと度胸がすはつて波一つ立たない靜な胸に成りました。受驗者は私達四人と男子が一人、外に二三人被居る筈だがつて試驗官がお云ひてしたがどうしたか見えませんてした。八時が打つと、いよ〳〵問題紙

が渡され濕厚な老事務官から二三の注意が御座ました佛文和譯、和文佛譯の二種。八時より二時迄室は森閑と靜まり返つてペンの走る音計サラ〳〵。風が雨方の窓から思ふ樣吹き込んで一寸も暑知らず……は有難いんてすが、時々紙をあほるのには困りましたの。佛文和譯は一つは容易しかつたんてすけれど後の Une loi naturelle の方には泣き出し度い位てしたの。譯は正直私學校は不得手て御在ますの。和文佛譯は始から心配致しませんてしたわ。德川家康が家臣に此世て一番甘いものとまづいものは何かと聞いたらお梶の局が鹽と答へた御話、御存じてせ



（二等）髮あらい　麻布　津川婦美子

う——あれてしたのよ。夫に付って大變ひが御在ますの。□□樣つたら、お梶の局と書いて其上男性に遊ばしたんてすつて。オホ、、、隨分てせう。蟬時雨の降りしきる門内を出て吐息をつき乍ら四人ともしよげ返つてろく〳〵話もせずに學校迄參りましたの。だつて佛文和譯がとても通過しまひと思つたのてすもの。玄關上ると受持の先生が馳せて來て尋ねて下さるのてす御食事中か、白い前掛の儘。追々他の先生も來られて口々に色々きかれて恥しう御在ました。問題を見て、哲學めいてるから少し無理だねと先生が

仰しやつたので少しは氣が安まりしたわ。發表は九月末との事てすのに十月も過たのにまだなんてせう。斷念して仕舞つてましたら、十一月の十五日に新聞に名が乘つてたつて本鄕の義兄が知らせて呉れましたの。丁度病臥つて居た時てしたので猶更嬉しくつて〳〵堪りませんてしたわ。てもねえ。悦ぶと同時に本試驗ッ……とすぐ不安の思が迫つて、斯うしちや居られない早く準備しなくつちやと毎日もがき〳〵ても二月にがい藥のお仲好てしたわ。本試驗の成績が發表しられる迄は何てすか胸のかたまりが溶け無樣て嫌てした。え？本試驗の時のも話せつて……もう私いや——饒舌疲びれて仕舞つたから許して頂戴！夫ぢやあねまムの日記を御目に懸けませう。委しくはかいて有りますけれどつまりませんから其お積でどうぞ……一緒に受けた男？名が出てないから落なんてせうよ。オホヽヽ、薄鬚の生へたいゝ年輩の人てしたつけが……本試驗の結果が發表されたのは二日越へた十八日。官報を繰つてた兄が『おい〳〵出て居るよ』と申しました時の嬉しさ御飯も咽に通らないので一膳て止めて近所の□□樣宅迄官報持て飛んて行きました。□□樣出てよつてお玄關てせい〳〵云ひながら申すと、いきなり官報引たくつて、父樣〳〵出ましたく〳〵つて□□樣てば奥に馳け込んておし舞遊ばすんですもの……御飯食べかけなのよ、ても最早食べたく無いわつてね矢張仰しやいますのよ。誰の心も同じてすわ。今考へると可笑しいのてすけれど、其時はもう夢中てしたの……ては日記は此所に置きますから御隨意に……豫備より課目が増へてヽ面白う御在ます。（貧）

刹那

信濃　山本操

○

胸に湧くおもひはたえず山かげの泉なりけり君をわすれじ

○

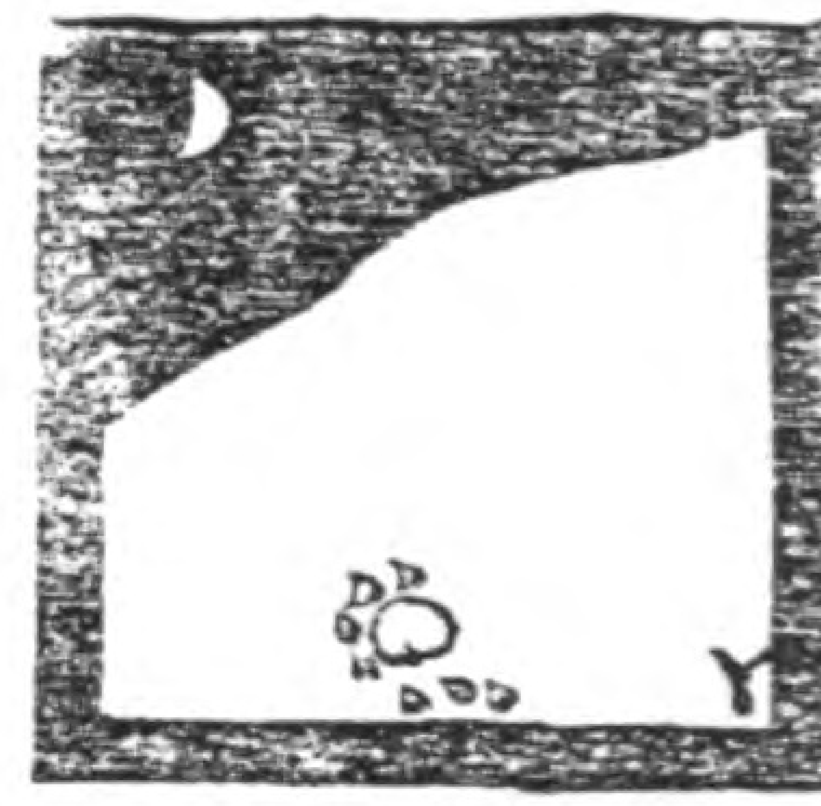
木枯の靜まりかへる其刹那わが身を襲ふ魔も來るらし

○

秋の日やものゝ聲皆わが胸に消えいる如く淋しさ覺ゆ

○

秋晴れやせまき山路の一角に白壁多き町を眺めぬ



富士の裾野に於ける 外國人一家の夏季生活

野ばら

二月餘りの暑中休暇を如何な風に過さうかといふ考へは常に私の腦裡を往來して居りました、幸ひ舊師(米國人)の知人(宣教師)が富士の裾野の別莊へ避暑に行かれるといふので御願してお供を致しました。

當地は停車場から青々とした田畑の間を蛇の樣にうねる狹い畔道を辿る事一里餘りの僻村て、大變不便で御座いますが、西洋人の別莊が幾軒かありますので、夏になりますと町の方から八百屋兼萬屋が來て店を出し升し野菜、鷄卵、炭等は農家て賣つて呉れます、魚類は沼津から汽車て新しいのが參りますし、牛乳屋もお豆腐屋も來ます、郵便は朝九時と午後の五時頃とに參ります、飲料水は山から湧き出る清いつめたい水晶の樣な水を鐵管て方々へ引いて居りますからあり餘る程て御座います當地の名物は白百合て花輪の大きな實に見事なのばかりです。山の中て御座いますから、割合に降雨が多う御座いますが、お天氣の好い朝には富士の石室まで見えます。土地が高く、樹木が多く、空氣の清いこの絶景の村は避暑には至極よい處と思ひました。

日々の行事

當家は主人御夫婦が七才と八才のお子さん女のコック、お洗濯係り各々一名、それから私はスクールボーイの樣な格て參りました、夏の間はごく簡單に生活をされますので働きも少ない方だそうですが氣樂な寄宿生活に馴れた私は始の中は隨分骨でした、先朝五時に起床、身仕度して客間と食堂廊下とのお掃除、終つて食卓てしらへ、食事のお給仕。朝御飯後は二階の寢室

四間のお掃除と寢床こしらへ、日本語の書信よみかき十一時過る頃から一時すぎ迄と、夕方五時半から六時半頃迄とは、食堂でお給仕致しました。時々は靴下等の繕ひ物が澤山出ますが、それらは大抵午後の時間に致しました。夜分は自由て、與へられた二階の六疊間て讀書なり裁縫なり勝手ですが、何しろ終日立ちづくめてすから、疲れが一時に出て、仲々豫想通りに勉强は出來ませんてした。

食卓と寢床

極く簡單な食卓のこしらい方は、まづテーブルの上にペエド(白ネルの布)をかけ、その上へテーブルクロスを掛けます、中央に花瓶を置く爲、センタピース(花瓶敷)を置きます、家によつて致し方がそれ〴〵違ひますが、普通は左の方へフォーク、右の方へナイフ、(刄の方を中へ向け)向ふの方へスプーン、フォークの左へパン皿へナプキンをのせて置き、ガラスの水呑はナイフの向ふへ置きます、食鹽入れは水呑の側か、フォークの向ふへおきます。

スプーン及びフォークは凹い方を上へ向けます匕は普通小さいのが二本、スープが出ます時は少し大きいのを附けます、肉が出ます時には、大きいナイフを側にそえます、尚ナプキンは疊んて輪具を掛けておくが普通て御座います、バタ、ジャム、お砂糖、胡椒入れ、各々適當の場所へ排置します、肉類と野菜類を入れるお皿は人數分家長の座へ置きます、肉類は大抵主人が切つて分けますが、野菜類はお給仕が一人々々へまわして取つて頂きます、お給仕の折は左から出した方が都合好う御座います、食後のお菓子が生の果物ならばフィンガーボール(指を洗ふ爲の水を入れた鉢)を出します、果物のナイフも別に出します、食器は熱いお湯てアイボリ石鹸をつけて洗ひます、金物は皆銀て御座いますから、玉子等が出ました折はまつ黑になりますので、一々銀みがきをかけます、硝子器や銀物は拭き方を殊に注意せねばなりません。

夏の事て御座いましたから、ベットもそんなに手間が掛りません、ベットの蒲團を一枚のシーツてよく皺などのない樣に包み、その上へ同じ位の大きさの白布(これは毛布の裏になります)と毛布をかけて、端を蒲團の下へ入れておきます、又埃が掛らない樣に覆ひの布を一枚かけておきます、蚊帳は殆んど要りませんてした、枕の中には羽毛がはいつておりますから、パン

をこねます時の如く、兩手て風がはいる様によく揉みます、寢具は晴天の折はよく日光に當て、シーツ、枕の袋は毎月曜日に取り換へます、月曜日には洗濯屋へ出す爲、洗濯物の種類と數とを數へ一つの袋の中へ入れてをきます、便器の始末から洗面用の水をも運ました。

テーブル掛やベットの覆は手拭地て作りますと、優美て且洗濯も利き、至極よい思付と存じました、特別にこの爲の地は銀座尾張町新地五番地境屋て求められます、一反の摸様が合ひます様に三巾か四巾を合せて縁を付ます（縁用のもあり）ガラス拭きはボンアミ（横濱の洋店にあり）といふ石鹸て致しますと、手數も少く時間も經濟て且つ心地よく奇麗になります、使用法は先布切を水てしめし石鹸をこすり付けガラスの兩面から隙間なく塗り付け十分程經てから別の乾いた切てふき取ります、是はなる可く晴天の時の方がかわきも早くてよう御座います。



（三等）　山門　青森縣　松尾千代子

給料

往復の旅費も別に食料として一と月七圓頂きました東京に比べますとすべて物價が高く、お米は普通一升十八錢、お醤油一合四錢、炭一俵五十二錢、野菜は重に南瓜、胡瓜、茄子、隱元、玉葱、キャベヂ、トマト馬鈴薯、これらは大抵東京の三倍位、お豆腐は一個三錢、鑵詰も大抵のはございましたし、果物は割合によいのばかりで中にも葡萄は安價で御座いました。出來る丈家事を學ぶ積りでしたから、食物は自炊致しました、少し經濟に注意しさへすると小遣錢も少しは殘ります。

西洋人の日々

どなたもよく申される事ですが、西洋の方々は兎角不規律に流れ易い避暑地でも、日々の仕事は整然と定つてをります、朝と夕方とには必ず家族全體の禮拜があり、午前は大抵書見や縫物などされ、午後の一時間位は午睡、それから訪問やら運動場でテニス。此運動は仲々盛んで暇があれば大人も小人も一緒にします、音樂會やら茶話會、親睦會なども度々催されました、召使の人達へも二三日位暇を呉れて遠足旅行に出してやります、勿論留守中は家族總がかりでお掃除やら食事の仕度致します、近來は西洋人の富士登山も多くなりました、八月の上旬はお天氣具合も一番よい樣に考へられます。

涼しいと申しましても日中働いてをりますと汗が瀧の樣に流れて、衣服も汗で洗つた樣になります、土曜日の大掃除のあとなど、始の中は晩に横になりますと身體中が痛くて眠れませんでした。しかし人はベットをつくせば大抵の事は出來る樣に造られてあります、

私は働いて居る間、自分は相當の教育を受けて居る學生であるといふ考へを全くすてゝ、割合に教育なき女中達と同化する樣につとめて働きました、しかし主人の側では學生として待遇してくれ女中たちも分らない所はよく教へてくれました。寄宿舍の外に世の中を見た事のない私が、他人のしかも口やかましい女中との交際は始の中は異樣の感が致しましたが、呼吸をのみ込めば何でもありません、無器用な私でも道具と材料があれば、一寸した洋食事に差し支へない丈のお料理を覺え、苦しいと思つた働きは、却つて身體の藥になつて、前のよりも餘程丈夫になつて歸りました(貞)



成るは嫌なり想ふは成らず

やるせない思を皆様に

白浪女

お懐しい記者様、並に誌友の皆様！私は、三十八年からの女子文壇愛讀者で御座いますが、自分自身の不心得から非常な苦しい目に逢ひまして、今は殆んど身の置所も無い様な有樣、誠にお恥しう御座いますが、悲しい私の身の上を、殘らずお打明致します故、皆様お讀下さいませ。

私の生れましたのは、極片田舎の貧しい農家で御座いますが、父が至つて學問好きで、苦しい中から兄達には、先づ相當の敎育を受けさせたさうで御座いますが私の育ちます頃には、上の方の兄は既職業に就いて居ましたし、其日が送れぬと云ふ様な境遇でも有りませんてしたので、五人の兄の末に生れた一人娘の事とて、大した不自由も無く、さして苦しい目にも逢ませず、十八年を過しました、小さい時から學問が好きで先生から愛せられ、女學校へ入りましても、相當の信用を得て、卒業し、附近の土地では、大人しい眞面目な娘だと隨分評判をたてられた私は、卒業後一ヶ年にして初めて、自分と云ふ者の思つた程に價値の無い事を知つたと同時に、恐しい目にも、悲しい目にも逢つたので御座います。

女學校を卒業ます時分には、それは〳〵人から羨まれる様な、高尚な、高い理想と奇望とを持つて居ましたが、或事情から、一時職業に就かねばならぬ事になりまして、厭々ながら、就くは就きましたものゝ、一時一時と云ふ考へから、其事業に不熱心で、長たる人から、自然と信用を失ふやうになり、遂に毎日のやうにお小言を頂きました。それでも、「あの品性の低い人が」と云ふ自負心から、常に其人を輕蔑んで、空吹く

風と聞き流して居りました。がさて、つまらぬ〳〵と云はれて見ますれば、遉腹が立たぬでもなく、「今に何かになつて見せるわ」と其人に對する反抗心から、一日も早く時の來るを待つ中厭な厭な一年間も、過ぎて終ひました。今こそ理想の學校に這入れると喜んで、急に其職業を退きましたもの丶什うした間違ひからか、其學校には入れなくなつたのです。そこで、致し方なく來年になつたらと思ひ其時迄勉強しやうと致しましたが、忙しい農家の事とて思ふやうに勉強が出來ません、上京したいと云つて或兄に賴んだ所が、快よく贊成して呉れて、學資は出して遣うが何の目的かと問はれた時、什う心が狂つて居た者か、文士の門に這入りたい、末は文士の妻になりたい、それが出來ねば生涯獨身で暮す積りですと云つたのです、所が其返事は、兄からと思ひの外、嫂からの長い長い手紙、東京は危險だ、女文士にはなれない、文士の家庭は圓滿を缺く事が多い等とばかりあつて遂に上京を見合せよとの事、其後から兄よりの便りはふつつり絕えて終ひました。後に聞けば、其兄が、余りに私のつまらない考へに愛想をつかして、上京をさせて下さらなかつたさうで御座います。

所で、何時迄じつとして居るわけに參りませんので色々と手を盡して見ましたが、望む所には父が許さず父の許す所には兄が不贊成、人も許し自分も心の進んだ所には、先方の都合で行かれなくなるし、一寸の間にも、それは〳〵多くの所に行く筈になつて行かれなくなりました。其處で、是非なく、子守の傍ら、生れて初めて農業の手傳をする事になり、畑にも出れば田にも出ました、米もつけば臼もすりました。

實に云ふに云はれぬ體の骨折りを見ましたが、若い時の辛抱、老母への孝行と思つて淚を呑んで働いて居ましたものを、近頃貰つた嫂は、それは〳〵我儘者で姑や夫をしりにしく丈なら未だしも、自分は端然として居て母を使ひ、人の惡口と、實家の自慢許りに日を送つて居ますもの、私は見るに見兼て、厭だ厭だとは思ひ乍らも、母を思ふ許りに辛抱して居ましたが、あまりと云へば嫂の惡口、百姓の子は百姓になつて終ふが良い、女學校等に入れるものではない、女が學問しても何にもならぬ、澤山のお金をかけて勉強さしても何一つ出來た事はない、僅か八九圓の月給を取つた所て、たつた一年位でやめてしまへばやくにたゝぬ」等と云ふやうな事許りですもの、母もあまりにたまり兼

ねて、父に懇願して、私を或る兄の許に遣る事にして呉れました。所が兄の方では、暑中休みがすんでから來て呉れとの事、それてもよいと待つたもの丶、さて私の心の中、不平不滿の數々を、一つならず、二つならず、三も四も五も重ねかけられては、什うして〳〵以前の高尙いおとなしい心で、何時迄居られませう? 寧そ死んで終うかと思つたり、夜にげでも仕樣かと思つたり、少し親切にでもして呉れる人があれば、其人の嫁になつて見たかつたり、それは〳〵亂れに亂れた心になつて終ひました。

其折りも折り、私は暑中休みに、或友達と或溫泉へ行きました。初めて地獄からでも上つたかのやうに、嬉しかつた上、心のゆるんだものか、常から望んで居た、自由と云ふものを、得る事が出來て、前後の考へもなく、或一人の男子と、ほんの二三日交際をはじめたのです、別れる時にあまりに名殘りを惜んで呉れたと思つて居ましたが、果して私が歸つて、或友達のお宅に行つて居ましたのに、わざ〳〵尋ねて來て第一番にお友達のお母樣に、私とあやしい關係でもあるかのやうに自分からしやべり、私が相手にならねば薄情だと迫り、諦めて下さいと云へば、人道が什うの心が腐つて居るのと云つてせめるです、仕方が無いので望むがま丶に、一枚の寫眞に、一通の手紙を添へてやつて漸く歸つたと喜んで居ましたら、二三日たつて再び來て、彼麽手紙を貰つて望みが盡きた、死んだがましだ三日も寢食しなかつたと言ひますから、直に哀れに思はれて、まあ死なずともと、慰めはしたもの丶、話に寄れば、宅の兩親がはや此事を知つて居て、非常に怒つて居られるとの事、さては宅に歸つても追ひ出されるに定つて居る。此家の主人は、一日も此處に居て貰つては心配だ、早くお宅に知らせて、迎へに來て貰はうと云はれる。此世界に唯一人の親友を、生涯賴みにしたいものと思つて、車も通はぬ五里の山奧、十八里の廻り道をして、行かぬと云ふ車夫を無理に賴んで、はる〳〵尋ねて來た甲斐も無く、こ一月と思つた其旅は、僅か十日にして歸つて呉れとの情無いお言葉、歸るに歸られず、居るに居られず、今こそ死なねばならぬ時が來た、死ぬより外に道は無いと決心して居りました折から、一人の助けの神樣とも云ふべき人が、懇々と私の不心得を諭して呉れて、什う云ふ風にして什うするが良いとくわしく敎へて呉れて私を宅に迄、無事に歸らせて下さいました。歸つて見ますれば、父母は

其麼事とは露知らぬらしく、喜んで私を迎へて呉れました。やれ嬉しやと喜ぶひまも唯二日、又々例の男が私に逢ひたいと云つて、近所迄來たのです、私はあきれました、どこ迄人を苦しめるのであらうと思つて、使に來た女に散々悪口を云つて會つてやりませんでした所が、此度は愈々怒つて、私を警察にでも呼んで恥をかゝせる積りでゞもあつたのか、或夜私の宅の椽側に眠つたふりして居て、父が起して尋ねたら、泥棒に來たのだから警官の手に渡して呉れと云ふので、仕方なしに父と兄とが警察に連れて行きましたが、さてその翌日の近所の人のさわぎ、あれやこれやと口々に云ひますので、兄も母も叔母達も、皆知つて終ひました、不思議に未だ知らないと思つた父は、巡査から聞いて喫驚、私は命も縮まるかと思ふ程に、どなりつけられました、母や叔母達は、非常な心配、どうせ一度は警察に呼ばれて訊問を受けねばなるまい、困つた事だと夜も眠らずに案じて呉れましたが、幸ひにして其心配だけは無駄になりました。



（四等）いづこへ　水戸　玉川すま子

所で、早く兄の許にやるがよからうとの皆の考へから、暑中をすむと直に私は或兄に連れられて、或土地へ參りました、元より來年の入學準備勉强すると云ふ名義の許に、私も其積りで居ましたが、さてつく〴〵

考へて見まするのに、私の此頃は既、勉強の出來るやうな心でもない、母も私の身に就いては心配して居られるし、なまじいに、名譽職にても就いたなら、何時又前の男に名譽をきづつけらるゝやうな事が無とも限らぬ故、いつそ母を喜ばせるために、學問をやめて何か職業を求めたいと思ひました。

そのうちに又交際して呉れろと云つてお手紙いたゞいた一人の男子、何だか文學にても志のある方らしく、假に交際をはじめました所、前途有望な一青年、此人こそはと思ふ心はいつか浅ましい、戀となり、數回の懐しいお手紙を貰つて、お寫眞迄頂いて、さて私の思の丈を書いて送つた其後て、戀し懐しと待ち暮した其御返事、讀んで私は泣きました。此儘死んでしまひたいと思ひました。

悲しい追憶にのみ惱んで居た私は、新しい戀人を得て少からず慰めて頂きました、何れ未來は此人も文壇上に名を現はされるに違ない、私も樂しい夢が結ばれると思つて喜んで居ましたものを、天地に誓つてと迄云つて置かれ乍ら、唯一ヶ月にして、もう交際をやめやうとのお言葉てす、私は情無くつて情無くつて、食事も何もいけませんてした。無論私がわるかつたには違ないが、前のお手紙では、さう急に變りさうなお心とも思はれませんてしたので、うつかり、私の缺點迄知らせてしまつたのが、私の間違てした。思はぬ人に迫られて苦んだ私は、今又思ふ人に捨てられて、どうして此世を送りませうか、自ら作つた天の罰、諦めやうとは思ふものゝ、什うしてこれが諦められませう、一度ならず二度迄も、男子のために、恥をかいた私、決して再び男子に想は掛けまい、嫁にも行くまい、眞に生涯獨身で送らねばなるまいと思へば、そゞろに悲しうなります、同じ獨身で送るなら、人に笑はれぬやうな彼職に！理想の地位になつたものを、今更學校には這入られぬやうになつたし、職業を求めるにはつてがない、それかと云つて、何時迄こゝに兄の世話になつても居られず、ほんに身の置き所がなくなりましたどうしたらよからうかと明け暮れ頭をなやまして居ますせめて。此事を、誌上のはしに載せて頂く事が出來て、お一人たりとも、染み〴〵讀んで下さる方があれば、私はこの上もない喜ばしい事て御座います。（寅）

若き夫と共に味はふ生活の苦痛

若き妻

私等は、事情があつて昨年、夫がまだ在學中に結婚しました。

夫は其頃、ある私立大學の三年に成つたばかりなので、兎も角も卒業してからと云ふのを、式だけもといふ夫の母の希望で到當その夏休中に式を擧げました。

その當座、私は實家に居りましたが、十月の始め出京し、夫と二人室借などして、飯事のような家庭を作り初めました。

その頃の私等は樂園の人のよう、物毎に樂しく、只夢のように月日を過したが、それだけ夫の勉強の妨げをしたことは言ふまでもありません。

夫れでも心配した程の事もなく、夫が無事に卒業したときの嬉しさ、私は自分の一生涯の仕事までが成し遂げられたような思ひて、これからさき社會といふ一層つらい旅路に向はふなどゝは夢にも思ひませんてした、私等は卒業早々歸國して、樂しい一夏を郷里に過したが、其間にも只一ッ、絶えず氣にかゝつたのは、夫の今後の職業問題でありました。

一體夫は長男なものですから親達は、「卒業を好機に引退んで家の事をやれ。」と切りに勸めますのを、夫は是れまで折角やつたことだから、將來もこれて立つて行かなければ世間體も恥かしい。」といつて奈何しても聽き入れません。「それなら今後一切補助はしないが遣れるなら遣つて見るがいゝ」。「屹度やつて見せる」。といふようなことで、洋服代か何か少し計りのお貨を頂いて共々に出京しましたのは、丁度去年私が出京したと同じ十月の始めて、前と同じに二階の生活を初めました。

私のお小使と併せて八十何圓、夫は笑ひながら、『さあ、是れを喰つて了ふまでに何かに就職かなけりやあ……。』と云ひましたとき、私は何か怖ろしいものゝ方へ向つて行くようて、随分心細いとは思ひましたが、倹約して二三ケ月もやつてゆく中には、夫の職も大抵定まるだろうと、さほど心配もしませんてした。

出京匆々夫は學校や先輩から貰つた紹介狀を持つては、毎日のように早朝から出掛けたが、夕刻にはいつ

も、落膽して歸つて來るのが定まりでした。私が樣子を聞いても唯、「徒爾」だと、ばかり。

この頃の私は、メレンスの切り一かけ買はず、足袋なども古いのを接いでは穿く位、萬事に出來るかぎり儉約しましたが。それでも夫の方は進物やら何やら毎日出る度びに費りますので、お貨の消え方は意外に早く十一月の半頃には殘りも僅かになつて了ひました。

所へ加へて夫は如何したことやら、此頃は外でお酒など飮んで歸つて來ることも度々て、家に居つても、今迄になく喰物なども六づかしくなり、其上私のした一寸の過失も、以前は手を打つて笑つたものを、今ては目角を立てゝ叱る無情さ、昨年から見ると全然別人のような心の荒び方。けれど變つたのは其心ばかりでなく容貌までが、つい去年までの若々しさは消え、瘠せて大人びて急に年の老けて來たよう。

夫れもこれも皆、不遇故にと思へば唯只、お氣の毒て何事も逆らはず出來る限り慰めて、心の中には一日も早く職が定まるようにと、只それのみを祈つて居りました。

其頃から私は、生活の補足にもと、仕立物など引きうけて初めましたが、年の暮故意外に多忙がはしく一生懸命、夜も十二時一時頃まで、火の消えたのも知らずに、針を持つて居りますと手も指も凍るよう。手と云へば去年出京の當時はよく、階下の主婦などに、「其麼可愛いゝ手で水が汲めますか。」つて嘲弄はれたが今では何かの木の皮のように荒れて、眞綿など始末する時の自烈度さに、泣かされたことも幾度か知れませぬ。

或日も夫が手紙を認めながら、

『去年の今頃はなあ、總ての方面に餘裕があつたが、貧乏閑なして、今年は茶も飮んだことがないなあ。』と熟々述懷。

私は是れをきくと、つい堪らなくなつて、財布を掴んだまゝ外に驅け出しました。夫の何より好きな栗饅てもと岡野まで行く途中、何氣なく顧向くと往來の人々が私の後姿を笑つて居る容子、氣が注けば無理もないこと、背筋の裾に四五寸の綻び、他人さまのものはいくらも縫ひながら、自分の綻び一つ繕ふ手はなかつたのか、ハッと思ふと恥かしいやら悲しいやら、胸は沸きかへるよう、直ぐ引きかへそうと思つたが、こゝまで來たものを、夫も待つて被在るにと思ひなほしそのまゝ驅け出して四五町の路を夢中に往返りしたこ

ともありました。

「誰れの補助も受けない。」と堅く決心した、夫の志を空しくするでもないと飽まで、我慢して今日迄は來たもの丶、二十錢のお菓子にも直ぐ差響く昨今の財政まさかの時に夫の恥は、私の不注意、假令「出過ぎる」と、叱られるか知らぬが、只用意迄にと、或晩夫の不在を幸ひ、細々と認めて實家の母に補助をお願しました。ポスト迄行けば、外は人間まで乾からびさすような、師走の夜風、此寒いのに奈何してお在かと案じて居れば十時過ぎに、夫は鼻を赤くしながら歸つて被入したが、私を見ると勢ひよく、

「今日は歸りに青山の川口の處へ寄つて見たら、塾の方も旨く行かないと見えて、先月などは、僅かに十三圓の收入て、夫婦やつて來たと云ふ。それても元氣なもので、「喰ふに困つたつて、中々死にやしないよ」。つて大氣焰さ、僕も是れ迄は、紹介狀にばかり依賴して居つたのは、實際誤りてあつた。實力を措いて紹介狀が何になる？この冷めたい世の中て、依賴りになるは自分の力の他に何がある、獨立々々。」と、頻りに感心して居りましたが、その翌朝から翻譯か何か吃々初めました。

それからは朝に晩に、私等は競爭の姿、お互にこんかぎり自分々々の仕事に勉めたが、私はお貨になつてもならないでも、夫の此決心を泌々力强く思ひました

恁麼有樣て、夫の職の方は一向定まらないのに月日は匆々と過ぎて、早やくも年の瀨の、町々は大賣出しの景氣のよさ。「お正月の買物は皆揃つたか」。と家毎に布れて廻るような廣告の樂隊も、皆他人ごと丶聽きながら、私は獨り淋しい二階に、他家の孃さまの春衣を縫つて居れば、知らず〳〵の物思ひ「何故私は恁麼に早く人妻になつたろう、普通ならば齡も同じこのお孃樣のように年の暮も知らず、縞柄の選定でもする他には、何の仕事も苦勞もなかつたろうものを、櫛一枚も思ふまゝにならぬ今の境遇、何と云ふ不幸の身だろうと思つても見たが又。イヤ〳〵私の愚痴よりも夫こそ學校を出たばかり、趣味の娛樂のと思ふまゝに働いて見なされたかろうものを、私と云ふ厄介者のあるばかりに、年老つた人と同じよう、生活の途に苦勞して居なさるが、ついぞ「お前が邪魔だ」と一言の不足もお仰らぬ男心、それを思へば、自分が少し位つらいからとて兎や角思ふたは、ほんに勿體ない事てある。是も時節やがては春も來ようものを、夫婦同じ心で

慰め合ひ扶けあつて行くならば、年の瀬一ツ越えるは愚、甚麼浮世の難關も笑ひながら越えられように：：なとゞ止度もなく空想して居る處へ、實家の母からの郵便、詳しい消息の末の方に卷き添えてあつた三十圓の爲替、私は今の先まで恁んなお貨のことなど少しも考へては居なかつたもの〻、來て見れば逍がに嬉しく何やら希望も生じて來て、いそ〱と晝餉の仕度して居ります處へ、何時にない元氣な容貌で夫は歸つて來ました。私を見るなり、

「オイ、安心しろ、俺の瘠腕にも力はあつたぞ！さあこれは今迄のお褒美だ何んでも好きなものを買へ」つて、投げ出したのは拾圓紙幣一枚！

その時の嬉しさ！其一枚が八疊の室一杯にも見えて自分が初めて得た賃金よりも、母さまからの爲替よりも、百圓よりも千圓すりも、此拾圓が遙かに有難くて私は思はず押し戴きました。

これからの行く先は山か川か知れませんが、どうでも續けねばならぬ浮世の旅路、私等も僅ながら路銀を得たことですから、これを力に徐々と出かけるのであります。（貧）

子爵家に乳母を世話した事

細野鈴蘭

私は此年の霜月の牛浦柳子爵家（本姓を隱す）へお乳母をお世話した、子爵は此春四月東京を去つて舊領地の某處へ歸られたのだ、奥方は此時御姙娠だつたので舊臣一同お變りがなければ良いがと思つたら、八月中旬にお可愛らしい姫樣をお產み遊して御前初め、一同お悅び申して居たがそれも束の間、翌日から發熱して醫師の投藥も看護婦のお看護も効なく、憐れお若い奥方は朝の露と消えてお終ひなすつた、其から姫樣はミルクでお育ちに成つた奥方は自分のお乳で育てると被仰て居らした相なのに、まあ――御臨終の時のお心持は――と何事も御存知なく成人遊ばす姫君をお見受する度に私は涙ぐむ、如何かして早く良いお乳母をとは、皆が等しく云ふ所だつた、然う丁度十月の末頃、ふと近在の友の宅へ遊びに行つた、すると生れて間の無い赤さんを抱いた婦人が來られて、友と三人て四方

山の話をした、其時私は此人は屹度良人と同棲してる人てなからうと思つた唯何となしに——、て歸られてから友に尋たら甘く想像は當つた、良人と云ふのは今朝鮮て働いて丶幾何かの金が出來る迄は歸らんと云ふのだ相なて房さん（婦人の名）も其迄は何なりとして小供を育てゝ行かねばならんのだ、て房さんは小供を實母に預けて何處かの乳母に行き度い而して給金の幾何かを母に渡すやうにしたいと云つてるとの事、私は何だか嬉しくて此人をお乳母に世話して見樣と思つて、本人の房さんに先き云はうか、それとも浦柳樣へ斯う云ふ人が有ると云はうかと、とつおいつ思案の末友に



（五等）散歩　筑前坪井よし子

其話をして房さんを招んで來て貰つた。話て見たら大變悅んで私のやうな禮儀も知らぬ土百姓の娘でも召してやらうと仰やつたら參ますと云ふので、房さんの生家親族の樣子から血統の正しい事迄も友から聞取つて先づ宜らうと歸つて父母に話したらお前の月下氷人ではちと賴りないけどまア出來るならお世話して御覽と云はれた。て屹度まとめる！と心に叫んて其れから浦柳樣へ行つて家扶に逢ひ度いと云ふと、貴女なら御案内無くとも此室迄ドシ／＼お出て下さいと云ひながら先きに立つて家扶の室に通された。此處迄來たは來たけど、廿歲と云つても未て世熟れぬ私、それがお乳母

のお世話せうと思ひまして等云ひ出したら、笑はれやしないかと心配で堪らない、けれどまあ宜いわと思つて、斯う云ふ人が有るが如何でせうと一息に云つてのけた、家扶も案外心やすく悦んで、能くお氣が付かれました、實は一人内貴村に有るのですが、初産で無いから良くなからうと云ふとてした。其樣な初産で奥方と御同年で產み月迄大した差がないと云ふ人なら結構此上なしです、では明日村役塲へ行つて血統其他の事聞き合して好いと決しましたら何日に三好學士の所へ乳汁身體檢査に行くやうお知らせしますから」と云ふ事だつた、歸つてからも氣が氣でなく何れに成るだらう、私の方に決まるやうにと思つて寢た、翌晚家扶が來られて、別に缺點も無し丁度宜しいから御前に伺ひましたら良いだらうと被仰いました、そこで明後日三好醫の宅へ行くやうにしませうと云つて歸られた。五分は成功、後五分の所、併し大丈夫合格に違ひないと合點して手紙を持たしてやつた。

いよ／＼今日だ、優しい房さんだから知らぬ醫師に乳房を持たれたり何かして嘸羞んで居るだらうと、此んな事思つてる中時計は容赦なく進んで三時を示した如何だらうと案じてゐると僕が美しい文箱を持つて來た早速開けて見たら「福澤房子身躰壯健申分なしと三好醫より只今通知有之候に付ては二三御相談申したき義御座候間即刻御越被下度候」と書いて有る、先づ成功だ、力み甲斐が有つたと早速行つた、お乳母樣の事御都合よく參りまして御同樣に結構で御座いますと私は云つた、家扶も非常の御機嫌で有つた、そして明日午後から參る樣申してくれと云はれた。男つて氣樂な者だ事、是で好い、おいそれと直ぐ出られると思はれるのかしらん、て私は女の事ですから着換の事から、子を預けるにしても用意も要りますでせうから、五六日猶豫を下さいと云つた、て其れはさうと決まつた、今度は給金は幾何位にしたら良いですかと問はれた、さ困つた自分ならば何程でも良いけど、他人の事だから何の位が宜いのか些もわからん、仕方がないから、彼の方が參られてから彼の方にお話して下さいまし、そして成る可く澤山にして上げて下さい、半分は養育料に割き成さるのですから何卒、と云つて、お茶を濁して歸つた。早速使ひを走らしたが使が歸つての話しに皆々大悦びで有つた相な、生れて初めて人の世話してそれが巧く行つたので私も嬉しかつた。

五六日は夢の中に過ぎて十一月十四日の朝、房さん

は來た、赤さんお泣きに成つて？と云つたら「イエ貴女、四日前から私は見ない樣にしてましたの、乳をやらずにコンデンスミルク許り飲ませておきました、て乳が張つて仕方が無いのですよ、心ではね、お前不悶だけど許してくれと云つて參りました、未だ顏覺えませんから樂です」と云つた、私は又是でお別れだからと出掛けにも飲ませたかと思つたのに、何と云ふ斷念の好い人だらうと思つた、其れから二人して浦柳樣へ行つて何卒宜しくと云つて歸つた、自分にも如何と思つた此事がスラ〳〵と都合よく決まつて、良いお乳母樣だ〳〵と上下の人に大切にしられて居るのを見る度に、聞く度に嬉しくて思はず微笑をもらすのです。（畝）

級友の行方

草香

延枝樣といへば校内一の音樂家として聞えた方、學科の方もお出來になるし、身分は鋒々たる醫學博士の令孃といふのですもの先生方の信用は、又大したものてしたわ、其癖當の音樂の先生はあんまりね…最も延枝さんを、それ程迄にお仕込の先生は、私達三年に上つて間も無くお辭職になりましてね、新らしく今度お見えになつた先生は、お友達の樣な、お若い方だつたんですの、延枝樣がピアノまでずんずんお彈になるし、お聲なんかは反て、先生よりお美しいといふ評判なのですもの、勢ひ先生も面白くは被入らないんでございますわ、でも學藝大會や又、敎會などゝいへば、屹度先生のピアノに、延枝樣のヴアイオリンか獨唱かゞお極りでして、それが又呼物だつたんで御座いますよ、黑いお髮を頭高の束髮に遊ばしてお襟は何時も白紋羽二重を、きつちり合はせて手切れる樣な胴をお袴の紐は思切り、細いのを、結んだ半身卓子の白コスモスの投挿の花瓶の橫から、浮いて、ふるひ付きたい樣なお聲で『殘夢』なんかお唱ひてした、お嫌ひは裁縫と、お縫ても決して、他の方にお負けをお取りになるなんて事御座いませんてしたわ、隨分お笑ひ坊てしたけど中々しつかりして被居たのですね、ちつと一點を凝視るのがお癖で毎日お机を並べて居る方でも穴のあくほど御覽になります、或る實業家の伯母樣のお宅て語學をご勉強の樣伺つてますお仲好だつたのが音樂好きのお元氣のよい花子樣よくお廊下などお二人腕を組

んてお歩きになつても小作の方なので延枝樣に引きづられて被居るのです、下豐頰のお齒並のお惡いのが、却てお可愛くも御座いました、一體派手好きな方で、音樂帖なんか海老茶の表紙のへクリームの二吋巾のりボンておとぢになりましたつけお宅は豪農だが寄宿舍に被入いましたの、お得意は數學、文章なぞお嫌ひの方、心臟がお弱いのでお好きな、舞蹈はお休み勝てした、お家庭に被居います樣、それから可笑しい事には花子樣の叔母樣も同級に被居たんですよ、矢張同じ私達の甲組つていふんですもの、えゝ確お母樣のお里方の末のお妹樣とかつて伺てましたわ、何しろお齡がたつた、お一つ違ひなんですから、宛然お從姉妹みたいなのよ、あの其の方は、貞子樣つてましてねお品のよい、どこかにお氣高いところのお有りの方で、學科は何でも勝れてお出てゞした、よく級長をおつとめなんてす。」

やせぎすのすらつとお背の高い、お目の大きい割に、お顏立の淋しい澤山なお髮を小いお頭に、重い樣な束髮にしてた方てお口數も極く少く皆樣ストーブ會議をはじめて被入つても決してお寄りになりませんの隅のべンチに出席簿をかゝへて、ぢつと聞いて被入るんてすの、其癖運動といつたら何でもお好きてテニスコートに貞子樣のお姿の見えない事は有りません、何とはなしに皆樣心服して被居いましてね、女醫學校へお入學なの、お似合ですわ、副級長が町子樣つて、某中學敎頭の文學士のお妹樣で眞個に靜かなお優しい方てした編物がお上手てよく五六人のお仲間と十分の休憩にもあの音樂室の窓下の芝生に小松の根を圍むて被入てよ學科は平均してお出來になるんですね、何ても御熱心て規律の正しい方、伊勢の方てすつてお言葉が妙よ、裁縫がお好きてミシン物なんかてすとずん／＼お手廻なすつて、皆樣まだ、せつせと遊ばしてる時に、もうお帽子なぞお覺えになるんてすよ小學校へお出になりますつて、お机を並べてらしつた方が又、鈴子樣て、寄宿舍の滑稽家なのよ、お宅は、つい此頃からめきめき財產がお出來遊ばしたとかてお祖父樣のお代迄は、毎朝隣町まて、野菜をお持ちになつたなんて、誰やらの陰言も、まんざらね、そりやもう何にも御承知ない方でらしつてよ、お持物なんかも隨分ギラ／＼した物許りでしてねお袴取た時なぞ草色博多と緋繻子のおふだん帶なんかお結になりましたの、畵の先生が大のお嫌ひて、鈴子樣の圖案ていふと、皮肉な御評が出まし

たのよ、體格はお立派な方、お得意は國語に、裁縫、音樂がお嫌ひでした事、美術學校ですつて、あら裁縫科ですよ。香さんていへば、校一とまで歌はれた、美しい方がお出でゞしたつけ、それは、それはお襟元なぞ拔ける樣な白さに丸髱の一糸亂れず青つぽい矢絣の袖をたゝむで窓に雜誌みてらつしやるお横姿なぞ繪の樣でしたわ、萩ならば白萩雨にも風にも堪え難なの風情で、意外の運動家で被居いました、弓術もなさるし庭球は貞子樣に、ついての選手よ、お二人とも運動部の幹事でしたもの、長いまつ毛を伏せて俯向き勝に被入る樣で、絶えずどこかに涼しいお瞳は動いてゆくのですもの、才がお有り遊ばすと謂ふのでせうよ、うつかりしてお話相手など出來やしません、數學に國語圖畫もお得意、お手蹟の美しいのでは級一英語と裁縫がお嫌ひらしい、家庭があまり、面白くないやう、聞えた藥種問屋で母樣がお異ひ遊ばすとか伺つてました、何でもお望みだつた學校へはおはいりにならないで、さる子爵家へお小間使に上つて間もなく御親類内とかの醫學士へお嫁きといふお噂さ、すれ〳〵のお仲だつた延枝樣もやつと御安心でせう、それから、靜岡と越後の方で可愛い方がお出でゞした、靜岡の方が民江樣て、醫學校へお通ひの兄樣とお二人自炊して被入いましてね、肥滿た子供〳〵した風でそれて、家庭的の趣味なんか一番お有遊ばした方なのよ、お料理も中々お出來でしたわ、えゝもう開業遊ばした、お兄樣とお老人の母樣を助けて、主婦がはりしていらつしやいますわ、屹度!! 直子樣が越後で裁判官のお孃樣赤いお毛をふつくりした桃割にして、雪國育ちの色白の小作りで淡泊した方でした、英語がお得意、お卒業間もなくお父樣御任地の山形へ行つてお了ひですのおひとり子でたしか法科をお卒業になる方とか、お養子にお定りの樣でした、約婚濟の方は、もお一人被入てよ、ゴム人形の槇子樣、ホ、何故? 西洋人形に、そつくりなお顏だちつて、ひそかに何處からかお名づけ、でも御當人樣中々の氣取屋で理屈家、鄕里御出身の騎兵中尉夫人におなり遊ばしましたわ、御親友が藤子樣、しやぐまの樣なお髮を大廂に遊ばして、紅ばらをおかざしになるのがお好き、躰操の順は一番といふに、三枚草履の鼻緖は、お袴の裾を稀に洩れる許り、オルガンがお得意、國語はお嫌ひでもお習字は中々お美事、目白の方へ被入いましてよ、家政科、藤子樣とい、對照が米子樣、うすいお髮を引つめて、よく病院へお通ひの

方てした、神經質な、お爪をかむお癖がお有りて、倫理や教育がお好きといふのは此方許りお實家は名だゝる呉服屋とか、道理てお羽織なんか幾枚おとりかへか分りませんわ、伯母様のお宅をおつぎになるのですつて、人望のお有りの方は如何しても百合子様ね、お父様は陸軍の大佐、兄様は軍醫て軍艦にばかりお乘りくみて被入る、華奢な透き通る様なお色白て、お顔だちからお動作、眞個にお名にもそつくりな、隔てなく誰にもお交際下さいました、音樂にも堪能て、英語に國語がお得意文才は當校一の評判かくれなきばかり、學友會內雜誌部の幹事をおつとめていらつしやいました近々某縣事務官にお嫁づきの様仄かに伺つてます、お年上ては一番の増子様、如何いふ御都合がお有りてすか、家内中北海道へお越し遊ばしましたつて、それもあの北の端の網走なんかへねえ、廻覧文もそろそろ二回目が來るてせう、ホヽ、私の事？つまりませんわ散々皆様の惡口いつ了つてね枯草たく遠野の畑に今日も一日禿筆かみ乍ら、暮れてゆきます、さらば皆様さきへお榮え遊ばせや。（實）

夕の星の冷たき笑ひ

夕ほし

六日間裁縫に囚はれてゐた私は、ほッとした、淺草公園にても行つて、活動寫眞廻りてもして大いに俗氣に觸れ……なんて云つたつても、夕ほしは仙人てもないお坊さんてもないのよ、お坊さんだつて此節は、ずい分バタ臭い事を云ひますわね、先日二十八日に「お講」つてのに參りましたの、そして、お說教を拜聽いたしたんてすよ、まあ感心だつて？そりやあね、いくらラブを崇拜する若き女だつても、阿彌陀如來の御前へぬかづけば、お老人方と御一所に、たとへ鸚鵡の眞似にせよ、南無阿彌陀佛位は唱へますわ、……それが、ちつとも分らないんてすけれど……

……今の學者達の云ふ、空なるテーブル論などゝいふ一句て、すつかり度膽を拔かれて終いましたの、講談家なら差し當り、扇子をポンとやる所てすが、雨の袖に珠數を爪繰りつゝ諄々と說き諭すは、流石は殊勝、あゝ有り難や、南無如來と、手を合せる刹那ふと見上ぐるその御顏、毎晚、鰻の丼を、二つも召し上がる

など思はれる福相のため、尊き影は追撃されてしまつたんでせう、何だか馬鹿らしくつてね思はず吹出したくなつて、どうにも困つちやつたの、昨夜心ひそかにたくらんで居た活動寫眞の計劃も美事に失敗しちやつて、又候、裁板の御前へ鎮座ましますは、阿彌陀如來の因果應報かも知れない、とまあ諦めるより外、所詮なしですわね、

　手のこぶしを、銘仙のふところへ、ゴロッキよろしくの體にてカシミヤの袴を轉用して、造へた海老色の座蒲團へどつかと座つたまゝ、茫然と、天井を仰いでゐる、牡丹餅が落ちやしないかと思つてだらうつてフーッ、人馬鹿にしてるわ。



（六等）　こたつ　信濃　森山房仙

あら、もう鐘が鳴つてよ、九時だわ、これからお隣りの教會で御祈禱が始まるのよ、御覧あそばせ、髮を英吉利風に巻いた、袴の裾ながい美しいクリスチャンが、石の門からゾロ〳〵入るではありませんか、

　日曜を東京見物の新兵さんが、珍らしそうに、覗いて行く。

K樣、お出で遊ばした事あつて？あの讃美歌のコーラス、いゝのね、夕ほしは大好きでございますよ、若き男女が、炎ともゆる胸の血潮を動かして神に捧ぐるきよき思をうたふのでありますもの、眉をひそめるやうなことなど

些つとだつてありやしないわ、ほら、例の、べからず憲法發布の日も近きにある樣子ね、新聞で承はりましたわ、御起草あそばすのは、無ぢ骨折りだつたでせうね此間可笑かつたのよ、云ふのは止しませうか、だつて、あの有名な瀬藤さん御存じでせう?その方が、廂を耳に押し付けて、ね、必つとよ、吹聴されちや身の置き所がなくなつて了ふ、つて指環のあとの凹む程、夕ほしの手を握つて仰有つたんですもの……ではK樣、內密よ、あのね……チタマシイからだわ……

……だつてホヽヽヽあら、そんな大い聲をなすつて。

不思議で仕樣がないの、何故世の人は、自由な少女の思想を束縛するに努力してゐるのでせう、思想ばかりぢやない、行動までも！春の若芽は、摘めばつむ程硬く出るもの、他の皆樣は如何か知るよしもないけれど、夕ほしは、處女といふ事を自覺してゐる、それを……それを……嗟、伊勢の海のほとりに在すN樣よ、せめて、木枯荒ぶ此頃の、夜半の寢ざめに都なる、三とせ古の菫の香を思ひ出して下さいますか、關西の、少壯短歌界に覇をなしてゐらつしやるとは陰ながら雜誌で伺つてをります。

春の潮にもたとへつべきおん胸に、永久の誇と咲きし一本の、ゆかりの花よ、香は失せて、今は冷たき夕べの星とかはりました。

熱き思は、涙となりて迸しる、流れつきせぬ涙の河よ。詩の湧く君がおんむねに、海嘯の如く流れ入れよ古き戀を戀ふさめたる夕ほし、ともすれば燃えつくさなかつた戀の焰が、風の吹きまはして、あふられてはつひ、失戀氣取りになり澄まして了いますのよ、いやだ、そんな笑ふものぢやなくつてよ。

あつ、母樣が階下で呼んでらつしやるわ、髮結さんが來たからだつて！來年はね、もう十八だからお正月になつたら島田に結へつておつしやるのよ、こんなお轉婆娘が、文金高島田なんていふのに上げたら、それこそ天下の奇觀、淺草の珍世界へでもさらけたら滿員客止めの大入は疑ふべからず、お蔭さまで、此の頃の不景氣も回復するでせうよ、樂隊なんか騷がしいものは不用、ど――れ四十三年の先登第一に、所謂、實業家の恩人となりませうか……エ?もう珍世界は無くなつたつて?それは失敗つた、澁澤さんの恩人になりそこなつちやつたわ。

あら〳〵母樣が早くをしつて急ぎますから、御免あそばせ、Kさま。(賞)

女學生と新聞紙

春鳥

女學生と新聞紙とは、宿世如何なる關係があるかは知りませんが、とかく女學生のことゝさへいへば其の一擧一動が、みな新聞の種となるのは不思議ではございませんか、海老茶がどうしたの、式部がどうだとか女ハイカラが何といつたとか、女學生のことを誇張して書かない新聞は、紙面が何となく寂しい樣な心持がする樣にね五六年前までは、花柳界の消息を載せてそれて紙上に花を飾つて、讀者を釣つて居た新聞も今ては花柳界のことをよして、盛んに女學界の材料を搜して紙上に掲るのを秘訣とするやうになつた、藝妓の艶種を一欄以上も埋めるより五行か十行でも、女學生の噂話を書いた方が、讀者の受けがよい、相てす。

新聞の小說ても、女學生のことを描いたものてなくては、一般の好評は得難いのてす、海老茶の袴を着けなくては、當世流の女子として世間に通用せぬといふところから、目敏い新聞記者などは、女學生てないものにも、海老茶の袴をきせて女學生にして了うのてす、そこて猫も杓子も女學生風てなければ先づ當世に賣れが惡いことになつた、かく多くの新聞が女學生のことを盛んに載せるのはマア好いとして、さて其の載せ方に就いて一言したい。

海老茶といひ式部といふ詞から、已に嘲弄的意味を含んて居るが、新聞に出て居る記事は更に戯談交りの惡口てなくば冷かし半分の罵倒て持ちきつて居るてはありませんか、電車の中て横柄な顔をしたといふては直ぐに新聞て攻擊される、お喋りをしたといつては忽ち散々に批評される、少しく身嗜みに念を入れて、氣のきいた風てもすればお轉婆よ、ハイカラよといはれる、さらばといつて、木綿ものて眞面目らしくして居れば女らしくないといふ。

全體どうすれば、よいのてあるか、女學生なるものまた甚た難い哉てある、思へば眞に氣の毒に堪へません、いくら學問する身てあるといつても、年頃の女てある、美しい着物もきたい、お化粧もする、三人よれば姦ましといふ女の身てあるから況して五人十人と同行のあるときには、隨分八釜しい程お喋りもしやうし又時としては横柄な顔をするものもあらうし、それを一々咎めたてをされては、どうすることも出來ない譯

てす何故に新聞てはさうやかましくいふのてあるか、何故又世間はやかましくいふのを歡迎ずるのてせう。新聞の程度が低いのてあるか、讀者の目が低いのてあるか、新聞の品格が高ければ、高が一少女の一顰一笑までぎやう／＼しくいふ程のことはあるまい又讀者の眼が少し肥へて居たならソンな新聞記事をよろこぶ筈はありますまい、然らば其罪は新聞紙と世間とにありといふてよろしかろうと思はるゝが、こゝに大體から觀察して別に理由があるのてある、新聞紙も世間もみな此の理由に支配されて動いて居るのです、妙齡の女子が世間から注目されるのは昔も今も、恐らく後世も、西洋ても日本ても同じことてある妙齡の娘は花てす百花思ひ／＼に咲き出る風情はどうして世間を騷かさずに置くものか、汽車中に一人の美人が居るとすべての乘客の視線はみな之に向つて注がるゝ、女學生といふ幾萬の女團體は花づくしの歌のやうに、梅や櫻や桃や海棠や牡丹や水仙や芍藥や桔梗や菊や乃至は胡瓜や茄子の花までもありとあらゆる花が集つて居るのであります。

花の衣裳を着て花の姿をして歩みを運ばすのを見ては何とか批評したいのが人情である、此の人情の弱點を押へてヤンヤと囃し立つるのが新聞の商買であるそれに浮かされるのが世間凡俗の希望である、氣の毒なのはほんとに我等女學生てす。

しかし此の現象は、一方より見るときは、世間が確かに女學生の勢力を認識した結果に外ならぬ、お轉婆のハイカラのと嘲弄さるゝ半面には、確かに勢力を認められて居る、若し無勢力なものならば、嘲弄する程の價値はない、善にもあれ惡にもあれ、どちらにしても女學生の勢力といふものは、次第に高くなつたと思ひます、此勢ひて進んて行く中には追々眞面目な批評が起ることになる、世間もまた其れに耳を傾くるやうになるのてす。

何ても世の一大勢力となる前には嘲弄や迫害の時代がある、嘲弄が甚だしければ甚だしいほど、將來に望みがある、迫害が大いなれば大いなるほど未來に盛んな實を結ぶのである、此時代を經過して後に初めて眞相が世にあらはれる、眞相があらはれてから世間は始めて其眞價を認めて、敬虔尊崇の念を生ずる、輕侮や嘲笑といふものは受ける當人の身に取りて、勿論不愉快てはあるが、畢竟は社會が我等を認めたから起ることで輕侮の一面には、尊崇がある嘲笑一たびその局面

を變すれば、忽ち敬虔となるのである。
兎に角女學生の評判は面白くないといはるゝ時代を早く通越して、女學生でなければならんといふ時代にしたいものです。（[illegible]）

女子事務員の朝夕

さよ

□□の事務員に雇れてから丁度一年、なんて早いんだらう、初めの一と月や二た月は近所隣は勿論、往來の人にさへ顏見らるゝがつらくて、惡いことでもしたかのように成る可く逢はない方針を取つて遁れてゐたものが、今じや馴れた所爲か、厚かましくなつたのか、左程苦痛にもならないけれどいくらか怯氣てゐる。

學校時代にはいつも好成績を占めて、組長のなんのつて敬せられ、髮も流行のマガレットに巾廣のりぼん納戶色の袴に編上の靴の音輕く、「向ふを通るドーターの三人連れの其中とまでは歌はれないが、何しろ得意の靑春の美しい花の時代であつた、去年首尾よく卒業してからは最早ハイカラを脫して、意氣向きに髷を思ひ切り出した島田や銀杏返しに結んで、ほんとうに毛がいゝのなんて行先々で賞められ、又少し違ふ方面に於て鼻が高かつたが、それもほんの束の間、思へば悲しい忘れもしない去年の木枯らし吹き荒ぶ師走空に父がかりそめの病で世を去つてからは、如何して吞氣な眞似が出來よう、泪をのんで今の女事務員――雇員となり下つて、一年前のお孃さんの氣振りは藥にしたくもない、人は如何思ふか？世の變遷に驚くの外なしと言ひたい。日本髮で袴じや如何にも雇員としか見えまいし、私は今の女事務員のスタイルは大嫌ひ、（事務員スタイル）なんて新語を使つては解らないでしようつまり、無格構な丸たぼの廂に、和製のりぼんをかけて黑い所に申譯計りの白粉を塗り、着物は木綿縞のゴツ〳〵に、褪せ返た袴で何日たゝまないか知れないのを穿いて、表なしの日和下駄をからころ〳〵と音立てゝ、ほんとうにいやになつてしまふ。每日每日斯ふいふ風の幾多の人に逢ふので、自分もそんなでは愛想がつきると思つて、成可く學生風に拵らへるようにしてゐる現在其の類の事務員でゐながら學生風に作るといふのですもの、其苦心たらないのです、そんなら私は如何かと仰しやるの？何しても雇員は雇員ですもの多少は

免れません、一寸申せば女學館式の横をつめて厚味をつけた前髪に、たぼを少し出し、舶來の花束を格構よく挿し、蝶貝入りのたぼ櫛をさしてます、着物は紡績位でも羽織丈けは銘仙の光りのあるスースーなのを着て、袴も納戸に靴か草履、白粉は薄つすり塗つて外へ出るまでは鏡と首つ引き、納戸のパラソルに友染の華手な風呂敷包を持つてそつくり學生になりすましてゐる、けれども折々學習院や女學館の生徒に電車で乘り合せると冷々いたします、癖み根性かも知れませんがジッと見入られて嘲弄と蔑視の眼光をあびせかけられ、何んの事務員がとても云ひそうな顏付、夫れならまだしも、オリーブのハンチングに流行のオーバコートを召した△△大學の貴公子方と、同車する時等はもう〱穴へても入りたいよう、早く下車てくれゝばよいがと前にゐる人の着物の縞を見つめる、何もそんなに少さくならないでも、「勞働は神聖なり、只職務に忠實なれ」と耳の奥に床しいはげみの聲を聞く時は少し力を得て、心までは雇員じやないと自覺の力を强める、こういろ〱な事を朝の新しい頭に浮べながら、電車を下りることも幾朝、再び玉舍メート（攻玉舍の生徒）に澤山出逢ふので又も肩をすぼめて門を入る、入つてしまへば自分の領域の如く、それこそステキな高襟や、山中の小僧のようなのや種々雜多な役員に逢ふけれども、書記とか雇員とかの別はあつても、同じ所の人と思へば自然平氣にもなつてしまふ、こんな風に餘計な事に頭を使ふので事務服をつける時分には落膽してしまふ。

働くべく生きてゐるか、生きるために働くのか理が解らない、この頃は一人前ては大げさ過ぎるが、事務に馴れた爲めか間違も少いし、手も頭も同時に働いてくれる、それに主任が至つて公平な人物なのと、女學校出の人が半をメめて割合に大人しいので、ほんとうに勤めいゝ毎日同じ事を繰返して一日一日と老いて行くのかと思ふと悲しくもなり、又前途どうかと面白くもなる、大勢の中てすもの氣に障る事も度々あるけれども新參のかなしさ無理にも笑つてすましてしまふ、雇員々々と馬鹿にするけれども、私のクラス（おかしいけれど皆の間に役所を學校々々と命名するので特にいふ）にだつて、美人がゐる、身なりも普通の事務員スタイルを脱して、中々氣取つたもの、〇〇さん等は級一の美人、品があつて學習院の姫御前といつてもいゝ位、言葉は自慢が出來ない、如何しても惡いのは免

れない、言語矯正法は女學生間に行はれたけれど我〳〵の社會には行はれない、それに眼の活動の烈しい事、人は其境遇に依て變化するといふが實際其とほり、どうして自分はこんなに變つて、少しのとにも邪氣を廻して良方にはとれないかしらんと、自分で自分がわからない、其代り世間の辛酸を味つたとてもいふのか、世のお孃樣と違つて或程度位までは何事も呑み込でゐるけれど場合によるとやつぱり「弱き者よ汝は女なり」の心になつて、べからず訓も解りはしない、それに神聖のなんのといふけれども、何かにあつた、(口惜きことの多き事務員の日記」じやありませんが、しないで世渡りの出來る方は決してこんなつまらない事務員等になるものじやないとつく〴〵思もました。

まだ愚痴のやうな訴へのやうな、何んですか澤山ありますけれども之れで止めましよう、ざつと私はこういふ風にして一日一日と過して行きます。



（七㊂等）　茶摘み女　紀伊　稗田みつ子

二十の春を迎えて

花子

白いリボンと、双の袂を風になびかせながら、テニスにふけつた十五六の時代どんなに華だつたでせう。

御友達から、可愛いのねえ、と云はれ、コチロンやワルツは御得意のもの、蝶の樣に舞つて全校六百の人の眼の中心となり、道をあるいても電車に乘つても、若い少女のきつと振り返る羨みの的、どんなに私の虛榮心を滿足させたてせう。

少しても自分が他人より劣つてゐると知つた時はひどい侮辱を受けた樣に感じて、父母にせがんて自分の滿足を得ましたもの。

房々した御下げ髮がふつくりした廂髮と變つて、すこしは世の中の事もわかつて來た十七の頃は、やつぱり樂しい華かな時代てした。

毎朝顏を合す若い人から手紙をよこされて、眞赤になつたのも其の頃てした。

そして、花の樣な甘い美しい戀を、あなたはなぜ得ないのかと情が叫けべば、理がそれを壓へて、私の心の中は、渦まきの樣に理と情が浮いたり沈んだりして人知れず思ひ惱んだ事もありましたが、然し私は、戀をするのにはあんまり理性が勝ちすぎてゐました。

捨てた戀！私はいつも華かな戀を捨てたのてす。

處女の誇！私はいつまても其の誇りを失なひたくありませんてした。

この胸の中を流れる血潮をはきつくしても、其の誇りは汚したくありませんてした。

少女十八、肺を病んて胸の血潮をしぼつて逝かれた久さん、清い少女のまゝて逝つた久さんを羨みました

二九の春を迎へてから、私の思ひはまた亂れてきました。

電車の中て自分より以上の人に會つてみんなの視線を引けば、其の時はまだ若い少女てすもの、なんだあの位、ダイヤの指輪の一つや二つ、私にだつてと云ふ樣な反抗心も起しましたけれど、それは其の時きり、絶えず私の胸を流れる思ひは、そんな富を願つてはゐないのてす。

自由！女は何事も服從しなければならないのてせうか？私は自分の思ふまゝ、勝手にいろ〳〵の事がしたくつて、勝手に出來るならば、父も母もいらないとまて思ひましたもの。

高等女學校まて卒業させて、幸あれと祈つて下さる父母は、最愛の我が子が、こんな事を思ふてゐるとはゆめにも御存知ないてせう。もしこんな事を御知りになつたら、それこそどんなに吃驚なさるてせう、けれども私には父母を捨てる勇氣はありません。い

いえどうしても出來ないのです。

時には、あゝこんな事思ふて濟まないと思ふ事もありますけれど、一生平凡な女で終るのがつまらない樣な氣もして――絶えず〱私の思ひは動搖してます。

こんな悶えを抱きながら今年もまた過ぎて行きます十九！二十ともなつたら、私の思ひはまたどう變化してゆく事でせうか。

母の爲に受けたる大いなる煩悶

あざみ

ほろ〱と鳴く山鳥の聲きけば、父かとぞ思ひ母かとぞ思ふ、朗かに讀みあげられた空札、お隣では今がかるたの眞最中、集ふた人の笑ひさわぐ華かな聲、其れを聞きながら溫むるに詮ない冷い心を抱いて、悲境に泣く田舍乙女をせめて憐れと思召して下さい。季ならば春、人生の最も樂しい女學校時代を私は、いまはしい秘密の爲に、悶え〱て過しました。けれども秘密は決して、限りなく守られるものではありません。波上幾千里と隔つた處の秘め事さへも知れ渡る世の中ですもの、其れを知らずに人を欺き、自分を僞つて、始終、心の中で泣いて居りました私は、ほんとうに憐れな者で御座いました。春來る事の遲い信濃の梅が、ふつくりとし初めたやよいの末、卒業式を終へて、輝く希望を追ふて、暖い家庭をさして、思ひ〱に去られた友を見て私は、身の置き處もない位ゐ羨みました。して、同じ卒業の日は迎へながらも其れを喜んでくれる人もなく、待つてくれる人もない、冷やかな家をさして、歸鄉致しました。其れは丁度、友戀しく、人懷しい私の十七の時でした。私には父もなければ兄弟も御座いません、只夫に逝かれて今は家に來て居ります叔母が一人、天にも地にも私のたよる者は、此叔母一人、たよられる者は、私一人、二人は寄る邊のない身を運命の波上に漂はせて居ります。慈深かつた父は四年前、重い病の爲に母と私と、少しの資産を殘して別世界へ旅立ちました。母は御座いますけれども、今は母とも思ひません、又子とも思はないでせう、あゝ私の母は――母は――、申すに忍びません、何卒推察して下さいまし。現今は橫濱て、道ならぬ道に迷つて果

かない榮華の捕となつて滿足して居ります。何と云ふ淺間しい、汚れた心てせふ。九代も清く續いた家の歴史は、此母の爲に拭ふ事の出來ない汚れを生じました、其れだけならばまだしも延いては御國の汚れ、地下に冥られた父樣は、何と御怒り遊ばしててせふ、私は、其れを思へば、胸をえぐられるよりもつらいのてす、如何して此母の爲に、國に、祖先に、父に御詫びしたらばいゝのてせふ、只一つの胸飾に幾百の黄金をなげうち、金紋つけたゴム輪の車に乘る、そんな餘裕はありませんけれども、母子が食に飢えて泣く樣な事はありません、其れを、家を捨て、祖先の位牌を汚し、泣いてすがる子を捨てゝ、夢の樣な榮に憧れて行た母は人てせふか鬼てせふか、捨てられた私は、何も運命とあきらめて、決して母とも呼びません、子とも思ひません、けれども世の人は、其れを許してくれません、永久に親子として數へます。丁度歸郷致しましてから間もない事て御座いました、洋妾の母親の子だもの、男とふざける位ゐは當然よ、私生兒ても生まぬが未だしも感心よ」何と云ふ罵りの叫びてせふ、唇も裂けよとかみしめて、身を振はせて泣きました、其れも私だけならば、堪へもしませふ、けれどもあの神聖い〱浩さんを迄私の樣な者の爲に、人に指ざゝせてどうして默言て居られませふ、親に捨てられ、人には卑められ遠ざけられて心には苦悶の絶えない自分の悲境を、訴へて泣いた其れを、人はかく迄に罵つて快と笑ふのてす。其れはかつては、浩さんと云ふ語は、振ひつき度ひ程なつかしく、胸の血潮を波立たせた事も御座います、して君の爲ならばと、心に誓ひました事も御座います、けれども其れは自分を知らない以前の事、少くとも人の道を學んて、母を知り自分と云ふ者を考へて、たとひ涙あり情ある君は、私を許して下さるにしても、私はつとめて、頭からも心からも、躰のすべてから取り退けやふとして、あせつて居ります。其れから三日三晩を泣いて、苦しんて、悶えて、明しました。して終に意を決して、甲斐ない事とは思ひながらも、薄氷をふむ樣な思ひて、横濱さして參りました。停車場につきました時には、あまり見すぼらしい自分の姿を見て、はつと思ひましたが其れもつかの間、すぐ本町の旅舍に宿を求めて、疲れを休むる間もなく、突然な來濱を傳へて、母を驚かせました。其れてもまだ私と云ふ者を覺へて居てくれました母は、三十分も經たない中に、車を急がせて來てくれました。あゝ其時ばかりは、なつかしい〱もし

か、私の來た甲斐があればと、荒んだ胸にも云ふ事の出來ない、うれしい氣が致しました、別れてから四年いくら鬼の樣に思ふて居た母でも、逢へば、母さんと呼んてすがりつき度い心地も致します、見る物、聞く事、皆華かな母の目には、田舍出の見すぼらしい私の風姿と、過去の苦悶に衰へた私の躰こそ、何と見へましたてせふ、してあらゆる血、すべての涙を惜まないて、其ひざ下にひれふして、訴へて、諫めて、乞ふた私の言葉は、何と響いたてせふ、けれども、血を吐く樣な訴へも、火の樣な涙を流しての願ひも、甲斐はありませんてした、いゝえ時がおくれたのてす、母は、其時もう普通の躰てはありませんてした、何の爲に、私は、恨みの多い地に來たのてせふ、只々母の清い心を得度いばつかりにてす、もう一年早く私が此心を起せば、いゝえ私は、一年はおろか二年も三年も前から只此事ばかりに小さい胸を、頭を惱して居りました。して、まはらぬ筆に赤い心を何度云ひ送りましたてせふ、けれども母の夢をさます事は出來ませんてした。もう〳〵何を云ふても事はおくれて、取り返しのつかない今日、其れを知らないて遙々來た私が、あまりに可憐想ては御座いませんか、あまりの事に涙さへも出ませんてした。して、只此まゝ二人とも死の神にても襲はれて終ひたかつたのてす、あゝ私は、まだ〳〵、こんな汚れた母に未練がありましたのてす、未練があればこそ、七十里の道を、來たのてすもの。翌朝、袖のち切れる迄引き止めた、母の手を振り放して、悲みに疲れ、歎きに疲れ、苦悶に瘦せた死骸の樣な躰を、汽車に乘せて、おめ〳〵と故鄕にかへりました、何と云ふ莫迦者てせふ、なぜ淺間の煙とても化して靈ばかりに故鄕の地を踏ませなかつたのてせふ。其年の十月玉の樣な男の子を抱いて、日光の小西旅館に宿つて居た母に、はからずも會ふて三十分ばかりを話したと云ふ浩さんからの葉書を受け取つて、なつかしい人の手にかゝれた筆の跡に顏おしあてゝ泣きました、其時はもう、母の現在を知つてもさほど心にもとめませんてした、前からかくある事と覺悟して居りましたもの、苦悶の中にも一年を過しました現今の私は、暖い血は枯れ、豊けかつた胸は骨ばつて、樂しみもなく、望みもなく、願ひもなく、只、不貞操な母、薄情な母、と云ふ、聲ないさゝやきと戰ふて居ります、行く處迄行けば果は如何にかなりますてせふけれども、たつて私の願ひを云へばたゞ死、其ればつかりて御座います。

夜の淺草公園

鈴木春子



白雲の樣なカーテンが、花瓦斯の灯に搖るゝ寫眞屋の玻璃扉の前を、人が、ぞろ〳〵通つてゐる。樣々の帽子やショールが恰度、盛夏の園の草花が、日光に閃めくやうに搖れゆれて行く。

私等は、つと群を拔けて、植込みの傍に來た。周圍を黑く取卷いた鐵の鎖と腰掛臺とが、樹間の處々に點けられた青白い光の底に重く沈んで、一種の公園趣味とも云ふべきものを深く感ぜしめる。

鎖の內は、枝と枝との影が縱横にもつれ合つてゐる。榎、楓などの網の目の樣な影のなかに、暖かい綠の葉衣を充分に纏うた八つ手、茶、躑躅などの灌木の影が濃く淡く織り込まれてゐる。

小徑には、ちらほら、人が通つてゐる。白い顏と、暗色の後姿とが、ちら〳〵と、光と影を綾なして、ある神秘なる意味を語つてるかの樣に見える。好奇なる私の心は、いつかふら〳〵と其光の內に入つた。影に入つた。其意味を追求しやうとあせつて。

けれ共、遂に何物をも、得るを許されなかつた。唯解き難きなぞの樣な、光と影との印象が、鈍い自分の心を嘲弄する樣に、眼の前にちらついて居る許りである。

散り殘りの木の葉が、折々、ひらり〳〵青白い閃めきを帶びて散つてくる。

六區の活動寫眞からであらう。ごちや〳〵と、物の渦巻き打合ふやうな樂隊の音が、矢たらに性急な音波を送つて、この水の如き空氣を掻き濁さうとしてゐる。じいつとしてゐると、物の影が急に息を吹込まれたやうに、ゆら〳〵搖れる樣な氣がする。

（姉さん！）

不意に弟の聲がした。足の早い父樣は、何處へゆかれたか、もう影も見えない。私は歩みを早めた。いろ〳〵の人が、すれ違つてゆく。けれ共、不安に滿たされた私の心は、雜然たる種々の色彩と、冷然たる數多の瞳とが、たゞ、夢のやうに淡く〳〵我が視野の裡に動いて居るといふ事丈を、感じたに過ぎぬ。私はやつと、弟に追ついた。はつ、はつと呼息が切れる。

（あれじやない？姉さん）

私の瞳は、弟の聲の走つた方へ閃めいた。そして、ア、と小さい叫び聲を上げた。

ぞろ〳〵寄せる人波のなかに黑い外套の背の高い、紫風呂敷をかぶせた大きな熊手を、すうつと差上げた後姿は、たしかに、父樣に違ひない。

少しゆくと、赤いカンテラの灯の滿ちた通りに出た。砂埃を透して濁つた光の内に、瀬戸物、玩具、小切など、大方、明るい晝の光に見放されたやうな物が調和もなく、ごちや〳〵に並べられて、埃のかゝつたやうな艶のない眼や、人の顏色をうかがふ樣な、狡猾こい眼が、其處こゝに光つて居る。

型にはまつた舊俳優の肖顏、べた〳〵とやたらに赤い色を塗抹つた幼稚な表紙の講談本、又藝妓の寫眞の澤山ついた文藝倶樂部など、そういふ種類の本の陳列された古本屋の莚の前には、主に下町風の匂ひのする、色白のチック頭や、紺の香のする印半纏などが、好奇に滿ちた目付をして覗いてゐる。私は渠等の輕操な態度や、齒の浮く樣な笑聲を聞いて、何がなしに、近松作中の人物の、戀の美酒に醉ひしれた、なまめいた姿や、桃の花の樣な四圍の光景を想像して居た。そして、兩者の間に何等かの連鎖が、ある樣な心持がしてならなかつた。

煤ぼけたやうな赤い灯のなかを、人は、ぞろ〳〵通つてゆく。

人々の目には、露店の光景が、華やかな綾をなして居る。否、浮々した樂隊の音で意識の全部は滿たされ

て居る。否々、其よりも各々の衣服の色彩と、顔の輪廓と、種々の意味と要求とをふくんだ數多の瞳の閃めきと。――私等は、又、月光のやうな冷たい瓦斯の光の内に入つた。

觀音堂も、噴水も、直ぐ眼の前にある。……私等は噴水の方へゆく。

青銅で造られた觀音の御像を、ぐる〳〵卷いた龍の口から、青白い霧が、しゆつ〳〵と勢よく吹かれて居る。

霧は、もう〳〵と烟の樣に、御像のうしろからも湧いてゐる。前からも立つ。……あちらからも湧く……此方からも湧く……霧のなかに、金色の龍のひげが、きら〳〵光つてゐる。

御像は、多角形の御影石の臺に載せられてある。其石の角々に置かれた植木鉢の黒土が、しつとりと飛沫にぬれて、銀粉を散らした樣にきらめいて居る。

青い葉は、一つもない。

ふと私は、人々の注意の燒點になつて居る樣に思つた。

手の白いのが眼に閃めき入ると、數多の羨望の瞳が、降りそゝいでるかの樣な、誇りを感じたが、其れも、ほんの一寸の間、赤い山茶花のはなが、夕陽の光に暖かう咲きこぼれた窓の小鏡や、通りすがりの夕暮の町の何物かひそんで居る樣な底ぐらいガラス扉や、其等にうつゝた醜い自分の姿が、はつきりと浮んでくると、急に深い深い地の底にでも突落された樣な、寂しさ悲しさに胸が一ぱいになつて、世のもの皆、自分に黒い背を向けて、ふと見た美はしい五彩の光を、其廣い袖を擴げてさへぎつてゐるかの樣な感じを、ひしひしと強く覺えた。眼に映る限りの人々の瞳が、冷たい冷たい嘲笑の色を湛えてる樣に見える。

何となく、瓦斯の光が、まばゆくなる。影が見える。大きな黒い影が見える。

私は、其黒い色が、たまらなくなつかしくなつた。光失なひし自らの胸に一致してるからと云ふのではないけれ共。……私は、いつの間にか影の内に入つて居た。そして、其影に包まれて引づられて行く。――すると、其影が、段々下に落ちこんでゆく。……自分の肉躰が冷たくなつてゐる。

父樣も見えぬ。人々も見えぬ。無論糸の如き光線すらも射さぬ。我が心の内は、唯暗い暗い色と、シーンとした靜寂の聲で滿ち切つて居る。

父様も居る。人々も見える。噫、實に美しい星の花
星！星！美はしい星！
光！不圖頭の上で、するどい歡喜のみなぎつた聲が響いた。すーつと水のやうな光が瞳を射た。
よ。

而し、この厚き葉と葉の闇に灰色の蕾かたく生れ出てし我が身には、露ほども其光を仰ぐ事を許されぬてはないか。

あゝ、……この我が身。

不圖、がた〳〵と、觀音堂の階段登る人の足音が、妙に胸にひゞいた。

古典的な丹膝の香が、夜目にも白く見える埃の裡に交り合つて、一種の匂ひが籠つて居る。

私は、其香が、堪らなくなつかしくなつた。そして、自分もいつそ信仰の門に入らうかとも思うた。其門のなかには、ふつ〳〵と希望の泉が湧いて居る。：………

初夏のやうな、青いみづ〳〵しい色が、草にも木にも、天にも地にも、隙間なく流れてゐる、絶えず、美はしい花が咲いて居る。……樂しさうな歌の聲が滿ちて居る。

而し、我が胸の家は、散々に打こはされて居る。――柱には、いたましい刀のあとが、ついて居る。床や壁には生々しい血しほが滴つて居る。……新木の香は、まだ高いけれども。

このこはれたる胸の家の扉に飾るべく、かの園の花は、餘りに淸く、美はしいものではないか。

それは、優しい微動を帶びた心の聲であつた。

否、かの庭、かの花、其等は凡て繪てある。ある大いなる人の子が、雲に描いた巧みな繪畫に過ぎない。謙遜なぞ決してする勿れ、汝が胸の扉は、まだ一度も開かれた事が無いじやないか！

其は、烈しい反抗の響をふくんだ熱狂の聲てあつた。雲のやうに烟のやうに……其聲もだん〳〵薄らいてゆく。……

すると、其反對に甘い――かすかな哀愁をふくんだ思ひが、こん〳〵と湧いてくる。

和らかなランプの光の内で、縫物してゐなさる母様の姿と、闇を飛ぶ木の葉の音とが、ぼうつと浮んで、ほろ〳〵と、あつい涙がこぼれた。

人々は、皆、希望に滿ちた華やかな顔をして、なだれ〳〵て光の波を渡つてゆく。（貴）



デヤレスト

下枝子

一人娘で育つて、十三の歳初めて女學校の寄宿舍に入つた私は、學校中での最年少者でもあり、小供らしくもあるので、學校一の赤ん坊と呼ばれ、諸先生方からも愛されゝば、上級生からも可愛がられ、髮をゆつて上げませう、帶を結んてあげませうと、皆なからちやほや可愛がられたものてすが、それでも故郷戀しく、母樣を思ひ父樣を懷しがり、ホームシックばかり起して、又かと笑はれるほど、夕方なぞ窓によつては泣き泣きしました。

寄宿舍に入つて一週間も經つた頃てしたてせうか、或る夜同室の四人の方と都合五人、て一つの洋燈の下に机をよせて、明日の日課の下さらへして居りますと、急に廊下が騷しくなり、バタバタ上草履て駈け出す音の間に、火事々々の聲が聞えるんてす。

ソラ、と皆な廊下へ出て見ますと、神戸の港の小野濱とか云ふあたりが、パッと赤く燃え上つて、白壁の倉庫、西洋館、さては海に浮んだ小舟蒸汽船など、まるで夢の中の景色でも見るやうな美しさ、廊下の突當りの河村先生のお部屋の前が一番よく見えると云ふので、私も皆樣の跡について行きましたが、別に縁者と云ふものも此地にはない私てす。

『まあ奇麗だ！』

とつい斯樣した言葉も出るのてした。而してハッと氣がついて餘り同情のない言葉と赤くなりましたが、皆樣も矢張り。

『火事は面白いわね』

『アラ又火の手が上つた事よ、あゝ奇麗なこと、今一度燃え上ると好い。』

など隨分殘忍なことを平氣で云つてらつしやるので、私も夢中で賑やかな美しい光景に見入つて居りました。併し思ひはいつの間にか又故郷の事につながつて、故郷に居てこれ丈けの火事だつたら如何、森山といふお米屋が燒けた時は、私の家とは十町も離れた家だつたけれど、孫一といふ下男も行けば、終ひには父樣迄黑い毛繻子のパッチを穿いて、舊式な吸上ポンプを小僧にかつがせ見舞ひにお出掛けなさるやら、母樣は母樣で下女共を相手に、いつでも味噌豆を煮るときか、餅つきの時か、左樣した時の外平常は決して用はない大釜で御飯をたいて、あつい焚立ての手の皮のはげるやうな御飯を大きな茶漬茶碗に入れて丸めて、其上へ斯うした時の用意にとしまつて置いたきなこをまぶしたお辨當を、何荷も何荷も作つては火事場へ持せてやるといふ大騷ぎ、私は從姉と一緒に二階で寐て居て、階子段の中程迄下りて來は來たが、どうにも恐ろしく、ガタガタ齒の根も合はず震へて居たつけ。

『何を見てらつしやるの、最う火事はとつくにおさまつたぢやありませんか、御覽なさい、皆樣皆な御引上げになつて、貴孃お一人ですよ。』

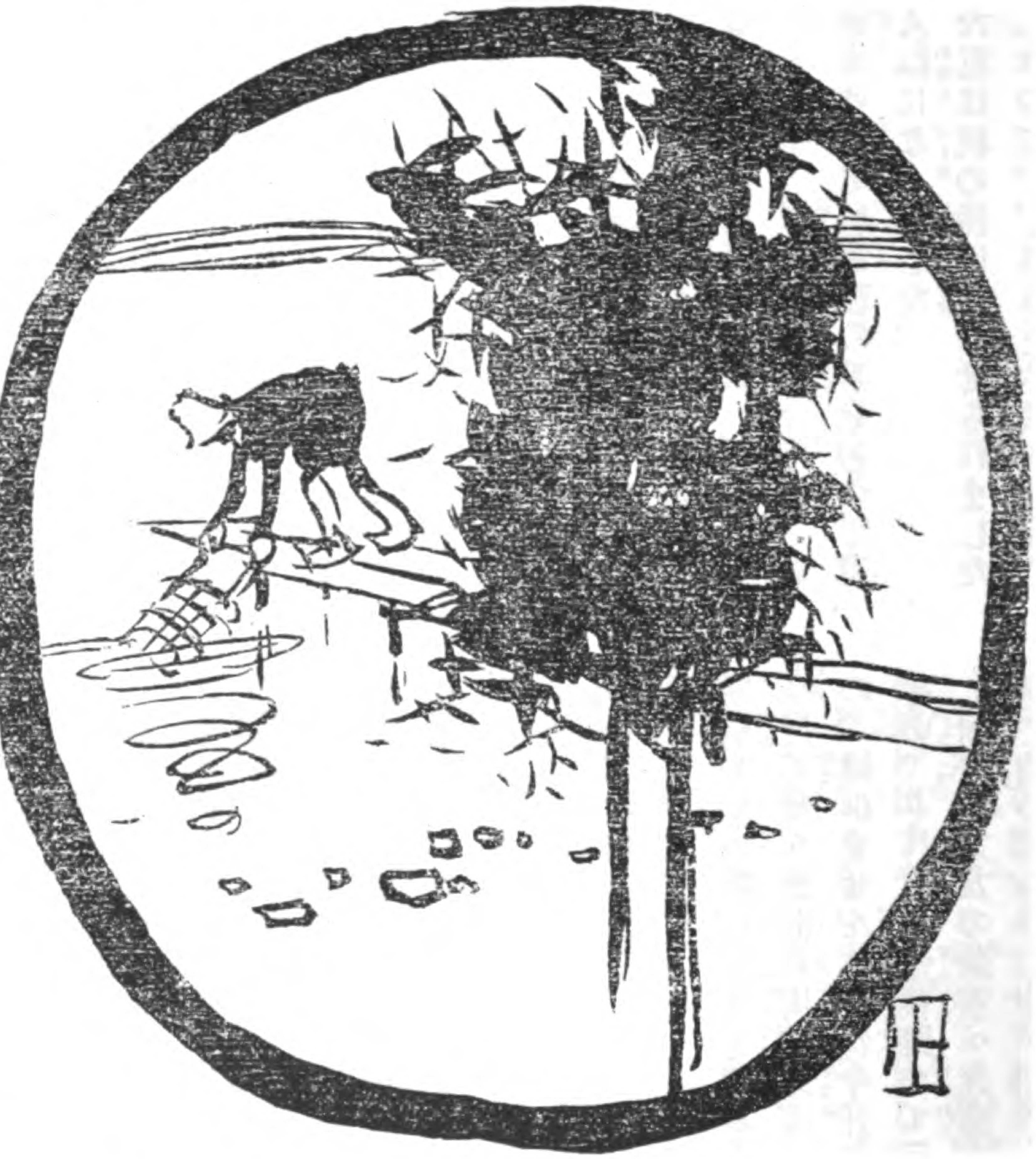
氣がついて見ると成程左樣だ、而して私の傍には女教師の河村さんが金縁の眼鏡越しにやさしいお目に私を見入りながら立つてらつしやるんです。きまりが惡くなつて默つて俯向きますと。

『オー音樂！あなた聞いてらつしつたのね、私氣がつきませんでした、何と云ふ可哀相な樂でせう、あれはねえ、此後ろの西洋館で赤ん坊がなくなりましてねその紀念會の樂なんですよ、オヤあなた泣いてらつしやるの。』

河村先生に音樂！と云はれる迄は氣づきませんでしたが、いかにも哀れ深いスヰートな樂の音色です。聞き入つて居ると堪らなく悲しくなつて、ついほろりと涙を落したのでした。而して泣いてらつしやるの？と訊かれると尙悲しいやうな氣になつて、終ひには忍びきれなくなつてよ、よと聲迄立てました。

『如何なすつて、――お故郷の母樣の事を思つてお泣きなの？先生もねえ、十九の年に初めてアメリカへ行つたんでせう、末つ兒なものですからね、甘やかされて育つて、本當にあなたと同じことゝベビーでしたの：：オヤ御免なさい、ですからねえ、知らない、おまけにどちらを見ても髮の毛の赤い、眼玉の碧い異人さんばかりなんてせう、堪らなく淋しくて悲しくて、日本

が戀しくつて、母の事を思つてはよく泣き泣きしましたよ、それてもね私がたよつて行つて下宿した家は牧師の家てして、家庭も立派て、アンナつてね、私と同じ年の娘さんもあり、夫人もそれは心切な方て何彼と面倒を見て敎へて慰めて下すつたんてすけども、どうにも悲しくて悲しくて、皆樣の心切に對しても泣いたりなんぞしては濟まないと、ちやんと考へて居るんてすけれど、珍らしいものを見るとか、變つた事に逢ふとか、奇麗な音樂



（八等）裏の川　青森　立花もと子

を聞とかしますとね、最うすぐ故郷の事が思はれて、母に見せたい、聞かせたいと思ふんてせう、而しては泣くてせう、いつてしたかこんな事もありましたよ、丁度ねえ今晩のやうな春の好い晩てしたの、家中が皆な食堂に集つて、食後の雜談をして居たんてす、すると何處か御近處てやつぱり赤さんの紀念會とかとありましてね、哀れつぽい音樂が聞えたんてす、私妙に斯う胸にしみるやうな氣がしましてね、泣きましたの、夫人だのアンナだのが種々心配して慰めて下されば下さる

程、無暗に悲しくなつて餘計なけるんですの、オイオイ泣き出して自分でもやめ度いと思ふんですけれ共ね、涙が出て出て仕方がないんです、するとね、夫人が、そんなに悲しいなら、泣き度い丈け、涙の泉がかれ切つて了ふまで、たんとお泣きなさい、そして此洗面器をあげますから涙で一杯にして下さいと仰有つてね、大きな洗面器を私の前にお出しなさるんでせう、私思はず可笑しくなりましてね、吹き出したんですよ、ホヽヽヽ』

河村先生は面白相に仰有つて、今の今迄泣いて居た私もつい釣込まれて、思はずニッと笑つて了ひました。

『さあ／＼、何時迄もこんな處に居たつて仕方がない、私の部屋へ被入いな、而してあなたの得心のゆく丈け幾らでもお泣きなさい、洗面器もお貸しゝますよ。』

斯う仰有つて、モジモジして居る私の手をとつて、直ぐ傍の部屋へお引入れになりました。

お部屋に連れられた私は机の傍に坐らせられましたがお部屋を中央からしきつて、ぐるりと六枚屛風を立て廻してありました。

『早くから寐床をとつて了つて、御免なさいよ、お狹いでせう、あなたお菓子は如何、江戸屋の田舍まんじうが取つてありました、サアお一つ、下等な菓子ですけども、一寸とお茶受けによござんすよ。』

先生はお茶をいれて下さつたりなんか、いろ／＼下にもおかないやうなおもてなして、アメリカのお友達の寫眞だの、先刻のお話のアンナの寫眞、牧師一家と一緒におとりになつた先生のだの、大きな黒塗りの手箱から取り出し取り出し、見るのも急がしい位あれこれと說明して下さるのでした。

と急にジリジリジリーンと電鈴です。

『何の鈴？就眠でせうか。』

『否、消燈。』

『アラ』

周章てゝお暇しやうとすると、

『何でせうまあ其周章方は、私の處に被在るんだもの、搆ひませんよ、ね今井さん、今少し遊んでらつしやい、それに消燈後歸つて行つて、却つてゴタゴタして同室の方だの隣室へ迷惑ぢやありませんか、朝迄此處て泊つてらつしやい。』

『え、てすけれど……』

『てすけれど如何？それとも先生の處に泊るのおいやなの？』

『否』

『そいぢや好いてせう。』

それて嫌應なしに屏風の中に一緒につれられて、寒い時候てないからと仰有つて、遠慮勝な私を無理に御自分の夜具の中にお入れになりました。

如何した譯か寐ようとしてもねつから寐つかれません、久しく久しくまぢ〳〵して居ました。

『まだ眠らないの、何故？』

折々河村先生から斯樣聲を掛けられるので、先生も矢張り少しもお眠りなさらないらしい御樣子。

頰の處が熱いやうな氣持ちがして、ふと見ると、知らない間に、うと〳〵したのてせう、先生はずつと私に寄り添ふて、私の顏を見入つて被在いました。而して

『また目を覺したのねサア又今のやうにおねんねなさいよ。』

併し私は如何しても寢つかれません、眠らうとあせればあせる程、尚更目がさへ切るのてす。

『何故お眠りなさらないの？』

河村先生は幾度も言葉をかけられた。

『何て可愛いんてせうねえ、全くのベビーさん！』

その内に夜も明けて、起床のベルが鳴りました。私は逃げ出すやうに驅け出して部屋に歸りました。

誰も知らない筈てすのに、もう私が河村先生の處て泊つた事が寄宿舍中に知れ渡つて居て、其日の夕方、晩御飯の時私が食堂に參りますと、摺れ違ひになつた人達は屹度、

『デャレスト』

とわざと、解るやうに、口の中てつぶやいたと云つた調子の云ひ方をして行き過ぎました。中には。

『デャレスト、パッパッ、ウアファファ、、』

などと思ひ切つた嘲笑をして行くものもありました。

食堂の黒板には

K. and I. Dearest

など、記されてありました。そして今井とか河村とかわざとに私に聞えるやうに蔭口する人もありました。私はもう堪らなく嫌て泣き出し度いやうな氣になりました。

其頃學校ては敎師と生徒、上級生と下級生、それが

少しても親しくして居ると直ぐ、デヤレストと云ふ言葉をあびせ掛ける風習てした。

其後河村先生は、私にさも親し相な様子をお見せになつて、少しばかりの用事ても、殊更私を尋ねて私にお命じなさると云つた風て、寄宿生は尚更やかましく騒ぎまし穴。併し私はそれが嫌て嫌て、なるべく此方から河村先生を避けるやうな態度をとりました。

而して先生は間もなく長谷場と云ふ美しい可愛い通學生と親しくなさつて、生徒は又、デヤレストを呼ぶのてありました。（貧）



お才さん

早蕨

十一月の二十七日である。

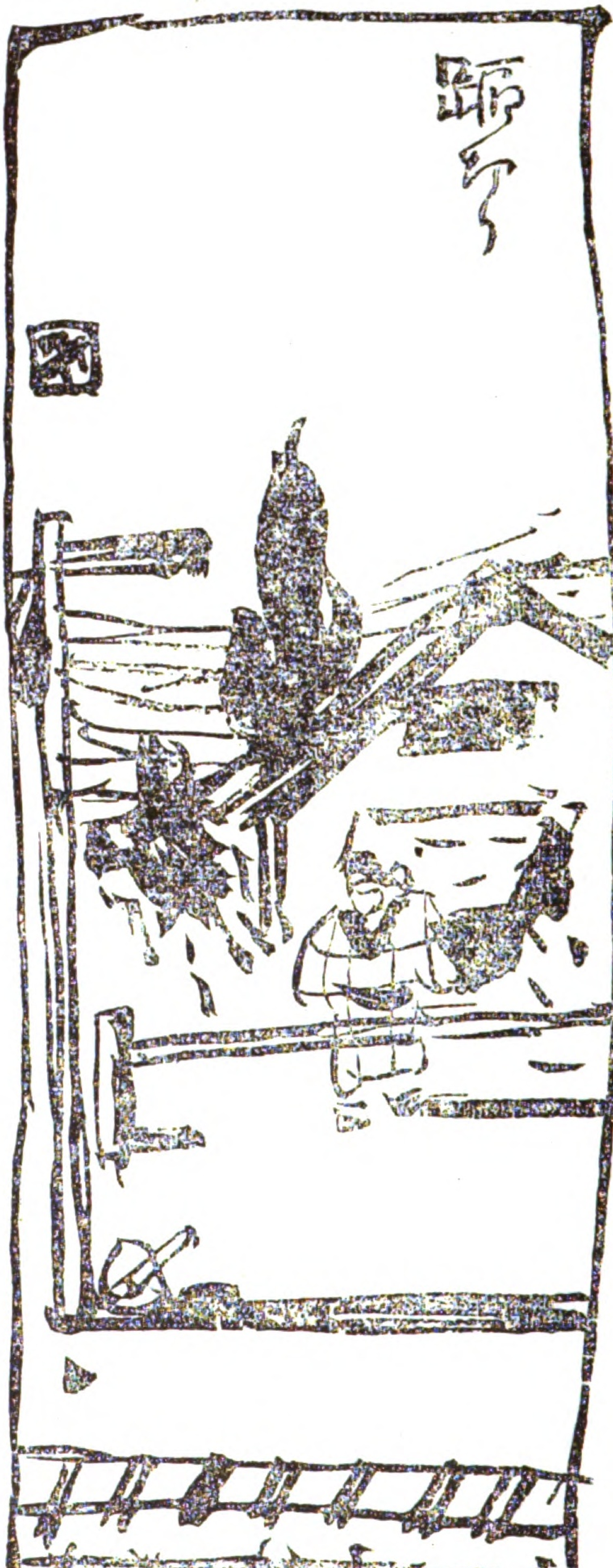
つい此秋先き萱葺の屋根も瓦葺に更へられて、立派な社殿となつた。金文字に田家村と傍へ小さく、中央へ諏訪大明神と大きく書された新らしい額の懸かつた拝殿に、何の誰と墨太に名入の花提灯、何の祈願かぬばたまの黒髪の長きもぶらさがつて居る。墨繪やあぶら繪の額のわきに小さい紅緒のはきものや、緋絹にてしらへて女の乳首をまねたのや色々かけてある。蠟燭の灯はとう〳〵と燃えて、くゝり上げられた紫の幕の内方は、金の御厨子、白がねの神鏡はまばゆい。

目を病ふ人、足のわるい人、あをざめた顔の人、けふは御縁日だけに七八人の男女。みんな四十位から六十前後の參詣者斗り、若い女は私だけである。神守人と云ふても敢て烏帽子直垂てもない。粗末な手織木綿茶縞の綿入につゑの羽織。

やがて、のりとがすむと靜寂として物の音もしない山中に、大皷の音が何となく神々しくひゞく。

私は三拜九拜すると、さつさと身仕度をして社殿を出た。

晝なほ暗き樹立の中、廣くもない社地を淋しう灯つて居る常夜燈を右に左に、中を通つて、東コートの上から裾をつまんて、とつとゝ石の階段を下りる。雪早き北國の霙まぢりの雨に山颪は、雪帽子につゝんだ頬にも痛い程である。麓へ來た。西南、秋葉山につらなる一脈の田家山は屛風立てになつて、枯れ凋んだ雜樹は階子田の溜水の面にかつきりと倒影を印して居る。心もち、だら〱になつた狹つてい里道を、小石に激しては泡沫のうくいさゝ流れを左にそうて。樹立から透く赤壁の家もまばらに見えて、鷄犬の聲も聞えて來た。何やら身を引きつけるようなものゝ音が聞える。とおもうて耳をかたむけると筬の音である。ふと私はお才さんの家が此邊に有る事を思ひ出した。お才さんのお父は頭のながい背のたかい人て、寒



（九等）踏切り　名古屋　板澤としこ

中雪を積み夏になるとそれを使ひ用として町へ賣りに出る。お母は新發田の殿樣のお乳母だつたそうだ。お才さんは十五の時、關東へ絹機習ひに出て、三十にして去月歸國つた。二人の女の子も連れて來た。亭主だつた人は奉天の落る前の日戰死したといふ。亡きつまへの誓とお才さんは髮を切つたけれど、いまはまだ腰の下までのびた、が艶い。

良人に別て、盲し姑に、病る義兄に、二人の子供を抱へて女のかよはき腕に生活難と戰うて居たが、どうしてお才さんの手一ッて多勢の糊口を過して行れよう。

手づるを求めて、昔は全盛をつくして榮え〳〵たといふ、常陸、大寳なる横瀨家のかゝへ人となつた。けなげなるお才さんの性を主人もめでて、厚き保護の許に亡夫の年金も貯蓄し得るやうになつて、今日あるのも、みんな横瀨樣のおかげだといふて、感謝の情を表して人に語つて居る。

つくばね詩人横瀨夜雨先生に著名なるお才さんの詩がある。お才さんは度々詩中の人に捉へられた「お才あれ見よ、越後の國の、雁が來たにと、だまされて」、（二十八宿）と泣いた當時は、山を見ても、野を見ても、すべてのものがさしびく涙はこぼれたて有らう。

現今は再び慈愛こもれる父母の膝下に、石油樽を背負いだり、薪を拾うたり、みづ〳〵と肥えて居る。とこんなことを思ひながら、土橋のそばの、ギーゴトン、ギーゴトンとめぐッて居る水車場の許へ來た。

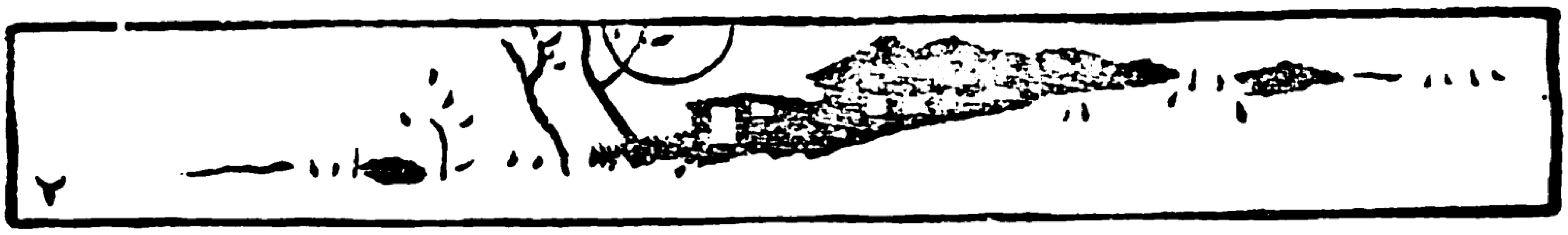
此處から一軒、二軒、三軒目の家がお才さんの居る家だ。柴垣を結うて家の裏におほきい竹藪のある、とみて居たらひよつくり十二位の女の子が出て來た。みると菅笠は赤い緒にくゝられて、小さい草鞋をはいて、――お才さんの總領娘――高ちやんだ。どこへ行くのであろう。「高ちやん母やん居たかい」。と私がいきなり聲をかけたら、「機織つて」むくるじのようなくる〳〵した目していふ。「高ちやん常陸に產まれたんだもの、夜雨先生ッて方知つてますか」―「奥の兄ちやんよ」「そう奥の兄ちやんッて云ふの、兄ちやんいまもやつぱり草花を弄つて居被るでせう」―「否、この頃は歩るけないので奥にばッかし引籠て本を讀んで居るの、帶も一人ではしめられないし、足袋も高が穿かしてあげるの」「帶も高ちやんがメてあげるのですか」「帶は若いおばちやん」「おやッ若いおばちやんッて奥の兄ちやんのお嫁さんかい」「そうぢやないよ、奥の兄ちやんのお母樣だことよ」。（貫）



暗中の文字

夢殿

あゝ今日も重きなやみの
去りやらず――はせちがふ人
亂れたる一國のこゝろの
どよめけるフローレンスよ――
さはれまた夕となりぬ。
こゝは河南の、人家もまれなるほとりなれば
町のどよみは遠くきくのみ
やせ衰へしバルダザルは
たゞ恨みによりて――これのみは
怪しくも輝るまなざしを
たえて久しきギリシヤ文字の上にさらしぬ。
（さはげる町を斜にさして
薄黄ににごりし晩秋の夕日は、この納屋の
よろび割れたるすきを通して、
なやましざまにおどみぞ入るに
敷き散りし藁屑の上に
おびたゞしくもまひのぼる
埃のにほひ
赫ぢやけて、たゞ亂るゝにまかせたる、髪に
むれよる
さはれどもバルダザルは
身うごきもせて一心に
文字を見つめつ――やゝありて――。
あゝ……こは何故ぞや……。
昔よみたる彼の文字の
いと高かりし響やいづち
又深遠かりし靈氣やいづち
まばゆかりにし光明さへ
いづくゆきしぞかげもなき――。
（彼の響――彼の靈氣――彼の光明――
あゝいづく……いづく……いづく……。）
深き思ひをたどらんとすれば
忽ち浮ぶ――彼のマリンタの
はげしき勞働に肉をうたれ
日にへだたりし靈と肉と――
肉の飢ゆるに囚はれし
餓鬼の我身のいたましき



記憶のいたさ——。
耳はたゞ故なく町のどよめきを
茫然としてきくのみに
何の響もつたはらず——。
　我かくては受けし恨をかへさんに
　何を以つてかはかるべき
　智識の力の、無限無盡とたのみたる
　ギリシャの學問とはなれたり。
　歸れ——歸れ——
　　そのかみの
　　彼の響‥‥彼の光明‥‥彼の靈氣
あせりつゝせはしき息をもろ共に
大粒なる涙流るゝしきりなれど
瞬間にひらめくものゝかげは
電の如消え去りて
文字を照す光とならず——。
　忘れしや‥‥あゝ忘れしや
　いたき三年の勞役につかれはてゝは
　我はすべてを忘れしや——。
　一度は、確と見たる、きゝたる、感じたる
　あゝ彼の光明‥‥響‥‥靈氣‥‥

　今はいづくぞ‥‥あはれあはれ‥‥
からびはてたるつばをのみつゝ
紙の上にこぼれし涙のかゞやきを
唇ふるはせて見入るほどに
早くも暮れぬ——秋の日かげ‥‥
やがては迫る闇の深さ
文字は甲斐なくかくれ去りて
死人の如くこはゞりし
「我心」あるのみを——彼は知り、
泣くにあまりて身じろがず
よせくる闇と暗中に
きそひきそひぬよもすがら——。（萱）

註　デュドモにてチトーを見し日は、彼は苦腦の新に起れるを感ぜしが、其夜のかへるさには、或る書店にてギリシヤ語の書を見、其うちにて最も廉き一冊を買ひとりてもちかへり、藁の上に座りて一心に之を見入り、昔の心力を呼びおこさんとせしが、見れども見れども其力も歸り來らず、忽にして日のみくれたり、然れども彼は暗中に之を見つめしまゝ身うごきもせざりし（エリオット原作「雪崩と百合」の一節）



若き憂ひ（貮）

伊達まつ子

○若き日のあはき悲しみ今も尙わづかにのこりかく涙する

○大いなるこの天地をたゝへうる力を持ちしわがほこらひよ

○いさゝかの罪さへ犯しあたはざるこの弱き子の寂しさを見よ

○今日も亦昨日のまゝの喜びをくりかへしつゝなつかしみ居ぬ

○若き日にありし事ども思ひ出て今日もわずかに心うるほす

○喜びをうしなひし身は大風のあとにも似たる靜けさに居ぬ

○よのつねの人に交りて人々のなすべき事をわれもしてあり

○なつかしき君にも逢へと春の夜をともしび並ぶ街をゆくかな

男の世（貮）

石上照子

○名を藉りてしばし男の子の世に住まむほこり寂しき女見むため

○さゝやきの人に聞えぬ林にて皐月の鳥と物思ひする

○足をもて手の償ひをする男いとやぶさかにまゐなひに來ぬ

○



うらがなしほのに緑の萌えそめし心の上の灰色の空

○

雨の後彌陀にたふとき光輪の暈していでぬ海の上の月

○

時の鐘つく寺男いと憎し若造りせしわればかり見る

○

病む牀に鶯買ひてもてまゐる風流男としも君を思はく

○

操てふ窒き人の名を負ひて身の殻めづる妻となりなむ

快樂（六）

山村龍子

○

形よく髪の結へたる嬉しさに遠まはりして家に歸りぬ

○

うら若き女二人は樂しげに着物のことを語りつつ行く

○

玉に似る乳を抱く我等少女子の尊きさまはおん神に次ぐ

○

若き男と行き逢ふごとに戀よりは少しく輕き心の起る

○

汽車の中あまたの人の眼を奪ひ若き女のもの言ひて居る

○

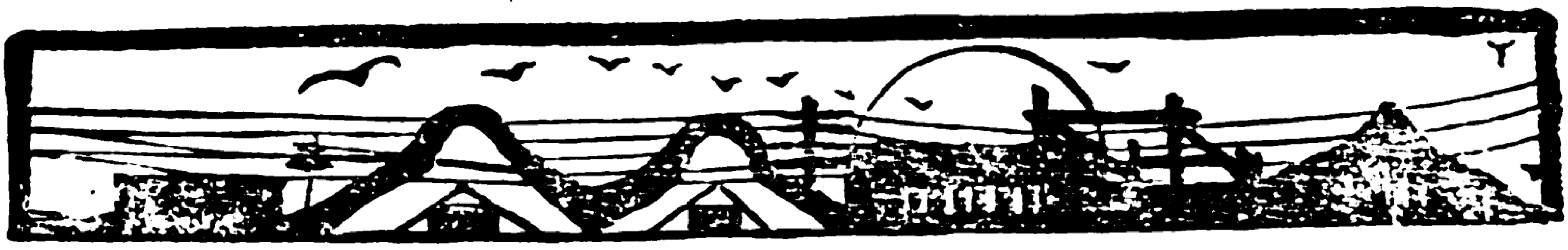
二十三年毎にわれ『妻』となることの難きをふかく感ずる

○

あゝ日毎我がこの胸をなつかしき少女心は遠離り行く

○

君思ひし如くにも我れ夜も晝も間なくぞ乳兒の思はるゝかな



手枕（六）

原田琴子

○泣くほどのいさかひをするそれもよし見ぬに少しくまさるとおもへば

○ビイドロの玉にも似たるみ心をいかに守らむいともあやふし

○わが老ゆるこのかなしみを慰するには君の力も少し足らざり

○夢にだにまさに來むかと敷妙の手枕つくりかたさりてぬる

○古のかむろのごとき者おきてみ心の國通はしめなば

○わが見たる凡てのものに裏表あるを思ひてみ心を見る

○鏡臺に鏡をおかぬそれよりもさびしきものは古女かな

○相思ひ相死たらばけだしくは一人となりて生れ來むかも

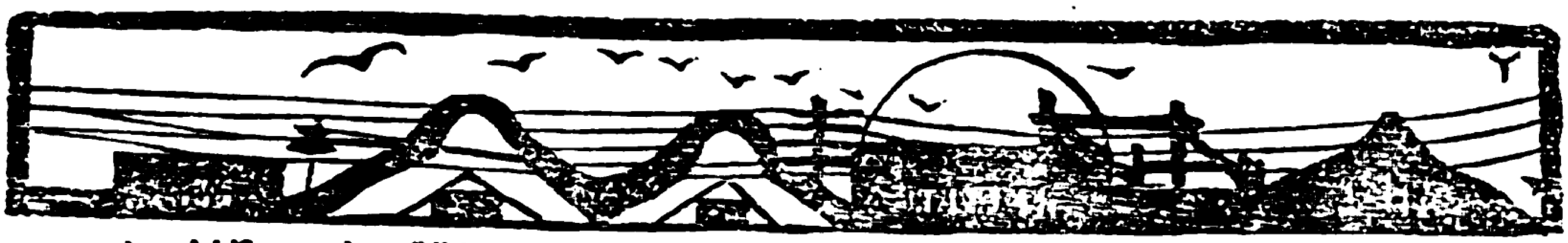
○かゝる時挽歌をよむそれゆゑにおぼえそめにし道ならなくに

福井縣　片山千里

○死したりと思ひし人の跡へり來し如き心地に君と語りぬ

○よく夢にものに追はれて走り得ぬ事ある如く昨日も今日も

○よしや身を捨てゝも君の爲ならばと宣ひぬ恐ろしき哉



逢はまじとすなる心の中にては逢へよ〳〵と何かさゝやく

○

父いませど母はいませど何となう安らかならぬ心地のしぬる

飛驒　坂井政子

○

命おばあたへむとまで云ひ給ふそれゆゑ少し恐ろしかりき

○

たがえずに逢ひに來よとてこの鍵を渡されしかど心たゆたふ

○

難きことわざとまうせどいと安く答するゆゑ憎しと思ひぬ

○

針金の上をあゆむにひとしかる危ふさながら尙したがひぬ

○

したゝかに酒くみしかどいさゝかも醉はぬ君ゆゑ寂しうなりぬ

○

何時の日もいかなる時もことなげにもの宣まへる君の憎さよ

西多摩　三ケ島よし子

○

秋なれば谷のもみぢを春に咲く花にまさるとわれはいふなり

○

湯あがりの手拭とほる夜の道を遠廻りしてかへり給ひぬ

○

天の姫の小指はなれし切り爪のこぼれてありぬあけぼのの月

○

力なき歌などつくり送らんはみづからさへも足らぬ心地す

○

小さなる胸の時計と大時計同じ時をばさすを疑ふ



結婚後に發揮すべき女性の權威

和泉花葉子

灰かな眞白い秋の日影に、花芙蓉は匂ふ。夢のやうな、秋陽炎のもゆる柔かな、枯草の葉にさへ、絶えざる何物かの動搖の跡が見えます。

私は、夢のやうな甘い過去を辿つて來て、夢のやうに人の妻となりました。唯快い、茫とした間を辿つて來たやうな、淡い感傷の中に、靜かに私の一ケ年間を考へると、本來此約束が、何處かに影をひそめて居たやうに思はれます。

秋風の光がうら悲しく、白き尾花を吹くがまゝに、白雲の、靜心なく行くがまゝに、私は幼年の懐かしみからさめて、今更のやうに吾身をふりかへつて見た時私は早や人の妻でした。

けれども私は敢て、近代の女性のすべてが感ずるやうな心の不滿に、自分の境遇を呪ふと言つたやうな、そんな淺墓な心はしませんでした。

海の波のやうに動搖しやすい、それて居て、美しかつた、若い處女の夢——今の夫と、エンゲーヂてあつた私は、月淡く、花匂ふ寄宿舍の玻璃窓て、眞白いカアテンをかゝげながら、羞かしき恐怖に胸を躍らせつゝ、密やかに、なづかしき人の手紙を何本くり擴げたのてしたろう。今にして思へば懐かしかりし甘き幻惑の情緒よ！

花咲き亂るゝまゝに、月曇り行く夜の夢に、圓き軟かな眸、豐かな頰の、餘りに鮮やかに其人の面影を描き見ては、小さき胸の、唯ならずうち騒ぐ朝もありました。

けれども私はいつまでも、醒めたる夢幻に耽りたくはない、人妻として現實の中に投り出されたと言ふてそ

ごには冷やかな悲哀に伴ふ、覺めたる歡喜があつたのです。

月の明るい晩、白鷺のこゑがしめやかに通ふ、二階の八疊の間で、明るい洋燈の下に、靜心なき世間話の二人の間には人知れぬ特殊の興があつた。

初めて、呼び捨てに私の名を呼ばれた時、若い嬌羞の血が、はしやいだ心を流れました。

「はい」と返詞をした、私の其時の言葉には、意味ある情緒の韻律と、淡々しい歡喜とが籠つて居ました次て、妻と言ふ意識、冷やかな現實の中の一人となつたと言ふ意識、もう處女のなつかしさには再びなれぬと思つた時、そこには、ほの暗い、かすかな哀感の閃めきがありました。

けれどもそこには、力の勝れた、たのもしい援護者が、其強い、權威ある腕に、妾を抱擁いて、妾の爲めには何物をも犧牲にせんとまでして居るのを思ふと、私の心は、總ての滿足に、華やかに波打たざるを得なかつたのです。

いかに美しく、花の如かりし吾が心の滿悅なりしかよ！

結婚した當時、クラスメートの誰や、彼やから、綺麗な繪葉書に、あらゆる讚歎の辭をつらねた、御祝状を頂戴した時、若い友達の、羨望に充ちた、美しい祝福の御言葉に、私の小さな胸はどんなに華やかに波打ち、私の眼はどんなに耀やかな表情にもだえたでせう。

私は女と生れて、始めて、ほんとうの女となつたと言ふことを明かに感じたのです。そこには、強い權威のある、若い華やかな、誇りがありました。私は、其誇りの中に、すべて、祝福すべき歡喜に充ちた人生を見て、充ち溢れた、滿悅に、光れる吾が微笑を匿すことが出來ませんでした。

田山花袋さんの小說『妻』を讀んだ時、處女より、人の妻に、妻より人の母となつて行く、暗い女性が必然逢遇すべき徑路を思ふて、人妻と言ふ其名を、果敢なきものとも思つて見ました。

しかし私は、私の生涯が、あのやうな悲慘な矛盾に咒はれて行くべしとは思はずにありたいです。私は、女性としては、クレオパトラのやうな、濃艶な人や、

小說『煤煙』に出た、眞鍋朋子のやうな、衒氣に充ちた生涯は嫌です。

私は、人の妻として、いつまでも若く眞面目でありたいと思ふ。明るい強い誇りの中にも女と言ふ意識は何處迄も捨てずにありたいと思ひます。

夫の爲めの妻として、妻たるものゝ夫として、私は夫妻の間に必然的に起る、權威ある眞實に充ちた、異性の愛に活きたいと思ひます。



（十等）　步み初め　青森　井上よし子

倦めり。はた、あきたり。と言ふて、戀の爲めに戀を弄び、愛の爲めに、愛を恣にする女性の、憫れなる悲哀よ、告白よ、悲歎よ、憂惱よ。

私は近代の若き婦人として今少し誇り高くありたいと思ひます。異性相互の愛を、單なる衝動にのみよりて起る甘き幻惑とのみ、淺はかに解したくはありません。其間に、何物かの意味ある、權威あるものゝ影を見出したいのです。

そして女と言ふ軟かに暖かな心を以つてしみじみと其人生を味ひたいのです。

妻となる時、はた母となる時、誰かは明るい暖かなうら若き嬌羞を感ぜぬ人がありませう。妻と呼ばれ、はた母と呼ばれた時、誰かは女として、満足なプライトを感ぜぬ人がありませう。そこに人生があり、涙があり、愛があり、情があり、そして人間が活きて居るのです。

真白い日影に、花蘭が仄かに匂ふやうに、明るい野の草に陽炎がもゆるやうに、赤い血の豊かに通ふところ、そこには、目に見えぬ、自然の、偉大な祝福が充溢してる筈でせう。

けれども、私の心は動揺しやすい。

明るい歓喜に伴ふ悲哀、満悦に充ちた心の欠陥、山に居て、海の生活を思ひ、海に居て山を空氣を憧憬するやうな、かすかな矛盾した悩みに出逢ふことがあります。捉へても捉へても、捉へ切れないやうな——妻とならない以前に、何かなし殘して來た、大きな仕事があるやうな、そんなことを思ふて、夢のやうに茫とすることがあります。

けれども私はもう人の妻です。總ての男の前に於てもはた女の前に於ても、私には自らに光るサムシングがあることを思はずには居られません。

權威ある私のプライトが、大きな「力」と言ふものを負ふて、人生と云ふ波の中に、光ある努力を續けて居るのです。

私は、人妻となつて、初めて、人生に觸れたと言ふ意識を得ました。そしてそこには矛盾に充ちた暗い悲哀と、光明に充ちた明るい歓喜の兩面があると云ふことを知りました。私は飽く迄も、誇り高き近代の女性として、明るい歓喜の中に、人妻として華やかなライフを送りたいと思つて居ます。(寅)

○

牛込　平塚白百合

泣きし後のまつげに殘る露はどのうるほひみせて春の雨ふる

谷間より山と山とのいとせまき空見るこゝち心たらいぬ

眼を病むと八つ手の影に紅絹の切れ手にしてゐたる白き顔みゆ

秋の風少なくなりし髪の根をひやひやとして吹きすぐるかな



戀を捨てゝ運命に服從せんとする心の渦巻

霞子

私には木村樣のお心がちやんとわかつて居る、嬉しい、嬉しい、彼お胸にすがりたい、天地間が暗黑てあつたら、私は彼お胸にすがつて思ふまゝ泣く、木村樣の、木村樣のお優しいお胸に、けれど〳〵そんな事が出來ようはずがない、どうしても此品はお返しなければならないのだ、お返したら何とお被仰だろふあゝ何も御存じないからお怒りになるのは知れて居る、あゝ私が惡かつた、先刻頂きさゝへしなければよかつたのに、けれど先刻彼小箱を渡された時の私の血潮は、熱して〳〵夢中だつたもの、あゝ今更お返して薄情と云はれるのがつらい、あゝ此止度なく頰を流れる熱い泪を木村樣のお手にそゝぎたい、木村樣！木村樣思はず叫んて、ふら〳〵と立上つたが、又ばつたり座つて座ぶとんの上へつゝぷして終た。

二時間あまり無意識に火鉢へかざして、しつとりと汗ばんだ手に、握つた皮張の小箱！あゝ此中には何かひそんて居る・・・？おゝ少女の魂を奪ふとする惡魔開！がくまい、開くまい、開いて奈何仕樣、此箱のある物に觸れたなら、私の魂は飛んて終ふだろふ、一度幼き胸に刻み附けられた印象の、今もやゝともすれば心を迷はせ樣とするのだもの——あゝ、此箱中の魔に觸たなら、私は處女てふ誇りを捨てゝ、木村樣の前に此主ある心を捧げはしまいか、あゝそれが自分ながらあやぶまれてならない、開くまい、開くまい、死んても開くまい、明後日又居被るとお被仰たから其時此まゝてお返しやう「それならなぜ今渡された時すぐ返さなかつた」と胸のどこかてしきりとなじる、おゝ切ない此胸！誰にもあかされないから猶苦しい。

あゝ私の心は狂して居る、どうせ狂して居ならあけやう、かまわない――かすかにふるう手先てそつとふたを開けた、緋繻子て張りつめた中央に燦然と輝やいたダイヤの指輪つと指にはめて暫し茫然と見つめた、其まゝ私の魂はいづこへかあこがれて終た、とやにはに何物にか深くも胸をゑぐられて、ハッと我に返つた。

お母様が今日お叔母様のうちへ何しに被行たか？私は知つて居る、たしかに知つて居る、其お留守に……あゝ私は‥けれど猶ぬき去り得ない指輪にはら〱と熱涙は止度なくそゝがれた。

小春日和のうらゝかさ、霜どけの庭に佐吉は松の手入れに餘念ない、先刻から頬白が梅もどきの小枝を嬉しげにとび渡つて居る、私は南の小窓にあたゝかい午後の日をあびながら、幾度か無意識に庭をながめては又あとをよむ、横けいに細かくかゝれた、ペンの文字巻紙に綴たならたしかに丈もこすべき長文。

（僕の足の下は地獄の底だ、こう思つては一日も居られぬわけだが、僕には護身がある、光枝さんといふ護身があるから大安心して航海して居る、光枝さんの待つて居る地をふむのも、もう一ケ月ばかりに近づいた。）

讀終つて静かに元の封筒へ納めて、今更の様にじつと見つめた、文字は次第〱にくもつて、はてはほろりと落ちた一雫に、紫インクがさつと散つた。

あゝ濟ない、津田様に濟ない、私の心は一度津田様に捧げた心ではないか、自分のもので自分の自由にする事の出來ない心だもの、かりにも木村様にさゝげたいなどゝ思ふのは不貞だ。お二方とも兄様の中學時代からの御親友て、度々遊びに被居た、其頃私は十二三の小供だつたもの、戀など知ろふはずはないけれど、たゞ何となく木村様が好きて、お顔さへ見ればお手にすがつたり、おひざにもたれたりしてせびつては、よくお伽ばなしをして頂いたつけ、あゝ其無邪氣な時代を今一度くり返したい、此頃の津田様は無口て、私となどお話一つした事はなかつた、木村様の快活な笑聲に反して、どんなおかしい時でもニヤリと苦笑するばかり「兄様津田様つてこわい人ネ」といつて笑らはれた事もあつた。

其後兄様と津田様とは同じ海軍へ志ざされたので、益々親しくなさるので、いつか私までも親しくお話する様になつた、けれど津田様との縁談のあつた時、私

は何だか心のどこかゝらか、或る物が手をだして止めるかのやうな氣がして、餘り進まなかつたけれど、病める兄樣にあんなに進められたので、とう〳〵義理にせまつて——ふと亡き兄樣の白いベツトに横たはつた青いお顔が目に浮ぶ、あゝもう〳〵思ふまい今となつたらしかたがない。死んだ兄樣のお怒りにふれまい。

お約束通り木村樣はお見えになつたいつもの軍服にかわつた大島紬に對のお羽織、それも硝子ごしにちらと見たばかり、何故か今日は母樣のお部屋へおはいりになつたぎりなので、出塲を失なつて私は御あいさつにも出ない、あゝ此小箱を——と机の引だ…から取りだしてしげ〳〵と見つめたが、ぶる〳〵とふるふ手先は再びふたを開く勇氣はなかつた。

腰に短劍をおびて凛然とたゝれた津田樣のお姿と、木村樣のカーキー色の軍服を召された快活な青年士官のお姿とが、ごつちやになつて私の腦の中をかけめぐつて居る、恰ど花に狂ふ胡蝶のやう小箱を握つてふら〳〵と立ち上つた、私は夢中で玄關へ來て、すみにつかねてあるインバネスのポケツトに恐る〳〵入れて、其まゝ部屋にもどつて來た、奥の話は至つて靜かである、聲は一向に聞えない、私の腦には依然として二つの影がかけめぐつて居る、夢のやうに、現のやうに。

佐吉は緣に腰を下して雁首の短いきせるに無器用な手つきで煙草をつめながら、自分の手入した松の形をつく〴〵感心した樣にながめて居る、木村樣がお歸りになるのではじめてお送りに出ると「やあ先日は失敬しました」ハツと胸にこたえて何ともお答できず、もじ〳〵して居るうち、もう銀金具のステツキを小わきにはさんで、薩摩下駄の音高く御影をふんで門をお出になつて終つた。あゝと深い吐息して、じつと俤をしとうた私の目は、どこまでも〳〵木村樣の後を追つて行くかのやうだ、いつの間に母樣はお部屋にもどられてか「光枝〳〵早く木村樣の後を追ふて是を」と椽づたいに小さなふくさ包をもつて居しつた、「はあ」といきなり草履をはいた私はばた〳〵と門外へはせだした、お呼び止めるも變と、たゞバタ〳〵と追ふてゆく足音に、お心づかれてか、つと振り返つてにつこりなさる「あのお忘物」と靜かにお渡する包を「やあ有がとう」とお手に取りながら、じつと私の顔を見つめて「光枝さん！貴女は近々お嫁きになるそうですネ」とお被仰る、此御言葉は胸に五寸くぎを打たれるよりなほつらかつた、消え入りたい思に「ハア」とお答した

言葉は自分にさえ聞き取れぬ程の小聲だつた「ひどいてすな僕にかくして居るなんて、ハヽヽ何しろお目出とう、いや失敬します」其まゝお別した、ポケットの事はお氣づかれてかどうか、ぢつとお姿を見送た私の目からは、たゞはら〳〵と泪が流れて、此胸を、胸を無茶苦茶にかきむしりたくなつた、キユッとくひしばつた襦袢の袖が、ビリヽとたゞならぬ音をもらしたのてハッと氣がつくと沈みかけた冬の日はよわい光を屋根に流して、さつと一としきりふきまくる強風に、後の楢林からつぶての樣に木の葉がバラ〳〵と肩を打つた。（寶）

若い女

川松はまじ

私は若い女です。

若い女が、自分は若いと云ふ事を思ふほど愉快な事はありません。と同時に又、此の若い華やかな青春の生氣に満ち満ちた時代に生きる。然うです、若い女が若く生る、之程樂しい事はありません。て、私達新時代に生れた若い女は、過去を追懐するとか、未來に理想の幻影を求めると云つた樣な事は、全然藥にしたくも考へたくないのです。

好いてはありませんか。――若い女が若く生きる。――出來るだけ自由な新鮮な空氣を呼吸して、出來るだけ歡樂を追及して、出來るだけ自分のライフをエンチョイする。これが眞の女らしい女、否少くとも、之れが私の藝術家としての眞の女性の特質てはないてせうか。

或は、人は斯う云ひませう『今の女は生意氣な、少しも女らしくない。』と。併し考へても見て下さい。私達新時代の若い女に向つて、昔の女の樣に自由とか權威とか云ふ樣なものは總て無視して了つて、強ひて一定の家庭と云ふ窮窟な箱に押込んて、女と云ふ女を無理にも各自の個性を同一の型に箝めて了つて、生きた者をして死んだ器物同樣に心得て一歩も自由に出られないと云つた樣な事が、如何して堪えられる事てせうか。

私は近頃、女の個性と云ふ事を考へました。而して外國の作物などに現れた女性と、現代の我國の女性と云ふものとを比較して考へました。――イプセンの『人形の家』のノラ、或は彼の露國の革命運動に參加した幾多の若い女、斯う云つた外國の女性に就いて考へるに付けて、私は日本の女性が實に情無くなつて了ふのです。

實際是迄の日本の女性には少しも個性と云ふものが認められません。何の女を見ても、唯女と云ふに止つて、此の女でなければならないと云つた、特有の女の個性と云ふものが一つも見られない。Aと云ふ女の代りに、他のBとかCとか云ふ女の性格を持つて行つても、依然同樣に何等の不便も感じないと云つた風です。實に甚だしく類型的に出來て居るのです。



紹介　兵庫　松岡しき子

私は此事を考へると、日本に生れたのが熟く殘念なのです。併しせめても自分の一生を捧げて、此の類型から脱して自由に自分に生きようと努るのです。

「女らしい女」と云ふ事を能く云ひます。些つと考へると成程と頸付かれさうて、斯んな類型的な迷語はありません。

何かと云ふと、世間の人は直ぐ口を揃へて『女らしい女』と云ふ言葉を標準に、總ての女性を律しようとしますが、之程我儘勝手な御都合の好い莫然たる解釋はありません。第一女と云ふもの丶一定の識見も考へないて、「女らしい女」とは何の事てせうか。舊時代の頭の人の所謂、「女」と云ふものに、私達の若い女の眞の「女」を沒却して從へと云ふのは道理てせうか。斯んな根本から成立しない自己本位の解釋て、私達若い女を律しようとは、餘りに時代を無視した慘酷な行爲てす。

私は『女らしい女』を説く以前に、『人間としての女』或は『女としての人間』に就いて考へねばならないと思ふのてす。

『人間としての女』、之れが女性問題の根本の生命の存する處てせう。此の根定もなくして唯莫然と『女らしい女』と云ふのは間違つて居る。而して人生には時代と云ふものがある、又その時代に伴ふ進化がある。私は先づ『女らしい女』を論ずる前に、此の時代と云ふ事を考へて貰ひたい。然る後更に『若い女』と云ふ事を考へて貰ひたいのです。

斯う云ふと、何だか固意難かしい生意氣な事を云ふ樣てすが、私は唯眞の『女らしい人間、』眞の『女らしい女』と云ふにあるのてす。

私達は若うございます。——て、その『若い女』らしい女てありたいのてす。だから『若い女』らしい女たるには、先づ自分と云ふ事を考へねばなりません。即ち『自分らしい自分』、自由な何物にも拘泥されない、飽くまでも自分に忠實に生きたいのです。而して之れが宛て又、『若い女』たる私達の眞のライフてあるのてす。

私は若い女てす。私は若く生きたいのてす。『若い女らしい若い女』に生きたいのてす。

……若い女が、自分は若いと云ふ事を思ふ程愉快なことはありません。（貞）

女學生氣質

櫻草

左様で厶いますよ。何校でも勢力のあるのは。中程の級で厶いますわね。まだ一年や二年では年齢からいつても、十三や十四ですし、數からいつても一や二ですし、どつちからいつても下なのですもの、いばれはしませんのね。それかといつて、五年にでもなりますと、上級生の肩書は有るし、卒業の方法がどうの、目的がどうのと、急に大人振つて沈着いてきますよ。惡くいふと、意氣銷沈といふ姿ですの。ですから勢力の有る級はといへば、何うしても中間に求めなければなりません、ね左様では厶いませんか。校風には化すし、下級の時の様な窮屈は無し、上級生の様に直接の責任はなし、本當に呑氣なのですから、ずいぶん思ひ切つた事を致しますよ。ホヽヽ、校中の花と自信してゐる連中なんですもの、いゑ、私達ばかりでは厶いませんわ、如何しても四年になりますとかうで厶いますよ。

處がそのお轉婆さんが、五年時代から卒業後となると、變化も變化も、化學的の變化をするのですもの、當年の意氣いづこに在りやで、悲まざるを得ないので厶います。

私達ももう一學期で五年になるんですけれど、殷鑑遠からず四年に在り、では可憐想で厶いますわね。全體私の級には奇人が多いのでせうか……。さうでした、何時か五六人の月旦を致しましたつけ、あんな様に貴女、私初めお轉婆さん揃ひなんですもの、でもね、是でも三年の始め頃は、なか／＼大人しかつたですよ。今では最早頭を押へる級はなし、はあ五年の方なんか、干渉しないどころではなく、一歩讓つて被居るんですもの。

何で厶いますよ。今迄のお猫さんが、急に本性を現したといふ様で、お互天眞を露出してゐるのですね。ホヽヽ、さう煽られては、たまりませんわねー、話せと仰しやるなら御話しも致しませうが、あの何時やらのを、雜誌にお書き遊ばしたでせう、私恨まれて了つたのよ。學科のこと迄素破拔たので、惡かつたんです

わ、學校の成績が引いては卒業後に及ぶてせう、ほら例の要件の一つになるんてすと。考へて見れば實際お氣の毒てしたわ。私此樣に人樣の瑕ばかり搜して：：：恨まれるばかりては、到底極樂へは行けませんわねーホヽヽては何誰から致しませう、かうつと：：：：

　高山令子樣、この方は所謂やり手屋てムいますの。御從姉さんが、自白臺山身の才色兼備といふ方なんてすから、たまらないてすよ。

　突き出した前髮に、わざと櫛は差さず、いつも下の方に袴を着て被在つて、眼中人無しといつた風に、大手振つて歩く方てすの。處がお作法の時間の貴女、その澄しやうつたら無いのてすよ、それても隨分思ひ切つた事をやり出しますの。えゝデカダン？遠からずの方てせう。

　先日もかうてしたよ。人物批評て級監の先生に呼ばれたんてすね、そして其の終りに、先生について何か不平はないか、と御聞きなすつたのてす。すると令子さん宜しく雄辯をふるつたやうてして、來ての話しがかうなんてすよ。「先生がお聞きなすつたので、始めはムいませんて云つてゐましたがね、根堀り葉ほり聞くものてすから、私、全體この學校ては、先生と生徒との親密が缺けてゐると思ひます、つて云ひましたの、すると左樣かも知れん、と仰しやつて、それから色々と御聞きなさるんてせう、私構はないＫ先生のこと云ひつけてやりましたわ、本當に胸が清々してよ」といふ樣な調子てしたの。Ｋ先生？はあ例の國語の先生てすの。あんな教へ方つて無いんてすもの、ちと酷かも知ないけれど、先生は參考になつたてせうよ。ホホヽ、困つた生徒のお揃ひてすわねえ。

　土屋田鶴子樣、たづ子さんて優美な名てせう。處が大違ひ、兼好の言葉以上なんてすの、維新頃薩摩の田舍から出たばかしの、書生つぽうみたいてすわ。ホホヽ、私と姉妹なんてすよ。御年齡？私の級ては一番の年かさ、廿一なんてすよ。男子といへば間違ひなし、髮なんか、ちよん髷をのせた樣てすの、それにお國が伊豆のづつと奧の方なんてせう、てすから言葉が荒い上に、アクセントが違ひますので、一寸お交際したばかしの時は、強い方だと思ひましたよ。併し誠實な方もう本當に言行一致なんてすからねえ。それても先生方、最も一部てせうが、善く思はれては居ないやうてすの、お世辭もなし、御上手もないのてすから、どうしてもねえ。

この方の御得意は謠曲、巧いものですよ。聲がまたお誂へといふのでせう、はあアルトですの。

島田信子樣、この方も前の土屋さんと形式は好一對けれどなか〳〵の交際家、才子なんですわねえ、形式屋のチヤキ〳〵、例の介子さんなんかよく〳〵、聖人振つた口をきいたつて、實行も出來ない僻に。つて攻撃をするのでムいますよ。けれど私、形式でも何でも、入學以來押し通しに來たのは偉いと思ひますよ。先生、わけて音樂の先生なんか、一にも島田、二にも島田と信用つたら非常ですわ、最も音樂はお得意なんですの、サプラーでは此の人が大將なんですからねえ。樂器使用は隨意ですが、ピアノがお上手で、よく先生と連彈などなさいますよ。はあ音樂學校へ被入るんですと、未來のピアニストと自信してゐるんですが、あの風采では、人事ながら氣になるんでムいますよ。はあ髮などの無造作つたら、朝十分で髮も結べば、洗面もするといふ勉强家なんですの。

白鳥柳子樣、いつでムいましたか、室の寫眞をお目にかけたでせう、あの時向つて右側の前に、俯向き加減に座つてゐた方があつたでせう。あの方なんです。先づ所謂大人しい方ですの。島田さんの親友ですから大抵性格は御わかりでせう。上級の方には多少信用もある樣ですけれど、あの一件！ほら御話ししたでせう級が二派に分れたとき？のねあれ以後此の方の級の一部に於ける信用といふものは、地に落ちて了ひましたわ。

秋月道子樣、理科の先生のお花でして、得意になつてゐるんですよ。昨年もこの爲に大騷動が起りましたの。女の生徒つて本當に五月蠅ものですわねえ、え只今？今はもう奧樣が被在るので大丈夫、ホヽヽ、岡燒連があつたんでムいますよ。

まあ道子さんて、如何方だと思し召して？丈は高い方ですが、惜しいことに、少し脊が屈んでますわ。よく體操の先生に、尺度を入れて歩けと云はれますわ。負けん氣の、惡くすると出しやばりの評は逃れられませんの、はあ多血質？左樣ですね、まあ八分は左樣でせう。さう〳〵私達が日曜學校に敎へに行くといふことは御存じでせう。まづ何誰も始めて敎へるのですもの、誰れが可愛いとか、何とかまあ一寸いひ度いものですわねえ。處が秋月さんたら、地田種郎といひまして、高等一年の兒を可愛がつてらしやるんですよ。先日もからでしたの、私の室へ來て、「私もう地田が可

愛くて〳〵……、いゝの私、人に何か云はれたつて。池田に私が此樣に可愛がつてるといふことを知らせれば、私滿足ですわ。私池田の爲には死んでも構やあしない」つててせう。本當に狂的なのよ。お年ですか？十九なんですよ。はあ令子さんが一番年下で十七ですの。

安田文子樣、一穗の筆て、全校三百の生徒を切りまくるといふ文章家。人懷つこい、優しい方ですの、私一度も此の方の怒つた顏など見た事はムいませんの。來年は高師に入るのだとかいつて、一生懸命勉強してらつしやいますの、はあよく〳〵お出來なさいますの。多少批評は有りますけれど……、え、くだらないですよ。先生の傍へ行くとやら何とやらですの……けれど何誰にも同じ樣になさる手際など、本當にうまいもの、感心な方ですよ。

まづこれ位にして置きませう。……あまり槍玉に上げると、またお目玉を頂戴しますわホヽヽ、なに秋月さん？　對Ｈ先生なんですか？　はあなか〳〵面白うムいましたよ。

お話しゝても宜しいのでムいますが、すると先生の月旦も爲なければなりませんので……ホヽヽ、先生を槍玉に上げるんですか？……ホヽヽ、戸田清もなかなか力持ちになりましたわねえ。けれど力は有つても極て憶病、後の祟りが恐ろしうムいますわ。まあ今日は御免遊ばせ。（貳）

肺病にかゝりし實驗談

みちえ

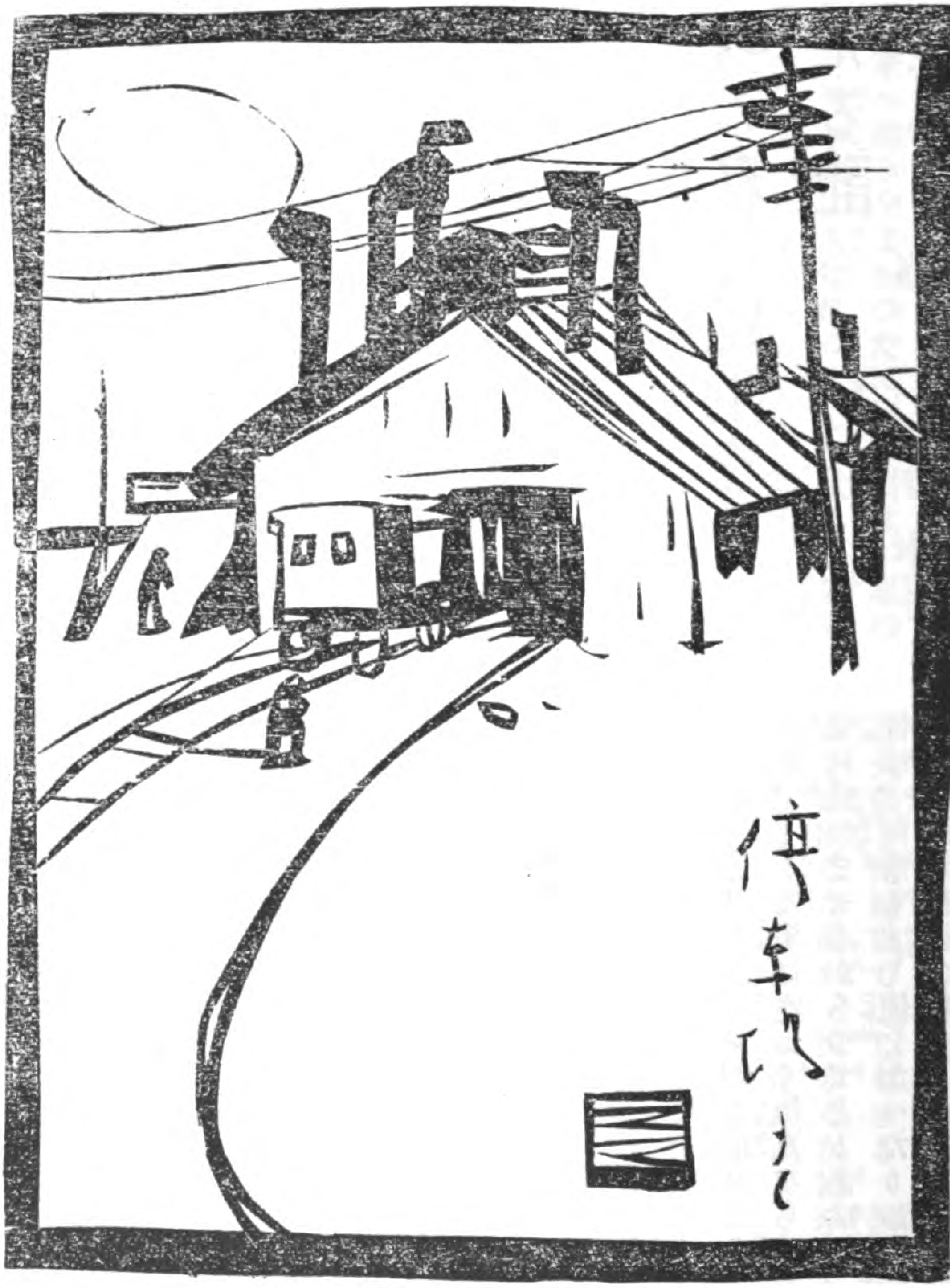
私は今年廿三歳の處女であります、こんなことを申しますのはまことに心苦しいのですが、私の青春の血を悉く奪ひ去つた病魔と戰つた實驗談をありのままにさせて戴きます。十九は女の厄年といふことばに背かず私は十八歳の冬度々風邪を引きましたのが原因で翌年の春になつて、人の心も浮き立つ頃を私は一日増に氣が沈んでしかたがないのでした。どうしても一枚づつ着物を脱がなければならない時節になつて、自分から驚きましたのは、胸のあたりの骨が高くなつたことです。もつとも胃が惡いなんていつては醫藥を用ゐ

てをりましたが、食慾はだん〲減るし、身體は衰弱するし、さうかといつて堪へられぬほどの苦痛があるのてもないのてすから、一日一日と忍耐して學業にたづさつてをりますうち、誰いふとなく肺病だといふ聲がするのてす。けれど醫者はただ（甘味しいものを食べなさい）といはれるきり、病名などいくら聞いても知らせて下さらないから、まさかと思つて一生懸命に强壯劑を用ゐたり牛乳を飲んだりして、養生してをりました。すると或る日舍監の先生が私をそつとお呼びになつてそれは〲懇に歸省をすすめて下さつたのてす、私はもう有難いやら悲しいやらて、その夜限りの寄宿の褥に友の寢息を羨ましと聞きながら、一晩中涙を吸はせて、翌朝始業前に校門を出たのてす。同級の皆樣が門のところまて見送つてくれましたから、淋しい顔を見せるのが厭で懷しい校門をかへり見もせずに、停車塲へ向つたのてす、中には私も病氣になつて〇〇さんのやうに歸省したなどとおつしやつた方もありましたが實は皆心の中ては（可哀さうにぢき死ぬのだな）と思つてゐたのだと思はれます。その前にもう三人さういふ例があるのてすから。六月の末だといふにその時汽車の窓から入る風のぞく〲と身に泌みたことや朝食べた一つの鷄卵さへもたれるやうて、心惡かつたことなどお話にはなりません。一分も早く家に歸りたいと思ひつづけながら、やうやう下車しますと、停車塲の前に紛れもない父の姿が見えたのてす。外にこんなところへ來られるわけはない、私を迎へに、ああ勿體ないと思ふと、そのやつれた姿をお目にかけるのが、どんなに悲しうございましたら、思ひきつて聲をかけるとおゝ居たかと喜んて直に手頸を握つて細くなつたなあといはれた時には何ともいはれぬ思ひてした。歸宅して三日目に、大學病院へいつて診察を受けましたら、クレオソートといふ丸藥をくれました。骸骨のやうな患者にはみんなこの藥だといふのて、私もゝう肺だなとはたしかに思ひましたが、どこか人の病氣とは違ふやうな氣もし又、自分もとう〲不治の病に陷つたのだなといふ感じもして、やがて死ぬのかなあとひとりて思ひ定めました。父も諦めて近所の醫者にまかせてしまひました。それても癒さうと思つて下さつて一つも多く卵を食べさせ、一粒も多くお米を食べさせやうとして下さいましたが、病勢は進むばかりてその年の暮には一杯の粥も厭になり、牛乳三合に鷄卵三つ位を毎日の食物として、他の食物はほ

んの赤兒の間食位を添へるばかりてした。幸ひ熱や咳などはあまり出ませんてしたから、なるべく戸外に出て日光に浴し、畑の中など散歩して僅一合ばかりの流動物を消化させるために五時間も費したのてす、夜は早く床に入りましたがそつと横はつたまゝ、腰などの骨のあたるところは痛くつて動かされませんから朝までじつとして、死んてゐる友だちに逢ふ夢をよく見ました。朝起き上つて座つた時の膝は自分の手を突いてもとても、自分の身體とは思はれないほど骨ばかりになつてゐるのてすもの、いくら傍に新聞や雜誌があらうが、見る氣にはなれませんてした。繼母樣が（あれても癒る積りてゐるのかしら）とよく蔭でおつしやるのてした。それてちよつと簞笥へなり着物へなり私の身體が觸らうものなら、もうそれは慄え上つてお嬢になるのてす。當然なことてはありませうが。はじめは脊中などさすつて下さつた父樣も、なるべく遠ざかるやうになさるし、外へ出たくつても、動くな、人の前へ出てくれるなといはれるやうになり、一番私に接して下さるのは、生れて七十年、三日と病氣したことのない祖母樣なのてした。御令孃みち子樣にはつひに御逝去なされ候由……などといふ手紙も二通ほど父の許へまゐりました。私を大そう愛して下さつた叔父樣が廿里の遠くから見舞に來られた時も、あとで聞いたら私の姿に恐れて、泊らなかつたのださうてした。幼い妹は私の顏を見ると狐だといつて逃げるのてした。さうなつて二年も暮してをつたものてすから、親戚のものも家のものも呆れてしまひ、はては父樣まてが、生きるとか死ぬとか決められないかなあといはれましたから、私ははじめて死といふことを心づいて、時々服用した藥もきつぱりやめ、牛乳をただ一合だけにして、あとは普通の食物を少しづつ用ゐるやうにしました。それといふもその頃はどつか身體に力がついてゐたからてせう。不思議にある夜から非常な空腹を訴へて何なりとも口に入れたくなつたのてす。（やあ食慾が急に出たから、これて胃を壞していよ〳〵死ぬのだらう）と父や母が眞面目に御話しなされてゐるのでした、私もさうかと思つて急に打ちだした脈膊の音や、それまで見なかつた血を交へた痰などに一時はとりこし苦勞をしましたが、手足の色から顏の色までどうやら生きてる人のやうに變つてきたり、どこかつかへてゐたやうな呼吸も氣持よくなつてきたり、ある朝驚いたのは鏡に映つた櫻色の顏には、若草が萌え出た

やうな新らしい綠毛が、生え際へぞつくり生えてゐたことです。人から見ればまだ〳〵この世の人とも見えないのですが、自分の心には全く花よりも美しく感じたのです。

けれどもまだ誰も癒るなどとは思ひませず、そのうち母樣がお產をなさるので、一所に置くのは危險だから私を別に住ませなければならないといふので、廿一歳の春の末にとうとう半里ばかり隔たつた、ある小さなお寺の一間を借りて、獨て氣儘に靜養せよといはれそこへ引越したのです。これでこそきつと癒つて見せなければならないと思ひましたから一生懸命に攝制し晝間は江戸川の堤の菫や蓮華花を眺め、夜は和尚樣の讀經のこゑを聞きながら、幾年



淋しき停車場　水戸すま子

ぷりかてまどかな夢を見ました。二ケ月ばかりのうち大そう肥りましたからいよ〳〵大丈夫と信じて上京し、何なりとも働いて父の負擔を少しも輕くしやうと思つて、あれこれと出來さうな仕事を探しましたが、今以て心に滿足する職業もなく、朝夕の水仕事から手の先の内職などして暮してをります。もううしと見し世ぞ今は戀しきといつて過ぎた日を思ひ出すやうな昔の心は忘れてしまひました。悲境に陷つてゐるけれど私は大きな幸福を受けた貴いこの身をどうかして救ひ出して見たいとつとめてをります。いえ、そんなことは思ひますまい、こんなに健康で愉快に日を送つてをるのですもの。私のやうに幸福なものは少いでせうと思ひます。（寅）

獨身の私が媒酌をしたる記

華水

濟んでの今考へると只譯もなく、突飛な事をよくしたと・・・遂には可笑しくなるのです、聟樣が廿五で嫁御が二十、媒人が廿二、前に斷つて置きますが聟樣は非常の好男子、嫁御は絶世の美人、私は不別嬪廿二歳にして夫の無き程の、而し私の妹は十九に滿たずに夫持ち世間晴れての。或方は私が當時を追懷して微笑んで下さるかも知れませんが、否私に向つてさへ燒付けに言つてらした方などもありますから、蔭の事は何となりと思召して下さいまし。そら私にだつて一度や二度は割鍋にもとぢぶたて、結婚の申込みをして下すつた人はありますけど、それが皆私にはかくれる樣に兩親にばかりこそ〳〵と、媒人さんが色々温言計り並べ立て〳〵行かれますので、私だつて大方そんな事だろう位心附かぬでもありませんから、よし〳〵誰を貰ひたくて來るのだ、本人にこそ〳〵してる樣な處へ誰が嫁つてやるもんか、十度なと百度なとむだ足ふんで歸らんせ、とさあもう兩親が勸めやうと、兄姉があせろうと、そんな事は空ふく風夏なら涼しい位に考へて、氣に逢ひませんからつてとりあはぬ、こうなると向ふ樣は、何度も〳〵使をかへたりして何が御氣に召しません、何が不足で嫁て頂けませんと頻りにご機嫌をとつて下さる、そんな事が不人情かは知らぬけど愉快で

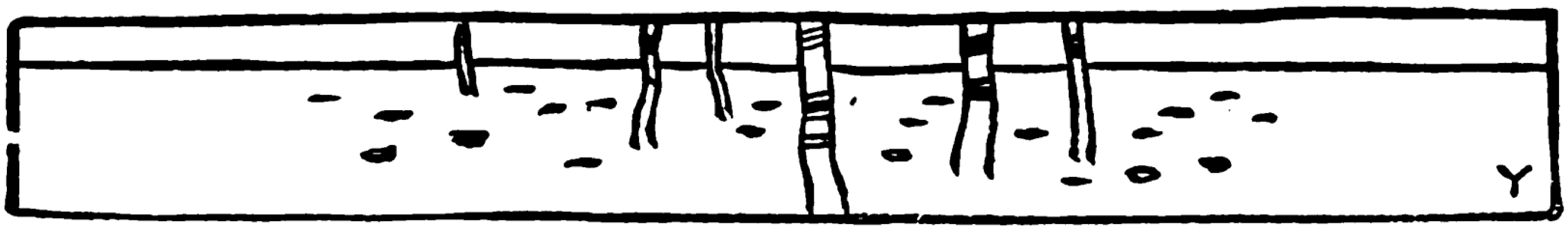
堪らなく、始めはどうだつた、と戰捷の報を握つて國旗を掲ぐる時の樣な心地になつて：：けれども其或時には、あゝ彼の家へ嫁きやよかつたに、今頃は、私の事でも思ひ出して男乍らに人知れぬ涙でも拭ふて居らつしやりはせぬかしら、とほのかに見たお寫繪の俤など思ひ出しては、ほろりとなる事など思ひ出して、これは一つ本人同士に打ちあけて、後兩方の兩親にいふに如かずと、秋の夜風に琴の音が交つて聞える位にとうまわしに話してみました處が、聟樣と嫁御はほんとに不知の間柄なんだけど、私を信用して下すつてか、私がうまく話した爲か、緣があつたといふのか、とにかく諾の胸を開かれた時には、如何な私の胸も動悸がはげしかつた樣に覺えて居ります、否もう身振ひしました。扨これからどうしようしら妹を嫁つた時で準備とか、媒人振りはあらかた、分つては居るものゝ、夫の無い私がどうする事も成りやしません、からつて聟樣に御存じの私ですから内らやいはこれて相すみ申候につき、御前樣より相當の方を撰び媒酌の儀宜敷く：：と自分に行くのが厭だもんだから手紙を出した、處が返事に私もそんな事は經驗無之困り入り候、呆れてしまいました私、誰だつて經驗があつて堪るものか、然れば誰それ樣を御願ひ致すべく御差支あらせられずや、と繪端書てしらばくれると、宜敷く候と矢張り繪端書で返しなさる、誰それ樣にも手紙で其由を御願した處が、出來るか出來ぬかは知りませんがやれる處迄やつゝけて見ませう、との事如何にも味方を得たと言ふが嬉しくて、嫁御にも内々あゝもしこうもなさいと、知つたか振つて後、とう／＼私が嫁御の兩親にそれをいはされる事になつてしまつた、詞の末をふるはせて思ひ切つて話して來た、家ともよう相談を致しまして何とか御返事致します、との事に今日はみえるか明日はと、とう／＼十日計り過ぎてしまつた、處が嫁御が一日か二日をき位には私を訪ふので、御母樣も一寸はふしんが起つたものとみへて、何子さんはなぜ此頃よく家へみえろか、と尋ねなすつたので、一寸相談事がわいて來ましてねえ母樣、おほゝゝゝゝ私が媒人をしようと思ひまして、つて笑つてしまひました、翌日誰それ樣がみへて聞き合してみた處が大へん都合がいゝから貰ふとの事だが、あちらはどうでしたといつてみへたので、まだ返事がありませんが一度行つて參りませうと、言つてる處へひよつくら嫁御の御父樣がみえたので、誰それさんを廊下へ出ても

らつてぴつしやりメたふすま越え、あんなおた福でも宜敷ければどうぞ貰つて下さい、娘にも申きけました處がいやだ〳〵と言ひますて、何がいやだか無理に嫁けとはいはぬけど、そういつ迄も家に置きたくても置けるもんぢやなし、大抵に世話をやかせる物ではないと申ましたら嫁つてもいゝと申ましたて何分宜敷く……血統さへよろしけりや財産など運がありや無くても出來ますし、運が無いのなら、有るのでも無くしてしまひますから、なんつて私の兩親にもどうもまあ此度は御世話樣でと……御兩人とも呆れてまあ昨日そんな事をいひましたけれど、戯談をいふた事と思つて居まして、何も御縁のもんてすから御互樣にと挨拶してらしたのをほのかにきゝました。

　それから吉日を撰んで誰それさんと私とで結納を持つて行きました、御酒など頂いて誰それさんに先へ歸つて頂いて、私は何子さんの御室へ行つて根掛や櫛をみて化粧道具を揃へたり遂遲くまで話して俥で歸つて父樣や母樣に儀式の事など承はつたのてすが、げに過ぎ來し坂を見返つては、ものゝ二月や一月半は夢のまの杉戸あけての明日は〳〵、と人のまち詫びしもことはりや、待たぬ日の短かう暮れて、明けの朝昨日調へたきし行李に手さげ、化粧道具に至るまで不足なく嫁御の家へ持參參上と顔をみるなり、まあ〳〵と奥へは入る、家は上を下への大そうどう、何子さんは一絲みだれぬ高島田の、今出來上つた處、都合よしと私は手序に束髮に結つて貰つた、けどいつものハイカラ的てはなかつた、それがいさゝか悲しかつたの、とこうするうちに時間がさし迫つたのでもう時間てすから荷物を出して下さいよ、つてせり立てた、入用物丈は忘れんように出しときなさい、何はあるの、何もよし〳〵お化粧道具は私が持つて來たからあなたのは入れときなさい、つて私も行李持つて行つて頂きたく、紋附をきて常着をしまつて送つてしまつた、お湯がいやならえり丈一寸と、湯を使ふ事になつて何子さんはお母樣のを着て、年寄柄な、私は紋附てお湯を使ふの、誰か知らない女が洗つてくださつた、何子さんは私もういやな事、今日は皆がみるもの、いやになつてしまつたわ身が振るへて仕方がないもの、つて唇をかんでるの、實際泪ぐんだ可愛らしい顔を見ては私も、もう持てあましそう、どうしたらいゝのかさつぱり譯がわかりやしないのてす、だけど弱腰になつちやだめだと思つて、何そんな事心配なさるな、一度は通らにやならぬ

関所だわ、つて大人ぶつた事いつて乍ら、私も何子さんにこんな事いはれたくないので、罪なこと、とほろりとなる、自分が媒人て大人役だから心まで大人ぶつて、背中の一つもなぜてやりたかつたのです、そこへ誰それさんが來て下すつたので、御名前も呼びにくかつて先生よくこそ、とご挨拶をした、お白粉下からねりをそのまゝえりへ足つきまつしろ、額から鼻筋へかけて一寸白ふ櫻色の頰に濃紅さして、きちんと胸高にお立て結びにした帯の模樣がふるいつきたいやう、嫁さんと間違んようにねえつて笑ひ乍ら、私のはうつすりお化粧して下すつた、別れの盃がすんでお晝をすますと出かけに、まあ御嫁さんたちお紅をたべてしまつて、とさつきの方が、紅筆て自分のつばきてひやつこくもお紅をさし直して下さる、心地が惡いけど無言でしらん顔してる、俥に乗るとき誰だしら私の事をそしつたらしかつた、表一ぱいの人を押しわけてから〱〱かけ出した、暑くもない日に洋傘さして顔をかくし乍ら……通る人逢ふ人が、ひやあ、ほうほう、たえつへん、なんて何子さんをのぞく事氣の毒な位、いまには私もお相伴に逢ふ、どこやらて犬がわん〱吠へついたので、何子さんはおごけにお茶をかけて食んなすつた事があるかしら、と思つたら堪らなくおかしくて〱、ぢつとこらへて行つた、遂々聟さんの家へ着いた、離れへ通つて着物をかへて、ふりかへつたら、何子さんはあはれ、無情の風にさそはれて死んでしまつた體だげな、さつぱり白無垢姿のいぢらしさ、私は悲しさに暗涙を拭つた、兩手を引かれて角かくしの下からつぐ足を望めて行く風情水晶の珠數を……私の珠數は赤かつた、私が御佛前に立つてお燒香をして、ちーんと一つ鈴をうつたせつなさう毛だつた樣な氣がした、高砂の謠につれて九獻の盃もすんで、こんどは踊り立つ樣なご衣裳、もう私は夢中て嬉しかつた、めでたく生れ來たかたち、大勢の人がわあ〱潮のひく樣にひいてしまつた見物人等が、こんどは嫁御正座にお酒もり、お高盛りの御飯につぎ〱色々並んだけど何子さんは、だまりきつて伏眼してゐらつしやつた。

其式のあとで、夜分みんなで一首宛書こうぢやないかと誰さんだつけいひ出しなすつたので、仕方なく書いたけど、あとにして考へるといかにも大人びたうただことと思ふ、遂の日は限りも知れず榮ふらむうつし植ゑたる菊のひともと。（貢）



新築

田中落葉子

無意識の樣な廣い運動場
平坦だ石一つ轉んで居ない
蒼白い魂のぬけた樣な月が
白楊の梢から見おろして居る
今夢からさめたらしく——
私はぢつと彳むで居た

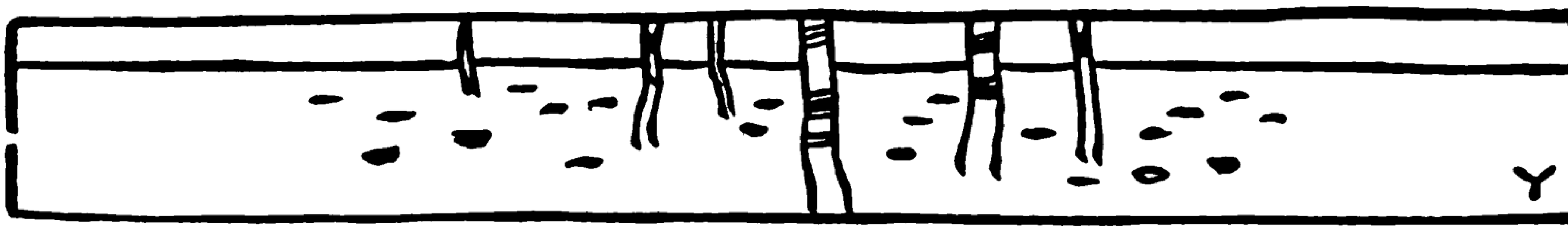
きこえるものはたゞ
自分の心の底を流れる
水の音許り——かすかに〱
私はともすると寂寞に吸ひ込まれさうだ
二三歩あるく——透かして見る
此間たつたばかりの新校舎が見える
たゞ黒くねむつて居るのが——

新木の香が流れて來る
又歩く
屋根と窓硝子が光つて見える
私はぢつと彳むで見て居た
息も吐かずに——

あゝ自分の荒れはてた胸の廣野にも
投げられた石を去つて
愛といふ道具をもつて
いつたれが新しい家をたてゝくれるだらうと思つて——

破れ鏡

木の影にかくれて見る——駄目だ
矢張り月が見える
木の葉がみな落ちて居るのだもの
どこへいつてもいけない
月は用捨なく照すから
目を瞑る。開くと又笑つて居る
私は飛び石を飛んで
部屋にかへらふとした——目につく



窓の下の光つたもの
はて何かしら
近つて見ると晝投げた
鏡の破れたのが月に光つて居るのだ

あらいやだまだ光つて居ると
拾つてもつと小さくてわさうと思つて居ると
月がかくれた
私は一人につこと笑つた
何となく心が安い　（賞）

靜かなる霜月のひとゝき

山田かめ

眞晝のひかり、いと鈍ぶく、
青く煙むれる、空のおもてに、
かすかな、淡い嘆きと、甘い悲しみの色を見る、
靜かな霜月の、晴れた日のひとゝき……

葉の落ちつくした、桑園には、
乾きゆく朽ち葉の、饐えた匂ひがして、
消え去つた、情熱の蔭のさびしさと、
極りない、なつかしさとが、
ほのかに、仄に、わが官能の底に顫ふ。

柔かに煙むる、鈍ぶき光線の暖かさに、
何となう、心足らぬ、心安さを覺え、
茫然として窓によると、
靜かに晴れた霜月の、風もない眞晝の一時の、
白き、白き夢のあなたに、
微に、かすかに、鷄の泣く音がする……

私は窓によつて、
たゞそれだけを、幻に幻にきいた。
悲しみと悩みと、煩ひと、
そして貧しいおもひでの青い濕ひとの、
薄く、淡く錯雜つた、
霜月の靜かな、まひるの一時の、
その夢のなげきの中に……。（賞）

クリスマスの前夜

君香

十二月二十四日、今朝の寒い事――お手水鉢にあつい氷がはつて、家々の屋根も、お庭の枯芝生も一面霜で眞白だ。いよ〳〵今年も僅か五六日を餘す計り。昨日市中に買物に行つたら「ちん餅仕り候」の札が大分眼についたつけ。「十二月と云ふ月は何だか氣が落着かないでね」つて、母樣も忙し想にそわ〳〵して被居るけれど。私など本當に氣樂なもの。最う今日からは學校も休みだし、暮から春にかけては貰物が多いから、これからは一層お鼻の下の忙しくなるばかしだわ。誰か柄の良い絹物か美しいリボンでも持つて來て下さればいゝに、家に來る者てそんな氣のきいた品を遺物にする人は一人もないから厭になつて終ふ。‥なんて、勝手な事を考へ乍ら、お火鉢の前で編物を始めた。早くこれを編み上げて、

クリマス。プレセント　天國のサンタクロースより
愛する宮ちやんに

‥‥つて贈りたい。これを受取つた時の宮ちやんの顏‥‥、屹度あの豐な筋肉をゆるめて喜ぶに違いない。宮ちやんと云へば、この間家に來て「君さん、あんまりね、女子文壇の「餘興に私の事出したでせう、エヽ什うせ私は圓盆に眼鼻のおしやれよ、貴方の兄樣も隨分ひどいわ」つて、プン〳〵怒つて歸つて行つて終つた。私は惡い事した、どうしようと心配して居たら、翌日又ひよつこりとやつて來た。「すまなかつたわね、宮ちやん堪忍して頂戴な」と、顏を見るなり突然あやまつたら、「あらいいのよ、私何にも立腹つてなぞゐないわ」莞爾笑つて、晩まで遊んで行つて呉れたので、私もやつと安心した。小學時代からの親友で、喧嘩も度々したが、妙に氣が合つて、私は宮ちやんが大好きなの。その好きな人の贈物だと思ふと、自然に手がはづんで、もう正午頃には見事に編上げて終つた。午後から母樣は妹をつれて、十番に買物に行らした。私一人お留守番。何か書こうと思つて机に向つて墨をすつた、抽斗から半紙を出して無意識に筆を走らせて、‥‥‥‥‥‥

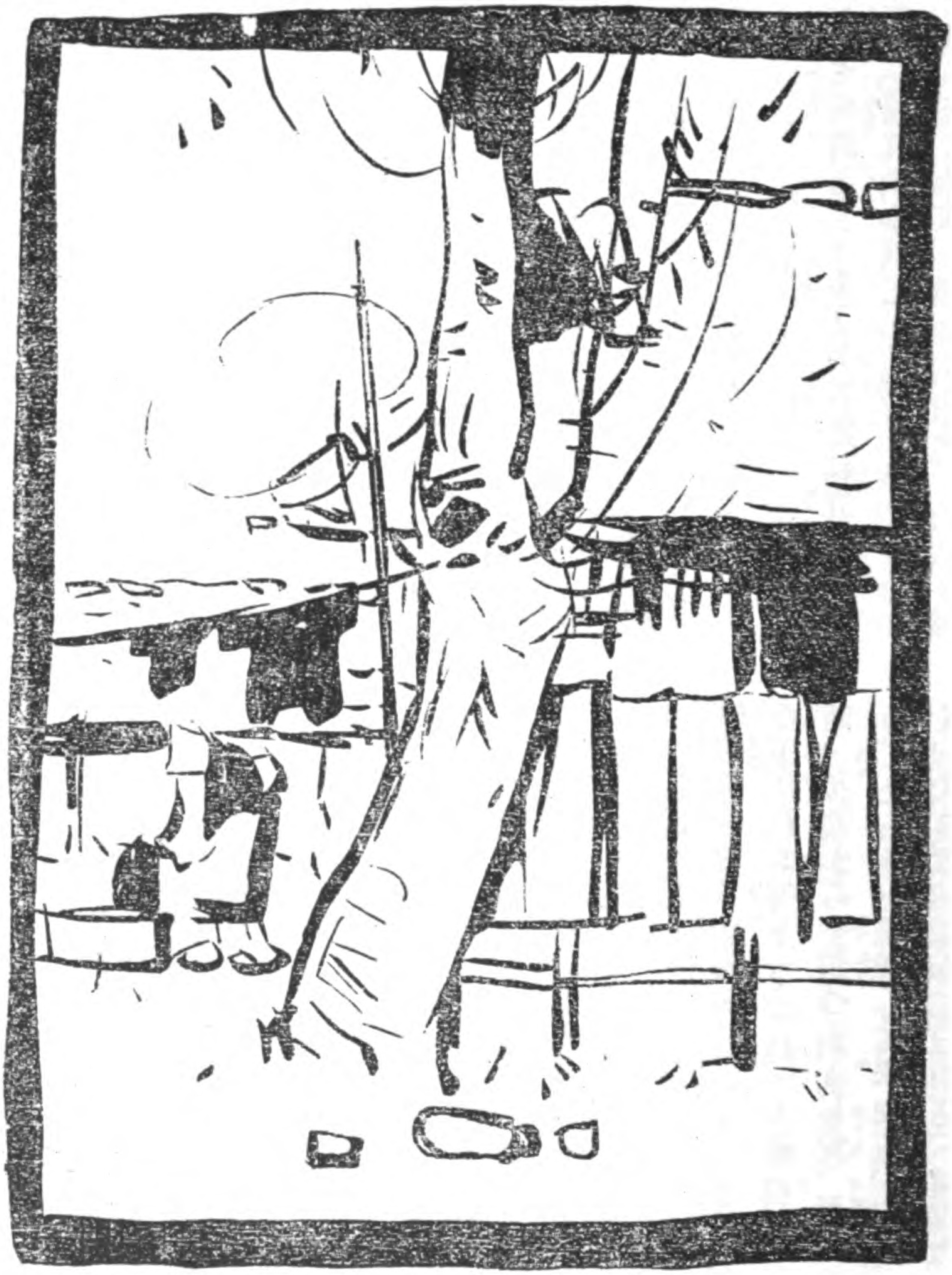
‥‥‥懐しい敏夫樣、戀しい敏夫樣‥‥‥

あらッ!!まあ‥私は‥‥‥

誰も居ないのを知つてゐ乍ら、ソッと四方を見廻して

ボッと赤面した。戀——ぢやあないのか知ら？

まさか、まさか、私はまだそんな大膽なまねをする程の年齢じやない、馬鹿なッ……我れとわが心を嘲けつて、ビリリと裂いて丸めて袂におし込んだ。所ざいなさに柱に凭れて、頭髪のフケを取つてみたり、袖口をひつぱつてみたり、袂をかんで居たが、何故か？淋しい心持がして、知らず涙が頬を傳つて居た。



懐しき家よ木よ人よ　（若き日の日記より）　玉川すま子

おや！この足袋も、大分汚れた事、あそう〳〵這麽下らぬ事考へてゐる隙があるなら、洗濯でもしませう、何時も母様に何にも彼もして戴いて、我れ關せずゑん、なぞ極め込んでゐるのはすまない事だ。

ついでに、此の襦袢も……。午後の暖い日を脊一杯に浴びて、井戸端で洗濯にかかつた。中

く骨が折れる、息がハーハーして肺病になりはしないかと、危ぶまれる程、苦しかつた、それでも我慢してやつと洗ひ上げて、丁寧に四度ゆすいて物干竿に掛けてゐる處へ、母様と妹が歸つて來た。「おやおや君ちやん御洗濯？、折角のお天氣つゞきを、明日は雨でも降らねばいいね」つて、笑ひ乍ら被仰る「雨など降るものですか、そんな事云ふなら私これから毎日でもするわ」、內心實は今日の一度でこりごりなんだけれど：：：。千重さんは、今買つて來たリボンや手袋を自分の前に並べてニコ〳〵「姉様、早く入らつしやいよ、このリボンなか〳〵ハイカラでせう、手袋も振るつた色だわ」と、ひとりして悦に入つて居る。

夜、郵便を出しに行つた歸り、敏夫様のお二階の障子に、廂髪と五分がり頭の影が二つ大きく寫つてゐる、私はハッとして立止つた。「ハヽヽヽ」、確に敏夫様の笑聲、つゞいて「オホヽヽ」、偲びやかな女の：：：：：：：：：：。

妬ましい氣がして何時までも〳〵其處に立つて居た、氷る樣な冷たい風に吹かれて：：：。

師走の月は、光り鋭く中天に輝いてゐる。

ガラッ：：と、玄關を開ける音に吃驚いて、あわてて家に逃げて來た「母様、お炬燵入れて下さい、私最う寝ます」。床に這入つて夜具引被つて泣いた。

伊勢大廟外宮にて御寶物を拜せし記

野の百合

うららかな小春の樣な日、風の出ない中にと九時頃に二見の宿を出て外宮行電車に乘る、乘客は母様と私を入れてたつた六人故大層靜かです、程もなく二里の道も過ぎてはや外宮前と云ふに下された、この間內宮様に參拜した折には兼ねて大廟と云へばさこそ優雅の神さびし處であらうと思ひもうけて居た目に、打續く六町の名物賣る店家毎に白く塗り立てた女子等が「お買ひ下はれお寄り下はれ」と呼び込んで居るのを見た時、少なからずがつかりした、それ故こゝも定めてそうであらうと豫想して來たら、案外もの賣る家も少なく、大きな旅館が二三軒と、立派な郵便局があるばかりて、直ぐ神苑の入口に着いた。內宮ではあの物賣る

店にてそがつかりしたが、宇治橋のほとり、美くしい五十鈴川のながれを見、ゆかしい神路山のすがたを眺めては、スツカリ俗界のけがれを清められた樣な心地がして、自ら心も引しまるやうに思ひ、神の御苑に入つたが、こゝは唯低い石の柵一重が神の御園と町とのさかひ故、とんとそんな氣高い念もおこらず、ふら〳〵と神苑に這入つてしまつた。

這入ると直ぐの梅園や、木々の林には皆垣を結ひ廻らし、其間〳〵に日露の役の戰利品などが置かれてある、其樣は內宮と少しの變りもないが、少し狹い樣に思はれる。程なく下馬標立てられた御橋のたもとへ來た、茲からはやう〳〵神さびて、自然と襟のたゞされる心地がして、神代の儘の古杉の空つくばかりなのや、楠などの見るから神々しく、太古の御神の御樣さへ偲ばれるやうなのを貴く仰ぎながら、御手洗場へ來る、こゝに外套など脫ぐのであらふ、一寸柵を結ふて小石の積んである處がある。

そこへコートやシヨールを置いて手を清める、この御手洗場は五十鈴川とは違つて普通の石で造つたもの故、あの川邊にかゞんで水をむすびながら、底行く鮎の人なれし愛らしい樣や、ときわにまじる紅葉の美くしいのが、影うつす風情を見ることは出來ないが、清く涌出る水にはやはり心まで清められた樣な思ひがして、一の御門をくゞる。白絹の垂れられた二の御門前に額づけば、言ひしれぬ貴さ辱さに唯々淚が催されて來る、暫しかゝるかしこき御國に生れ得た幸を謝し尙幾千代を榮えしめ給へと祈り上げて、もう何とも云へぬ淸々しい心地しながら御門を出る。二三歩をうつすと右に風の宮が拜される、こゝも參拜して行ふと杉の木の間を縫ふて行けば、茲は詣づる人もまれと見えて、枝さし交えた木々の繁みほの暗く、落葉の上に落葉して、さながら深山の奥の樣な感がする、こゝも跪づきて代々榮えませと念じ上る。

物の音人の聲さへなく神代とは此樣な靜さであらふと思ふ程寂なので、何とも言へぬ感にうたれて、自分もこんなに淸い靜な、けがれのない身に成つたのか、アー此淸淨な心の儘、こうして何時までも〳〵居たらなどゝ思ひ續けて居ると、何だか人のけはひがするやうなので、其方を見ると遙か向ふから、稍腰の曲つた白衣の人がはゝきを肩に、竹籠をさげ、素足の儘に藁の草履を穿いて、みどりの老杉の隙をゆる〳〵と縫ふて來る。其樣ほんに繪にもないゆかしい景なので、私

までが古への大裏にでも事へまつゝて居る人のやうな氣がして心嬉しく眺めて居る中、近くへ來て見れば、白髪童顔の翁の樣なお老爺さん、一層嬉しくて何をするかと見て居ると、手に鍵の樣な物を持つて居る、お鳥居の前に一禮してづん／＼行き、お扉をかちんと開けては入り、また閉めた、中のお掃除をするのと見える。

何時まで居てもはてしが無い故、こゝの上におはします御神を拜さんと石階を昇りかける、隨分高い上に入らつしやるが、何と仰しやる神樣か誰ぞに問ひ度いものと思つて居ると、折よく上から一人のお老人さんが下りて來た。聞いて見ると「たかの宮けんと言ははります」とおしえて呉れた、昇りきるとやはり他の宮と同じ樣な白木の宮造りがおはします、また跪づいてお詣して、この樣な閑雅な地を去るのはほんとに殘り惜しいと云つて、何時まで居る譯にも行かないので、もう下りやうとすると、何の葉かほろ／＼と音もなく落ちて來た、さも私共の歸るのが名殘惜しいと言ひがほにこの一葉て元より靜かな寂しさが一層靜かに寂しさを增させた、うつとりと何の念もなしに階を下りかけると、ふいにこの靜さをやぶつて通つたやうなこもつたやうな鷄の聲が森中に高く響き渡つた。

こんな折に聞く鷄の聲、かの岩戸神樂の古事も思はれて、得も云はれぬうれしさにほゝゑまれつゝ下るやさき、「チンチ――ン」と妙にひゞく電車のべる、おゝいやな折角の趣をすつかりこわされてしまつた、元來た道はスーと通つて、此度は大廟のお裏の方へ出る、こゝも人通りは少しもない、皆前の道を通るのて、見ると右手のうす暗い處に厩がある、赤いお馬が長いかほを出して、人なつこい目て見て居る、何だか可愛くてお豆でもやり度成つて、番人に少しやつたら、ハイ／＼と喜んてバラ／＼と播いてやつて呉れた、直ぐ食べて居ると、其下へ廣い御苑のあちこちに愛らしく遊びまわつて居る眞白な鷄がよろ／＼と覺つかない足どりて驅けて來て、早速おこぼれを頂戴して居る、可愛ので何時までも見て居度いが果しがないからこゝも過ぎて、宮の東に面した御門から葛緒木清い新らしき幾棟かの宮を拜しつ、御裏の方の御垣の角に出ると、白衣の仕丁が大層往來して居るのが見える、何かあるのかと見て居ると、やがて古き宮の方からとカッと目を射る樣な光がしたので、おやと思ふと先の仕丁等が黃金造りの骨て、藤紫に浮模樣のあるお布

地は何かしらぬが紗の樣に透て見える物でありながら、中は燃たつやうな緋の布地を張つてあるお日傘のやうなものに、ふつさりと緋房の下つて、それに蒔繪の長柄が付いた、それは〳〵まばゆい程の美くしいお品を捧げて、其後からはなみの形の長柄傘、これも柄は蒔繪、次にはお椅子みたいな形のやはり蒔繪のもの、それにまた緋羅紗のお裏の付いたおとばかりかと思はれる緋房の付いたお布地、次には蒔繪長柄の軍配團扇、また緋羅紗に白く巴の御紋染ぬいた御旗、どれとて目の覺めるやうなものばかり、息もつかずに新らしい宮へはこび入れるのを見て居ると、やがてまた今の人達が舊の宮へ歸つて行く。杉の木の間をあの白衣の袂をゆるがせて、五、七人も行く樣は外では見られぬ奥ゆかしさだ、其中また何か捧げて來た故、こんどはどんなものと樂しんで居ると、これは朱塗の六尺あまりもあるお箱、丁度お琴位のもの、次には何か大層大きな物で、二三人で持つて來たが、四隅に四本の蒔繪した柱が有つて、幾本も棒のわたしてある其下に白い糸がかけてあるもの、よく見たらお機の具であつた、それが行くと次は緋羅紗の幔幕の樣なもの、それ丈で有つたが、どれも〳〵世の常のものでない、色や光て、誠に貴く一々首が下げられるやうに覺えた。これ丈の貴い御品々をさゝげ入れる處を拜されたとは、何と云ふ幸福者であらふと母樣は淚を浮めて喜んで居らつしやる、ほんに今日參拜した方等もあまた有るが、この古雅に優美なお有樣を拜し得たものは、たつた母樣と私の二人であつた故、思ひもかけぬ有り難い御參拜をしたのを喜びつゝ、工寮の人等が白衣で木を挽たり、削つたりして居るのを珍らしく見て、神苑におわかれした。

湖畔の歌

なのりそ

物思ひ我もまたするとつくことゝ物ならふことゝはたちのことゝ

あゝ我は人知れず泣く我にしては最もふかきかなしみなれど

我道をさへぎるものを目とぢして面見ず刹那死ねよぞ思ふ

日を一日もの言ひつゞけ暮したる寂しき我を人はしらなく

鐵瓶はいたくすゝけぬされどなほとろとろ火たくふるき我家よ

秋のゆきもの思ひつゝ暗き家にすゑもの洗ふさびしき音かな



あな、見よ
靑き大月は
西よりのぼり
あなや、
また瘧病むはての
顫して
東へ落つる
日の光
大空に
星はなげかひ
靑く盲ひし
水面には
藥香にほふ

白秋

晴着の見立

なゝしぐさ



「この御納戸のは如何？」

山と積み重ねた中から伯母様は撰り出して御見せなさる、「それもきれいで御座いますこと」たゞこう云つて可いとも惡いとも私は云はない、「これが變つてゝ宜しうございますわ、」妙子樣は茶色地のかはり柄を撰り出して下さる、「ほんとて御座いますね」今度もこう同意した、あゝ私、私、ほんとにどれでも搆はないのですもの、母樣も、伯母樣も、宜しい樣に決めて下さいまし、と心中てはこう思つて居るのだ。

丁度私の運命が云はゞ風にまかせた小舟の樣なもの、いゝえ女といふものゝ運命が…何處の岸にもよらぬ中こそそこにかすかな自由があるけれど、さていづれ、岸に寄るとなると…何處でも寄れる岸によつて了ふのが安全なのか、撰り好んて望ましい岸を見出す日を靜かにまつが幸福か、私は知らぬ、私は今世間の人の行く通り、した通りの路を世間なみにふまうとすると世を經て來た人が未だ經ぬ私の爲に云ふ事は決して惡い事てはなからう、二十年、覆しもせず池に浮べてくれた小波は、よも恐ろしい岸には運んてくれまい、——永い將來の事はそれは、もう——

其時の爲の着物をと思ふと、いつもお召よ、銘仙よと柄好みする陽氣な心地になれない袖丈も七寸にする

のださうな、袖付も今から六寸五分つけて置くのださうな、柄の地味なのを求めるのは勿論の事。欲しい時はひとりで買つて着ますから可い樣に（御言葉の「後の爲」になる樣に）御見計らひ下さいまし。此樣思つて私は何も云はなかつた。

「如何なんてす、もつと出させますか」と伯母樣、

「いゝえもうこれで澤山、私にこの茶色のが可笑しくないと皆さん思召して下さればこれにしませう、ちつと意氣てせうけれど」

それなら、といふのてとにかくお召は定つた、下着据廻し、みんなよいほどに意見は大部分すつ込めて、皆の意向通りに決めた、それから紋御召、と米琉銘仙も二三反、他にまだ見るものは澤山あるけれど、模樣室の混雜して居ないのを幸、さきに模樣を決めやうと母樣の發言、皆て模樣室に行く。

母樣の昔風ともすれば松竹梅式に傾き易いのに引きかへて、伯母樣はお年も若いからだらうが撰擇の眼がこえてらつしやる。

「此水仙が面白かありませんか。」

「左樣て御座いますね」と例の通り。

「此竹も變つてゝ好い樣だし」「えゝ。」

「妙子さんちつと見てやつて下さいませよ」と一生懸命に御覧になり乍ら母樣が仰しやる。

「あれは？　派手て御座いませうか」と私は壁間を指した。

「派手な事はちつともないてせう、然しあゝいふのはすぐ人の眼について倦き易いもんてね」と伯母樣。

「あんな途方もない模樣は祝ひには向きませんよ」と母樣、妙子樣が「あゝ可い事、蝶の羽の色合がねえ」と云つて下さつたけれど、だめ〳〵、排斥されて了つた、ハイ〳〵とおとなしく從つて一時間半の評議の後にやつと定めたのは、黑が、大輪の白椿の高据、私が「椿はポロリと落ちますね」つてまぜ返したら母樣やつきとなつて、「玉椿千代八千代に御目出度い」のだつて、まあ何ても結構、どうせ其時以後にたんと着る折もあるまい、大分母樣が執念かけてらしたクシャ〳〵とこみ入つた松の摸樣だつてかまはないつもりて居た位てすもの。

薄色は亂菊、色はねづみ納戸、袷が薄葡萄て紅葉、そう〳〵黑は芭蕉てしたつけ、絽は薄色だけにして、青味がゝつた、うすい色に摸樣はありふれの浪に千鳥。

「大變おなかが空いた樣てすね、何時かしら」と時計

を出して見て、「まあもう一時」と伯母樣は、吃驚なすつてすぐ樣食堂行の事。

食堂に入つて見ると空席はたんとなかつた、一番奥の姿見の前のテーブルをぐるりと占領する、私は一番後て席をとつたら、まあ、鏡の眞前、上をむくと自分のほてつた顔、亂れた髪がはつきり現れるのですもの。仕方がないから卓上の早咲の梅をほめて見た。

おすしとそれから御菓子、コーヒーを云つて皆は待つ間色々な事を話す。

「やれ〳〵摸樣が極つて安心しました、皆樣のおかげて」と母樣は嬉しさう、「あれなら結構てすよ、何處に出ても押しも押されもしません」と伯母樣も得意然としてらつしやる、あゝ皆さまてこの十二月の忙がしい中を私の爲にこうして時間をつぶして下さる、有り難さ、私は、あゝ幸福なのかしら。

去年の、さう〳〵、丁度今頃だつた――も少し早かつたらう、御婚禮が十二月の末だつたから、十一月てもあつたか――佐代樣の御摸樣見にやつぱり此店にきて、あれか、これかとなか〳〵定らなかつた、御待受の色直しの御振袖一つだつたが隨分評議はむづかしかつた、翌日御本人の佐代樣を連れ出してとう〳〵あの牡丹にきめて……當日のあでやかなお姿、苦心したかひがあつたと喜んだつけ、其佐代樣がもう近々に御母樣、今日も出がけに一寸御門の通りがけ御よりして見たら、今度は私が御一所に行く番てすのに、もう出あるきも苦しくて」と寂しく笑つてらした、私は其時思つた、ほんとに一年なんてまたゝくひま、それだのに、其すぐ過ぎてしまふ一年のうちにも人は、驚くべき變化をする、佐代樣、今、もう一度あの振袖姿に御なりなすつたつて、もう、もう、あの水々しい若い、容子はとても。

種々きものが出來て嬉しからうと皆さまは思つてらつしやるのだらう、けれど、私はちつとも喜ばしくはない、時の力に支配されて、此處にひとりの娘が消えて、人の妻となる、あたりまへの事てありながら、其當人にとつては驚くべき、事實、そこには恐怖もあり、憂慮もある、何となく悲しく何となくさびしく、殊に、こゝに名殘は惜しい、追懷、想像、いりみだれて頭はくるめく思ひてあるのに、幾枚のきもの、それてすべての思ひをごまかし得る人はさいはひてせう。

さま〴〵な事を考へて私の胸はあやしく響く、鏡にうつつた面ははづかしいほどほてつて居た。

妙さまが運ばれたお皿を並べて下さる、ハときづいて、私も急須をとりあげて皆さまに注いでさしあげた。

妙さまはさもおいしさうにさつさと空にして「×樣のお召の出來た御祝ひに私も少し頂き度いわ」と御代りの御注文、うらやましい、妙子さま、明ければ十九といふ聲がかゝるに、やがてこはい御話も數々參りませうよ、今のうち、今の、この束の間をダンスにあこがれ、羽子に浮身を御やつしなさいませ。

「どれまた、お見立にかゝりませうか」伯母樣がたち支度なさりかけた時まだ私の前にはお菓子が澤山あつた、やつと今いれた角砂糖がお茶碗の中で泡をたてゝ居た。

「まあ肝心の御本人樣がまだ御立ちになれないわ」と妙さまは陽氣にお笑ひなすつた、私もひきいれられて輕く笑つた、けれどすぐあとから眼がうるんだ、が心弱いと我を叱つて元氣に立ち上つた。（眞）

血

苦しくはないかと耳元で何物かゞ囁く、けれど、形は見えない、ちつとも苦しかないと私の胸は小さく答へてゐる、けれど熱い泪がぽろ／＼とこぼれる。

袂から眞白なハンカチを出してふいて見ると血ー!!血!!!ハンカチがまつかに染つて終つた、と耳元でから／＼と嘲笑ふ私の胸は依然として苦しくない／＼と叫んで居る。

青い顔

白いベットの上に誰か眠つて居る、其青白い顔、亂れた髪がはつきり見えるけれど、それが誰だかわからない、青白い顔は、時々目をパッと開いて、私の顔を見ては、何かいふけれど、ちつとも聞えない。たしかに私の知つてる人にちがいないのだが、どうしても思ひ出せないのだ。

一たい此處はどこだらう、病院かしら――と思ふとベットも青い顔もどこへか消えて終つた、ランプがボッ／＼と息をして居る。

後の足音

私は一生懸命に走つて居る、後からも誰か走つてくる、いくら走つても走つても道はつきない、私が止まると後の足音も止まる、また私は走つた、と突然目の前に茨の垣根がきづかれた、私はそこを破つて走つた、髪はむしれ肉は破れて、全身からだら／＼と血が流れる、それでも私は走つて居る、止らうと思つてもひとりでに足が前へ出て何うしても止る事が出來ないのだ。

こうして私はどこまで走つてゆくのだらう、自分でもちつともわからない。

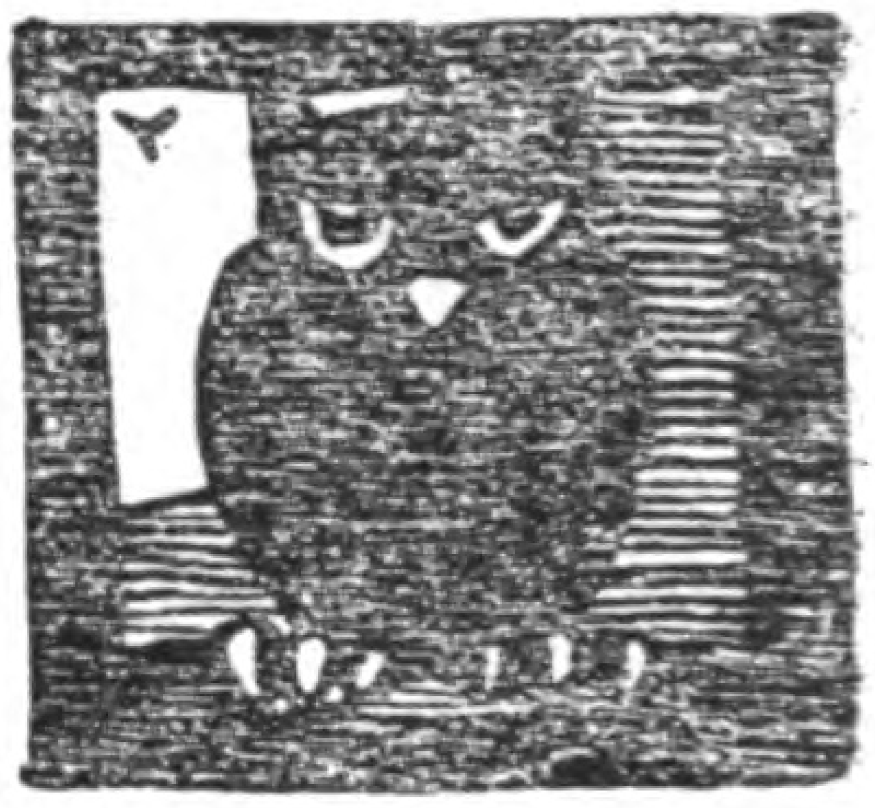
白木の柩

向ふから白木の柩がかつがれてくる、あゝ必と彼は私を中へいれやうと思つてくるのだらうと思つて居ると、つとゆきすぎて終つた、私の魂はぶる／＼とからだをぬけて、どこ迄も／＼柩の後を追ふて行く、やがて魂はつかれはてゝ、もう後を追はない、遠ざかつてゆく柩をうらめしそうに見送つて居る。

――きやう――

破りし柵

若杉小夜子



此の頃の私の友は皆異性だ、昨夜も二人に誘はれて神田邊を逍遥つて活動寫眞から出た時は、寒い風が頰肉を殺ぐやうだつた。

『オイ飲まうぢやないかつまらない』寥さんの例の癖で常盤へ入らうと云ふ、初めは拒んだけれども餘り大した差支もないから、をとなしく聞いた。

寥さんは飲む程に眼光の鋭くなる額に青線の張る人で、語氣は段々荒くなつて來て。

『なんだ其の飲み方は、卑怯ぢやないか』と怒鳴りながら注いで呉れた正宗に、病氣が在つて飲めないと云ふ葉さんの飲つて居るサイダーを取つて杯に割つた儘ぐいつと飲み乾すと全身の血は激しい勢で驅け廻つて心臟が破れるかと思はれる、私は苦しまぎれに窓に凭れて、あゝ陽は彼方イタリヤの…と云ふ二人の詩吟を微かに聞いた。あゝ其の哀音の中に私の過去が首を上げ初めて、清い〳〵昔の夢がなつかしくて堪まらなくなる、もう二度憧憬れる事は出來やしない、其の美しい清い心地は味はうとしたつてもうだめだ、虚榮の中にも空想の中にも何が在るのか知つて見ればつまらないものだ、虚榮、空想、此の二つの球を時々矛盾させながら、私は十八の年まで懷中に持つて來て、どうした足跡にか落して割つた、割れて見れば煙さへ立ち登らない空虚だ！、二つとも全じやうな奇麗な球だつたのに餘り飽ッ氣ないぢやないか、汚いものでも恐ろしいものでも宜いから入つて居れば宜かつたにと私は思つた。

『茅野君！まだ苦しいのか、シッカリ仕給へ』

葉さんに背中を打たれてハッとした、そして自分は

好い阿婆擢れ女だと思つた、英さんに聞かしても穏さんに聞えても惡い事だ、屹度二人は怒つて墮落女奴！と罵るだらう、然し何故惡いのかしら親友とお酒飲んで醉つたつて何が不埒か！、男だつて女だつて全じ事だ、凡てを打ち壞した私には男も女も區別はない、女が女にも戀をするぢやないかと、自分に自分で今夜の辯解を頻りに求める丈、私はまだ幼稚なものだつたのだ。

醉ひ覺めの蒼白い頰を風に吹かれながら三人は其處を出た、月光は冷く街路に布いて電車はもう途絶えて居た「歩いて歸りますよ」「歸すものか」此んな事を繰り返しながら遂々歩いて。

「僕は母に叱られるから歸るよ」と葉さんが眞面目に切り出したので。

「私も歸ります、サ歸りませう、」寥さんは覺め切つた眞面目な顏付きをして。

「諸君に少し話したい事がある、是非聞いて呉れ給へ、靜かな部屋で語らうぢやないか」

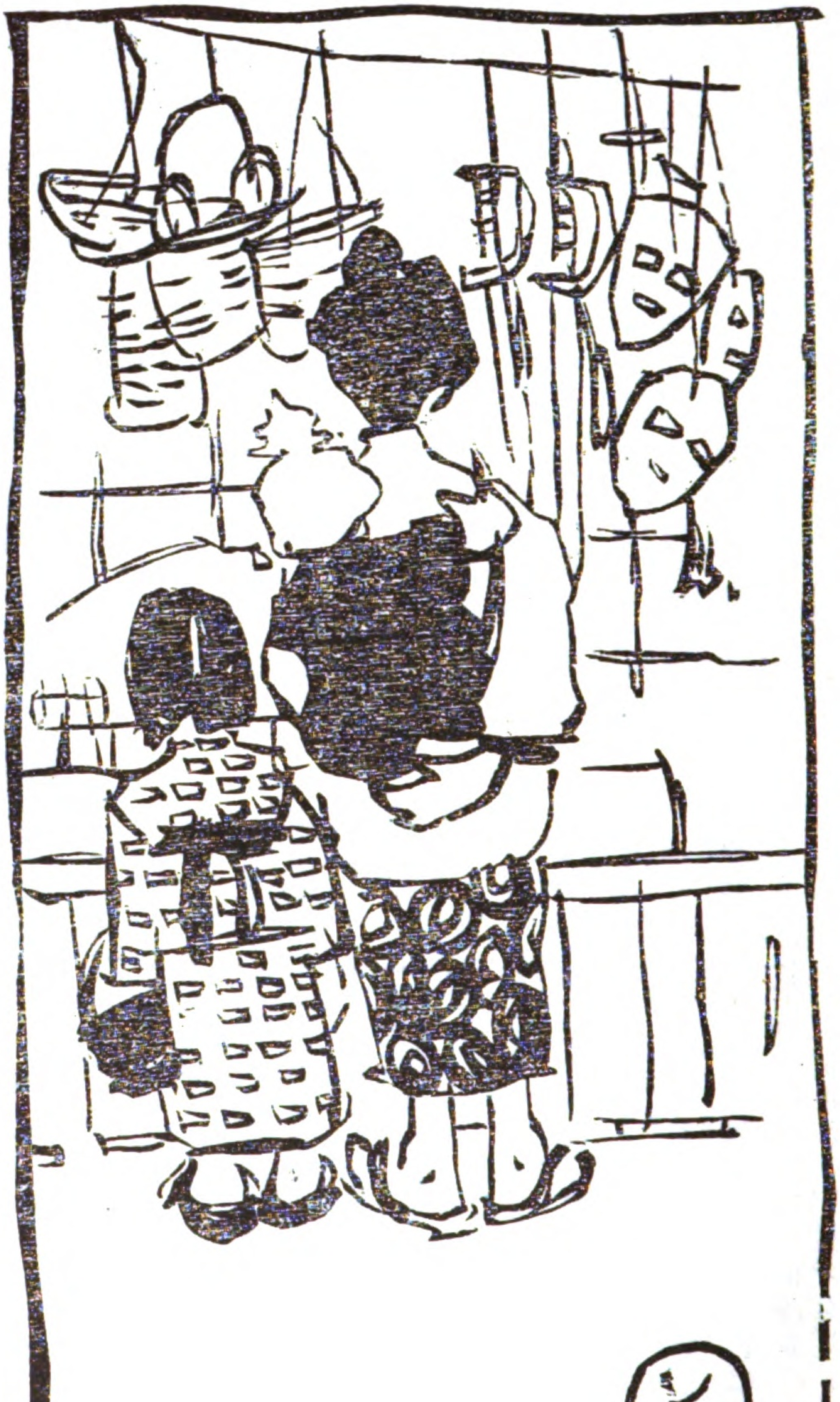
シンミリした調子には例ながら葉さんも私も動かされて終ふのだ、どんな重大な事件なのだらうと思つた。斯う云ひ合つて神田橋畔の旅館を叩いて三人は泊つたのだ。

宿の人は明日歸つたら何とか云ふに定つて居る、何と云たつて構ふものか、とても私はヂッとして居られる人間ぢやない、絶え間なく苦んで居る大病人なのだもの、自分から進んで手術臺の上に上つて、大手術を受けなければ死んで終ふ人間なのだと、常に寥さんから聞いてる議論が耳に泌み込んで此んな事を云はせる、然し自分の眞個の聲は、大膽なる女よ、哀れなる女よ、お汝はまだ十八だよ、何故優しい美しい恐怖に包まれないか！少しも可愛氣のない女だ。

然しお汝は飽く迄自分の個性を尊び信ずるからであろう、そのお汝の大膽な信仰は折角世間が女の人を入れる爲に作りあげやうとする柵を、滅茶〳〵に破り散らかして終つては憤慨させて居るのではないか、そしてお汝の嘆く時許りが眞のお汝なのだ、自分の性格、境遇、運命、主張、凡てをよく秘し切つて柵破り牢破りの罪を遁れやう爲に、時々お汝は無邪氣らしい笑を以つてするだらう、その時のお汝の心の痛さ加減を能く解し得る者は一人もありはしないのだらう。

翌朝、旅館を出たのは十時だつた、自分は鞏固な信

仰を持つて異性の友人と旅館泊りをしたのだ、少しも自分に恥づる事はない筈なのに、從來の道德や習慣から絶對に脫し得ないのか、口實許り設けたがつて途を歩いた、此んななら寧ろ大手術は受けないものだと、此の醜い汚い自分の姿をつく〲私は悲んだ。



おもちや屋の前　陸奥　山本しげ子

一度破つて出た柵の中に又すまし込んで入つて、その後を小細工して胡麻化して置かうとする程、醜い賤しい姿が又とあらうかつくらふのは嫌だ破れたものは破れたままに置きたいのだけれど、裂けた衣を着て街を歩いたら人は狂者と云ふだらうか、然り狂ふたのだ（賞）



迷ひすぎて婚期を逸したる政治家のお孃さん

雪輪

什うも女學校などを卒業なすつた方は、氣位ばかり高くて、ヤレ學士を良人にせねば恥かしいの、下女を傭はねば家政の整理が出來ぬの、姑は嫌ひだからなるべく獨身の者で財産のある家でないと落附かぬのと、色々注文をお出しになる、最も多少高等の教育でも受けたものが、全く無學の人に嫁ぐと云ふことは宜くないかも知れません。

第一意見が合はぬやうなことがないとも云へませんね、よくある例ですが娘の親が相手方の財産に絲目をかけて本人の心の中も調べて見ず、唯郷里で門閥家であると云ふのに惚れて娘を無理やりに嫁かせる、娘は幾分教育は當世風に受けてこそ居れ、相手の良人はホンの小學校を出たばかりとすれば、何かにつけて自分が社交の表に立つ機會が多い、勢ひ良人をないがしろにする樣になる、良人は一圖に家長權を笠に着て、頭から遮二無二に押へつける、それが昔風の貞女主義に養はれた女大學流なら、別に問題にもなりませんが、何を云ふにも生學問があるのでせう、是が嵩んで一家の平和を破るので終には別れ話が持上ると云ふ順序になるのですから、双方ともよく〳〵調べ合つて、趣味や嗜好の點にまで衝突のないやうにして置かねばなりません。

凡そ虚榮心ほど恐しいものはないと思ひます、虚榮と嫉妬は女子の最も禁物とせなければならないもので、この虚榮心のためあたら花盛りの婚期を失つた實例は世間に澤山あります。私の妹の友達で久須美とき子と云つて關西代議士の娘さんで、當年二十八歳におなりですが、未だに嫁入口がないのでございます。

イエなかつたのではありませんが、お父さんの代議士さんが、早く奥さんにお別れになつて後妻をお貰ひにならず、萬事家の方はとき子さんが切廻してゐましたし、代議士の娘と云ふところで本人の氣位は非常に高い。

且又、常に交際場裡に出る機會もあつて、學校の同窓會とか、婦人會にはいつも一番にお見えになるのです、そればかりでなく、お父さんの選擧の時は必ず自分が運動員となつて、町の有權者の家を叩いて、投票方を頼んで廻るのです、大變勝氣な御婦人で、鳩山春子さんの二代目だなんて町では評判が大したものでした、かう云ふ氣風の人ですから、何事もハキ〳〵してゐます、土地の聯隊の去る大尉から是非にと貰ひに來たこともあつたのですが、お父さんの手離しかねたところへ、持つて來て本人はやりくり大尉はいやだと申すのです。そんならどんな處へ嫁に行くかと尋ねると、一流の政治家で學士に片附きたいと云ふのです、隨分鐘と太鼓で探したら無いとも云へないでせうが、如何にせん、田舍のことですから、遂に今日まで何處へも嫁けないのです。それで本人も今更、同窓生の手前、世間の聞えもあり、滅多なところへ嫁くのは恥かしいと申して、モウ一生嫁に行かず、お父さんの側にゐると云つてゐるのです、殊に本人の心からと云ひませうか、可愛想なのは妹で、矢張女學校の補習科まで卒業して當年二十四歳です、姉が嫁かぬのに妹が嫁かれぬと申してゐるので、親族の方々が色々心配なすつてですが、什うとも仕方がないので、お父さんはモウ諦めて妹の嫁入先は誰でも構はぬと申してゐるのです。併しこればかりはさう勝手にも參りませんし、虚榮心もよく〳〵心得ねばなりませんと思ひます、先づ相應なところと云つてむづかしいですが、あれやこれやと餘りに御注文が澤山ですと、前お話申した代議士さんの娘のやうなことになります、自分の家格にくらべて大層な優劣があるのにも教育の程度、趣味の傾向にも心を止めず、婚期だから嫁入らすと申すのも輕卒ですけれど、女子の全盛の時は三日見ぬ間の花同様、決して油斷をしてはなりませんと信じて居ります、こんなことは解り切つた話ではございますが、常に世間にある例ですから、一言申上げた次第です。（寅）



兄を氣遣ふ

千とせ

もう十二時過ぎたのに、何時迄待つて居た處できりが無いから寢て了はふ、雜誌を枕元へ投げてランプのチヂをきゆつと下ろすと、スーッと細く青く消え相になつて危く止まる、オヤあの足音……と耳を欹てれば家の前を通り超して了つた、此の寒さにどこへ行つて被入るんだらう、此節はちよい〳〵夜更しを成さるけれど斯麽に遲く成つた事は無い、何か變事が有つたのじや無からうか……何卒父樣や母樣の御存知無い內に歸つて來て下さればいゝが、あゝ待つ身の辛さ何とやら……　睡らうとすれば目は益々冴えるし、本を見ても氣は纏まらず、オヽ此度こそあの口笛は確に……半ば身を起せば是れも又向ふの横町へ外れて了ふ、四邊は靜まり返つて折ふしかさこそと雨戸に當る風の音が身に染みて物寂しい、もう思ふまい、何にも考へまい………、未だ香の失せぬビロードの厚ぼつたい搔卷の襟へ頤迄埋めて沈と眼を閉ぢると、晝間猫が破いた枕元の障子の穴から、細く固まつた冷たい風が額へひやりと觸れる、と又次が、又後から、夫が丁度一昨年の秋窒扶斯を病んだ時、ぞつと足の先へ惡寒を覺えると脊筋を走つて頭へ突進する、又次が又後から……小一時間も續くと四十度以上の熱に成つたつけが、彼の熱は肉に包まれたる骨を刺して走る、此の冷たい風は皮膚を上つ辷りして消える、ふと斯麽事を考へ出すと堪らなく厭な心持がするので、出來る丈枕を右の方へ寄せて細い風を避けた、一躰母樣は少しも疑惑心の無い方だから、兄樣の仰在る事抔は一圖に信じて被入るけれど、もう兄さんだつて氣の許せないお歳頃、夫にどうも此節の御友人が、分けてあの內山さんとか云ふ方は、歷然とした親兄弟が有りながら、意見が合はぬとかで家を飛び出して苦學して被入ると云つて兄さんはひどく

同情してお出だけれど、如何に意見が合はねばとて、自分の希望が達せられないとて、家を振り捨ると云ふのはちと無法過る、第一夫程迄に熱心な願を親たり兄たる者が容れない筈も無からう、夫も家が貧しいなら兎も角も、噓か眞か可成の資産家だ相な：：どうしても條理が合はない、確に兄樣は騙されて被入るのだ、今朝も今朝とて、此の寒空に外套が無くつて可憐相だから貳拾圓貸して遣つて吳れ、と仰在つたのを、未だ學生の身で金錢の貸借はよく無い、と母樣に云はれて、夫ては友人の交誼に背くの母樣は不實だのと、いつもに似氣無く食つて掛るので、埒へ兼て傍から私が口を出せば、貴樣抔の知つた事では無い默つて居ろ、と劍もほろゝ、夫ぎりぷいと出て行つてお了ひなさつた。

どうしてあゝお世話燒なんだらう、人の困るのを聞いて聽捨に出來無いのは兩親に似て居るんだから仕方がないが、此の節柄あれじやあ今にとんだ目に會うやうな事が出來るかと熟々母樣は案じて被入つたが、あの二十圓の入用は什麼單純な事では無さ相だ、どうも今年に成つてから酒氣を帶びて被入るのを度々見受るし、本を買うとか何の會費だとか云つて餘分に頂くお金も少なくは無い、あゝ云ふ一徹な人がふいと邪徑へ外れると仕末にいけない物だと聞いて居るが、若や：：若や：：まさか什麼事も有るまいけれど、ドン／＼と戶を叩く音にハッと驚くと動悸が高まつて急には起きられない、ドン／＼ドン／＼、と稍々荒く成つて來た、只今、と力の有る低い聲で答へて戶を開けると、オヽ寒うと飛び込んでマントを拂へばバラ／＼と白い物か落ちた「オヤ雪ですか」「アヽ降り出して來たよ」「兄さんのお床へ行火が這入つて居升から」「ソー有難い：：もう電車が無いので向島から歩いて來たもんだから體中凍つて了つた」行火に抱擁いて顏丈蒲團に乘せて、ふーつと吐き出す息が靜かな夜の氣を搖るがせて白く、頰は林檎のやうに紅い、「どうして向島なんぞへ行つて入らしたの」私は兄さんの包んで居る或る物を探り度いやうな氣がして、出來る丈近く座つた、「今日テニス會で宮田に會つたら、岡本の病氣がよく無い相だから二人で見舞に行つた處が、餘程重患なのさ、夫に他人の家に居るんでは看護が行き屆かないから病院へ這入るやうに勸めて、親戚へ相談に行つたり手續きをしたりして漸く明日入院の出來る迄に運んで遣つたが餘りあちこち歩いて居たんで疲れて了つた：：オヤもう一時だね」體の溫まると共に頰の紅味は

次第に醒めて酒氣は少しも無い、ホッと安心すると今迄兎や角疑つて居た淺薄な心を恥ぢるけれど、然りとて此頃兄さんの身邊へ微かながらも認めた薄暗い不安の影は容易に打ち消す事は出來ない。（賞）

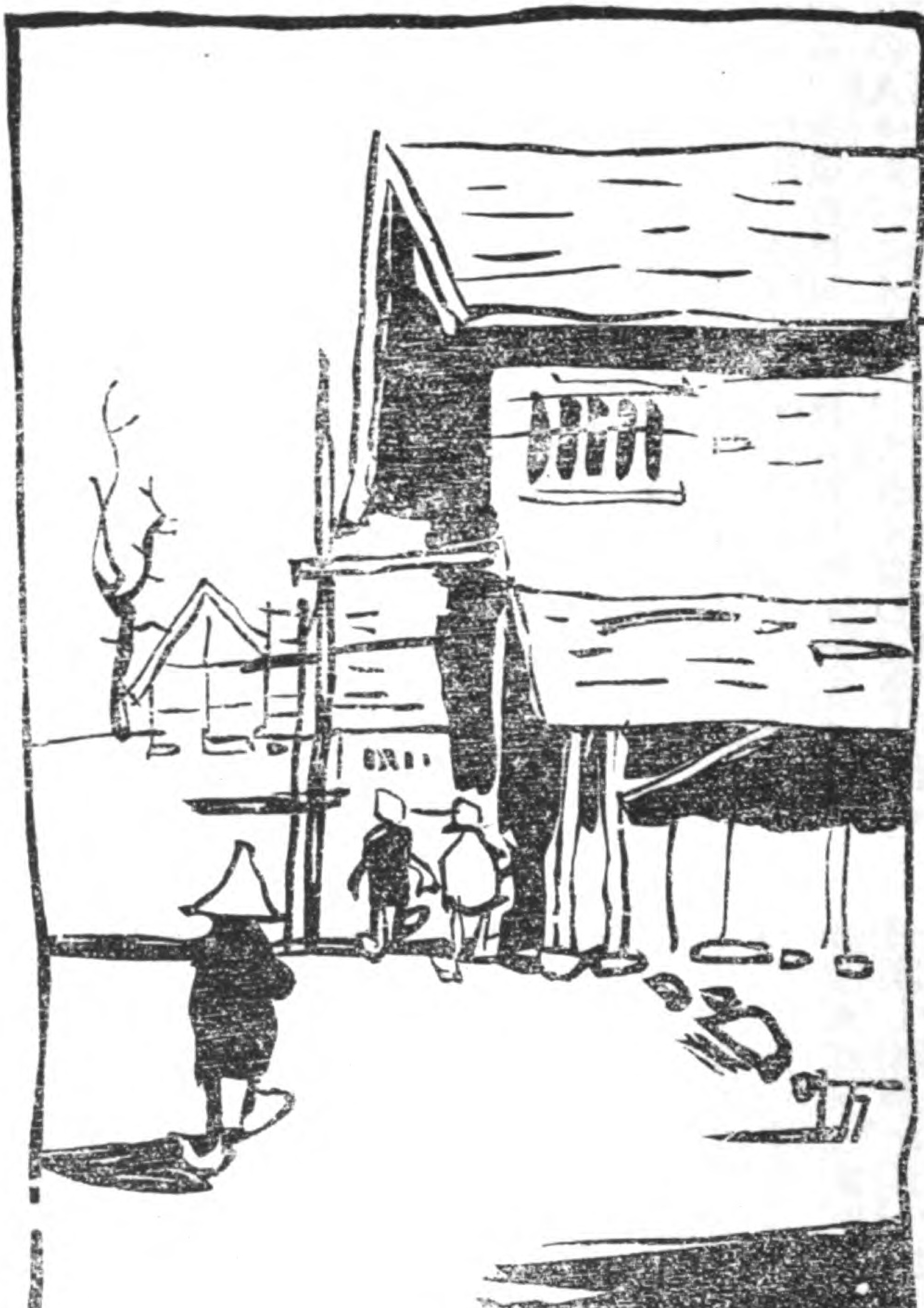


夢

江森美子

燃立つ樣な緋のリボンを、頭よりも大きく結んで、雪白の胸掛したのが可愛いと云つて、先生方に撫でられたり、抱かれたりする嬉れしさに小兎の如く飛んだり、跳ねたりして居た、罪のない姿は、自分ながら、まだ眼に見える樣に思ふけれど、何時八年の春秋を重ねて、髮も延び丈も伸びて、日頃母樣が卒業式の日のにとみ心こめて仕立て下さつた袴の色も、あざやかに、白襟黑紋付の姿凛々しく。私は其の光榮ある卒業式にのぞんだ數も、少くなき優等生中に數へ入つた私の名が聲高く、呼ばれた時包みきれない、喜悦の情に躍る胸をしひて靜めて、歩む靴の音が、物靜かに式場に響いて、滿場の視線はひとしく私にそゝがれた、私は恥かしくも、嬉しく、天へも昇る心地に、戰々と身内の打ち慄ふを覺えつゝ、温顏に微笑して立ち給ふ、老校長のお手から親しく賞品を授與されて、我席に復した、其時、私は、ふと、或る事が胸に偲れて、嚴かに居並給ふ諸先生方の中にも一ときは風采凛然と漆黑のお髭美しき繁田先生の方を見上た。先生はいとも、御滿足氣に、何時變らぬ微笑を片頰に湛へて、私を御覽下さつたので私も亦思はず、心の中に、嫣然して、又俯向いたが、私の胸は決して安らかでなかつた。卒業によつて起る別離、別離によつて起る悲哀、悲しみによつて出づる涙、其の涙を、師にも友にも見られじと、忍び〳〵して胸の中に泣いたのである。あゝ別れたくない、情厚くお優しい先生、幼なき頃から渝らぬ、愛くしみを受けた繁田先生に、別れたくないと、思へば、思ふ

ほどどうしても、別れねばならぬと云ふ、情にせめられて、親しく懷かしさの、猶ほ增つて、人目なくば、おそばへ、飛んでも行きたい樣に思つた、私が始めて先生のお顏を、覺えたのは、最初此の校に入學した、其日、手の擧げ樣と、お返事の仕方とをお敎へられた時であつた、澤山先生が變り〳〵來て、色々の話しをして下すつた、中に繁田先生も居らしつた、さうして、悧發な生徒と云ふ題て有益な、面白い、お話しをなすつたが。私は其の話より、何より、先生が絶えず〳〵微笑を含んで居被るお顏を、幼心にも、忘れじと、目ばたきもせず見上げて居た、さうして、其の時受持ち敎師となられた、先生より、繁田と云ふ、其の先生のみ名の方を早



家と人　陸奧　山本しげ子

く、おぼえて終つた等は、今でも不思議に思つて居るので、其後先生に其のお話をしたら、先生も笑ひながら、私も美様は初めから、可愛ゆい生徒だと思つて居たと被仰つたつけ。廊下等でひつたり、出合ふと、先生は優しく私の頭を撫てて、下ださつた事なぞは數へ切れないほど、一二年頃の遊び時間は、先生のお膝の上で過した事が多かつた。ちようど尋常四年の頃だつたらう、雨の一日を先生の受持つて居る、高等三四年の教場へ遊びに行つたら、先生が何かお話しをして下さいと、被仰たので、私は、臆せる色もなく、壇上に立つて、父様から、よく聞かされて居た。祐天上人のお話をして、先生にも、生徒の方にも、大變賞賛て、嬉しく、其れからと、云ふものは、雪の日、雨の日には、乾度先生の方へ遊びに行つては、級友等に美子様は何時でも、大きい方の所へばかり遊びに行くつてよく眼を、むいては、怒られたつけ、小さい人の小さい胸に燃ゆる、羨望の恨等は、幾ら買つたかわからなかつた、其の人々が、こんなに、大きくなつてまして卒業證書を、握るのかと思ふと、眞實にお可笑い。花の上に舞ふ蝶を、追つたり、學園に咲く美しい花を、せがんだりして、先生を、困らした時代は眞實に夢の樣に過ぎて終つて、事なく、高等三年級に進んだ、其の日。言葉爽やかに、今度は、皆樣方を私が受持つ事になりました、とボールドを背にして、にこやかに、立つた人は、繁田先生、私はもう〳〵、嬉しくつて、嬉しくつて、心から先生を、敬ひ、心から先生に、服し、心から先生を慕ひ奉るので、先生の愛くしみを日々に深く、興に乘じては美坊や何んて、お呼びになつた事さへあつた。人の心を、溶かしめる樣な、木犀の香、繁き立秋の頃、私は始めて、お家へ遊びに行つた、先生は大變なお喜びで、手を取らんばかりにして、ピアノの音のする、二階のお室へ伴れて行き、さうして、水色カーテンの中ば絞られた、南向の窓に寄つて、餘念なく細い指をピアノの上に躍して居る。頰の櫻色に、二重瞼の、美くしい、女の方に「是が何時もよく話す、クラスきつての秀才、僕のブヲシイトする美子孃さ」つて、其の頃私には、まだ、よくわからない言葉なんか交ぜて先生が、仰被ると、女の方の美しい顔は一しほ美しく輝いて「あゝ左樣」と先生の方へ向けた視線は私に注がれ「まあよく居らしつてね、ゆつくり遊そんで被居」と被仰しやつた、先生は、呼鈴をならして顔の赤い、肩巾の廣下女を呼んて、色々の雜誌を、

運ばせたり、先生と奥樣とて、ピンポンの道具を、はこんだりして、とう〳〵終ひには、人が、足りないので、下女さんまで這入てダンスが始じまるやら、大さわぎ、時の、たつのも忘れて、一日面白く遊んで、夕陽の西方に燃立つ頃、うす紫に、ほの匂ふ富士の姿を、先生も奥樣も私も赤い顏の下女さんまで、言ふ樣もない笑を浮べて眺めたつけ。眞實に卒業前の二年間は、取り分けて、樂しかつた、大好な繁田先生のお敎子となつてまるで美しい、春の夢でも、見て居た樣に安らかだつた胸も、今や。卒業の聲と共にさまされた、あゝ此の卒業免狀、一枚に、破つて終はうか、捨てゝ終はうか、たゞ一枚の紙だもの、其うして、其うして、繁田先生のおそばに、もつと居たい、もつと居たい、何時までも、何時までも、先生のお敎子となつて居たい、出來る事なら、此の肉體と、靈と相分離するまで、不歸の身となるまで、いゝえ〳〵死んでも死んでも先生のおそばを、離れたくない。此の、此の、天地のあらん限り、長しへに、先生のお敎子となつて居たいなど取りとめもなく思つた。美子樣どうかなすつて、後の秀樣に呼ばれてびつくり、夢幻のさかひを、脫して我れに歸つて見れば、あゝ、辛い、辛い、心の臟を、かきむしらるゝよりも、辛い、告別の歌は、今し、(朝夕なれにし學びの窓――ほたるの燈火――積む白雪――)と、さすがに、長年睦まし、友、師、校、に別れんとする、悲じさは、或は強く又淡く、三十有餘の友垣の胸にも滿て、聲揚げて歌つてる人は數へるほど、(今――こそ――別――れめ――いざ――さらあば――)と、哀音の響長く引て終りにし、瞬間は寄り集ふ、五百に近き人も、皆、默して、靜寂の極み、小針のまろび音も、聞えさう、やがて、式も終り睦まじき、師弟打ちとけての、茶話會に移り、來賓及び諸先生方の誠心こめし、御敎訓の數々日頃、カツポレ先生と、渾名を取つた、おどけ上手の○○先生さへも、至極まじめに、「光榮ある卒業生諸子に」を、冒頭に、しんみりしたお話、けれど、何んとなく、滑稽的な身振が見えるので、中には、ハンケチに笑ひを偲ばせる方もあつた。繁田先生は例によつて、お得意の、義士銘々傳中の、神崎與五郎敎安が、吾妻下りの節三島の宿に於て、牛五郎の爲めに、惡口雜言は、愚か、武士の面に、唾かけられてまでも、大望ある身を忘れず、泉下なる主の御心を思ひ、又義を重んじて、あはや、四五寸拔きかけし、鈎をびたと、鞘に納めて、さがなき者に、わび證文を

あたへしてふ、勘忍を主として、卒業生等の行先きを思ふ、熱誠面に、あふれたるお教訓には、思はず、居並ぶ人々の襟を正さしめて、身心の引きしまるを、覺えしめた、其れに次て卒業生等の、談話の彈琴短い袴に、下げ髮、靴ばきのまゝの、お父様も出來れば、父様より、丈の高い、お孃様も生れるてふ、卒業生各自其のまゝの、スタイルて演ずる珍無類の餘興等可々大笑の中に、目出度會は閉られた。しかも閉られざるは、我胸、朋友との別離、校との、別れもとより、悲しきも、忍ぶ力はある、繁田先生との、別離を、あゝ、どうしよう、先生のお胸の中も、こんなに、辛いのかしら、苦いのかしら、あゝ、先生は何處に、と曇る眼に、幼き時から戀ひ慕ひし學園の内を見まわすと、夕風に音もなく、ひらり〳〵と、散かゝる櫻を拂ひもせずに其古木にもたれて居らつしやる、私はもう夢中に走せ寄つて「先生」と呼んだきり、聲が喉につまつて、こらへし涙が流れる、先生はしかと、私の手を、お取りに、なつたまゝ暫らくはお言葉もなかつた、其の時先生のお顏を見上たら、きつと涼し氣なお眼には、美しい涙が、淸かな、夕月に輝いて居たのだらう、先生は暫らくして、色々と慰さめて下すつた末、一しほ力あるお聲に被仰た、感情的な人に生れた者は、嬉しさに泣き、悲しさに泣き、到底涙を、逸する、事は出來ませんが、木葉的人間の思ひも、及ばない、言ふに言はれぬ、樂しき情味に醉ふ事が出來ます、しかし、感情的の人は、動きやすく又、まよひ、やすいものですから、どうぞ、美様は心して、今日は東に明日は西にと、漂ふ、淺瀬に浮ぶ瓢簞的人間にならないで下さい、水底深くに輝く寶玉の様な人になつて下さい。さあさ、あまり闇くなりますからと、先生は、門前まで、送つて下すつた、私の小さい胸は、先生のいや深きみ情けに對する、感謝の情に湧きかへれど、たゞ、わづかに一句「先生もどうぞ、お健かに」と千言萬語につきぬ思ひを、涙聲に言つたまゝ、夢中に夕闇を分て、暫らくして、ふと返り見れば、先生のお手には、ハンケチが、ほの、白ら閃めいて居た。

あゝ其の時から、三年を過ごしての今日、かく、暗涙に、むせびつ、懐かしき先生の墓前に、額からうとは、親しき先生の墓きに、まうて樣とは、あゝ、夢にも、あゝ幻しにも、思はなかつた。其の古しへ、泉式部は其の子小式部の内侍の失せにし後、上東門院よりたまはりし絹の、ふだに、小式部の内侍とあるを見て、（諸

共に苔の下には朽ずして、埋れぬ名を見るぞ悲しきと、詠みけりと、親子の情もとより深しといへど、師弟の契りは世に最とも深しと聞く、其の恩深く、懐かしさ、師の君の、み名を、今墓標の面に眺むる、我が心の悲さを、苦しさを、天國にまします、師の君よ、愛弟の此熱涙は通ひましようか、師の君よ、安らかなれ、櫻散りしく夕べ、あたへられた御教訓は、愛弟の胸に深く徹して忘れはいたしません、長しへに。師の君の教へも深き、言の葉は世に出づる身の守りとぞなる、天國にまします師の君よ、み心あらば受けてよ。あゝ此の天地は夢ならねど、人の命、人の世は夢だもの、何もかも皆、夢、夢と、あきらめ樣、あゝされど、いつはらぬ心の悲しさは涙となつて、頬を、そめて、あふれては、ハンクチも紅く染まるかとも思はれるのである。（貳）



秘密の頁

千鶴子

あら今度の増刊は若き婦人ですつて？嬉しいのね何んても若い人の記事ばかりですと——私古臭いお婆さんの念佛見たいに「女と云ふ者は‥‥」など四角四面お說教的の文句は大嫌い女は三界に家無しと男子に奴隷視して居られた時とは、時代が、違いますわ、今は、女權擴張の世の中ぢや、有ませんか、どし〳〵、活動すべしてすわ。年は、何歳ですて？芳紀當に、十八歲、花ならば、半開の‥‥と、云へば、知らぬ、御人は、繪にある、文金の、高島田、光琳模樣の、三枚襲、厚板の帶を、立矢に恥を含むで立ませる、痩肩のすつきりした、姿を御想像遊ばすてせう?! まあ〳〵、其樣思召して、居らつしやれば、間違は有ませんわ、見ぬ中が、花てすもの。私だつて、鬼も十八、山茶も、出花お白粉でも、塗けて、朝から、晩まて、鏡と、首つ引

き、御園よ、レートよと、化粧品の、撰擇に、浮身を、粧したら、少しは、美麗になりませうが、私大嫌て、之れても、美人の、稱號が、欲しければ、何時ても、戴かれるのよ、一寸汽車のレールに、横に伏り、一つしか無い、命を、差し出せば、明日の、新聞には、一部轢死美人と、三號活字で貴重なる、三面紙上の、一部を割いて、全國に、報知する事疑ひなしと、自信してますから、不標致ても敢て、悲みませんの、僞と、お思いてしたら、命の、御不要の方試驗に、轢死てお覽遊ばせ、女子てさへ、あれば、きつとよ。あら、決して、鐵道往生を、お進するんでは、無ことよ、今年は、婦人の、轢死者が、多數いが、お前が、誘拐したのだろう、なんて、お目玉は、眞平よ。美人薄命、お多福多命てすもの、私なんて、長壽よ、二百歳位まて、生きてる心算りなの、××××の美人ても、一朝無情の、風に、誘はれて、死出の、山路に、入つたなら、皆同樣ですは、骨となりて、穴に入るのてすもの。あの、御存知の姿色自慢の、霜子さんね、只さへ、お美麗な、其上に、日々の、御鍊磨て黑々したお髮を、庇に突出させて、マガレに、水色の、巾廣リボン、紫矢絣の、お召に、赤い、綾子の、お帶を立矢に、結んて、お花片手に、伏眼がちに、一寸白い、細顏の、顏を、横にして、運歩遊ばす姿、往來する人は、言はずもがな、女性の、私てさへ、恍惚として、見惚る事、漸々暫し、級中の、クレオパトラ――山下小町――赤門の、秀才S君の、沸騰點以上の、御熱中、詩に、歌に、自己の、熱烈なる、愛情を、書き、捧げて、霜さんの、一擲の、同情ある、言語を聞まほしと、祈つても、御當人、一向平氣なもの、

「私角帽なんて、大嫌いよ、未だ卒業もしない僻に、戀よ、理想と、騷いてさ、角帽さへ、被つてれば、女は、皆んな、服從すると、思てゝ、實然に失敬な學士が何に――苦心慘憺やつとの、思ひて、卒業ところて、月俸大枚三十圓が、關の山、未來は、大臣か、博士か、知らないが……それよか、實業家の方が、幾等良好か不時の、收入はあるし、年中金庫の、中には、お金が、一ぱい、芝居には、行かれるし……よ……錢無し學士の比べものに、なりませんわ、」と、氣焔萬丈。戀に、惱める、S君此事をお聞きに、なつた時の、失望思ひ、やられますわ。

　私隨分肥つたてせう！丈比らべなら、横から來給へよ。女力士にてもなれば、差詰め、大關よ、妹と並

ぶと、ソマトーゼの、好モデル、大好きな、S、P、と、來たら、六本位は、朝飯前よ、死體累累盆上に、山をなす樣子、姫御前の、あられも無いと、笑はゞ、笑ひ給へ……。白魚を、五本並べた樣な、細き指、至て、日影の、朝顏見たいに、蹌踉して、波さん、然とした、風姿の人は、大嫌ひよ、肺病黴菌の、製造元見たいだ、オツト、之れは、失禮……女は、女らしく、小説中の、薄幸女主人公のやうに、なよ〳〵と、觸らば、散らん風情に、頂垂れ勝の眼し、雨に惱める、海棠が、理想の、お方!!我田引水論と、大眼に、お見逭し、下さいな。えゝ、私だとて、何にも母樣が、此如な、大膽た、お轉婆女になれと、生むでは下さいません、亦生れた時はやはり、人間普通に、母樣の、暖き、懷に抱かれ、甘き、乳房に、すや〳〵と、無心の笑湛へつゝ、寢り、或は、母樣〳〵と、病に、惱める、母君の、枕邊に取縋り、乳母困らせしも、幾度ぞ……。赤き模樣の、着物に、赤き、被布、振分髮を肩まて、垂し「千鶴ちやん、赤い着物着て、良のね……」と御自分は、何にも、買はずに、何時も、私の、赤い、反物ばかり買つて、下すつた、一番末つ子の、私姉樣が、よく「千鶴ちやんばつかり、可愛がつて」と、妬れた程だつた、一昨年迄浮世を、知らない箱入娘でした、世の中に、自分の意志の如に、成就ないものはなく、樂しい、ものとのみ、思つてましたの、それに〳〵……人知らぬ、思ひに、胸の、焰燃やしつゝ、心の奧深かく、秘めた、語ることの、出來ない、胸の秘密。ほつと、つく、息さへ、火炎と變化つて、このまゝ、身を燒いて、望しいは、切ない苦るしい、胸を、抱き、ながら、太平樂を、並べつゝ、芝居よ、活動寫眞よと、浮き〳〵、遊び歩く、私の、心の中……母樣千鶴は、生きた、木乃伊てす、淚も、情も、枯れました、笑つて泣いてる、胸中を、仝情しては、下さいません?思を仇て報ずる、不孝者、生んだが、因果と、お思召して、お許し下さい、母樣千鶴は、千鶴は、手を合掌せて、拜みます……。

然し駄目だ、忘れやうと、すればする程、過去の、記憶の絲は、解て——暖かき、御手——金緣眼鏡——マント……等切れ〳〵の、印象は、走馬燈のやうに、幻となつて、驅廻る。海老茶袴を裾短かに黑の沓下脛まて、出して、赤い、リボンを、風に、靡かせて、我こそ、女學校の、生徒に、候と云はぬばかりに、胸つき出して、濶歩した時が可懷しい、張裂る計の今の

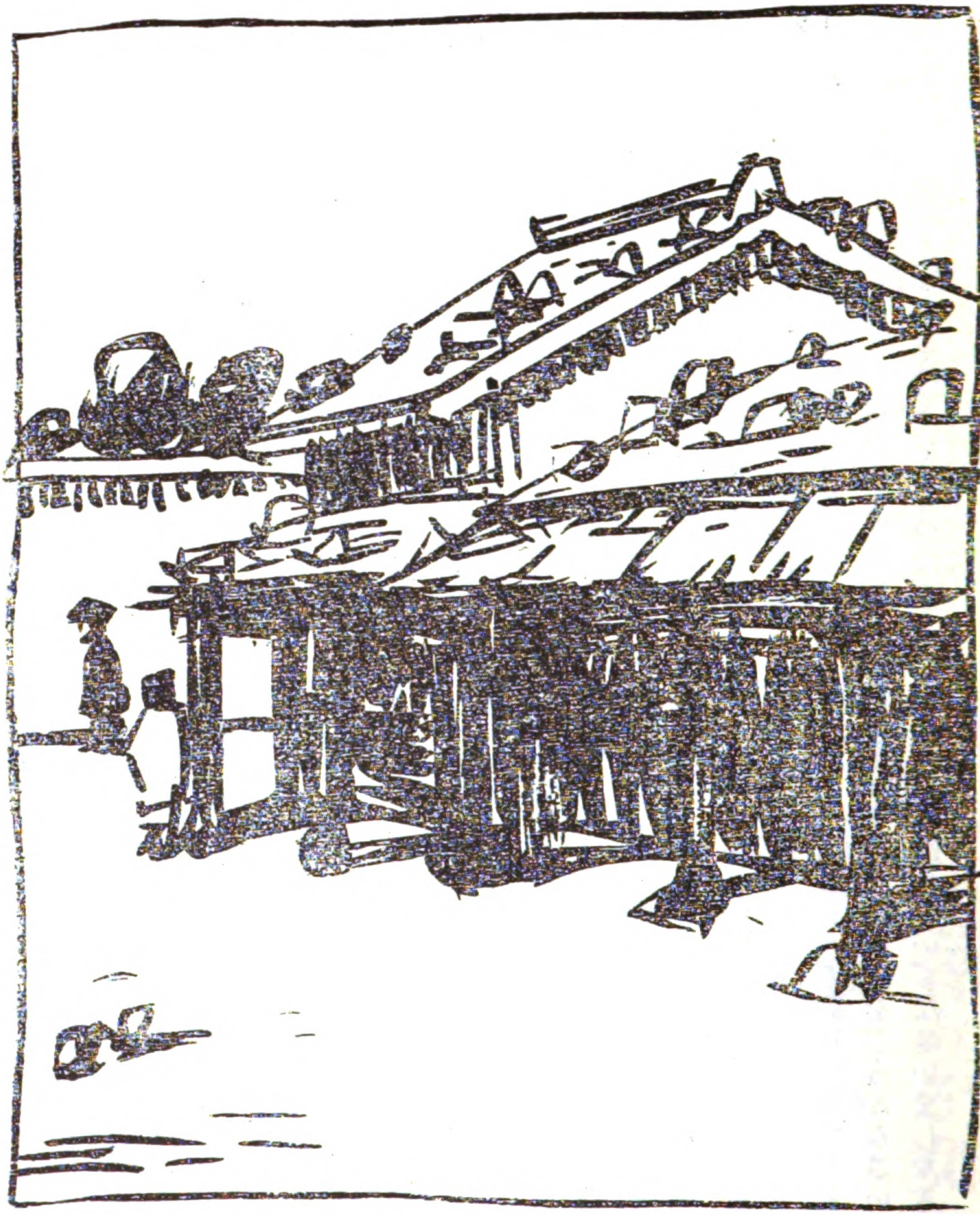
胸、あゝ苦るしい…文雄さん…何ぜ、私一人を、遺て、お逝てなすつたのですか、今一度、お口から、千鶴ちやんと、愛の滿ちた、お聲て、お呼び下さいな、只た、一度――お送り下すつた、忘名草は、君がお命と、共に色は、褪ました、然し〱、心に、植えられた、戀の、花は、永久に永久に、枯れ落つ事は、ありません、あゝ、文雄さん、千鶴は、樂しかつた、昔を忍んて、一人て、泣いてます、どうぞ、亡君よ、安らかに、父の御神の、御側に逝き給え、千鶴も遠く祈ります。（敏）

平和に甘んじて徒に婚期を過す

敏子

あゝまた私は何とも形容し難い寂寞を感じました、何故て御座いましやう？…父には九才て別れ、お祖父樣には十七才て、十九才ては遂々母にまても別れて仕舞ました、生れて今日二十年間まあ三度も死といふ最大な不幸に出逢ひましたので御座います、然し是が不幸中の幸とても申すので御座いましやう、何一ッ不自由も不足もなくしかも九人家内の賑かさに、七十餘のお祖母樣は一も二もなく敏子とし子と云つて下さいますし、兄さん姉さんはほんとにまだ私を三ッ兒見たいに、三つになる姪がきんかんを十もらえば私にも十下さると云ふ有樣てすもの、時にはほんとにおかしく成つて來る事が御座います。それにまた中間の姉樣が私を思つて下さいます事は、とても〱あゝ私は必と未來強い追憶に泣かされる事があるて御座いましやう。こんな風の境涯て御座いますもの、ほんとに寂寞を感じるなど實に我乍ら腹のたつ程いぶかしう御座います、其寂寞を意味する事項と云ふのは扨何て御座いましやう？ひよつと私はいやなオールドミスに成つたのては御座いますまいか！あゝ苦しう御座います、かなしう御座います、…何としてもいやなのは結婚問題、此問題ばかりには私は泣かずには居られないのでございます、元より私がわがまゝなのには相違御座いませんけど――けれど私は我意を通さては、どうしてもおかないといふ一ッの是も虚榮とかいふ怖ろしい者にとらはれて居るのかも知れませんが、否々私は決

してそんな弱い者にとらはれて居樣とは思はんので御座います元々は獨立心もありましたが、高女を卒業する前頃からして、トンとうせたのがサア私にとつていゝのやらわるいのやら、馬



一つ家　陸奥釜澤ひて子

鹿らしい煩悶といふものを引おて御座いました。——そりやあてれ迄ゑん談も數々御座いましたけれども高い身分として恥づべき持參金だの、大酒だの、扨は身體に弱點があつたりして、いかに名はよくつても、どつていとびつ

く事は出來ません。其他は將來大望があるとばかりて、中學も卒へない判任官、あゝ私は…私はせめて中學を卒業した人が望ましいので御座います、…あゝ悲しい哉、私はオールドミスに成つた實談をお打あけ致しませう。

或日の事、世話好きの縣屬が私を東京の〇〇省へ出る人の許へ世話仕樣といつて、不動産等の書つけ迄持つて來られました。中學出てはございませんけど、誠に好人物の所謂見込のある秀才とかて、先方から是非所望したいといつて越れたそうでございます。けれども私はどういふものか、何だか氣が進みませんので、思ひきつて兄樣に否とのお返事をキッパリと致しました。元より誰一人として私に惡い顏はお見せに成りませんでした、處が或日中の姉樣が仰有には「敏子さん！此間兄樣が仰有るには「敏子も大分大人に成つた、一も二もなく嫁きませんといつたには實に驚いた」とあゝ私は姉樣の仰有る間は只笑顏てゐましたが、たちまち胸には大浪がよせて來て堪えきれず、とう〳〵姉樣のお膝に泣き伏しました…。

兄樣方は必と良い嫁塲だと思ひきめていらしつたのてございましやう、後悔先にたゝず!! 否々後悔位ならせだしも、あゝ私は淸い華かな少女て御座います、それに、それに少女らしくもなく、何故、嫁きませんとキッパリ否心中いさゝか腹をたてゝ、こうもいつたので御座いませう！あゝ〳〵私は必と何者にかとらへられてるのではございますまいか？…

其以來縁談はちつともございません、兄姉樣も私には何等一言の苦情らしい事も仰有らず、相も變らず敏子さん〳〵とお愛し下さいます。けれども「惜しい事をした」とは時々仰有つて、中の姉樣が仰有いました、しかし此縁談にはお祖母樣と中の姉樣とは、格別はずんでも被居らなかつた樣でございました。

お祖母樣はいつも〳〵、わしの在命中にお前丈はどこか樂な良い處へやらなくちや死なれない、けれどもお前が居ないと琴もきかれず、お花も見られず、ほんとに惜しくもあるがの…イヤ〳〵それは思ひ切らなくちや、まあ〳〵せかなくても良い處はいくらでもあるから、氣長くまあちつとも内に居て樂をしてお〻きなさい…あゝそうで御座いますとも、お祖母さんおせき遊ばすな〇〇さんをごらんなさいませ、二十三てあんな良い處へおいてなさいましたもの、しかも初嫁てすわね、やはり縁遠といふ事も御座いますから…」

どうして泣かずに居られませうぞ、中の姉さんはお祖母樣とこんな話なさつては手の甲でお目をおこすりに成りますもの……思へば父はなく、母は亡くとも、ほんとに有難い身上なんて御座います。

それにまあ、何といふ我乍ら腹立しい事で御座いませう、何だか何やらものたらないやうなはがい〳〵やうな悲しい殊に寂しい〳〵思が、ひし〳〵と胸にせまつて來て、何事もしたくなく怖ろしくもつたなくも死んて仕舞つたらと思て見たり、時には書をばり〳〵裂いたりする事も御座います、あゝ私は何といふばちあたりて御座いませう！何一つ不足ない境遇に居乍ら、こうも胸とづる日があつては、あゝ私の前途は果して眞暗がりては御座いますまいか!!!悲しう御座います——かなしうございますとも、お友達は殘らず貴女程羨しい方は無いと、いつも〳〵仰有いますけれど……。

△娘一人に七藏あけた
△美人は命を斷つ斧
△憎い〳〵は可愛の裏よ
△西風と夫婦喧嘩は夕方限り
△女房はかへるほど惡くなる
△仲人七うそ

許婚者ある女の感ずる寂しみ

海棠女

私が十三の時てした、別家の伯父が死にまして子がなかつたものてすから、私が相續者として、その年の秋養女に參りました、そして伯母の甥にあたる人を、未來の配遇者と定められました。兄樣……常にかう呼びなれてゐますから……は其時十九中學の五年生てした、其時叔母から「えつちやん貞雄さんは好？」と問はれて、わがまゝて無邪氣に育つた私は「えゝ大好」と即座に答へました「ぢや奧樣になつて？」「奧樣にても何でもなつてよ」こんな事を平氣で答へたものです。實際好だつたんてす、テニスの御對手をして貰つたり、雜記帳の表紙に奇麗な繪を書いて貰ひましたから……其翌年兄樣が、第一高等に入るまて一緒にゐました、いゝ遊び對手が出來たくらゐな氣て、それはわが儘を云つて困らしたものてす。その後四年ばかりして伯母は亡くなりましたので、私は家を人に貸して生家の方

に歸りました、しかし矢張伯父の性を名乘つて兄樣が大學を終ふのを待つて、式を擧げて伯父の後をつぐ都合てあります。

兄樣は暑中休暇の度に歸省りますが、これも生家の方て、ちよい／＼訪ねて來るくらゐ、それとても以前のやうに一緒に菓子など喰ひながら雜談すると云ふ事はありませんし、幾分もの心ついた私は餘り近かぬやうしますから、二人の間は何時とはなしに遠ざかりました。私は兄樣が好てした、しかしそれは眞の兄としてゞ終生を托する人としては餘りにもの足りなく思ひます、兄樣は來年七月文科を出る筈てすが、創作をやると云ふてもなく、高等文官の試驗を受けやうともせず、食ふに差支へぬ財産のあるを幸、此地の中學にても遊半分出て見ようか位の考へらしいので、虛榮心の燃えてゐる私は餘りの意氣地なさに情なう御座いました。

始めから戀てはなかつた二人の間の遠ざかるのは止を得んてせう、私は學校を出た後、語學、生花、茶湯琴、ピアノなど師を招いて專心敎はりました。

それに自分て云ふのは變てすが、敢て美人と云ふ程てはなくとも、また餘り醜いと云ふ程てはありませんので、『△△家の養女』と云ふ事を知りつゝ、何の彼のと申し込む人も少くはありませんので、さア、私の胸はいよいよ燃えました。私はしつかり、〇〇の妻と覺悟はしてゐても、父が「彼女には許婚がありますから」とにべもなく片端から拒絶するのをきくと、涙の出る程、口惜しうも思ひます。殊に先日來、折り返して無理にと懇望されてるのがあります、一は縣出身の海軍中尉、一は縣事務官の弟て外交官試補、之は私の親友の兄にあたりますので私自身もよく知つてゐます、都に名だゝる、某々名家の令孃を與へんと云ふのを固辭して、無理に私をと云ふ勿體ないやうな緣談、後者は兵學校を首席て卒業して功六級の金鵄勳章までいたゞいた方、すぐる日の音學會に某先生の紹介て一寸會ひましたが、丈の高い立派な體格、無遠慮に大聲て笑はれるのが何故とはなしになつかしく、不如歸の武男さんを聯想て、世には此樣方の奧樣になつて逗子あたりに靜に住まはれる方もあるに、私はたかゞ文學士の妻と、この方が今、××市の令孃の競爭點になつてらつしやると云ふ事をきいて云ひ知れぬ淋しさを感じましたが、望むまじと思つた方からのぞまれて、何故かうも私は不運なのかと、悲しさやる方も御座いません。

學校でも卒業際になると、誰の頭にも結婚と云ふ事が深く思はれると見えて、「誰さんは卒業すぐだそうな」「誰さんは未來のドクトル夫人」とそんな話で持ち切つてゐました「あら！いやですわ、そんなこと」打ち消すでもなく恥を含んで嬌艶をなさる皆様を、私はまアどんなに羨しいと思ひましたろう「えつるさんとこのは文科ですつてね、未來の大文豪の夫人！」と口のわるいKさんにからかはれて「うそつ、ずいぶんですわそんな事、おぼへてらつしやい、どうせ私は無能文學士の妻ぐらひが關の山でせうよ」とわれと我胸をさす事を云つて、はては侮辱されたやう感じて人なき所に行つては一人泣いた事もありました。

　小說などよむ度に、許婚の間にてもこんな美しい戀はあるものを、私には何故心から兄様を思ふ事が出來ないんだろうと悲しうも思ひます。兄樣はやさしいそれは勿體ない程やさしうして下さるが、私は兎角他の人を思ひ勝ちだ、淺墓なと笑はれもせうが、事實さうなんてす、しばらくにもせよこんな事を思ふやうな時代があつては、結婚後もとてもおもしろくは行きますまい、何故もの心もつかぬうち許婚などするでせう、私は誓ひます、孫子の末までも許婚などはせぬ事を！

處女心の動搖

磨志緒

先日汽車旅行をした時て御ざいました、第一の乘かへ驛で暫し時間待をした折同じ室に、お若い御夫婦がそれは樂しさうに語りあつてはニッコリ笑つて被居る其口元の可愛い奥樣、みづ／＼した黒髮に赤のテガラかけた美しい丸髷に、お召の御紋と同じ平打の金かんざしをさして、驛の賣子が口早に、物を商ふ樣を見ては時々微かな笑を洩して被居いました、其美しい御姿を見た時、私の心は早くあの樣に丸髷の奥樣姿となつてと、其髷がどんなに羨ましく思はれましたか、同じ樣な年頃――ソッと私は手を上げて見ました、油氣のない束髮頭に白バラが一ッ根元にグッとさしてある計り、あゝ早く／＼とお召物よりも何よりも髷計りに見とれて時間のたつのも忘れて居りました。

　第二の乘かへ驛では、時間待もなく乘り込んだ二等室には、英國婦人が二人と私よりは二ッ三ッ年上らしい日本婦人が一人と、さも面白さうに話し續けて居るのです、私が聞いたつて半分も分りやしませんに、同

じ日本の女でありながら、此人は外國人と話が出來て面白い時には同じ樣に笑ひ、驚いたといふ風をすれば矢張りまあさうですつて、と言つた樣な目付をして語つては、驚き顏で被居る、どんなに樂しからう、女は人の妻となつて、母となつて、そして其了ひには、お祖母樣〳〵と孫に、せがまれて其お守りするのか、あゝそれよりか此婦人のやうに、語學でも修めて各國の人々と交つて共にこうして汽車にも乘り、旅行もし散歩もして淸く美しう一生を獨身て送つたら。さう子もない、孫もない、何處からか一人貰つて母と呼ばせ、私は年とつても新しい時代の人と心を合せて現代の空氣に常に觸れやう、こうして一生を終らう。ともう先の丸髷はどこへやら、いつて了ひました。

其夜火ともし頃歸つて書齋に入りますと机上に、スミレ色の封筒と婦人世界とが……ああ勇樣ね……封筒を頰によせて、胸に抱いて扨封を切ると病は、おひおひ快方にむかう、然し書を繙く事を禁ぜられた身、目的の學校には、入られず、受けた試驗は皆體格の爲に……とは何といふ御氣の毒な事であらう――早く治つて頂戴、晴れの日は刻々と迫つて來ますに私。私は地位や名譽に嫁ぐのでは御ざいませんと、丈より長い卷紙の終に書て今日さしたバラの一片をこめて封じました、御手紙は懷におさめて……。

勇樣から每月送つて頂く婦人世界の幾頁かを無意識に繰つて行きますと、目に止まつたは女子商業學校出の方が某商店員となつての經驗談、今の世女も男と同じ樣に社會に出て、働く。私だつて人間たもの同じ暮すならば此草深い田舍に一生を送るより、今一度御父樣にねがつて、どうにもして御許を得て、さう〳〵今日汽車で見た、語學を修めやうか、商業にしやうか、まあ何にしても規則書がなくてはと早速二通を認めて机上に置きました。

明朝郵便の來るのを待て出さうとする三通の手紙、其一通こそ近き將來に於て夫と呼ぶべき人に送る情計りの集まつた文てすのに、平氣で一所にして置きました。

一日のうちに、こうも心の變る私が、三日の後先の二校から、規則書を送られた時、お裁縫も、向ふへつきやつて、兩方を見くらべて、どちらの學校に入らうか、とにかくお父樣に願つた上と、其日の夕方御飯後おたのみ致しました、父はとう〳〵まけたのでせう「よし其心があるならば行け、結婚の費に要る金を學資に

と言ふならば分つて居る、土地の樣に五十過ぎても、着る樣な衣服は買はぬつもりでも千圓近くの金はいる、それを身に入れるといふのならば、それでよし、然しお前は一生獨身で行くのか萬一病の起つた時誰に親身になつて世話して貰ふ自分がそれ程に決心のある事なら何事も充分考へてから言ひ出した事であらうから、お前に聞かせる事はない、金は送つてやらう」と言ひました、さあ私の心は又亂れて來ました、もし私が學校へいつたとしたならば、今の約束は私が破る事となると思ふと、此間勇樣へ出した手紙の句が胸に表れて何とはなしに濟まぬ樣な懷しい樣な氣がして、急いで書齋に入つて今紫に白のフチをとつたレースの中に赤のリボン入れた寫眞掛の中の主をじつと見て居りますと、まだ中學にお出の頃、お話の定まつた後、長い手紙にそへて下すつたのは之。其時私は色多き中に此の紫と赤と白の三つを選んで編上げて此柱に掛けたもの、此後今になる迄互に變らず日を送つて來たに、まして最早日まで定まつてゐるのに、病は日々に快くなるといふじやないか。あの電報のかゝつた夜、終列車で途中で一晩泊り二日目の晝頃やう〳〵着て、すぐ枕元によつた時もう人を見分るお力もなかつた、しばらくして氷囊を換へやうとする私の手をとつて愛さんでせうつて仰つた時、其手のつめたかつた事なぜこう熱が上るのかと思つて、悲しかつた、兄樣しつかりして頂戴、私先きから來て居りますよ、つて言つた時心の中では、あゝ到底全快の見込はなささう例令式は濟んで居なくとも、私の夫は勇樣である、もしも此儘世をさられたら私は、きつと〳〵夫は持つまいと誓つた。と其當時の事ども思ひ浮べて掛てあつた寫眞をやたらに取て、許して頂戴なぜ〳〵私が勇樣を捨て道でない道をふみませうぞ、獨身でなくては行けぬといふ身ではありませんものを、御自分の病を忘れて迄も、十日に一度は御便り下さる勇樣、あゝ私は此慕はしい君を一寸の間でも忘て居たのでせうかと、たまらなくなつて寫眞を胸にだいたまゝ、又母の室にいつて御父樣はあゝして上京をお許し下さいましたれど、考て見ると私一人の爲に約を破り、女の道を忘れて生涯を獨身で送り、其上我身の上をいつ迄も〳〵お兩親に案じさせます、それよりは矢張り安達家を相續して女の踏むべき道を踏みます、と聲ふるわせながら言つたのでした。

之から後は毎朝夕のお祈に、たゞ勇樣の御平癒の一

日も早かれとそれ計り。しかしどうかすると納豆を賣り牛乳を配達して迄勉強する人があるのに、私は毎日〱何もせず遊び暮してお金をつかつて、おゝ先月も悉皆で九圓餘費つた、之にも少し、たして頂くと立派に何かを修める事が出來ると思ふと一月でいゝから上京をと都戀しくなり、あはれな孤兒の話を聞けば持てゐるお金も着物も皆やつて自分も共に身を犧牲にしてとも思ひ。書齋に入つて雜誌を見れば私は一生此の六疊の一室て諸雜誌に投書する原稿を作つて、新聞に、雜誌に日に五六冊は入つて來る樣にしたいが、今の樣なまづい作では、いや〱其うちに上達もしやといふ氣にもなりますが、年とつた女教師や、同じ年頃の人が獨身主義よ何んて仰やるのを見聞きする度毎に、何かしら、あはれな樣な淋しさうな影よと見て、私はほんたうに幸人よと誇りを思へますれど、心の底には澤山の子が、あちらて泣き、こちらて泣き負つたり手をひいたりしてゐる女と、妾は若き昔より書を夫とし來れる者よと肉付豐かな美しき七十餘りの女史が高座に山なす書籍をながめて被居る樣が見へます。

　地位高くとも名譽あるとも愛なき結婚は淋しきもの悲しきものでせう私は例令勇樣が目的の地におのぼり遊ばざすともあの優しい御心に保護されて一生を樂しく〱送りませう、しかし老いたくはない實際は母と呼ばるゝのも、つらいのですもの、私の心はどうしてこうおち付かないのでせう。

奪はれたる青春時代

伊志子

弱い私の告白を聞いて下さい。

病んで五月、まだ起きも上り得ぬ私はたつた一人の兄に死なれました。私の方が先に床にふして重體でしたので、誰でも私はどうかと案じて居たのに、私は反つて無事てそんなにも思つて居なかつた兄の方が俄に逝きましたのですもの親類の人なども寢耳に水でびつくりしてとんで來ました。私は床に臥て居て人々のざはめく聲や葬式道具を運ぶ音などを耳にしながら、それでもまだ兄さんが逝つたとは思はれませんてした、現在そこに、輕いお蒲團を重ねて兄さんは靜かに、きれの長いひとみをとぢて寢て居ますもの。けれどもああ、目の前に寢て居られるけれども、もう兄さんとや

さしくよんでも、搖ぶつても、兄さんは起きて來ませんきれの長い眼が力なく開くかと何時まで見入つても、睫毛がかたくかぶさつて……。あゝ手をにぎればよみの底から湧き出たやうな冷たさのみが私の身體につたはります、私は、私はもう胸がつまつて……まるで夢を見て居るやうなのです、兄さんは健康なとき、女の子は何にもならぬとよく私を泣かしては、女に生れたが悔しけりや死んでしまへと憎まれ口をきいたくせに自分



勝ちか負けか　信濃　森山房仙

が先へ意氣地なく逝くなつた、あんなに私を叱つた兄さんが死んだのでせうか、ほんとうに死んだのでせうか！あゝ明日はこのつめたい骸に火をつけて燒くのかあまり、慘たらしい、そしてうちのさびしい人數がまた一人減るのであらうか、あゝこのまゝ死骸でもいゝこのまゝにしておいてほしい、まだ魂が身體からはなれきらないやうな氣がするけれどもだん〳〵人が出入りする度に私のはかなきた

のみはやぶれて兄さんは逝くなつたといふことが、今度は燒印をおされたやうに強くつよく私の胸に感ぜられました。兄さんはもうほんとに死んでしまつた甦れません。

葬式の日の朝、他所へ嫁つて居た姉さんが來て、兄さんの經帷布や手巾脚袢、頭陀袋などを戻し針せずに縫ひましたのと、從兄が涙聲で「今度生れて來る時には健康で好い家へ生れて來うよ」といつたのは覺えて居ます。

雨が篠つくやうに横ざまに降つて、風も勢ひ猛く加はつて來る最中、棺は我家を出ました。家を出る時何だかごた／＼して居るのです、父が私に位牌の持ち初をせよといひましたので、私は寢衣に羽織をきたまゝ棺の前に立ちまして、家を出る時から從兄に代つてもらひました。

佛事をすまして姉が歸ります前の夜、荷造りをしながら私にいろ／＼の事をきかして呉れました、あゝもう私は藝術に憧憬るゝ心を殺してしまつて、まづしい場末の町家の女で朽ちはてゝしまへと宣告されたのです、老いた兩親の膝下で華やかなことは見も聞もせず謹んで、嚴かに相續人にならねばならないのです。

あゝ私の身體は縛られてしまつた、いくら脱れやうとしても脱れることの出來ない罠にひつかゝつてしまつた、駄目、駄目、弱い私がいくらもがいたつて、あがいたつて周圍の人は不思議さうに見て居るばかり、私の心とは皆違つた心を持つた人ばかりだ、ちつとも私の思想なんか取り上げてくれない舊時代の人達の中へ新しい私一人投げこまれて一擧一動を環視されるのだもの、あゝ何故、何故兄さんは逝つたのだらう、兄さんまで死んで私を悶えさす氣か、死にたくないのに何故逝くなつた、美しい詩のやうな生活も夢みた、虹のやうなはかない希望にも憧憬れた、今になつては皆美しい夢のあとゝなつてしまつたけれども、夢みた昔日はどれか一つは未來に我をまつ運命と思つたものをあゝもう涙を流しても我には得られぬ自由を奪はれた私はもう荒物屋の娘から妻となり母となつて、葉かげの花のやうに人に認められずに世を去らねばならないのでせうか、私はひろ／＼と翔りゆく小鳥のやうになりたい、先の見える生活は送りたくない、描いた理想が蜃氣樓のやうに消えてもかまはない、も一度自由な身になつて自由な思想を抱いて見たい、あゝ姉さん！姉さん！あなたは妹の浮かぬ顔なのを見て、人は身分

相應な考を持たねば行きつまつたとき失望するといつて、お前も夢のやうな榮華はすてゝおしまい、も少しこれからしつかりしてお父樣の相談相手にもなり、家のことも氣をつけなくちやならない、と誡しめて下さいました、私はようくわかつて居ます。けれども襟白粉を濃くつけて裁縫の材料に親を困らした姉樣の娘時代のやうな、そんなおさない考へは持つて居ませぬ、醜業婦のやうに上部ばかりぬりたて飾りたてゝ、うか〳〵と世を送りたいのなら何もこんなに悶なくてもいゝ、錢で動かされる物質上の滿足を與へてもらうたところて、私の心の寂寥は消え失せやしない、ましてゆくばかりてす。あゝ私はこんなことを思ふのは恐かものてせうが、もつともつと愚物に生れてきたらよかつた、そして女學校へも入らず家庭といふ小天地に平凡な女の鑄型にはまるやうな娘に育てゝもらへばよかつた、強いきびしい制裁の大手に、反抗ふたつてだめと知りながら、發達した智や情が渾身の力をふりおこしてどこまでもどこまでも反抗します、敗れつゝも反抗します、兄の氣息のたえたとき、私の一身の自由はうばはれ、弱い双肩に相續の義務がふりかゝつた、否んだつて譯をいつたつてきまゝとしか聞て吳ない、あゝ誰か私の心を知りぬいて吳れる人がほしい、老いた父上母上に安心をさせ、舊道德に盲從してゆけば私は幸福な娘になれるのてせうか、私を詩人だの將來をまつなどと煽てるやうなことをいつた先生、もつと高等の學校へお入りなさいとすゝめて下さつた親切な先生、麗〳〵しく兄の薄命を悼んてあなたも今は悲しんてばかり居る時てはない、將來御兩親を扶養する義務ある君、御病氣はきつとなほりませう、亡せ給ひし兄君も御身の幸福を祈るため身を犧牲にされたのてせう、とかいて下さつたお手紙あゝこれがほんとのお心か、御自分の地位に對して私の思想に同情して下さらぬのであらうか、もう私を煽てた先生も惜んだ先生も、私を場末の荒物屋の主婦にしてしまふ心なんてせうか、あゝ周圍の人からつきはなされた心の寂しみを私は毎日一日毎にふかく考へては底しれぬ深海に沈てゆくやうてす。私は弱いのてすもの、暗い〳〵家の空氣を呼吸して舊思想に捉はれた強い兩親の壓迫を受けて、知らずしらずのうちにその風に同化されてしまふのてはないてせうか、あゝお寺院のやうなしめつぽい氣の滿ちた家よ！沈默のさびしき人よ！あゝ、木偶だ、呼吸をする人形のやうな一生を送りたくない、渾身に沸きかへる

血潮はあふれながら、まだ白粉の味しらぬ私は、戀も藝術の匂ひにも觸れないで、胸の血の高なることもなく、青春のおもひ出といふものなしに世を終るのでせうか、異性の人に一切つきあふな、誘惑が來るのが恐い、お前は相續人だからなほさら身持ちをかたくしなけれや、といはれても私は異性の人に顔見られても頬がほてりますもの、私の心が浮氣つぽいのでせうか、顔見せず、ものいはず尼さんのやうな生活をこれから妻となるまでつゞけてゆかねばならないのか、あゝ死んでゆく私の若い心！私は家のために生にえにならねばならないのか十七の晩秋から私はもう私の生涯の春はもう家のためにページを閉ぢねばならぬのでせうか私は同じさびしい生涯に入るにしても、私の心を汲みとつて呉れて、可憐さうだといつて下さる先生がほしい、親がほしい、私の思想と融和して呉る友がほしい弱い弱い小鳥を生涯出られぬ籠の中に入れてだきながら、他の鳥が自由に翔りさへづつて居るのを見せて居るやうなものだ、無慈悲ぢやないでせうか精神的にも體質上にも弱い私の、その弱みにつけこんで、破られぬ墻をまばらに結つておいて、中でおとなしくして居ろといふのです、私位の乙女が擅に笑つたり謳つたりして、藝術に憧憬れ、情の行くまゝに歡樂を享けて居るのが墻とすれ〳〵に私の目に入る。同じ暗黑い行末ならどうしてもいゝ、一度、一度あのひろ〳〵した中へ出て、何にも忘れて狂つて見たい！涙の目て止めて下さる母上！お母様あなたはこの弱い床にある子を義理て！弱い子のたつた一つの願望を世間並の義理て斥けやうとなさるのか、死にかけて居る私の、華やかな心まで殺さうとなさるのか、私が可愛いのならお母樣、私の一身の幸福を祈つてください、先生！先生！そんなそつけない手紙を送らないで、私が惡いのなら私の心が首肯くやうさとして下さい、私はもう誰にも同情してもらへないで暗い家に倒れて居るんです、あゝ誰か私を心から笑はして下さればいゝ、もう一日一秒毎に老ひこんでゆく私を……。

△女房をとるのと馬を買ふのには目をねぶつて神にまかせよ
△蹴かねは良い馬、ブツクサいはねは良い女房
△妻のない男は屋根のない家
△世界中に只二人良い女がある、一人は死んだので、一人はまだ見つからぬ
△娘は割物
△夜目遠目かさの内
△思ふ中にも垣をせよ

憐なる女中の身の上話

白菊女



月日の經つてほんとに早いもの、思へば懐かしい父様や、母様や、可愛いい武男さんや、美枝ちやんと別れて只一人叔父様の許にお世話になつたのも、つい此間からと思ふたのに早七月になる。

忘れもしない今年の六月初でした、私達一家は仔細有つて麻布の住居を引拂ひ、靜岡へ移ることとなりました、私も一緒に行く筈てした處が、叔父様と叔母様は大反對て、どうしても御承知になりません、修業盛りてはあるし、來年いつぱい勉强させて、厄年前に屹度立派な所へお世話するから、安心して預けて行けと親切に種々と仰つて下さつたが、母様がどうしても連れて行くと仰る。

實は私も永年住み馴れた花の都に別れて、知らぬ他國へ行くは厭、それかと云つて御兩親や弟達と別れてまて東京へ殘るも辛いし實際迷ふて了た。父様は叔父様御夫婦なら大切な娘を預けても御心配は無いので、種々と母様を説いて、そして御承知なすつて了いました。叔母様は鬼の首でも取つたやうに嬉んで入らつしつたが、母様のお力のお落し様てなかつたわ。

間もなく父様は麻布の家を賣り拂ひ、叔父様に私の衣食費などを預け、そして靜岡へ入らしつた。實際斯うして遠く別れて居ると懐かしさは增すもの

て、時には木枯し吹く夕など、椽の柱に身をもたせて、遠く離れし父母は弟は妹はと、夫れからそれへと想を走らせ、風邪引くのも知らずに夢中て居る時もあるし、折にふれては古き寫眞等取り出して種々な追懐にふけることも有る。

　それでも幸と叔父様叔母様は、私をまるて實子のやうに少しも隔てなしにお世話して下さるので、何一つの不平なしに暮らしてるうちに、富士の根の雪もとけるやうな夏も過ぎ、好きな好きな秋も逝つて了て、早や今年も今月となつて了つた。

　甲斐なき身にも暮れ行く月日が流石に惜しいと此様てと考へて居るうちに、羽織も縫ひ上つたので、火熨斗かけて疊んで仕舞て、庭へ出て見ると、長閑に照らす日影をあびて、青い葉の中から白い花の水仙が咲いてゐる、珍らしいので思ひ切つて鋏を入れ、早咲きの梅をあしらひ、床の間へ活けて、殘つたのを、自分の机の上に投挿にさしておく。

　久しく御無沙汰したのてお兩親の御機嫌伺ひの手紙を認め、別に母様に來春には是非武男と美枝子連れて入らつしやるやう、細々と書いて居ると、叔母様がお呼びなさるので、何の用かと急いて茶の間へ行くと、にこ〳〵笑ひながら、お待兼なものが出來てよと仰る、何か知らんと不思議に思つて居ると、さあこれよと嬉しい待ちに待つた春着、擴げて見ると菫色縮緬二枚襲、模様は奇抜な若竹、帶は唐繻織、模様は亂れ菊、地色は白茶金通し色糸入り。

　餘り氣に入つたので見惚れて了た、叔母様はどうしてお氣に召してと仰るので、えゝ氣に入つてよと力をこめて云つた、叔母様も私の嬉ぶ顔を見て大そうられしそうだ。

　二三日中に美枝子ちやんのも、仕立上つて來るさうな、早く見たいわ。

　午後から三越へ買物に行く、銘仙やらお召やら帶など種々買つて戴く、歸りに白牡丹へ寄つて四時頃歸る。夕飯後叔父様と叔母様は車で赤坂の梅澤さんへお出てになる、歸りは遲くなるとの事、何の御用か私には知れない、居間へ這入つて母様のお羽織にと思つて晝間買つて來た無地お召出して裁つ、私が見たてて私が縫つてあげるのですもの、どんなにお嬉びなさるてあろう。

　縫はふとするとまあ生憎な、丁度似合つた絲がない誰かに買ひにやろうかと思つたが、何も急ぎてはなし

寒いに夜まで使にやつては愍然と思つて、明日縫ふてとゝして大好な女子文壇出す、おゝ賑かだこと、どれから讀ふと氣がうろ／＼する、ともかく初めから讀むと餘りの面白さに息をもつかずに讀み終つた。

私は數多い雜誌の中で此本が一番好きよ、今度は机に向つて須磨子さんへの御消息書く、暫くしてから何の氣なしに窓を見ると障子一杯明るくなつてゐる、不思議に思つて障子を明けて見ると、澄み渡つた大空に磨ぎ上げたやうな月、まあ美い月と我を忘れて暫時は見惚れて了つた。折柄さつと身を切るやうな寒風に我知らず、あゝ寒と身ぶるひして、ぴたりと障子を締めた、不圖良い事を思ひついて、其處にあつた水色の絹半帕で電燈の下から上をすつかり、包んで了うと、華やかな光は忽ちぼんやりとして蒼白く、丁度月の光のやう、これで好い、これで好いと、ひとり笑壺に入つて橋姫と初音の曲をさらつて見た。

仕舞て時計を見ると九時前、お二方のお歸りに餘程間がある、所在無いので茶の間へ行かうと、女中部屋の前を通ると誰か居る、おや今夜は皆樣がお留守なので、玄關の次の六疊へと云ひ付けたにと、障子明けて見ると火鉢の側に房が居る、何うやら泣いてたらしい樣子、喧嘩でも仕たのかと思つて聞くと「いゝえ、左樣ては御座いません、餘り靜かなので、つい種々な事考へまして」と詫びるやうに俯向いて其膝に又もホロリ一雫。

どうも其樣子が氣に掛つて親しく種々と身の上を尋ねて見た、感情の强い房には、私の眞心こめた言葉が如何に强く胸に響いたのであらう、暫時靜止私の顏見て居たが、やがて涙と共に語つたのは悲慘なる經歷談。

房の家は近在の貧しい農家であつた、父親は日傭ひ母親は賃仕事して、貧しいなかでも房を掌の中の玉と愛して何卒この兒だけは立派に育て上げやうと、父母心を合せて稼いで居た、親子三人何一つの不平もなしに靜かに安らかに幸福な月日を送つて居たが、吁その幸福も永くは續かなかつた。

房が五つの秋であつた、母親は風邪の心地で十日程臥つたが、秋雨のぴしよ／＼と降る陰氣な日の夕方、哀れ返らぬ黄泉へと旅立つて了つた。

父親は落膽の餘り、暫は仕事も手につかなかつたが、可愛い我子の愛にひかされて、やがて又元の勤勉家となつたが、房は如何にしても懐かしい母を忘れない、過ぎし日暖い母の懐に眠むつた樂しさを、子供心に

も思ひ出しては朝に晩に母親を戀ひ慕つた。

日を經るに隨つて房の母を慕ふ念は尚一層募つた以前に變る淋しい月日を送つて居たが、其中に半年一年と日月は經つて、やがて七歳となつた、房は小學校へ通ふ身となつた。

一年も二年も優等であつたので、父親の喜びは非常であつたが、房が三年生となつた其初夏、又も不幸に襲はれた、垣の卯の花雪と亂れて、降る雨もわびしい頃、杖とも柱とも頼む父親は、重い病にかゝつて了つた、常から貧しい身の忽ち生活難てふ大敵に襲はれた。幸ひ隣村に只一人の叔母があつたが、それとても貧しい身、房一家を引取ることはおろか、三度の食すら與へられぬ身の上、僅かに親類とては無いので、ともかく三度の食だけは父の勤めた主人の情で與へられたが天性孝心深い房は、せめて薬の一服もと殊勝にも決心して看病のかたわら、僅か九つの幼い身を、雨の日も風の日も田螺とつたり、人の使走り、其間には鎮守樣へ跣參り、それも之も皆一心に父の病を癒そう爲めであつたが、吁運命の神は何處まで不幸なものを泣かせるのであろう。

雁がないて萩がこぼれて秋もやう／＼深くなつた十月の末、哀れ父親も亦黄泉の客となつて了つた、人の命の果敢なさ、房は冷い父に取り縋つて涙のかれる迄も泣いた。

人々の情でからくも野邊の送りはすませたが、父母に逝かれて孤獨となつた哀れな房は、一時は叔母に引取られたが、翌年の二月、始めて守子奉公する身となつた、其後彼方に三年、此方に五年と、永い間の奉公に彼女の心は荒んで來た。

房が涙の裡に月日は經つて、やがて人の目をひく花盛りとなつたが、永いこと浮世の荒波にもまれて／＼もみぬかれた房には、最早乙女らしい情の泉は涸れて居た。

噫、房は華やかなるべきその妙齡を、青春の甘い戀の香も知らず、たゞ／＼愁と涙とを友として過ぎたが二十一の霜月であつた、世話する人あつて心進まぬ房を無理にすゝめて隣村の農家に縁付けた、十二年ぶりに再び溫き家庭の人となつて、嬉んだも束の間、二年目の昨年、口惜しい事情で、さんざ揉めた擧句、遂に破鏡の歎きを見た、叔母の許に立ち歸つた房は、暫憂愁の淵に沈んて居たが、ついに人に顔見られるも辛いとばかり追懐／＼い故鄕をあとに、東京へ出て來た、

そして今年の春宅の仲働きとなつたのです。

此頃ては人の心の頼み難きをしみ／＼さとつて、結婚によつて樂を得やうとした心を、すつかり捨てて了つた其後も二三度縁談はあつたが、決心した房は美事に斷つて了たそうな。

そしてただ此の上の望みには、二十年なり二十五年なり、東京で辛抱して故郷へ歸つて、小やかながら我家を再興するより外には何も望みはないと云ふ。



朝の人　青楓　立花とも子

然し房だつて若い女ですもの、冬の永夜など、たよりない身の行末を思つては、人知れず零す涙に袖をぬらすことも有るであらうと、他の身の上に哀れさを痛切に感じて、同情の涙は止度なしに溢れた。

堰き來る涙をこらへ〳〵てやつと以上を物語つた房は、堪へられなくなつたのであらう。

孃樣御免遊ばせと云ふや否や、轉ぶやうに立つて次の間へ、闇の中から歔欷く音が洩れた。

吁此貧しい不幸な人に、强ひて其儚い運命を思ひ出させたかと、思ふと何となく心が責めた。

居間へ歸ると間もなくお二方のお歸り、種々お土産戴いたが平常程嬉れしく思はなかつた。

叔母樣は泣き腫した私の顏を靜止御覽なすつて被入つたので、屹度明日は種々と聞かれるであらう、其時はみんな話そう、すれば情ある叔母樣のことですもの屹度〳〵房の身の上を何かと御心配なすつて下さるであらう、私も出來るだけ親切に彼女を慰めてやりませうと、心きめて、最早十二時も鳴つて了つた、餘り遲くまで起きてゝはと思ふて寢卷着かへたが、房はどうしたらう、未泣いてはせぬかと案じられたので、そつと隔ての襖音せぬ樣に明けて、忍び足に廊下通つて、女中部屋の前に立つて、耳をすますと微に優しいいびき。

やつと安心して臥床に入つた。

折から凄涼な鐘の音が聞えた、上野の丘からであらう、冴え渡つた夜氣の底を靜かに遠く沈痛な尾を曳いて……（貫）

繋がれた女

紅芙蓉



紅葉が散る、銀杏が飛ぶ、萩が靡く。襟に寒い風につれてからびた落葉の數々が窓から散り込む。あゝ衰殘の影と、私は見るに堪へぬ思がして、足擦しながらい、いら〳〵する胸を抑へました。秋は充實の時ですけれ

ど、その裏にはもう此衰への影がひそんでゐるのです。社會の花といふ女、其花の中でも色まだ若い少女の身て、如何して此ものゝ末期の様を心靜に見てゐられませう、私は「見よ見よ汝の未來」と或る恐しい示顯に逢ふやうな氣がして、最後の裁判の庭に立つ如く、云ひあらはせぬ戰慄を覺えました。あゝ此頰に燃える紅の色も、斯くして褪せる女の身か、此丈なす綠の黑髮も、風に弄られる芒と亂れてうら枯れるのか、そしてその時……もう考へるも厭しい行末です。今日まで、此十八まで、誰が一度心の誇を見て下されましたらう、五百に近い校友の中でも、此目に、此口に、此髮に、並んで並べる勇氣を持つた人は幾人ありましたか、流行を追うた靴の跡の過ぎ行く所には、男といふ男の心に何等かの印象を與へて、其物怖するやうな横目を私は皆嘲の笑で迎へたのです。嚴格の人格化とも見える男教師のペンすら、此瞳の流を浴びては何時も滿點の印を書きました。あゝ其天の愛兒と生れ得た身の誇が矢張同じ衰殘の悲運に逢はねばならぬのでせうか！

けれども、思へば私の身は、其衰殘を待つまでもなく、今とて只徒に誇る花の色ではありますまいか？獨自分の心の誇に止つて、公然に示されぬ美てはありますまいか？さう！私の身も心も、もう囚れてゐるのです。繫がれてゐるのです。其根は個人の手に握られて、思ふがまゝに弄ばれる花、自ら天下の寶のやうに思つてゐた此髮も目も、手も足も、只一人の愛玩の料に過ぎぬ美です。

＊　＊　＊

忠雄さんと私との結髮の關係を聞かせられたのは早い事ですけれど、其初は何の感も起りませんでした。けれども何時の時代からか、――女といふ自然の約束につれて――私は微ながら或嬉しさを胸に覺えたのです。其性の働、それがその儘穩に進んだなら今日の苦痛は味はずに過ぎたでせうが、十六といふ眞の女の幕は、其情の發達より早く明けました。そして其時、自分の美が自分に解された其時から、切實に感ずる心の誇と共に、曾て胸に抱いた「嬉しさ」の外に、我を惜む或思が湧いたのです。此思につけ加へて、不圖「我」といふものに思ひ到つた時の私の心、潛んでゐた焰は猛然と燃え上つて、あゝ過去の自分がどんなに物足りなかつたでせう。自ら憐んで後悔して、さて此後の「我」を考へると、限りなく悲しうございました。私は今僞なく告白致します。自ら知つた己の美をかへり見ると

生命といふものよりも其美がどんなに惜しうございましたか、此儘まだ世に誇り得る「我」を持つた間に、忽然此身が消えたらばとさへ幾度も思つた位です。

心の思が其姿の上に顯然あらはれるものならばですけれど、忠雄さんに私の此頃の胸が如何して了解りませう。一日一日と訪問は繁くなつて、言葉も仕打も其度に打ちとけて行く。目の色は何時も愛に燃えて、心の動搖が事々にほのみえる。それを見ると私とても、曾つて覺えた「嬉しさ」の感じが胸に漂うて、其愛のささやきが此胸にも感じますけれど、不圖自我の念が頭をもたげると、今迄の暖さが虹のやうに消えて行つて其打ちとけた言葉も仕打も、只「我がもの」といふ、猛獸が得物に向ふ心の表彰のやうに見えるのです。燃る目、動く心、何かは男が女に對する咀の叫でないでせう？園に作られた花は枝も葉も主の心の儘に摘まれてまげられて、花其もの丶自然の姿は遂に發揮するによしがない。囚はれた女の身も、「我」といふものを天賦のまゝに發揮させて、其自由を永久に保ち、其美を心行くまで人に誇られないのです。自の誇を胸に抱いてゐても、顧て繫がれた綱を思つては、其美にも戰ぎの影がさしますまいか。世の中には繫れた奴隷の繩を斷つために、幾多の志士の血を流した例があると聞きますが、長い一生を男の手に縛られて、「我」といふものを沒しなければならぬ女の境遇に同情して下さる涙はないのでせうか！然しそれも自然の約束ならば致方がありませぬけれど、僅に許されてゐる少女の春の時代から、早囚はれの影につきまとはれてゐる私の運命は憐れむべきものではありますまいか。それも「我」を見出す機會を與へられずに其運命に從ふ身ならば、只盲者が花の色を知らで過ぎる憐れさの同情丈に止まりませうけれど、新しい時代の新しい福音に驚かされて、幾千でも内省の目の開いた女が、其儘悲しい運命の導に盲從されませうか。さう思つては自分で勇氣を振起して、戰ぐ手で反抗の刃も握つて見ました。或時は男の手に縋つて自由を哀願しても見ました。或時は兩親に作られた運命の不平もいふて見ました。けれども、あゝ、男は只時代思潮に醉うた言葉として顧みません。兩親は古い習慣を重壓として二度と聞くべく耳を假しません。此間に居て、まだ一般から開放されぬ女が、如何志をのべられませう。其上私も半は古い敎の世の中に生立つた身です。愛の前には心弱い女です。苦しい胸の悶には泣きつゝも、もう此上抗ふべき勇氣は

ありません。來るべき秋には、結婚といふ少女の終さへ近付きつゝあるのですが、あゝ皆様、私は此儘此尊い自由と清い美とを捨てゝ、人生の秋に入らねばならぬのでせうか。

秋は充實の時です、然してもう衰殘の影の潜んでゐる時です。其次期に來るべきものは只悲しい寂寞の影!あゝ紅葉は散り、銀杏は飛び、萩は靡く。私も繋がれた少女の春を此儘すてゝ、何の榮もない、然し人は待ち詫びてゐる寂しい充實の秋を望んで進まねばならぬのでせうか!世の人は、繋がれた女の此僞なき告白を如何聞いて下さるでせう。(貢)



家事實習會

山口治子

とん／＼と爼板の音が聞えたので、皆様もう被入つたのかしら、と急いで割烹室へ行くと、出會頭に主婦役の富岡さんが、あらお早う今日は如何もご苦勞様でございます何分お願ひ申ます、と特別改まつた御挨拶に、いゝえどういたしまして、と應へ乍ら這入る。

案の如く皆様は水を汲んだり、火を起したりして被居る、私は用意の前掛をかけて黒板に献立表を掲示し

二汁五菜

本膳

鱠　ほつき　みかん　猩々のり　推茸　溪苔

汁　燒豆腐賽の目　鱈のしんじよ　ふき

坪　たら　百合　まるしめじ　あんかけ

飯

香物　胡瓜鐵砲漬　奈良漬うり

二の膳

比目魚黄味むし

比目魚

汁｛海苔　もやし防風

中皿目ぬき甘煮

烏賊酢味噌

たゝき牛蒡

平｛煮こみ椎茸　花くわゐ

猪口—さかづき

燒物—かき附燒

臺引｛かすてら玉子　鎌倉えび

吸物｛鳥肉　つきこん　せり

さて相談の上皆樣がそれ〳〵役割を決定て私は平と猪口とを拵へる役目になつた。先づ鍋に目笊を敷いて其中に玉子を入れて茹てる、其間に椎茸の石附を取つて水洗ひし小鍋に醤油と砂糖と味淋とを混ぜ入れて椎茸を煮しめる、スル〳〵と慈姑の皮を剝いて洗つて笊にあげ、あさづきも上皮を去つて水で洗ひおく、丁度玉子が火箸で鋏まれるやうになつてからおろして水にうつし、その後に慈姑を茹でる、烏賊は甲をぬき取り足をもぎて體の皮を剝き洗ひ竪四つ位に切り小口切にする、玉子の皮を剝き黄味のみを裏漉にかけ鍋に入れて多量の砂糖を加へ、先の椎茸を下して後にかけてかきまわす、椎茸を大皿に列べて、罌粟をふりかくる、此度はあさづきを茹でなければならない、あさづきは煮え立ちたらば葢を取りて煮る、葢をして煮ると青い葉が赤くなるからである、二三度沸騰したから下して水にうつし、烏賊を入れて半茹にして笊に上げて水氣を去る、切身にしたる比目魚を洗ひ蒸器にて鳥渡むし取出して前に作り置きたる黄味を魚の上にのせて又蒸す、前に茹ておきたる慈姑を別の小鍋に入れ少量の醤油と砂糖と味淋とを交ぜて絶えず掻き廻し乍ら煮しめる。味噌を擂つてる内にくわゐのつゆが無くなつて居たのを米田さんに教へられた、もう少してしくじる所だつたのを教へて呉れて實際に嬉しい、それから味噌を裏漉にして酢でドロ〳〵にゆるめ、砂糖をチットガへて又擂り、あさづきを絞つて長さ一寸位に切り又ゆるく絞り先の烏賊と共に和へる。慈姑を糸切り玉子のやうにして形よく丁寧に切る、此等を盛るには平を奇麗に拭き取り黄味蒸しを向ふに椎茸を二つ斜に重ねて手前の左に、右には花慈姑を二つ盛る、次に猪口をも奇麗に拭ひて酢味噌和へを手際よく盛る、あら大變な事になつて仕舞つた——といふので什麽したの？とみんなが急いで行つて見るとまあ菊野さん百合を皆煮解かして了つた、詮方がないから八百屋に電話をかけて持つて來て貰ふ、おそくなるといふ疑念があるので一時は大層心配した、一生懸命にしたので私の分は

澄んだけれど、皆樣は未だ誰も出來てゐないが、それには介意ずに座禮作法室なるお座敷に行つて見ると、裝飾係の方は裝飾品をお座敷に取亂して掛物をこつちにかけたり、そつちに掛けたり、本を縱に列べたり、橫に列べたり、床置をいじつたりして鳥渡きまりがつきさうもない、すると係の加藤さんが、あつちに行つて頂戴、あなたはこゝに來る人ではありませんなんて云ふから、勝氣の私も、見たつていゝじやありませんか、減りはしまいしと怒つた振してやつたら、あら怒つたの、ご免なさい今のは冗談よ。

次のお座敷に來て見ると、お給仕役の方が四五人て、頻りに稽古していらつしやる、富岡さんは邪魔にならぬ方にさけて、黑塗、金卷繪の筒に葉蘭を生花て被居しやる、私は冗談半分に、主婦さん私のは出來ましたからご覽下さいつて云つたら、まあ厭な主婦さんなんて、だつて今日だけは特別ですからいゝてしよう、ホヽヽじやちよつと見ましようか、あなたそれ生けてからてよくつてよ壞れると不可いから、それなら何卒後にして下さい、私は割烹室に下りてご飯を焚きに取かゝつた、實習會の時はいつも私がご飯を焚く役目、いつぞやのクラス會にお客樣にごもく鮨を御馳走するやうになつた時、私がご飯を焚いたら大層鹽梅がよいといはれてから、皆樣が願ふのでそれから私が焚くやうになつて來た。皆樣はお米幾升に水を幾升などと勘定するけれ共、私は手加減て計り、それでもいつも上等に出來るから結構、菊野さんが膾の盛りやうが解らないつて困つていらつしやるから敎へて上る、ほつきを向ふの左にその右には滾苔をてまへの左に椎茸右にみかん眞中に猩々のりこれて什麽でしようか、宜しいてしよう、みかんは脊に庖丁目を入れて開いた方がよいやうですね、さうね配合がよくつて甚麽も有難う。

さあ、これで何もかも出來上つたのでいざ排列。私等は會席料理の膳部はこれ迄いくらも拵へた事があるけれど、本膳は今日が始めてゞあるから、ようく不明ないので大騷をやつて居ると、ヒヨツコリ割烹の敎師が來しつて、まあ補習科にもなつて本膳の排列も知らないなんて驚いて仕舞いました、もし私が來なかつたら能きなかつたかも知れませんねえと微笑つて被在るんだもの――これは少々恥いつた。滑稽な佐野さんが後で手を合掌して居る、可笑しいけれ共笑つてはおられないし……。軈てお晝の鈴が鳴ると同時にガヤガヤズト〳〵と大奔走してゐたのが大水の引いたやう。

生徒が教室へ這入る音、講堂のピアノの音や裁縫室で箱道具をしまふ音などが急に耳近く聞えてくる。

すると間もなく靴の音がしたので、そら校長先生が被入つたよと注意されると此度は蟻程の音もしない、續いてお客分の先生が段々お出になる、と折からお座敷のオルゴル仕掛の時計が君が代を歌ひ出した。

これは氣がきいたね、校長先生のお聲、あの無邪氣な小兒の如な笑顏が目のあたり視えて來る、ツフ、ヽといつも底太い聲を出すのが岩谷先生、お給仕の人々は氣が氣でないやうにして早く〳〵と催促しながら運ぶ、四年の實習會の時、お吸物にお汁を入れないで出して、御批評にまゐされたそうですから、皆さん間違はないて頂戴と富岡さんに云はれて、今更のやうに一々蓋を取つてみる、何だか可笑しい。ご飯をお鉢にうつし、お汁をあたゝめて置いて、あまり散ばつてるから少し片附初める音がすると不可ないから後でなさいよつて仰有るけれ共、取散した處を見るとかまはないでは居られない性分だから詮方がないわ、いつぞやの女子文壇にもあつたし、又ご批評の時〳〵も御注意があつた通り、箸とらぬ前の御馳走は臺所の平和をいふのであるから出來得る限り靜肅にしなければならない、何だか恐しい物にてもさはるやうにして足音に迄氣が引ける。

目ぬきた比目魚や鱈等の餘計だつたのを集めて鍋に入れて甘煮にする、これは私等のお晝のお菜、ホヽヽ所謂廢物利用よ。さうこうしてる間に御酒もすみ、ご飯もすんで、石山さんはお茶の用意をして居ると事業はじめの鈴が鳴りだした。

お客樣がお歸りになつてから、お座敷のお裝飾を見てこようと思つて、障子を開けると、プーンとお香のにほひが鼻をうつた。上段のお床の間には鳥度見た計りても涼しいやうな二幅對の山水のお掛物、水晶の玉に鼠色の房がついて、その前には主婦さんの生けた花が、何だか知らない立派な花臺の上に居を占めてる、左には孔雀の床置、右にはお香をたく道具、烟がモーッと立登つてゐる。お隣の違ひだなに洋裝の本が十册許り、金文字のあと鮮に、オルゴル仕掛の金の置時計、下には石菖の盆栽、側の黑塗に金卷繪の大きな硯箱には色紙や短冊迄も添へてある。下段の方のお床に尾の上の松のお掛物いにしだと金盞花の二重生、流石は伊藤さんのお手際だ、これを上段のにしたら宜かろうといふ人が二三人あつたが、二重生は本式でないと

やら、私は何だか知らない、だるまの床置が少時滑稽に出きてる、片隅に巻いた掛物が三幅重ねてある。しきりの柱には魚形の掛筒に山茶花が二三輪笑つたのが向ひ合の掛鏡にうつゝていとゞ装飾の美を増して居る。南むきの椽端の朱塗の鳥籠に金雀が二羽ゆるやかなる太陽の光を受けて樂しさうに飛び廻つてるのがあつて、其の右の大きな鉢にはしたゝるやうな綠の葉につゝまれたホワイトローズが今を盛りと咲き亂て庭を見ると奇麗に箒目がついて、何といふ心地がいゝだらう――。

あゝこれて最終の實習會もをはりをつげた。斯のやうにして一級の者が心を合せて樂しい會を開く事がもう出來ないのか、と思ふと何となく寂しい感がして甚麽しても此處を去りたくない、けれ共おひ／＼に進み往く時刻は終にこの殘り惜しい會をも引率ていくのてあらう。（賞）

釋迦にも經のよみちがひ
男の眼には糸を引け女の眼には鈴を張れ
戀に上下の隔てなし
三十九ぢやもの花ぢやもの
女房百日馬二十日



伊豆の溫泉

平塚白百合

指折るともう一昨年、東京は一たいに大水のため淺草邊は船をこぎまわつたといふ時です。暫時私は伊豆の溫泉に參つてゐました。矢張當地も毎日雨が降りつゞいて、やつと窓の向ふの峯が見えて來たと思ふと、直にまた雨が白く峯をかくしてしまつて大降になる。こう降込められると男は碁や將棊にこりきつて、女は小說に讀み耽る。こんな時は食物店は大繁盛、部屋毎をまはつてくる菓子屋とか果物屋は忽ち賣れてあとからお催促が出る。お湯にはひまつぶしに六七度もは入る。たつた來てから十日許にしかならないのにもうあき倦きしてしまつた。

處が一日、やつと鈍い日足がしめ／＼した部屋の中に差し込んで向ふの山の靑い草を色どつた時は皆やつと蘇つたやう、ぬかる路をこねかへして堤の崩れや狩野川のました水量なんか見まはつた。

橋はもう水に杭をあらはれて通行を止められてゐる。その内新聞も手紙もつく。小山山北間汽車不通、の大活字は誰の頭にもひゞいたと見えて一しきりお湯にゆくとその話でもちきり。中には長くゐてもう歸ろうなんどゝ云つてゐた處へこんな騒が起つたので、保養所が家が案ぜられて氣がきでない人もゐる。

私の隣室にゐた根岸の方なんか水に潰つたと書いてあるので、ご隠居樣は軸箱や茶器がといつもこぼしてゐられた。

程なく小山山北間膝栗毛ならば通られるといふ事になつたので早速かへつてしまつた。その中にあつちでもこつちでも毎日歸つてゆく。

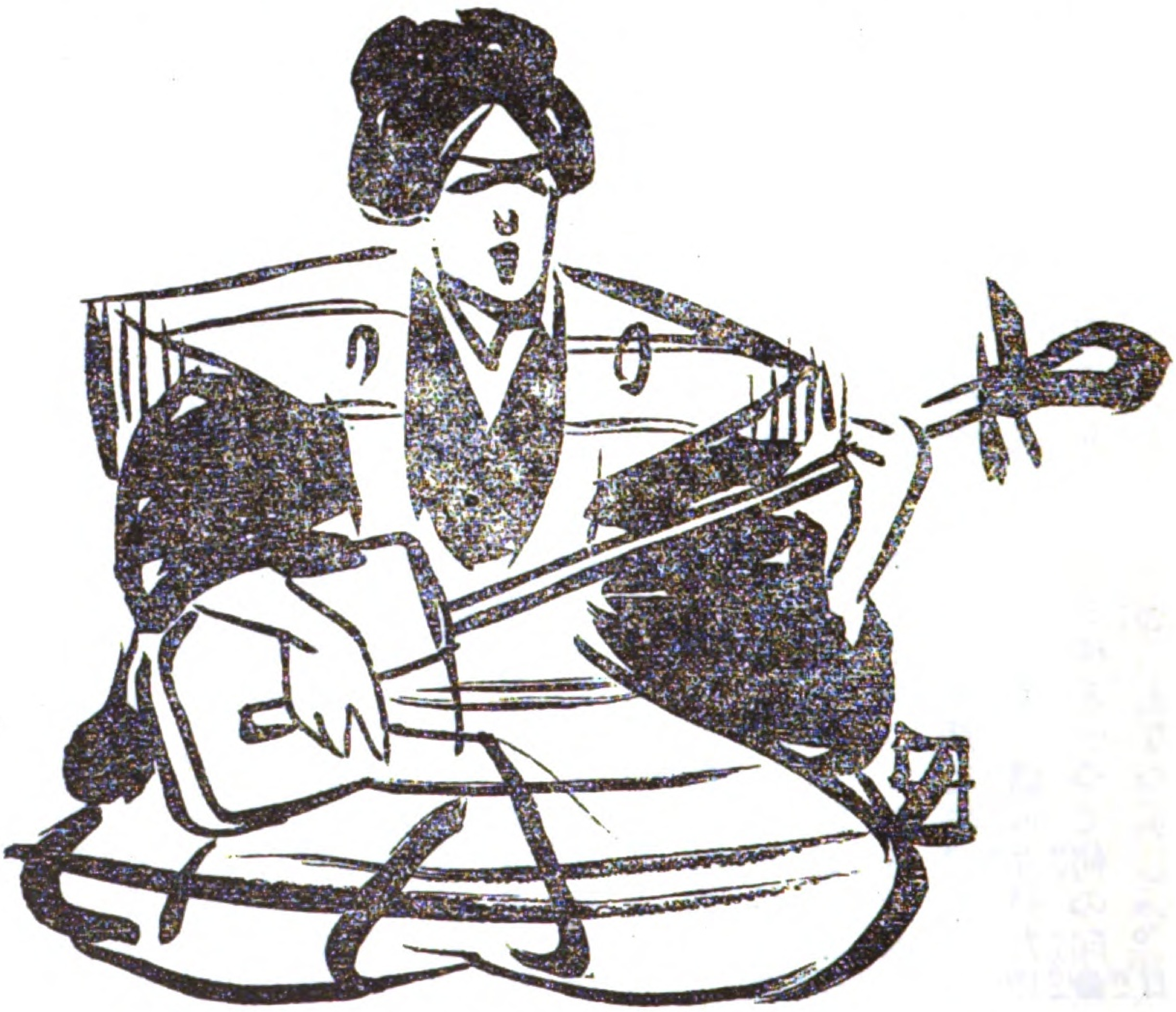
夕方散歩に出てかへつてくると、何處の旅館の部屋でも火の付いてゐるのは極少ない。お湯に入つて見ても知つた顔はだんへつてしまつた。まああの人丈まだゐると思つてゐると、又雨が近くなつたやうでございますから今のうちに歸りませうと存じまして、はあ此の上降り込められましてはと存じますの、明朝。なんて挨拶する。

私もつく／＼いやになつてしまつた。まるでをどをどして何だか温泉場なんて伸びりした氣はない。それに狭い所なんて見る所はなし。そのうちにまた一日雨が降つた。翌日は殆殘されてゐた人達がかへつてしまつた。

窓によつて見てゐると、三臺並んだ乘合馬車の中に行李や何か積こんで、またでは東京でなんて挨拶して乘込んでしまふと、旅館の亭主や女中番頭がお世辭を並べながら頭を下げる。やせがれた馬は細い足を張つてがた／＼ゆれる馬車を引出す。だーと見送つてゐるとだん／＼小さくなつて稲田の青い穂のかげにらつぱの淋しい音を殘して消えてしまつた。そのプ、プ、プ、プーとふきのこされた音をきいてゐると、一人離れ小島にでも取のこされたやう、わけもなく涙ぐんでしまつた。こんな事がつゞいた三日目でした、母樣もとう／＼歸ろうかと云ひ出して下すつたので、私はいそいそと行李の中につめる物を出して見た。一つの方には弟や妹への土産、最二人は父樣に連れられて房州の海水浴に行つてゐる。だん／＼出したものをつめ込んでゐると、青い美しい山のやうな形した石の眞中に、眞白く丁度石全體を山と見るなら瀧でも落ちてゐるやうな線のは入つた石が出て來ました。

私はこれを見るとつとこれを採つた處を思つて見ま

した。
この時は兄樣も私と二人切りて路もない山をさくさくわけて、時々はひ出る蛇に肝をひやしながらだんだん登つたのでございます。
一たいあの邊は小山が幾つとなく重つて極なだらかなせいか頂上に馬が二三頭青草の中にはなされて、靜かに草を喰んでゐました。
私は秋草を手折つてはだん／＼まあ此の邊では一番高い山に登つたのでした。丁度十一時頃でもございましたでしやう。久しく見なかつた富士山は紫に向ふの山と山との間からクッキリ美しい姿を浮ばせて、數多の山を脚下にしてそびえて居りました。何となく暫らく逢はなかつた戀人にでも逢つたやう何樣になつかしかつたでしやう。後の方には天城が山の襞を美しく見せて、右手にはあの幾多のトンネルをふまへた箱根が浮雲に頭をかくしてしづまつてゐます。見てゐるうちに雲はいろ／＼に變化して富士は中央を雲が横切つて紫は一しほこくそんで居りました。下の方の山には草刈る人がチラ／＼して馬も見えます。
兄樣は口笛をふきながらステッキをふつて寮歌をうたつてゐらつしやいました。
前の山の松の間には私のゐる旅館が僅か手拭の



肉筆　北海道　大杉なほ子

掛つてゐる襷を見せてゐます。
もう下りやうかねーとおつしやるのでまた手を引いて頂きながら、時々草すべりしたりして谷川の邊に出ました。
向ふの山裾では若い娘が草刈りうたを唄ひながら男と一共に鎌を動かしてゐます。それに日がうつつてはキラリと光るので何とも云へない程心地ようございました。
兄樣は暑いなーなんておつしやりながらとう〳〵谷川にとび込んでしまいました。
私も草履をぬいて骨に透るやうな水に足をひたしながら深くはいつて見ました。
奇麗にすんだ水は深くは入つても足ににじんだ赤い鼻緒の色までですけて、兩側から水をしたつて萩が、重くたれた枝の影を水に落してゐる。
山と山とせまつた間から生れてくる水は、私の足元で僅かに大うねりをつけて、直下の方で岩にせまつて美しく白玉をからませながらとび下つてゐる。
二本線の制帽ぬぎ捨てた五分がりの兄樣の頭は、此の水が美しくあたつて、岩床の下つた通りなぞへによりかゝつた骨組のよい身體には聲あげて水が走つてゐる。私は上の方へ岸にそつて歩いてゐました。よほど力をいれても思ふやうには歩けず、砂のやはらかな川床には魚の影もありません。單衣の裾をシックリ上げて歩いてゐますと、何か眞白なマーブルのやうな石が見えますので、左の手で裾を押さへながら右手でさぐりますと、美しい此の石でした。その時はもう兄樣も草花の中に脱ぎ捨てた着物を召して、何だ露さん、て肩ごしに手にとつて、フムこれやめづらしい、いゝ紀念物が出來た、僕にくれないかねー、その替り露さんのほしがつてるボアー買つてやるぜ。云はれて別に私にはほしいとも思はないのでその場で兄樣に上げてしまつた。それなんです。
もう何もないかなー、つめこんでゐらしつた兄樣は私の手の石を見ると、露さんあの谷川の邊はよかつたなー、とおつしやつて石をご自分の手のひらにのせて見てゐらつしやる。處へお湯から母樣が上つてゐらしつて、まだなの、とおつしやるので大いそぎに詰め込んで私もお湯へ立つた。
これといつて何の印象もない所だけれど今日切りだと思ふとなつかしい。私はしみ〳〵とお湯の香をかいで長々と赤くなるまでつかつた。

さて明日はあの昔から聞えた箱根の難所をこの弱い足に草鞋ふみかためて、越えるのかと思ふと、危ぶまれもするもの丶好奇心が手傳つて明日といふ日が待ち遠しい。まああすはお天氣でゐてくれ丶ばなんてつぶやきながらゆつたりつかつて、昔越えた人の事なんか考へて見た。(貫)



桃太郎の感化

玉島せき子

私の、幼き記憶を喚び起すに、日本一なる語は頗る大なる印象を與へて居る、日本一の貞女、日本一の金持、日本一の學者、日本一の大將、日本一の孝行者等、非凡傑出せる事柄に冠するに、皆日本一なる語を以てして、其の偉大を表現したものである、語は簡單であるが、幼き頭に及ぼしたる刺激は深く強きものである、日本の國民は、此の一語に依つて大に皷舞せられ、奮起させられたに相違無い、しかして此の日本一なる語は、實に桃太郎のお伽噺によつて傳へられたのである、勿論日本一なる語は、他の方面に於て既に〱現はれて居つたてあろうが、切實に吾人の頭腦にしみ込みたるは、夜伽の噺に聞た、彼れ快男子桃太郎の賜てある。

或る時こんな事があつた。お母ちやんご飯と、種郎が走つて來たが、どうしたはづみか疊目に足をとられてあはや棒倒しとなつて、前額をした丶か机の角て打つた、幸傷は負はなかつたが、寳永山が吹き出した、痛さは痛し、いたはつてくれると信ずる親が居る、大聲あげて泣き出そうとした、こ丶が育兒の呼吸だと合點して、泣いたら弱虫ぢや、種郎は強いから泣くのでない、泣くと桃太郎さんに負けますよ、日本一の桃太郎さんよりも種郎は強いいの、ちやいしておきな、ほらなほつた、とすかすと、桃太郎さんに勵まされて、遂に彼は泣かずに喰ひしばつて。

又こんな事もあつた、隣家のおば樣が、お寺詣りの土産の饅頭二つ持つて來てくれた、種郎目敏く見つけて、二つ共鷲摑みにして頬張ろうとしたので、これこれ一つは治郎・・・・種郎の弟・・・・さんにおあげなさいと云

つても、分與するのがいやと見へてかぶりを振つて居る、そんなことしたら桃太郎さんに笑はれますよ、桃太郎さんは、おばあちやんに貰つたおにぎを、猿さんや、わん／＼に分けてあげたでせう、種郎さんかしこいな、ちやつと治郎さんに分けてあげるだらう、とさとすと、種郎はさあと、一つを治郎に與へた、

こは吾が家の出來事の一二にすぎないが、世間にかかる例は幾何もあらう、幼稚園などでも、誰が桃太郎さんのようにえらいのでせうかと云ふと、椀白者共が急に膝に手を置て居ずまいを正すのを見る、桃太郎さんは、幼兒にとつては無上最高の人物なのである、元氣な兒も桃太郎、お行儀のよいのも桃太郎、孝行なのも桃太郎である、桃太郎さんの感化や偉大なりと云ふべしである、

三つ兒の魂百までとやら、桃太郎によつて養はれたるこの負けじ魂こそは、彼の旅順の强襲、奉天の追撃に陸離たる光彩は發したる、武士道の根底であるまいか、宇内の一等國たらんとの抱負は、畢竟日本一なる語より醱酵したのであろう、私の想像をして誤りなからしむれば、吾が國が桃太郎に負ふ處大なりと云ふべしてある。

一體、吾が國のお伽噺の多くは、消極的で悲觀的のものが多くて、新日本の幼童に話すものとしては、不滿足のものばかりであるが、獨り桃太郎のお伽噺ばかりは、其の積極的にして、活動主義である點は、現今の要求を充たすに十分にして、お伽噺の理想的のものである、兒童が桃太郎を以て、無上最高の人物と崇拜するのも尤である、桃太郎談を善用せば、新時代の新人物を養成する、必ずしも困難でない、世の教育家及び父兄は、私と感を同じゆうするか否や。

以上の如く、桃太郎の感化深甚にして、其の人格偉大なりとせば、其の功を表彰し、其の人格に親炙せしむるの方法を講ずるも、あながち無用の事ではあるまい、然らば其の方法如何、私はよろしく帝都の中央に、桃太郎の一大銅像を建設すべしと云ふのである、今日は實に、銅像流行の時である、武將功臣は勿論、俳優の銅像まで出來た、吾が輩は猫の主人公、クシヤミ君が嘗て死去したので、漱石先生の庭には、猫の墓が出來たそうである、銅像にしてはどうかとの話が有つたとか無かつたとか、これこそ猫も杓子もである、しかし、これを西洋諸國の銅像流行に比すると、まだ／＼である由、彼の國では、一寸した公園や都市にても、

至る處何等かの銅像があつて、國民は銅像の有する歷史を誇りとして居るとか、美いことである、英雄崇拜は思想の未だ幼稚なる證據であると、つむじまがりの人などは云ふが、英雄崇拜熱の冷却はたしかに、時代風潮の惰落を意味してをる、元氣の旺盛を欠くのてある、海外發展の新日本國民には、大に狂熱に必要てある、銅像を透して、其の人格の偉大に渴仰せしめよ、私は、吾が國の幼童が、深く切に、桃太郎に憧憬せんことを熱望するのてある。（貧）



土佐の女學校の現在

寂　靜子

K女學校

光子樣!! 御勉强? 今春はいよ〳〵出高て來らつしやいますつてね、御尋ねにまかせて姉樣株を氣取つて少し私の學校、K女學校の有樣をお話致しませう、好いと思ふ事も惡いと思ふ事もさらけ出しての御話してすから其お積りてネ、さあと、先づ何からお話し致しませう。今は枯れて見る影もありませんが夏は紅蓮白蓮艶を競ふた濠に添ふた嚴めしい赤門が即ち其れてす二階の窓からは廣い內海の景色、白帆の往來が遠く眺められ北窓からは春は梅や櫻の亂れた樣、夏は靑芝の上に詩集片手の詩人振りの靑年の姿等の見らるゝ高知公園が手に取る樣てす、職員は十六人、女先生には高師出の若い先生も三四人ありますが其他は皆檢定のみ生徒は四百人、何分學校が古いのが名になつて市內よりは地方の父兄に信用され、年々の受驗者五百人內外の中て地方出の人が三分の一以上占めて居ます。

主義方針、は賢母良妻は云はでもがな、なるべく常識を養ひ虛榮心を去り今迄のお孃樣風を打破して新に國家社會に有益なる立派な婦人を作るのに心を注いて居ます、四年になればお料理もあり、梅干澤庵の漬方障子の張り方まて敎はります。規律は非常に嚴格て、夜間外出は斷然出來ません、若し晝間ても外出の際は定められた袴を穿き父兄の監督を要します、若し帶て縮緬の羽織かなんかゾロリと着流し五吋のリボンやなんかて通つてる處を見付けられ樣ものなら、それてこそ飛んだ御目玉頂戴して折角の着物も臺なしてすよ、從

て本校には此樣生徒は、多くありませんが女學生の夜行が盛んなとでも云ふ樣な評が立ちますと、非常線を張つて警戒するんです、服裝、裝飾品は一も二も質素々々袖も身丈の半分より一二寸短くなくてはいけません、何日てしたか外來の或先生が、土佐の女學生は思つたより華美だ、袖なんかも此樣に長い所は何處にも無い」と仰言つたそうて校長始めヤッキとなつたんてすね、それからは一層質素々々て絹物は一切いけません少し光る物が一線入つてゝもすぐ目が光る、頭髮は束髮か銀杏返し、白い切一つゆるしません、此頃は東京からとやら、前髮より後や横を張らし櫛て留めてますが（一般の父兄は鍋蓋式と云つて非常に嫌ひます）それも四枚櫛は餘り御機嫌が好くない位、次第に寒くなると先生の目は、耳の後や首に宿つて、よく「此頃は又白粉の殘りが盛になりましたね、あながち塗るのが惡いとは云はないが、朝は必ず落して來なければいけない」つてすぐ之てす、少し顔が白いと見られたら石鹼て洗はされます、海老茶の木綿袴に、下駄の赤緒も御機嫌がよく無い位、質素なのは何處に出ても負は取りますまい。音樂文學讀書力は少い、新聞、小說、雜誌は禁讀せられて居るからかも知りませんが、けれど實際讀ま無い人はなく、不如歸金色夜叉乳姉妹を知らぬ人はほとんどありません、だが幾何小說は讀んでも誰の作やら、何處が好さやら、其樣事思ふ人はありません、亂讀てすね、現在の小說家や詩人の名だけても知つてる人はありません、「夜雨樣が女子文壇の詩の撰評をおやめなさるつてね」と云つても、「夜雨？夜雨つて一體それ誰の事？」と圓い目をするのが九分九厘殊に與謝野先生を元祿時代の歌人だと云つた人のあつたのには、あきれて物が云はれませんね、先生も生徒も文學なんて事には重きを置いて居ません、幾何的頭の女が級に八分以上占めてますもの、雜誌や新聞に投書てもしやうものなら、自分の才をほのめかす爲の手段だの、一寸新しい熟語でも使つて文を綴ると「此文は現代文だが雜誌や小說本の中にある樣な語を使つてある、之ぢやいかんもつと句ぎりよく垢拔のした樣に作らなくてはいかん」なんて諷されますわ、だから文題は相變らず「鏡の說」だの「食鹽」だので、旨くなれ樣筈がありません、女子文壇なんかても御覽なすつても解りますわ、土佐といふ地名の人が幾人あるてしやう、僅々二三人ても、皆ちつぽけな六號ばかりて、少し位文才のある人ても其才を伸ばす機會‥‥とても申

しませうか・・・それに逢ふ事が出來ないで埋つて終ふのですね、情無いぢやありませんか、實際音樂や文學に趣味を持つてる人が無いですもの、男や學生の關係は監督が嚴なだけに先づ過失はありません、年賀狀の、やり取りでも仕樣ものならそれこそもう其男女の間には何か醜い關係でもある樣に、パッと噂されますし、先生は先生で、此頃此學校の生徒が何樣か知らんが、男女學生と手紙の往復をする者があると云ふ噂がある、若し其樣人が本校に一人でもあると、世間からは生徒全體を其樣見られるから、よく注意しなくちやいけ無い」と喃々として盡くる所を知らずと云ふ樣な有樣なので、新聞の端書便りの種に上る樣な生徒もありません、土佐の女學生て眞自目なのは先づ本校てしやう、まあ學校のお話といへばこれ位ですね（K女學校にて、S子）

C女學校

私ですか、私はC女學校の四年生です、まあ學校の話をせよとの仰せですか、それは困りましたね、格別お話する樣な事もありませんが、是非とならー寸お話致しませう。二三年前迄は私立だと云ふので世間からも輕く見られて生徒なんかもK女學校の試驗に落選した云へばお殘り頂戴てな格でしたが、此頃は世間からも其實用的なのをみとめられ、次第に隆盛になつて來ました。裁縫、料理を重にし實用的の奥樣養成に吸々たる有樣です、放任と云へば語弊がありますがKよりは規則なんかも幾分か緩うございます、生徒も地方よりは市内の商家の娘が多うございます、服裝も質素々々とは云ふ物の少々模樣が華美でも、袖丈が長くとも、そんな事には制限がありません、髮も最新流行の束髮で袴は多く毛カシミヤ紫はゆるしません、白粉も毎朝塗つて行つても各別御目玉頂戴して赤恥掻く樣な事はありません、それで一目でK學生かC女學生か見分が付きますよ、Kは質素で作つてる樣な人はありませんが、Cはパッと華やかで人目に付き安く、それて世間の人や男學生は「C女學校には美人が多い」つてな評か高うござり升。文學、振つてるとはまだ〳〵申されませんが、文學に趣味を持つてる人が比較的多い樣です、小説や芝居は禁じられてますが、幕毎に覗きに行く人も隨分あります、けれど多く役者を見に行くんですね。J子樣と云ふハイカラが短篇小説を作つて作文の先生に「先生之でも小説に成つてませうか」

つて見せた時も先生は一J子は中々ハイカラですよ小說が出來ますね一つて笑つてらしつただけだつて云ふんですよ、新聞社の訪問係なんかやつてる樣なKには思ひも寄らぬ樣な人もあります、之等は幾分か新しい方に向はんとしてる現象かも知れませんはね。(C女學校、H子)

●一般女學生の誇!　土佐の女學生と云へば一般平凡ですね、其誇とする所は所謂なるべく早く結婚して裁縫なんかも相應に出來て早く赤兒でも拵へればもうそれで澤山、緣談の口が一つでも多く掛り厚板の帶が一線でも多くあるのが何より肩身が廣い、雜誌讀んだり歌の一首も詠むよりは鏡との相談が肝要、筆取るよりは白粉のハケ握るのが得策、親の仰なら何でもハイハイと聞く所は柔順でしやうが、何の自覺も煩悶もなく至極平穩無事、現今の青年文士の要求してる樣な意志の自由な熱烈な戀でも仕得る樣な女は一人もありません、之が一般女學生の常態とでも申しませうか。

●卒業後、家庭に這入つてからは、氣が利かぬ、交際が下手、の非難の聲は(學校は平面的に方針を取つてるのに拘はらず)高うございます、つまり學校の努めてる樣な其理想的の女はまだなか〳〵實現されないですね、生徒が其主義と同化するのを避けてるのか、又當局者の同化さし樣が惡いのか、知りませんが。だから矢張り、社會と女學校とは別世界の感が深ふございますね。(賞)

子供から一足飛びの奥様

いと子

今から丁度三年前の彌生六日午後四時過ぎ、裁縫所から歸つて雛人形をしまひ、床の間をきれいに掃除して餘り冷たかつたので一寸火燵で手を煖めて居た時、母樣が何時もの樣ににこにこしてお火がありますかといつてお出でなさつた、二人で暫く暖つて居た、邊は靜かで表の間の時計の音がこつち、こつち、と聞えてゐる、大へんよい氣持になつて眠い樣になつた、妾は幼い時から極靜かな所が好だのに、家内が多くて其上妾より小さい子が三人もあるので騷しくて逆上てしまふ樣であつた、今日は父樣がつれて近所へ劍術の稽古

を見物に行たから静かて嬉しい樣なので、何氣なう母樣に向つて、家は只父樣と母樣と妾と三人きりてしたらどんなてしようと聞いた。母樣はそれはさぞ呑氣でしよう、妹や弟の世話をしようとも思はず、自分の事丈して餘程氣樂な事てすが、而し母樣達はとてもそんな呑氣な事はありませんが、お前等は未だ幼い身だから、望み通りな事が出來るとおつしやつた。そこて妾



あひる　紀伊　つれ子

は日頃から二人か三人かの極々靜な家へ一日でも住つて見たいと思つて居た所であるからすぐ母樣に、「妾にてもその樣な暮が出來ませうか」と聞いた、母樣は出來るともと言ふて四五日前或人からいつて來た縁談の事を話なさつた。先方は只親子二人ぎりで内が淋しいから早く嫁を貰ふといふ、何分一人しかない子だから今度貰つたら妹と思ふて勉强もさせて見たいといふ事

だそうで、妾は其話しが日頃思ふて居た處にあてはまるので「その家に行きませうか」と何心なく言つたが、而し妾は未だ田舎育ちの小娘、漸う小學校を卒業したぎりて、物言法も知らぬ、只淺はかな考へて内に居れば兄妹の數が多いから思ふ事も敎へて貰へぬ、それに先方へ行けば兄妹二人の樣だから、妾の思ふ通り、お琴の稽古は元より、何から何迄自由自在だ、此位結構な事はない、これは神樣のおさずけてあろうかと其家へ早く嫁つて見たくてたまらん、母樣はにこにこ笑つて「お前が行く氣になれば今にても直ぐだよ、では行きますか」といはれたので快く「はい」と答へた。

其から愈々相談が纏つて父樣も母樣も其日から妾の事に打かゝつてお出てなさる、今まで欲いと思ふて居つた衣裳やお道具、俄かに新らしく一度にたくさん調へて貰つて嬉しくてたまらん、夜もろくろく眠られん、早く、あの着物を着て、あの帶をして、あの下駄をはいて見たいとその事ばかり樂しんで居た、愈々其日がきた時は早花の彌生も過ぎ去つて卯月三日、しかも神武天皇祭の當日てあつた。村の人達から貰つた餞別、親類からの歡びの品、山の樣に重なつた、小供心の妾何の事も考へず朝飯もそこ〲に終つたので母樣の馳走の手傳ひをした、表の方てはだん〲とお客樣があるらしく、父樣が一人してもてなして居られる、今度は伯母樣が裏の方からひよつくり來て又手傳をしてゐる、妹は朝から湯をたいてゐたと見えて、早沸きましたと傳へてきた時は伯母樣が「まだ髮結女は來ぬか」といつた、妾は「誰か髮結ふの」と尋ねたら「お前のよ」妾は二つ三つ頭をふつて「否てすよ人に結つて貰ふのは否ですよ、妾一人て結ひますよ」といつたら母樣と伯母樣とは顔見合して「又そんな事」と色々評議して居る内、其髮結女が來た妾は急いて裏口から飛び出して、倉の後へ行つて土の上に字ばかり書いて居たら、伯母樣が來て「てはもう一人て髮を結ふて、そろ〲お湯にてもお入り」と氣嫌取りに來てつれて家には入つた、物も言はず思ふ通りに二百三高地にあげた、それからお湯に入つた、未だ一番湯だからすみきつて足の方まて丸見えだ。伯母樣が來て首から脊中から洗つて下さつた、何時もよりは大そう久しくかゝつてよく洗つたので顔が眞赤になつた、それから水てすいて、少し涼んで鏡臺の前へ座つた、伯母樣と母樣と二人して化粧して下さつた、妾は今までお白粉なんか着けた事はない、此時が初めてであつた。

それて伯母樣がこれからはもう娘ではない、お嫁樣だからちつとは朝と晩とだけは、こうして今伯母がして上げた樣におやつしをなさいよ、またリボンもさしたりしてきれいにして居らねといけませんよ、と敎へられた「でも妾はまだ十七ですもの、お隣の婦美樣等は二十二だからもうお嫁樣だけど妾は未だ娘ですね、母樣」といつて後を向いて母樣の顏を見た、母樣は口の邊りには少し笑をうかべられたが、目は少しうるんだ、伯母樣も母樣の方を向いて居られた。

暫くして伯母樣は何にもせよもう化粧してもよい年だなどいふ內、全く出來上つた、鏡にうつる自分の顏が人の樣に思はれる、お隣の婦美子さんの母樣が來て「丸て見代つてしまつた、ほんとに繪に書いた人形見た樣だ」なんて冷かされた、それから今度更に調へた着物を上から下まで揃へて貰つてきたら、肩行が大そう長い、手がかくれてしまふ樣な、ふと氣が付て見ると肩揚がないので「伯母樣これはまだ揚がないよ、こんなに行が長い一寸して下さい、妾が下着をしますから」といつたら、伯母樣は「實に什方のない子だね、今日は常とは異ふのだから肩揚なんかしてはいけません、又あちらの着物へはちやんとしてあるからね、これ丈はせぬのだ、大きくなつて揚を下した時あとが見苦しいからね」といつて長なり辛抱する事になつて身仕度も出來た、それから伯母樣につれられて村を廻つた、何をいふのか知らぬ敎へて貰つたけれど都合よく口に出ぬ、只々おじぎ丈してすんで歸た、丁度十二時てあつたから妹や弟を呼んでお飯を食べた、其時奥の間では賑やかに酒宴が出來て居つた、母樣は妾をこつそり別の間に呼んで、夫家へ行つてからの禮儀作法其他の心得等かんで含める樣にいふて聞された、妾は其話を聞いてから俄に悲しうなつた、一度嫁つたらもう其內がお前の家だとか、又あちらの母樣がお前の母樣だから、母樣母樣といつて大切にせよとか、今までのように氣まゝに他所へでも行つてはいけんとか、實に苦しい學校で罰ても喰つた時の樣、其上に一度も見た事もない人を母樣となんて言へませう、又妾の家はやはり家なのに、母樣あんな事おつしやつて、と今迄露程も思つて居らなかつたのに、今行くと云ふ時になつてと、一度にどつと悲しくなつて胸が一ぱいになつて泣き度くてたまらん。妾は漸う顏を上げて「母樣妾今もう嫁かんといふ事言へませんの」といつたら母樣はそゞろ淚をうかべられ、今からそんな我まゝな事など

言へませう」といはれたので、悲しい處へ又悲しうなつで座つて居られんので、火燵に伏して、なぜ今まで此事が妾にわからなかつたのであろうか、なぜ母樣は早く教へて下さらなかつたろうかと我身をくひ母をうらみ、落る涙を蒲團にぬぐひつゝ如何したらよかろうかと途方に暮れて居つた所へ伯母樣が來て「さー、いとさん行くのですよ、これなにを泣いて居るの、お化粧が見苦しく成つてしまうよ、さ、さ、早く早く」と手を取られ、やう〳〵に立上り表へ出た、表のふみ石の上に下駄をきちんと揃へてあつた、外には村の人達が多勢見送りに來て下さつた、皆一々禮をなさつたけれど妾は口もきけずおじぎ丈した、媒介人は早や先に行つて居る、伯母は「さーお出て」とせき立てゝ手を取る人足は面白く言つて道具を出して居る、其荷を運ばれるのが又一層つらくなつた、夢中で伯母に引かれて家を出た、一町ばかり行つてふと跡をふり向て見ると、村の人や親類の人達が見送つて居られる、其内母樣ははるかこちらの方へきて延び上つて見て居られる、妹や弟は姉さん姉さんと呼んで居たが、父樣にしかられてやめたらしい、あー母樣父樣と思ふと又悲しくなつて足が出ぬ、立止つて又泣いた、伯母は又色々となぐさめて一歩一歩と足を進めた、又後を見た、早や父樣や母樣の姿は見へぬ、只々家の屋根がちらちら見えて居る、それから間もなく大路へ出ると車が待つて居る妾は後から二番目へ乘つたが、而し前後夢中であつた、車夫は何くわぬ顔して勢よく走つた。夕方或家の門で止まつた、一同下車た、妾は伯母に手を取られて内へ入つた。あーこれが母樣がおつしやつた妾の家かと、其あたりを見た、暫くしてお茶漬が出た、伯母樣に進められて一口食べた、それから一寸して初めての湯に入つた、上つて化粧して鏡に寫る顔をしみじみ見た、晝故郷で化粧した時の顔とはすつかり變つて居る、それから祝儀着に着代て奥へ出た。客はくるりと並んで居る、見物人は表一ぱいにつめかけて居る、數十の眼はことごとく妾に注がれた、色々と批評して居る聲も聞える、内に三三九度の盃も終つたので、丸で嫁樣に成つたのだ。而し心は未だ小供なのだ、でもそれからは皆の人に、奥樣奥樣とよばれて、恥かしいやら、悲しいやら、おかしいやらで日を送つて居ます。

世にも稀なる潔癖のお婆さん

華影

私の祖母樣は世にも稀な潔癖で、自分の着る常の着物は、絲から紺屋に染に遣り、それを暑からうが、寒からうが、頓着なく自分て水で洗ひます、能く洗ひあげてから下女に織らせます、色の變つた位は關はないのてす。それから下女の織る間は始終機の傍につききりで、鼻をかんでも、頭を掻いても直ぐ手を洗はせます、少しでも織物に手が觸つたら大變てす、下女こそ飛んだ窮屈な目に遭ひます。

洗濯ものは下女に二三度よく洗はせて、一番後の一度は、少し熱があつて氣分の惡い時でも、自分の手でそゝぎます。

或る夕立の日に祖母樣が御留守てしたから洗濯の物を下女が取り入れました、其あとで何故私を呼びにこなかつた、きたないと大目玉を受けて又洗ひなをしをしました、だから祖母樣のお衣服はどれもはげて變なのてす。でも洗へば何てもよいと云ふのてす。

或る時も新參の下女が風呂を沸して祖母樣に、お風呂が沸きました」と云ふと「どうして加減が解つたかへ」と聞かれましたので下女は「へい手を入れましたから」と澄して答へましたら祖母樣は、つと立つて湯殿へ行き、栓を拔いて風呂の湯を落して仕舞はれました、下女は呆れて驚いて變な顏をして眺めて居ましたら「何故、もうよい加減か見て下さいましと云つてこないのか、主人より先へ手を入れると云ふ法がありますか」と大變に叱られました、下女は又風呂をたきなをしました。

お父樣が未だ五つ位の時（失禮な事ですけれど）あの少し小便を粗忽せられました、すると祖母樣は直ぐに裏へ連れて行つて、着物を脱がし、下女が湯を沸かす五六分の時間も待遠しく、遂に炬燵の中でも寒い寒中に水の行水をつかはしました。其時は祖父樣も大變怒られて一寸てゆきましたか、二三日の家にまとまりましたと。今でもお父樣は、私等が少し我儘な事を云ふと、そら水の行水でもせよと仰有る。

初孫の出來た時にも祖母さんは五布の大風呂敷を肩からきて三日目の子を抱かれたさうです、產れてから

湯を二三遍しか使つただけては不潔と云ふのてした。伯母さんがお嫁になつてから五年間、些とも祖母樣のお部屋へ入れて貰へなんだのてす、處が重い御病氣になつて初めて入れて貰つたのてす、が、そりやね結構なお部屋てした？、疊が古い上に二三ケ所紙がはつてあつて、襖の破れた所へは短冊や色紙がはつてある、祖母樣はこれても一生懸命に私が掃除して居つたから新らしいのよりよいと仰有つたさうてす。

醫師も手をはなした今日か明日かと云ふ時、見舞に見えた此れも矢張り綺麗ずきの向ふの奥さんが、初めてお部屋へ入つて「ま、おやせなすつた事、少しお撫て申しましようか」と優しく言つて背など撫て暫くしてお歸りなさると、すぐ動きも出來ぬ身の祖母樣が「今奥さんが撫てたから寢衣を着かへさしてお呉れ」と仰有つたので、家中して更りの衣服を出し、釣る樣にしてやう〳〵にきかへさせた。何にしても不思議な祖母さんてした。

暴風雨

木村那賀子

明治卅五年八月の大暴風雨は未曾有の大暴れて、やくざな造りの家や、古い家、離れた一軒家等、大抵は潰倒して了ひました、私の家も矢張り潰れたも同然、寧ろ其れ以上に酷かつたのてす、當時私は十一歳の幼年、高等小學二年生の時てした、恰ど其日は日曜て曉から降り出した雨は、朝になつて一層烈しく午前八時頃になると、生暖かい風さへ吹き出して來たのてした。私は學校が休みなので、朝の食事がすむと、直ぐ、幸子さんと云ふ、私とは同級生の方の家へ行つて、其方と讀本の復習をして居りました、此家は私の家の裏で眞北に當つてをります、此所いらは人家が一番揃つてゐる所て、大ていの風てはビクともしないのてす、けれども此日は朝からの吹き降りなので、何處の家ても戸を締めきつて商賣も仕事も休んだのてした。幸子さんのお父樣もお役所が休みて家に居りました、初め東の方の座敷に居た私共は、次第々々暴れがひどくなつて、垣根が倒れる、庭木の枝が折れて戸に打ちつかる

音に怖ろしくなつて、忽々に本を片付け茶の間の兩親の所え來て小さく成つてゐました、すると幸子樣のお父樣が「風が丑寅から辰巳えまわつたから、益々大きくなるばかりだ」と心配氣に被仰るので、私は小供心にも自分の家が心配で〳〵もう居ても立つてもゐられません、其れ程心配になるなら俺が行つて見て來てやろう、と幸子樣のお父樣のお言葉も無下に斷り、とう〳〵幸子樣の家を出ました、出ると直ぐだし、其れに傘をさしては危險だと云ふので、手拭をきつしり頰かぶりにして、すそをはしよつて貰ひ、素はだして馳け出しますと、表はしのつくやうな雨、ともすると、身體は吹き飛ばされそうなのです、其れでも一生懸命に馳けて家の裏へ來て見ると、黄く赤く色ついた百日柿が、庭一面敷いた樣に落ちて居るのです、常ならば大騷ぎで拾ふのですが、此時は其れ所ではありません、其柿の上をむやみにごろ〳〵歩るいて家へ來ると、裏の戸もお店の戸も開いて居るのです、夢中で家の中へ馳け込むと、臺所の床下に水が一ぱいには入つて、私の赤い緒の下駄や、姉樣の下駄等二足も三足も浮いてゐます、はだしですから臺所でお母さん〳〵と呼びますと、納戸の方から姉樣が、手拭を姉さんかぶりにして襷をかけ、おすそはしよつて出て來て私を見ると「まあ那賀ちやん」と云つたまゝ喫驚したやうに私を凝視めたのです、そして何とも云はずに足をふいて座敷へ上げて呉れました、奧座敷へ來ると、出入の鳶の者が三人來て居て、お父樣とお母樣はさしづして箪笥や長持等を店の方え運ばして居るのです、之を見ると私はもしや家がつぶれるのかしら、と思ふと急に悲しく成つて、お父樣の傍へ行つて「お家は潰れて了ひますの」て訊きましたら、今まで私の來たのをご存じなかつたと見えて大層驚いて「こんななかをいつの間に來たの」と被仰るので「たつた今、家が心配ですから」と云ひますと「馬鹿な奴だなあ、眞當に、其れでもよく負傷をしなかつた」とお小言を頂戴しました、そして「家は潰れやしないが、屋根はみんなむくられて了つたのだから、今道具を殘らず向ふに持つて行つて了ふと、皆も家には居られないのだから、お前は又姉さんと幸子さんのお家へ行つておいて、今送らしてあげるから、」と云はれました、其内に家財道具は殘らずお向ひの家へ運ばれて了ひました、私はそちこちうろ〳〵して居ましたが、茶の間に行つても、お店の方に行つても、うら板のすきまから、すゝまじりの雨が、

ぼしよく\流れ落ちるのです、疊は何の座敷のも上げて了ひ、お店と中の間の所のしきゐへ積み重ねました之だけ見て私は又お父樣にお負われて、姉さんも吉藏さん(鳶の者)にお負して幸子さんの家へ送り込まれました、お父樣は姉樣と私の事をくれぐ\もお頼みして直ぐ吉藏さんと引き返して行きました、幸子樣のお家は二階建てすれど、まだ新しいし、其れに土藏造りてすから安心してゐられました、其れても座つて居るとぐらく\家が左右に搖れて、まるて船にても乘つて居るやうな心持がしました、それから、私の家の三軒ばかりすじ向ふの中澤さんと云ふ家て、當時普請最中て上屋根がかゝつて居りました、其屋根にはつてあつたトタン板が、三尺もある大きいのが、ガランく\と云ふ音して飛むてくるのです、其物凄いことと何とも形容する事が出來ません、正午少し過ぎると吉藏さんが、大きな籠へ柿と栗を一ばい拾つて來てくれました、皆退屈して居る矢先きてすから直ぐに大喜びて食べ始めました、其時吉藏さんが田中町や根岸町は大概潰倒されて了つたと話して行きました、それからお羽黑樣(神社)の御神木が一本倒れたと云ひますので、其所は此所より餘程地形が高いので、二階て見たら見えるだろう、と皆ぞろく\二階へ上つて窓の金格子につかまつて見ますと、杉の大木と見えて恰ど枝が林のやうに立つて見えますので誰もく\只「まあつ」と云ふ驚嘆の言葉より外にありませんでした、午後三時頃に成りますと、流石猛烈に暴れに暴れた風雨も漸く靜かになりましたので、幸子さんと姉樣と私と三人て潰れた家を見に出かけました、何しろ風はまだピッタリ止むだわけてもなし、雨もチラく\降つて居りますので、手拭をかぶりおすそを端折つて、素はだして、まるて豆僧小僧のやうなスタイルて、今思つても吹き出します、此麼仕度て、平氣て見て歩るきました。田中町と根岸町は裏が筑波山麓まて見えるやうな、見渡す限りの田甫てすから風の當ても定めしひどかつたのてしよう、家と云ふ家は一軒も殘らず潰倒されて了つたのです、其有樣はまるて將棊を倒したやうてす、實に慘絕たる光景てした、學校は尋常の方は屋根の瓦が少し飛むだだけてしたが、高等の方は男子部も、新築後、未だ日も淺い女子部も潰倒されて了ひました、之が日曜てなかつたら定めし澤山な負傷する生徒が出來たてあらうと想像して、思はず戰慄しました、そして日曜だつた幸ひを心の中て祝しました。私の家も屋根ば皆むかれ

家財道具は全部他家へあづけたものですから、親戚や知人からは皆見舞を頂きました、當時四十八才になつたお父様、他からお握りを頂いて食べたのは生れてから初めてだと被仰ひました、其夜も雨は降りませんが風は可成り大きく吹きましたので、火の元が不用心だから一軒について一人づゝ寢ずの番をするやうに、と町内中へおふれが廻りました、て私の家でもお父様と吉藏さんと起きてゝ下さいました、屋根のない裏板ばかりの家え、茶の間だけ疊を敷き込むで其所へ寢みましたが、子供心にも何となく淋しく悲しく感じました。其れから一月計りは屋根ふきや、家の其所此所修繕等に、私迄が毎日落ちつかない日を過ごしました、學校も尋常校は直ぐ授業開始しましたけれど、高等校の方は潰れて了ひましたから一週間日に町役場から、學校に遺留品を取りに來いと通達がありましたので、私も裁縫箱と硯箱と算盤上草履等置いてありますので取りに參りました、其時迄校舍は矢張り潰れたまゝてありましたが、各級室の所には、其級の先生がついて居りまして、何くれとなく世話をして下さいました、其れて生徒は各自に自分の席だと思ふ所に、もぐつて行つて品物を取り出しますので、中には窓のガラスのカケ等て負傷したお方が御座いました、私の机の上は、恰ど大きな梁が落ちて居ましたので、机は無慘にも粉碎されて居りましたが、硯箱と裁縫箱は大した異狀もありませんてした、けれども、上草履と算盤はいくら探しても、とうとう見つかりませんてした、上草履は其頃まだ田舍ては見られぬ、千代田草履なので、ほしくつて〱眞當に泣きましたが。兩親や人樣から命拾ひしたのだから致方が無い、草履位ゐ諦めな、なんて申されました。其れから一月餘り休むて居る間に、町の有志方や、役員方の骨折りて、町の大きなお寺四軒と演劇場、其れに半道ばかりある在のお寺を借りで、其所て授業を開始しました、何しろ所々離れて居る所に通學するのですから、隨分不便てした、直ぐお隣りのやふな所に通ふ人もあれば、又一里も半里も行かなければならない人もありました、私等は初め家から一町ばかりしかない劇場の二階の樂屋て敎へを受けましたが、此所は表通りて喧しくて授業が爲惡いと申まして、間もなく町の西のはしの弘德寺と云ふお寺へ移りました机は大概、こわれて了ひましたので、腰かけ臺を机の代用にしました、此麽風ですから其年は、毎年する秋季運動會も、修學旅行もお流れになつて了ひました、

卒業式も其所で擧げました、其れ限り私は退校して終ひましたが、其翌年も矢張り此所で卒へ、同級生が四學年になつて、始めて今の校舍が新築落成して、四學年卒業式を目出度すましたのでご座います。此時の暴風雨は、私の心に、一生忘られぬ印象を刻み付けました。

浴室

とし子

浴室は靄もう〳〵とたちこめて
瞳おのづと閉ざされぬ
あゝ魂のなごみゆく
湯槽の靄のもや〳〵に
浮びもいてぬ、花の乳房
眞白き肌の柔かに
女の生命つゝむなる
乳房のながれ、底やいづら
探らんとする人もあれや
靄はいよ〳〵深し。あたゝかし
室のそとより冷き氣
襲ひ入るべき隙間もなし
女の龜子よ、若き夢の
血はあたゝめられ
息は熱して
心地死ぬべう快き
かをりと醉と、はた狂ひと。

木枯

むらさき

止みかゝつた木枯が、以前よりも、更に強く吹いて來た。
戸障子のばたつく音……樹木の呻吟などが、一の悲哀の奏樂のやうに響てゐる。
風は何ものゝ反抗をも享けず、北へ北へと、波のやうに吹き荒んでゐる。
深碧な空から、薄絹で包んだやうな月が、ほつとした淡い光を布いてゐる——全く風が、月光を搔き搖らつて行くやうに。
吹き落されて、一つ所に集つた枯葉が、ざつと音を立てゝ擴がつた。
風は、自己の領域をます〳〵擴めて彌々猛り狂ふので、家家の軒燈は、大概消されて終つた。が、獨り地藏堂のほの暗い灯だけが、靜かに夜を守つてゐる。



鬱金のはちまき

長曾我部菊子

子供の走る音がする。あはただしげに走る。耳をすませば遠くから賑かな拍子が風に送られてくる。あゝ、もう來たんだなと思ふて、とんとんと急ぎ足で二階にあがつて障子を細目に開けてのぞいた。子供は梅の花の咲いてゐる樹によつて、よろこんで待つてゐる。

隣の家からは女房さんと婆さんとが袖をすりあはして出てゐる、自轉車をあるいてひつぱつてゐた鳥打帽の男もゆつくらと見ながらゆく。

行列は總勢そろつて鬱金色のはちまきに、家の紋どころをそめた紺のはつぴ、二人が一荷をかついで二十三四人のかきてである。

まつさきには、ぴらりぴらりと長い袴のすそをけかへして、背の高い宰領人がくる。おなじく袴の男がなほ一人宰領人につきそふてくる。

だんだんに近よる。

赤く醉ふた男が自慢の聲をあげて伊勢ぶしをうたふてゐるので、二十三人の鬱金色連の足はかるく荷はをどる。拍子木は鳴る。

これは八幡の町の小松屋といふ財産家から、私の村の○○家へ乙娘の可愛いゝ美しいのが、嫁入つて來たのであつて、今日は村の人達のまちかまへた日であつた。

私の家の門にさしかかつた。小供たちに、お菓子をあげるからすぐ○○へお出てよと一人が言ふた。

伊勢はせゑ――津てゑ――もつ….

と一層歌聲がはづむと

よいよ――いよ――いやなあ

と囃したてる聲は益々歡喜をふくむ。

こしらへは七とほりてあるさうていちばん後から、かきだいが四つ五つばかりもゆく。それにも濃い空色に

桔梗の紋をくつきりと染めぬいた大布を垂れ、長くかけてはあるが、前後から風にあげられて燃ゆるやうな緋裏に、表は青と桃色とを井筒にした布團が、美々しく華麗に見えるのである。

自轉車をおす男もふりかへつた。子供はいよいよと叫んんであとを追ふてはしつてゆく。二人の女もたちすくんで見てゐる。行手を見れば、はるかにむかふに木立がある。その葉かげをすいて白かべが見える、紫の幕がちらちらする、ああ！あそこの御婚禮である。

冬のをはりの日は珍らしく暖にてらして、一町とつづいた鬱金のはちまきはやうやく遠ざかる。歌もとほざかる。見をはつて後、私は、私の胸の舊の如く冷かでないのをしつた。あゝ瞬間の醉ひに血は頰をぽうつと染めてゐる。（貞）

慕しき香

むらさき女

後の黒住敎のお家から、朝のお祈りの太鼓の音が、どんどんする外、あたりは物音一つしない。靜かだ。外には霙が降つてる。冬の乾いた空氣ながら、妙に强い壓迫を皮膚に與へて、今室の氣は沈みつゝある。青疊のなつかしい香が、すがすがしく胸を通して、疲れた神經を柔に撫でゝゆく、ふと此種の懷かしさについて思は風のやうに走つた。

○

雨上りの畦道だ。土の上つ皮だけ白くなつてる所へ、車の跡がぎつしり、はまり込んでゐる道を歩いて見る。ぱつぱつと足を運ぶ毎に、淸く澄んだ野の空氣の下層が、白く光つて、其度に胸の底まで浸みるやうな、土いきれの香が襲つてくる。遠い山を眺めながら其香をきくと「獨」と云ふ事が頻りに思はれて、何かこう「お父様！お母様！」と叫ばずに居られぬ、日の光りは野に滿ちてる。

○

ざあざあと暖かくふつくらした、お湯を體にかけて、少し心ばかり働かなくなつた眼を据えて、たえず下から上へ入れかはつてる、白い湯氣を眺めてると、新らしい木の香が、慕はしく身に迫つて來る。丸い電燈が淡い光りを湯殿一ぱいに投げて、此私の體をも玉の樣に白く透いたかと思ふ樣に照してゐる。波打つて我官能を刺戟する槇の香を、じつと嗅いて人の世の衣をつけてゐない時の心地……微かな我若い誇を感じた。

○

そつと裏から脱けてゝ白い花の眞盛りの梨畑にいつて棚の下をさまよふ。五月闇の靜かな宵だ――、鬢の毛を動かす程の風が吹くと、ハラハラハラハラとあちらでもこちらでも、大瓣の花が雪の樣に散る……と、あるかなしかの香が一寸澱んですぐ送られてしまふ。强いなつかしさの執着が泉の樣に湧く、大きい花瓣は私

の髪にも肩にも掛つてる、靈ぬけた遺骸と云ふ樣な思がして抱きしめて見た。弱い香は今少しく澱んで、棚の下にたゞよふてゐる。

○

水氣を含んだ重い空氣は森の立木をぬらして侵し込んできた、初夏の朝によくある、白くかすんで煙のやうに――。新綠の顫ひつきたい程に慕かしい香が、夢の樣に漂ひながら來る。空虛の心をふと氣附いて堪へられぬ人戀しさに、少し寂しい、さは〳〵と、風のそよぎに一入強い若葉の匂が、歌ひながら和らかに、燃えやうとしてゐる若い子の、胸をそゝつた、

○

日は今またゝきをし乍ら、赤くたゞれて沈まうとしてゐる。萬象は泣いてゐる、薄靄のかゝつた海の面は、まるで血を流したやうに美くしい、やゝに〳〵海の面は黑ずんだ――。微かな滿潮の響が沖から、かちどきをあげて寄せてきた。……と新らしい潮の香が響と共にすが〳〵しく胸にこたへて、身内の血汐も鳴るやうに思つた。なつかしい潮の香は響と一所に一度、岸を洗つて再び沖にかへつた。

○

高い氣持のよい松風の音がして、今一人眉の長い色の白いのがなつめを取つて、美くしい青いお茶を薄茶の碗にうつして、たぎつてる湯を注いだ、白い湯氣があがると高い薄茶の薫りが、室中に滿ちた。「好いね。」と正座の一人が云つて、鉄煎餅を引寄せて隣の人と形ばかりの讓りあひをして自分が取つて次へ送つた。「好きな香だことね。」と先刻話しかけられた一人が答へた。立て込めた室の内にむら〳〵と茶の匂は漂ふてゐる。

十八九の頃の寂寥

佐藤浪子

十八と云ふ溫い血潮の燃え立つ妙齡でありながらどうして沈鬱んで居るんだろう、派手な着物着て人通りの繁しい街へ出ると急に世間から懸隔されて居るやうに思れて心細くなつて終ふ、啞のやうにだまつてうつむいて步くのです、また華やかな憧憬多いお話をして居ても其裏面には絕えず冷い感情がつきまとふて居りますの、私は十八であると自覺するのが淋しいのです、いつも孤獨と云ふ寂寥を抱いて居る、親兄姉も何もない、息あるものは皆私の味方てはないものを、堪らなくなると暗い物影で泣く、誰にも見付からぬ樣に潛々と泣き度い、――いつも慰めて下さる姉樣のお手を振り拂つて、此麼時には却つて邪見になるんでせうか!! 兄樣は「そら、房の病氣が始まつたよ、そつくり關はんてお置き」と被仰る、姉樣のお情も嬉しい、兄樣の御愛情も嬉しい、お二人のお情けをよく〳〵識つて居て厚く慕ひ申して居ても、どうしても孤獨の寂寥を消す事が出來ない、惡い私の心――、私は眞つ白い淋しい表情の花が好き、机上にはいつも飾つて置きますの、

ジイ〳〵と油のつきる灯影をじつと見詰めては暗い底へ沈んで行くやうてムいますの。小春日和の一日お級友と知るべの濱へ行きました、其時嫁がれた方が貴女方は夢の人よ、私ね平凡だつて嘲笑つた昔の女になつて終つてよ、これでも多少新空氣を吸つて理想だの抱負だのと描いた妾だろうかと思ふ事もありますのよ、醒めた苦しい現實に泣いて居ますわ、「家庭日記」の「今の女」ねひどく感じましたわ、實際彼の通りなんてすもの、餘り平凡な感情を抱いて單調に生存して居るのも辱てすはね、少しは煩悶も結構、青春のすさびてすもの、貴女方は美しい夢に憧れて被在るのよ」と云つて眞實に寂しいお顔をなすつた、此麼さびしみも青春の夢てせうか。

私は今お母樣をお見送りして御玄關に茫然此麼事思つて居りました、パッと差しかけた大蛇の目の中に粹な銀杏返しの髮を並べて小刻に歩く女を見た、「都座の不如歸、さう、桂の武夫てすつて、好いでせうね、女主人公は？あら、嘉美村まあ振いつき度いやうてせうね隆華座は？影法師よ」四つの袖がユラ〳〵と搖れるかと思ふと、大粟の雪が横にヒラ〳〵と降る、私は呑氣な人達だと思つた、彼麼にもなり度いとも思はぬ、矢張り私は寂しい方が樂しみなのてす。

願掛け

ゆり子

私は今夜もまた、暗い三王門の石段を登つた。尺と積つた雪は、僅に兩側へ掃き寄せられて、石段は鏡の樣に光つて居る。私は、お祖母樣の冷たい手を堅乎握つて、一段々々と靜かに登つた。

「お祖母樣、今夜て十八日目てすわネ」私は何氣なく云つたが、お祖母樣にはそれが、强く響いたらしい。

「ほんとにな、毎晩寒いのにお前に氣の毒てならないよ」と仰有つた聲は沈んて居た。

「あらお祖母樣、私なんか一寸も寒か御座いませんわお祖母樣こそお寒か御ざいませんの？」と私は、白い雪明りにお祖母樣のお顔を覗いた。

「何のお前、こんな用の無い身體など什麼なつても」と低い力の有る聲て被仰る。

私はお祖母樣をお胸の中を思つて泣いた。

毎晩斯うして、暗い石段を登る時、お祖母樣のお胸には屹度、彼の薄暗い病院の臥床に病み細つた、力の無い眼ざしの人の暗い影が、さ迷つてゐるのてせう。

「お濱(私の叔母)の病氣は、屹度私が治して見せる、今夜から三七日の願詣りをする」ときつぱり被仰つたお祖母樣のお顔には、堅い〳〵决心の色が見へた。

お祖母樣、私お供しますわ」と私が晴やかに云つた時！お祖母樣の窪んだお目には、美しい〳〵露が輝いて

居た。

師走の末近い此夜寒に、三七日の願詣り、お祖母樣は只の一度も、寒いとは被仰らない。

今夜で十八日、甚麼雪の夜も私は快くお祖母のお手を引いては此石段を登るのである

大峰颪の寒い夜風が、ヒューッと吹いて來る。人の聲さへしない。如是姫の噴水も堅く氷つて、姫が手に持つ電燈の玉許りが、弱い〳〵光を投げて居る。

葵と卍巴の、善光寺の定紋附いた燈籠の灯影が、雪の中にぼんやり見える私しは昵とそれを見詰めた、今にも消え入る樣に見えたので……。

本堂の高い階段をのぼつた。左右の扉は堅く閉ざゝれて眞中許りが明いて居る、壯大な大伽藍、只寂寞!!!堂守のしはぶき一つ堂内に響いた。



勞働　京都　岸田富美子

あなたに見える幾つかの光り!!!佛前にゆらぐ淡き燈火を見て、私達は跪づいた。

堅く合掌してぬかづいて被在るお祖母樣は、只一筋に吾がねぎ事を、佛のみ前に捧げて被在る。其後に小さく座つた私も、只同じ願ひを祈るより外何もなかつた。

最後に一つ深くぬかづいて上げられたお祖母樣のお顏は、もう願ひ事の叶つたかの樣に、美しかつた。

香の煙りさへ漂つて居ない、淋しい本堂の階段を下りた時、雪深い敷石の上をこなたへと來る七つ八つの人の影!!!!雪を照す提灯の灯影も見えた。

「お百度詣りだネ、誰が病氣か可愛想にな」とお祖母樣の潤んだお目は其人達にそゝがれる。

今、分秒を爭ふ今、死の手に囚れ樣とする、病む人の横たはる暗い家を思つて、私は雪の中に避けて、沈ん

だ顏の其人達を見送つた。

「さあお祖母樣、足元をお氣を附けなさいましな」と優しく心附けて、辷る石段を下りた私は、何となく暗い影に追はれる樣な氣がして、思はず後をふり返つた。

部屋住日記

若草

日曜日。目がさめると母屋では、ダムが子を生だので大さわぎ、三つ三つ、やなめてる〳〵などと武ちやんの聲が手に取るやうにきこえる、やがて揃て報告に來た、末の敏ちやんまてあとにつひて同じ事を云て又、ぞろ〳〵行てしまふ、大へんなさわぎだこと、お前達そう、さわいじやあ、ダムが目をまわしてしまふよとお姉樣の一聲に、バッタリしづまつてしまふ。

用をすましてから、そつと行て見ると、五つになつて居た。武ちやん等は一人が一疋づゝ抱けると大よろこび、ダムの御飯の入物を洗て、おいしい御飯にしてやる。椽の下の茶箱の中て、五つの子をかゝへて急に母らしくなつた、ダムがなんとなくいとしくなつたから母樣、大そうよいとてけふもお起になる、午後代診の水野さんがくる、もう大丈夫てす、なに大した事ぢやありませんよと診察もしないて、自分の家ては暮れになると、餅をつくとか、大根をつけるとかほんとにそんな世話に一人ぢや困ります、家内てすか、もらはうと思ふんてすがなか〳〵いゝのがないもので、なぞと一人て話てお歸りになる、をかしな人だ。

佐遠州の姉樣からお手紙がくる、例の通り長い長い。みな御丈夫なそう、諏坊の話て持切り、五月のお產には母樣にきつと〳〵來て下さいと。もう二人のお子持になるのか。姉樣を思ふといつも土間の廣い臺所を思ひ出す。そして私が行た時、ふだん着の銘仙の袖を、ひつぱつて、いゝ縞だね、お前樣織りなすつたかね、ときいたあの、七十位の飯たき婆さんを思ひ出す。御自分て好ていらしたものゝ、あまり山の中でお可愛そうと思たけれど、行て見たら、ほんとに氣樂なよいお家それに遠江はおとなしい姉樣にふさわしいよい所と思ふやうになつた。すぐに又長い〳〵御返じをかく。例の通り手あたり次第に姪甥の事、來客の事、花園の有樣からダムのお產や、カナリヤの事下女下男の滑稽談には繪までは入て十時までかゝつてやう〳〵かき終るこれでも姉樣は、家の有樣が目に見えるやうよ、おかげて、けふは樂しく働けました、又あんなのを頂だいなぞと、長くさへあればお氣に入るのだから、

月曜日。例の通り冷水摩擦をして椽に出ると、母屋の椽側て武ちやんが、空をながめて、あゝけふは草履て行けないかなあ、と一人言を云て居る。すると、坊ちやん、けふは大丈夫てすと椿の影から竹箒を持た、太吉の大言だつてあんなに雲があるぜ、あつてもようがす降りやあしません、どこまでも受合て居る武ちやんはまだ不安な顏をして居る坊ちやん降たらかけつけま

さあウンそうしとくれ、けふは三時だぜと急に元氣が出て武ちやんは障子の内へは入た。太吉の天氣豫報はよくあたるから不思議だ。母屋へ、お早ように行くとめづらしくお姉様が、まだお床にゐらつしやる、どう遊ばして、とき〳〵と、ひどく目まひがして、おきられないそう、母さんわね、はゞかりへ行たら、ころびそうであるけなかつたのよと武ちやんや好子が云て居るそう、ぢや靜にしなければいけないわ、とそこらをかたづけて、みんなを茶の間へつれて行く、これから私がお主婦さんのかわり。三人を學校へ出してしまふとあとの二人が淋しいので色々な事を云てつきまとふ、末の敬ちやんはなほの事、姉ちやまが、ぶつたとか、おしつこ。お庭へ出るから靴はかしてをばちやまでなくつちや厭。ころんだ。とげがたつたなぞそれは〳〵座るまもない、又植木屋のお茶は何に致しませう。晩のお料理は、魚屋が參りました。お孃様一寸お金を、などと、これもなか〳〵忙しい、お姉様は、ふだんこれを、どうしてすましてゐらつしやるだらう、別に忙しそうにも見えず、おちついて仕事をしてゐらつしやる私は自分でして見て大姉様のお腕前に、もうすつかり感心してしまつた。夜はお習字どころか、子供がねるとすぐ自分もお部屋に歸て、何もしづに、ねてしまつた。

裏の森

深雪の人

北上州の高原にその源を發して利根の流が、岩を嚙み、岸を削つて、急流に特有な奇勝を形くつて流れてゐる。幾多の細流を合せ、幾多の村を綴り、山を回り野を出つて、沼田を過ぎ澁川を貫き、白堊多い前橋の地を洗ふ頃は、既う餘程緩やかな流となる。とはいへ全く急流の面影が失せたとは云へない。それが一里と下り、二里と下つて、横瀬の渡しといふ邊まで來ると稍平らかな水となつて、流にはもう石舟の姿が見えてくるそれから二里ばかり、玉村から伊勢崎に通ずる舊令幣使街道にある下の宮の渡場あたりへ來ると、石舟の影もずつと増して、烏川が流れ込むあたりは既う全くの平野的流となる。

妾の生れた村といふのは、その下の宮の渡塲から程遠からぬ〇〇といふ僻村で、戸數といへば廿戸足らずしかない。前は一體の雑木林で、櫟や楢や栗や榛やが所狭きまで生茂つて、その下には幾條もの細路が通つてゐる。何の細路をとつても利根の河原へは下りられる。

村の後はまた一體の森つゞきであつたが、妾の少さい頃切られて仕舞つた。妾は此の森に就いては種々の追懐やら出來事を知つてゐる。妾等はこの森を『裏の森』と呼んでゐた。妾は今この『裏の森』に就いて書い

て見ようと思ふ。

『裏の森』――それは幾百年を經たものか妾は知らないが、森々と聳え立つた松の樹には、三抱へもあらうと思はれる程の大きいのが、幾本ともなくすく〳〵と立つてゐた。その幹は皆赤かつた。

風多い冬の日になると、この森は終日轟々と鳴つてそしてハラ〳〵と絶えずその枯葉の雨を降らした。斯ういふ時には村の女や子供は、各自に籠と熊手とを持つて、よくこの森の中へ這つて行つた。そして轟々と鳴る森の音樂に和して時の流行唄などを唄ひながらカラリ〳〵……と松葉を掻く。妾もよくこの群に雜つて松葉を掻いた。時には大きな松の瘤を見付けて、その瘤から流れる赤い脂の樣な汁を『蜜、々』と云て嬉んで嘗めた。

『裏の森』にはまた蕈や松露が多かつた。しと〳〵と濕かい雨の降つた翌日、妾はよく上の姉に連れられてこの森に這入つた。重い雫でホッリ〳〵と穴があいた地には、可愛い奴が彼方にも此方にも頭を出してゐた妾はそれを籠に摘んだ時の心持を今でも忘れない。

蕈には初蕈、しめじ蕈、松蕈などがあつた。

この森をすつと通り越すとそこは野で、遠い部落の上には赤城榛名淺間の山々がみえた。淺間は朝が美しく赤城は夕暮が面白かつた。あの複雜した襞に紅い夕日が射した姿は何時見てもいゝ。妾等はよくこの森を拔けてその山々を見た。

それからカン〳〵と照りつける夏の日盛りには、多くの旅人がこの森を目的に集つて來た。中にも村々を經めぐつて毒消といふ藥を賣つてあるく北國の女……：それはこの南上州へは年毎に來る……その女の群がホーイ〳〵と呼び合ひながら、よくこの森へ集つて來た。大きな荷物を下して、笠をとつて、さも疲れたやうに太い足を投げ出して休憩んでゐたのを見た。

かうした追懷に盡きぬ森は、今から十年ばかり前、妾が八九歲の頃遂々切拂はれて仕舞つた。その頃は妾の祖母が今の小家を店に、酒屋を營つてゐた。ある風の寒い夕暮、妾は何時もの樣に祖母の店へ行つて、祖母の行火に倚つて繪本か何かを開いてゐると、

『おゝ寒む、お婆さん熱いので一本……。』

かう云つて這入つて來た二人の人があつた。二人とも洋服を着た眼の鋭い人であつた。祖母の店へ洋服などの人が來たといふことが第一に妾には珍らしかつた。それにその人等の酒を呑む風が如何にも亂暴なので妾には何うしても忘られない。妾はその晚『何處の人』と祖母に聞いたが、祖母は知らなかつた。父に聞いたら『大方裏の森へでも來たんだらう』と云つた。

それから半月ばかりたつた頃、その日はぽか〳〵と溫い春のやうな日、この靜な裏の森に、突然カーン〳〵と斧を入れる音がきこえた。森は大きく反響した。村の人々は皆音のする方へ集つた。

そこには四五人の樵夫がゐた。中でも一番屈强さう

な男が、大きな斧を翳して、今、二抱えもあらうと思はれる程の赤松の根元を切つてゐた。

カアン〱……。

大きな響と共に白い木端はパッ〱と四邊に飛んだ松の香が紛々と迫る。その中に彼方にも此方にも斧の音が入り亂れた。ゴリ〱と挽く大鋸の牙が何だか怖ろしい樣に思はれた。

『オイ皆來てくれエ、歯を喰へて駄目だッ。』と屈强な男がいふ。と他の人々は皆綱に寄り集つた。高い枝から太い綱が垂れてるのが妾には不思議に思へた。人がヨーイ〱……と引く毎に、モサリ〱と梢の方が動れた、犬や何かがよく死際にする呼吸のやうだと思つた。やがて『ソウラ……』といふ聲と共に根元にゐた男が立つた。綱を曳いた人々は彼方へ……と、凄じい地響と反響の中に大きな松は地に倒れた。

鳥が頻りにさわいだ。

この晩からこの樵夫達は毎晩店へ來て酒を呑んだ。樹は同じ樣に毎日倒されて行つた。

やがて切拂はれた空地に小屋掛が出來た。柱には松の丸太のまゝを立て、壁や屋根や床には挽き割つた板を使つた。床の上には汚い莚が敷かれ、その中央には大きな爐が切られた。爐には火がどん〱と燃えて、黑い自在鍵には何時も茶釜が掛つてゐた。

間もなくこの小屋へ一人の女が來た。美しいといふのではなかつたが、何處か普通の女と違つて居た。名は何とかいつたが忘れて仕舞つた。これは竹さんといふ樵夫のお神さんであつた。

妾等は毎日この小屋へ遊びに行つた。樵夫は皆唄を唄つた。竹さんの聲が一番好かつた。

私しや太田の
金山育ち……

よくかういふ唄をうたつた。ゴッ〱と挽く大鋸の歯がキラ〱と太陽に光つた。ハラ〱と散る鋸屑が風にもつれては積る……

竹さんはまた唄ふ。

『私は太田の金山育ち……』

すると若いのが楔を打ちかへながら

『外にきはないまつばかり……。』とつぐ。

『ヨオヨオ！』と竹さんのお神さんが小屋の中から囃した。妾は子供心にも木挽の神さんなどゝ云ふ者は厭な者だと思つた。

かうして森の樹は毎日々々幾本か倒されて行き、倒された木は角や板に挽き割られた。

一年ばかりして森はすつかり切拂はれた。村の人々は遠い夢からでも醒めた樣に、今更らしくカラッとした裏の空をながめやつた。そして今迄に見たことの無い世界が眼の前に展けた樣な心地がした。がそれと同時にこの藁屋根の家ばかりの小さい村が、馬鹿に寂しく窄らしいものになつたやうな心地がした。

妾は今でも裏へ出ると、あの森々と聳えた『裏の森

の姿」を大空に描いてみる。そしてこの背景を失つた村々悲しく思ふ。

「裏の森は」今は畑になつてゐる。

木曾の冬

更衣

打ち囲む連山には最早雪が來て冬の威を示して居る、今年も最早十二月に入つて雪は二三度降つた山家と見渡した所、日蔭には未だ、白く雪が消え殘つて居る、冬の山國只うら淋しいと云ふより外はない、一日汽車は四廻通つて妙角寺の鐘の音が朝晝夜と三度あたりになつて、一日は暮れるのである、通りへ出ると、雪袴を穿いた小學校の生徒にたま〳〵出逢ふ外汽車の發着毎奥の方から通ふ、がた馬車が淋しい笛をふいて、デコボコの往來を砂ほこり立つて行くのに出逢ふなども在る、何處の家も同じ樣な古い高い家で內は薄暗い。人の面にも何となしに暗い影が宿つて居る、新しい生々した物を見る事は出來ない。皆々いんきな沈んで行く樣な氣に滿たされて居る、が！夕暮れに只見る！家の內爐邊に燃えて居る、火勢のみが獨わづかに生氣がある、氣をそゝる樣な勢である、此の時には飲食店の中から、だみ聲も洩れ聞くのである、町外れを藥賣が呑氣な聲て唄を歌つて通る、二日か三日の月が冴へ切つた空にかゝつて、水車は絕へず廻つて居る。鎮守の森！點々と漸くまばらな、人家！眼を衝く飯盛山天王洞の山々が眠むつて居る樣に靜かだ、音の無い樣で何處からともなく淙々の音が音樂の樣に傳つて來るのは木曾川の流れてある、日の在るうち河原に下りたならば白玉の樂園にても遊ぶ樣な氣がして此の世の感は仕ない野ばらの赤い實を喰めば仙氣がする。落葉した疎林に交つて、松柏の綠も一段の映え。下は毛氈を敷きつめた樣な枯れ落葉に里の子かケンポン梨とか云ふ木の實を拾つて居る、北を望めば雪の白峯が重なり合つて駒ヶ岳の連山雲か山かと思ふ樣である。川狩の流材事業多く今行はれて一樣に雪袴姿の人夫がヨーホイと云ふ悠長な、かけ聲が如何にも神秘な想を寄せる、丸く白く洗ひなされた石が見渡すかぎり續いて、その上を飛び〳〵に步けば白光に眼を射られ身も心も仙境に在る心地。歸途を手頃のたくあん石にと拾つて行くのに初めて我れに歸るので在る。想ひ見るに此の邊の屋根上の石は皆此所から取つたものであろう。歸り途に見る落日の紅が向ひの白峯を紅化して、想はず壯觀々々の聲を放たしめるのてある、山路に逢ふかりびとに其のえもの問へばたゞ一言「キジだなし」と云ひ放して去る。

薪木負ふた童にも逢ふ。冬の木曾はたゞ此の間に暮れて行くのて在る、雞が時を告げ交はす聲！寺の鐘も打ち出して外を馬力が通る。

雪の日

つる子

雪の朝

ふと夫の手文庫をあけると私用には使はぬ特別製の大きな封筒に夫の官名を記し裏にも同じくさる人の官名を記したのがある、變な、公用書類はこゝへはいれぬ筈であるのに、自分はたゞ何となくみたいので、引き出!してみるとこれは又思もよらぬ雅な繪の封筒にきれいな女文字で正しく夫の名宛、裏には西本たつとはて、きかぬ名前殊に夫はいまだかつて婦人と交際しわ事はないといはれたのに、それでも無垢な自分は疑ひを起もせず、たゞ好奇の心にかられて讀んだ、法律家の今からやかましく「親書の秘密はまもらねばならぬたとへはがき一枚といへどもみだりによんではならぬ殊に封書はよし開封してあつたにせよ無斷てはよまぬもの」との訓誡も忘れてよみ下すとみゝず流といふのかはた金釘流といふのか誠によみにくい字で次の樣な意味の事がかゝれてあつた、

「少しもきて下さらないので何うなすつたかとほうばいと始終お噂してゐました、聞けば近頃奥樣をお迎へになつたそうでまことにおめでたう存じます、何ぞいく久しく御仲むつまじく御暮しになる樣かげながら祈ります、しかし御存じの通りこの世の中に親兄弟はなし誠に心細い身の上故たまにはお遊びにゐらして下さいませ、長くは御ひき止め申ませぬ故、それに相談にのつて頂きたい事も御ざいますから、この手紙御うけとりになりましたらはがきてゞも何日行くと知らせて下さいお待ち申して居ります、長くはお引き止め申ませぬ故ぜひどうぞ：：：

それから君香さんもあなたにお目にかゝりたいと申てゐます、それはあの外國へ行くとお云ひになつた高田さんの事です、東京から一度手紙がきました切り一向音沙汰がないので心配して居ます、今頃はどこにゐらしやるのでせう、もう毎日〳〵君香さんとあなたのお噂しない事は御ざいません、ほんとに此の手紙がつきましたらぜひゐらして下さい

くりかへし來てくれとかいてある、日付から察するにうけとられてすでに一月以上經過してゐる、その間未だそれらしい樣子はない、とまだゆかれぬのか？自分はこの手紙によつて夫が過去の獨身時代の樣を想ふて何とはなしのほゝえみを禁ずる事ができなかつた、

雪の夜

そりやもうみにくい女だつたよお話にもならないね併し又いゝ處もあるさ、第一きれい好て、それに欲氣がないんだからなあ――全くあの手紙にあつた通り親兄弟もない上に、あの通り手紙もろくすつぽうかけないんじやないか、手紙たつてキット二日も三日もかゝつてかいたんだらうよ、そりや僕一人を賴りにおもふの

相談相手になつてくれのといふのはどうせ女郎だもの女郎通有の文句さ

「やつぱり可愛くおもつてらしやいますのね、

「そりやたとへ一晩でも自分のものにしてみたのだもの憎くはないさ併しお前といふものができたらば――

「ホヽヽヽ

「大丈夫だよ心配しなくつたつて、

「誰もそんな、そんな心配なんかいたしませんよ、だけどもねえ、かたい〳〵と評判されなすつたあなたがやつぱりいつの間にか女郎買ひなどなすつたかとおもふと何だかおかしくつて……本統に男つてわからないものて御ざいますわねえ

「そりやお前、男かこの年になつて女郎買ひ一度しないつていふのは餘程しみつたれか何ぞてなくちやあてきないわさ、それても僕は去年のくれ迄は一度も行つた事はなかつたのだけどもね、僕の下宿に△君がきてからつい誘はれてゆく樣になつたのだ、その爲めあの○君も一緒にね、うそとおもつたら下宿やの主人にきいてごらんわかるから

「何もそんないゝわけなぞ遊ばさなくてもよう御ざいますよ、だけど私もずい分うかつだつたと思ひますのいつかあの菊尾樣へ上つた折玉江さんが「これが菊尾のなじみの女の手紙てすてけさ郵便てきたのよ、ちと遊びにきてくれつて、そしたら菊尾はいつてもいゝかつて云ひますからねさあ〳〵いつてもそいつたら今夜あなたん所のを誘つて行くつて、一ず用心してらつしやいそしてね、うちで此女も廓一の美人だとか可愛くて忘れられないのつていふのよつて淋しく笑になると、どうしてわすれられないものですよ、今夜は玉がいゝいふから吉田君を引つぱつて行きますよ、いゝてせうな、「まあ――大丈夫吉田なぞはそんな處へ參りませぬよ」、「はゝゝゝあなたも正直だ、男は存外柔かなものですよかたい〳〵と思つてると當ちがひだつて大笑ひなすつたつけがやつぱりあなたの事をほのめかしなすつたのでせうねえ、

「矢張あんな處へ行くと思へばいゝ氣持はしないかい

「そりやいゝ氣持はしませんけど……でもその女が可愛相て會つてみたい樣な氣がしますよ、こんな雪の晩をどんなにか心細いてせうねえ、

雪の夕べ

いよ〳〵お隣の家に同居してらした丸岡さんにも奥樣がゐらした、今迄は早く奥樣をおむかへになればいゝとおもつてたものかさてお出になると、何だかものたりない淋しい氣がする、いつそこんな位なら――

　併しいつ迄も別にゐられるものてはなし……何も自分がどうのこうのといふのてはないけど、それても何か淋しい氣がする、何も自分のものてもとられたかの樣な、今夜は着物一枚仕立なほすにも一々相談されて又私の方ても家の人の樣な氣がしてゐんりよもなくあ

ゝこうと親身に世話やき一寸したものでもすぐわけてあげるとか、家へよんであげるとか致たし、又自分の手にあはない事はすぐ丸岡さんにおねがいしてたのだけど、これからは、そんなわけにはゆかぬ、何だか淋しい、

女と女は割合に親しみにくいものである、虚榮、嫉妬といふ樣なものがお互の心によこたはつてゐるのではあるまいか？

あの奥樣の御挨拶などもずい分とよそ〴〵しい、自分も女ながら女といふものがあさましい、女といへばあの女だつてやはり私の樣な思ひしてゐるのではあるまいか？こんな吹雪の晩はなほさらどんなに心細い思ひに泣いてゐるだらう、

できるならうちへつれて來て女中がわりにでも……今のたきは不性で生意氣故、そう仕樣か――

併し是等の爲に自分がそ外される樣な事があつてはあゝあれも女！



いとし子　麻布　津川ふみ子

いな光

八代やゑ子

刹那がすぐれば過去となる。死が來れば無となる。

かう思ふ姉を横に、少年は白き床に仰向けに寐て居る電燈の光りが斜に照して左に落ちる黒き影には憂ひが

沈んで居る無言の儘の四人は等しき思ひをそれ〴〵に抱きしめ乍ら、見えぬ物の底に深く沈んだ心地になる。沈んだ心地のまゝ己がまはりを攪きまはして、重みとなつた悲しみを紛らはしたい。否もつと切に思つて思ひ狂ふたなら胸がいゑやう。

四人は思つても何とも言はぬ。

外には、はつと稲光りがして人の世界、雨の世界を、明るきに持ち上げて、又はつと暗きに落す。雨は怒りに力を込めて破れよと闇を狂ひ貫く。

「劇い雨」若い女はさも氣になるやうに云ふ。

思ふ事を堅く包んで思はぬ事を言ふ人は苦しみに負けた人である。

動く大きな世に、靜に小さく居るには力が要る。まして、明るくあるべき世が夜暗く、暗かるべき人の家が火に明るい。その矛盾が心の蔭に切なさをかこつ。大なる自然に人が負けるか。小なる人が自然を壓倒するか。

死なしとして居る少年を行くまいやるまいとして居る人と、死ねと引く自然との爭ひに、力の有りたけを想ひに込めてかまへて居る。かまへては居るものの、光と闇とを日毎に織りなす時と、高く低く身を自由に動かす力とに、勝てやうか。勝てるだらうか。

生をやるかやらぬか。

看す〳〵と人の世から人の世ならぬ世に、人を奪はれるのは口惜しい。

若い女はさう思つて父を見た。母を見た。見られた父は、母は、何か言ひ度く思つて、思つて默つて居た。

硝子から稲光りが鳥渡覗いて逃げて行つた。闇はそれを追駆けて行く。續いて雷が大きな聲で闇の末々迄響き渡る。それは、なげき、かなしみ、うれいの塊りがときの聲をあげて居るのではないかと疑ふ。

雨がその響を押し込むやうに音を立てゝ降る。

少年は衰へた眼を据えて、一點を瞶める。見つめた一點と少年の瞳とを結びつけた一線は微かに顫ふ。

ぴかと稲光りが走つて來てその線を切らうとする。

線はきつく張つて居て、今度はぴりりともゆるがぬ。

稲光りは、ぱつとはねかへつて坐つた人等の胸にきらめいた。四人は胸支へて愁をおさえた。

人生を過去に書きゆく時の筆は此の家のみを暗い色に染めてゆく。

あ、漏刻の水は、今、つきる——

町の角

せゝらぎ

荒廢した萬象は眼の前にひらかれた。

海がおびえたさうに白う光つて居る。伊勢山の枯木立が疎に列をなして、夏の頃は青葉の中に白く美しく見え透いた中腹に忠魂碑が、枯黄した四隣の色に圍繞されて、荒寥とした山の姿佗しい哀しい冬を痛切に感じさせる。二人は默つて道を歩いた。

冬の乾ききつた空氣は、重く動いて冷たい頬を紫色に晒す。かじかみさうな手を黒の手袋につゝんで、本包みを右手に抱えながら。

雲も灰色海も灰色、模糊と煙つて水天の際のわかぬあたり、うすぐろい帆をあげた船は、希望のない人の魂をのせて、運命を死の國に運んでゆくのぢやないか知ら萬物が燃きのない色に煙つて、暮ちかく何となく不安の氣の漂ふ街通りを綿うすい着物の肩をすぼめて、行きすぎる人を幾人も見た。敗殘――と私の胸はかすかに動く、糊口に逐はれて希望もなにもなく、猶生に執着してゐる、――みじめな生と思つた

陰鬱な周圍は一層私の靈を沈ませた。徒に氣のいらつくやうな、如何とも仕樣のない懊惱が心の中にわだかまつてゐて。

(二人はどうして一緒な心になれないのでせう)

窺ふやうに友のかほを見乍ら云つた。愛すといふも同情するといふも私は人を信ずることはできない。此頃の空漠な生活に、悶えながら泣きながら、拗ねた魂はなほも、孤獨の世に住んで人の同情を求めやうともしないのだ。悲境におちいつて他人に憫まれて泣く人はなほ幸福である。反抗に反抗して心の苦闘を續けて來た私には、憫みは要らない。眞の同情――いゝえそんなものは世の人の心にあるものぢやない。想ひに敗れた弱者を、世のすべての人は冷たい一瞥を與へたまゝ侮つて嘲つて無形の鞭で鞭うつて快しとわらふのだ。

偶近くとも人の離れ去るのは容易いもの、慰藉も同情も求めやうとはしないけれども、さすがにこの強情なひねくれた私の心さへ孤獨はさびしいのに。

坂の上に立てば、冬の日はもう傾き切つて、弱い殘光がなほ杜の梢に躊ふ。正金銀行の白壁と煤烟に埋まつた眞黒の屋根ばかりの町を、赫とてらしてゐる。

刻々としづみゆく夕陽のやうに、わが生涯は光明もない夜に沈んでゆくのだ。

孤獨を好むといふのは失意の人の負け惜しみだ、詐つた感情なのだ。誰がこんな空漠な生活をのぞむ人があらう。その寂しさは男の私すら耐へ難いのに、まして女のあなたには耐へられまい。とあゝ先生も被仰つた獨立は女に難いものとは知つてるけれど。私は、女なる者に定められた運命に盲從しては行きたくない。覺醒もせずに生を送るなら、三絃をいのちに唄ふてくらす藝妓も華かな望ましい生涯だ。理想もなく一生田舍の草に埋もれて暮すとも何も煩悶はなからうと思ふ女は皆、獨立の勇ましい門出を侮蔑と嘲罵に送られてのぼつた。寂寞と生活難に勝ちえないで仆るゝ人があると、勝ち誇つた叫びをあげて冷罵の裡に葬つてしまうすべて強者の世の中だ。あゝ私も斃るゝまでは、と寂しい生涯を思ひながらも遠い光明をのぞんで眉をあげ胸を躍らすこともあるけれど。弱い〳〵性とうまれたのを思つてはいく度泣いたか。處女といふ美しい名を被せられて、若い女は到底自由の域に馳せることはで

きないのだ。

鈍い日影は天にかへつた。夕焼けの色ばかり、いかめしい雲のかたちに殘して、それも段々に褪せてゆくと靄はうつすりと地にはく。灯のまたゝきそめた町は夕暮の色につゝまれた。例も別れる町角に立つたが、なにも云はず一丁ばかり默つて跟いて行つた。さようならと云つてくるり背を向けて歩み出したが何となく物足りない。噫私は弱いなあとしみ〴〵思つた。

私の身

みゆき

卒業證書を抱ひて再び故郷の人となつての後は何とも云はれぬ寂寞を感じる。

先日も矢絣の袷布を着てゴム裏の草履をはいて小學時代のお友達をお訪問ねしたけれど誰樣も〳〵云ひ合はせた樣に只じろ〳〵と私の顔を御覧なさる許り、頓斗談話がはずまない。如何しても東京の土を踏んだ私とは趣味が投合はない樣に思はれる。だから自然出不性になつて、たれ込め勝ちになつて胃の工合も惡るい。

昨夜も一閑張の机に向つて藤村の春を讀んで居たら襖がすうつと開ひて母樣がいらしつた。而して「此頃萩さんは如何してるのね、體の具合が惡かあ無くつて?と被仰る、イーエ別に何處も……。

そう、だつて此頃どちらへも出ないし第一あれ程仲のよかつたお花さんとこへも一寸も行かないぢやないか夫れに顔色も好くないのよ。

そう?自分ぢや何ともないの、私はね好きて家に許り居るのよ、だつてお花さんはもう母ぢやありませんか私等とはお談話が合ひませんわ」と伏眼勝に云ふ。好きなら好きてよいけれどそう机に許り向つて居ちや――私はお前一人が頼りなんだからね、何卒體を大事にして」―心細そうに被仰る。

此一二年の母樣のお弱り方つたら、一昨年頃迄は「十八にもなつて其起居は何だえ?なんて久々て暑中休暇に歸省したのだに隨分皮肉にお叱りなすつた物だが、其俤を今は何邊に求められやう?兩鬢白う霜を置いてちよい〳〵心細氣な事を被仰る。併し考て見れば母樣も如何なにか心細かろう。お淋しかろう。おつれあひには早くお別なすつて生みの子でもない私を只々頼に思つて被入るんだもの、夫れに田舍の事だから二十にも成れば子供の二人位は有つてかねても附けて居よう者を、家ぢや孫處ではない未だに私の身さへきまらないんだもの、母樣が明け暮御心配なさるのも無理はない。

「御孃樣」と云ふ聲に驚いてふり向けば女中が同窓會誌を持つて來たのである。早速帶封を解いて會員の消息を見る。まあ驚いた。逐此間櫻花咲き匂ふ校庭て告別式を擧げた許りだのにクラスの大部分はもうマダム中には來春早々御出產の筈等云ふのもある。袴が取れて肩上げが下りて島田に結んて紋付をきて角かくしをかぶつたかと思へば直ぐにもう人の母――學生から一足

飛びに母になつてしまふのだもの、あ、人生は餘りに〳〵早い者てはないか。

次々に見て行く内に「萩子樣――御歸鄕後お變りもなく母樣のお手助の傍ら兼ねてお好みの文學の研究に餘念もおはさずとか」と讀んだ時には思はずフヽと鼻て笑つた。

私だとて人だもの、女だもの、机を並べたお友達が時めくマダム振を傳え聞いても如何に何でも只一人此處に此樣して是て滿足して居られやうか。羨ましいとも思つた、口惜しいとも思つた、ねたましいとも思つた、ならば自分も人妻と呼ばれて華々しい社會へは入つて見たい――。

けれど――。

宿世拙き星の下に生れた子は幼き時より母とは云ふものゝ、むつきの中から伯母に引取られて養女になつた身、あまつさへ東京へ迄遊學させて頂いたんだもの、生みの親にも勝る御恩は山程ある、義理もある、世間と云ふ言もある――。あ私の我を通さるべき身分て無いとは知つてるけれど一生を托す可き其人迄母樣の被仰る通りには……。あゝ村長の息子連に丈なす黑き此髮と淸き此肌とをさゝげられやうか。

窓際に身をよせて冬枯の木立を見つめてると梧桐の一葉がパサリと落ちた。

何としもなく冷い淚が頰を傳ふて衿にこぼれる、

私の未來

しげ子

あ、私は何故こんな心なのてせう、我ながら我心が不思議てなりません、母樣は常に私は何故こんなひねくれた魂性の子を生んだかと云つて歎かれます、又父樣は幼い時からのお前の敎育が惡いからだと母樣をお叱りなさいます、私の魂性は敎育のわざても何てもありません如何に改めようたつて改められないしんに生れついた毒なのてす、あ、世の處女は皆美しい着物を着美しい髮飾りをつけ手にはダイヤや寶石をまぶしう光らせて滿足した樣に活步して居られます、其して幼い時から簞笥が何ぼ竿長持が幾竿と云つてさも此上もない晴れの樣に嫁入なさいます、あ、私もあの樣にしたら母樣が悅ばれるてせう、けれど〳〵私は衣裳など身の飾りには決して〳〵見向きもしたくありません其の上あの嫁入と云ふ事は耳にするも恐ろしうございます

　私は幼い時からひどい目的をたつて一人空想にふけつて居ましたが病氣の爲め遂に破壞されて了ひました其からは何の目的もなく唯母樣の許に我儘許りして暮しました、すると一昨年の春からは厭な厭な緣談のはなしが切れないのてか樣に此胸をいため〳〵て今日迄ものがれて來ましたが、あ、もう私は打ち勝つ勇氣がございませぬ、此間も父母に攻められて泣いて許り居ましたら幸にも親族からある一つの事情を聞き出した

爲又破壞となりました、其時の私の嬉しさは何と例へ樣もございません、押しつまつた咽喉の穴が俄に開いた樣で短く縮まつた生命を長くのばした樣で嬉しくて〳〵たまりませぬ、けれど〳〵いつ迄もこうして居られる身でもありませず殊に女と生れてからは母となつて子を育てるのが大義務です、されば其大義務に從ふて嫁入して子供を育てる事なんか、とても〳〵私に限つてよう致しませぬ、あ、私は大の親不孝者です、不孝者〳〵と常に自分の心が攻めつゝも尙此魂性が改められません我ながら此頑固な心根には呆れて了ひます
あ、私は此からどうしたら良いでせう、好きな勉强は中々にゆるされないし、一そ家出して髮をそつて尼寺に入り一生身を純潔に過しませうか、其とも父母からさづかつた傷一つも無い淸い美しい身體をと思へば又心が亂れて了ひます、あ私の未來はどうしたら良いてせう、毎日〳〵彼所に立ち此處に立ち此な事のみ思つて苦しんで居ます、
あ、私の未來〳〵誰か良い事を聞かして下さる人はないでせうか。

若き愁

夏野紅花

あゝも今年も逝くのか……夕暮私は椽にもたれてぢつと空を見てゐると、何とも云へぬ冷い涙がハラハラとこぼれた。若い女の……否人の……胸の中には、絕えず年を取りたくないと云ふ思ひが、いつぱいになつてゐる……かどうか知らぬが。私等はたえず此の思ひに苦しめられてゐる、五六年前迄は、早く大きくなつて、姉樣のやうに、高島田に結つて振袖を着て嫁入りしたいと思つてゐた、けど十八の私の目にうつつた人生は十三の目に見えた、……其の樣に面白い、樂しいものではなかつた、美しかつた姉樣が人前も耻ぢず、子供のよだれて、汚れた衣服の胸を擴げて乳を飮ましたり、母樣に良人がと話したりなさるのを聞く每に私はしみ〳〵年は取りたくないと思ふ、私は小說を讀んでも、人の話をきいても、十八以下の女にはよくても惡くても同情した。人が惡く云ふと其人の感情を害して迄も辯解した、私の目には十八以下の女の子は。みな美しく見えたからだ。そして私は、今二十日許りでいや〳〵な十九にならねばならぬ、私は死んでもなりたくない、近所の人等が「大きうおなりやしたなあ、もうお嫁入りせなならまへんなあ」など云ふ度に默つて笑つてはゐるものゝ心の中では「何なりと云へ私はもう死ぬかも知れない結婚なんて聞いてもいやだ。もし結婚すると年を取らぬと云ふのならしない事もないが、といつも冷笑つてゐる、實際私の命は、十八限りのやうな氣がして又夫れが無上に嬉しかつた。少し病氣にてもなると、今度こそ死ぬのだろうと、一人て思ひ定めて、友に借りたものは返し、書齋から衣服箪笥の中迄整へて、いつ死んでも耻しくないやうにして、……

一度は、……遺書迄作つた。……自分は床の中で聖書など讀んで倦くとまた考へる、自分は今八疊の眞中に北枕に横たはつてゐる、私は今死骸になつて居るので、枕元の机の上には、樒が一本に、白紙の行燈、素焼の香爐には、何とか云ふ好い香いの線香がくゆつてゐるし。好きだつたからといつて、御所柿の美しいのが籠に盛られてある、お友達の誰かゞ來て、顔にかゝつてゐる白い布を取ると青白い頰には、未だ最後の笑が殘つてゐて三つに分けて組んだ長い髮の末を、草色のリボンで柔に結んであつて、白フランネルの寢衣につゝまれた、私の身體は、さながら天使のやう、友達が「ホントに惜しう御座いましたわ」と泣く、と母は涙で洗れた頰に、淋しい笑を浮べて「彼は本望なのでしようよ、若いうちに死にたいなんて、よく云つてましたから……でも後に殘りました者を悲しませて、不孝者ですわ」と泣きながら線香を立てゝ、下さる、詩人の佐藤さんは挽歌を作つて下さろうし、文章家で私と仲の一番いゝ澤沼さんは、お得意の美文で、天才の實をおあげなさるだろうなど、わけもない空想にふけつて、一人喜んでゐた、……がもう十八もあと廿日許り餘すのみとなつた。其間に死なれさうにもない、してみると私はいやな十九と云ふ聲をきかねばならぬかしら、十九はまだ好い、二十二十一にもなつて死ねなかつたら如何せう。姉様のやうに人前を恥しげもなく、乳をのませるやうになるのだろうか。私はいやだ、どうしてもいやだ。では自殺すればいゝではないか、いや私には自殺する勇氣はない、例へ姉さんのやうになつたとて、私にはとても自殺は出來ない。すると私は死にたいと云ふのは表面で、……佳人薄命とか何とか、人に云はれたいと云ふ、虚榮の俘になつてるのだろうか……さうかも知れぬ、……今もし人が殺してやると云つたら、屹度泣いて助けて下さいと云ふだろう。……淺ましいではないか、人と云ふものは、皆かうか知ら。それとも私丈こんなだろうか、しかし老いたくないと云ふのは、私の眞心からの願ひだ。――だから、今死ねば永久に百年たつても二百年すぎても、年老いた汚い婆さんにならなくてもすむ行年十八歳と云ふ文字が苔がむして分らなくなつたつて、誰かゞ此の人は、未だ若い十八の時に死んだのだ惜しいものだと云はれゝば。しかし百年後にそんな事を云ふ人もあるまい。それ所ではない、此の家に信子と云ふ女があつたなどと旅人の話にも殘るまい。だから生きて五十六十迄生きて、せめて旅人の口傳へにでも殘るやうな事業をしてから死ねばいゝではないか。とか若いと云ふのは、女の命だ。老いたくないかて、死ぬるものか、人と云ふものは我儘なものだ。何も彼も神様の命だから、どんなに思つたかて、する事が出來ないではないか。私はかう獨言ちて強いて冷い笑を浮べやうとしたが、只涙が流れたのみである、眞暗な空にさつと、星が一つ東に流れた。



我が決心を姉様に

深山の櫻

いつにかはらぬ御情あつき御文たゞ涙もて拜見いたしました、思へば〳〵御耻づかしき夫の不品行、度々の御親切なる御意見も上の空なるあのしまつ、私は私は口惜しう御座います。けれど義兄様はとても末の見込みがないと仰せられ、姉様もまた行末長い身を、あの無情な夫に操を立てゝ涙に送るを姉として見るに忍びぬゆゑ、今の中何とか考へがあるならば、遠慮なしにいへとの御言葉は御情け過ぎてかへつて御怨めしう存じます、それはもう此世の中に、たゞ一人力と頼む夫があのしまつ、口惜しうなうて何といたしませう、人の夫を取つた女憎う、二心の夫恨めしう、肉に嚙みつくも飽かぬ怨は、胸一杯炎焔は燃えに燃えて、終には我身も焦げ死ぬばかりの苦しさに、幾夜をひとり淋しきふしどにもだえ、明しましたやら。いつそ我れを亡き者にして、おいさめ申たらばと閨の燈火かき立てゝ思ふがまゝに書き殘し、亡父様よりいたゞきし守刀手にとりし事も幾夜か、しかしかやうな事が世間に知れ渡る時は、家の不面目のみかは、ます〳〵夫は社會からつまはぢきせらるゝ事と思へば、それもなりがたくとてもかくても幼くして母様に別れ、なさぬ仲の繼母様にはうとまれ、力と頼む父様にもふりすてらるゝほどの不幸に生れつきたる此身、一生憂きに泣いて終るが我運命とならば、此苦しさつらさを美ん事堪へて、家の爲め、夫の爲め、我一身を捧げんと決心いたしました。堰くにつのるが戀のならひとや、ましてよく〳〵思はぬ女ならでは、無分別な若い者ともいはれぬ三十こした夫の五年あまりもつれそふ妻をすてゝの戀はすまじきと思へば、なまじひな悋氣立てして、ます〳〵この戀をつのらせ、此上つれなきあつかひ受けて、あの女に笑はれんもつらう、さればとて私この家を出て

なば家の中はただ慾にのみ固まりしあの女の手にかきまぜられ、代々傳はりし名譽ある家もこゝに終りと相成べく、また私も生家へ歸り、例の繼母樣から意氣地なしの腑甲斐なしのと朝な夕なにのゝしられ、姉樣にもまた此上の御心配かけん事の堪へがたう、さりとて淵川に身を沈むるとも笑ふ人のあればとて、哀れといふてくれる人もなく、徒らに犬死せんも口惜しう、今の此無念を、たゞ死んだ氣になりて堪らへに堪らへてこの家の爲め、夫の爲め、我一身を捧げてつくしなばたとへ情けを知らぬ夫なりとて、いつかは我誠心にほだされて、浮氣も止む時あらむと、たゞこの事一つを頼みに、たとへ此身は思ひのあまり、名もなき病にたほるゝ迄も、たゞたゞ此まゝに堪へまする。

姉樣お願ひて御座りまする、私不便と思召さば、どうぞ〱今しばらく、此まゝ見ぬふり聞かぬふりしてゐていたゞき度‥‥けれど姉樣、此やうに固く〱決心はいたしましても「お家の旦那樣が美しい女と御いつしよにあるいて御出ての處を昨夜御見かけしました」「あゝ私も昨日」と出入の商人や何かゞ臺所で話してゐるのをかげて聞いて居る身のつらさ‥‥姉樣御察し遊ばして‥‥何卒よく辛抱すると御賞め下され度く、また〱申上度いとはなか〱つきませねど、みだれ〱し思ひを書く事も後や先き、御はんじ遊ばされ度末筆ながら義兄樣へ宜く御とりなしいたゞき度さらば。（寛）

心明かせし友の許に

ちくさ女

先日は御親切におたづね下さつて有難う。いつもまあこんなによく見捨て下さいませんのね。

歌子樣やはり大變な事は起つて參ります。いつか申上げた事は近い中てす、御忘れてはないてせうね。えあの事、辻樣はやはり私を御忘れては御座いませんてした、この事だけは喜んて下さいよ、て私は近い中にあの思切つた事をしようと存じます。御驚きてせうねぇ家出の事よ。貴女はいつも、そんな事があるならすぐ私にだけは話してくれと仰つてねよくおぼえてゐますから打明かしますの、兩親にも妹にも話さぬ大事、如何てせうか此の戀といふ惡魔にとらへられた私にはもう前後も考へられません。もう私は何も解りませんが只貴女の御言葉だけは覺えてますの。いづれ出たなら東京てす。その時は貴女の御宅もたずねますからたくさん意見して下さいよ。

あゝ私は何も覺えません、いづれ近い中、私の馬鹿は

世の嘲笑の的となるでせう。今はそんな事も考へません。兩親のなげきは、どれだけでせう、涙もろい私はもう涙の種もつきて露一つやどりませんよ。恐しいものですねえ。

　別封のは、私の忍び草集と、日記、むら雲の巻とですから見て苦しい心を察して下さい。

何しろ、急ぎましたのと人目を忍び、亂れた胸を鎮めながら書いたのとて、非常な亂筆でどうか御ゆるし下さい。では何卒御大切に遊ばせ。(貞)

姉様へ

篠原由美子

姉様寒ふなりました事ねエ、其後お變りがありませんか、父様も母様も此頃は鳥啼きが惡いが喜美はどうしてであらう？無事かしら…どう云ふものか、此の頃はわけて氣に掛かるつてね、それは〳〵姉様の事を氣づこうて、ゐらつしやるのよ、平常無頓着屋の妾でさへしみ〳〵胸に、こたえて思はず眼を、ぬぐひましたわ、姉様今、何ふして、ゐらつしやるの？さぞお淋しひてせうね、義兄様亡くなられて早チョット二月になりますね、妙ちやん淋しがつてゝせう、まだヤット二ツになつたばかりですものね、お父様のお顔知らないてせう、モーモー妾姉様や妙ちやんの事思出すと、泣かずにはゐられませんわ、でも御姑様はおやさしひから、いゝわね、姑つてものは、へビより嫁がきらひだと申しますが、姉様方の御姑様は、おやさしひわね父様も母様も心配の中にも御姑のおやさしひのを、よろこんでゐらつしやるのよ、そしてね、お夕飯の時など、時々こんな事仰つしやるのよ、喜美も、てい主に死別れて淋しかろうが、御姑が、やさしひから、何よりだ、モー潔にも、やさしい嫁を、もらい、祺子も良い家へかたづけたら、モーいつ死んでも殘りが無いなんて、ねー、悲しい事ばかし仰つしやるのよ、姉様、なぜ父様や母様は此頃こんなに、淋しい事を仰つしやる様になつたのでせう？やはり、お身體がお惡い爲でせうか、此頃はお食も多分は召し上らずお藥も父様は少々召しますが、母様は、幾らお進め申しても、お召し遊ばさないのですもの、妾モー泣きたくなりますわ兄様も、いろ〳〵とお慰め申してゐらつしやいます、姉様今度近々に一度、妙ちやんを、つれてゐらして頂戴な、妾一生のお願よ――、そのかわり、妙ちやんにそれは〳〵好い物を、こさへて置きますからね！必度よ……御姑様へ山々御宜しくね！さよなら

おやさしい〳〵姉様へ　妹より

自園の果物に添て

立川悌子

文子さん貴女、今、何していらつしやいます、今日は、日曜故きつとお遊にお出の事とお待申して居ます。今頃は。あの寄宿舎の、南向の窓下のお机に寄て、昨日

の復習や、明日の豫習やて御勉強てしよう、それとも、古里の御兩親樣の事等お案じてすか。あの先日お出の時、裏の蜜柑の未だ小さいのを見て、家にもこんなのが有るけど、今二三年は、食る事は出來ぬと、被仰た事を記憶て居ます、あれが今、大變美しく熟して味がよい、と皆褒めますので、私、今朝霜柱を踏んて、木の下をグル／＼まいしてこれだけ取ました、歸に、無類の腕白坊の弟がヒヨツコリ出て、姉さん何と云ますから好い物と云ふと、そつと籠の中を覗いて、ヤッ、蜜柑と云ふが早いかトウ／＼一ッしてやられました、其罰て貴女處迄お使てす、どうか室の方を古里の方と思召して御一しよに御笑味下さい、お氣に召たらまだ／＼いくらでも御ざいますから御遠慮なく。　サヨウナラ

暖き夜

いそ子

はさみしてサンタマリアの油畫をきりぬきてゐぬ千代紙の上

淡ひのはゝき星見るおばしまにホア捲く人の白き顔かな

ふとさめて胸とゞろきぬよその家に一夜泊りの夢とはいへど

烈しさにまことゝはせぬなまぬるき女の顔のまのびたるさま

若妻と若き男と朝早く人に訪はれしわりなさ語る

かゝる夜をあかつき待ちて咲きいづる花もあらんと眠りに入りぬ



卒業後の悔

花子

女子教育！女學校教育てすね…今少し實用的に願たいのです…なぜ？と云ふに私共中流の家庭！否、以下てせう！けれども私共の家庭ては未だ／＼學校て學だことと家庭の生活とはあんまり遠ひのてす、とても實行はてきませぬ。中にも一番遠いのは…舞踏てせう！なにになります…薄弱な少女の心に一番早く虚榮！虚榮を教へるのは舞踏てせうさあどうてす？薄弱な精神、誤解され易き社會、まあ！一寸晴れの場所て舞ふて見たいのてす…それあ普通の心てせう！敢て虚榮とは思ひませぬ、淡い心てす——何々の夜會にも出て…などゝ空想します、折角五年間もかゝつて覺えた舞踏てせう、無理ては有りません…掃除しながら帚木を持つたまゝ舞つて見ます…面白かありませんもの、華な交際社會て貴婦人方と共に得意の腕を振て見たいのです…それあ誰れでも少女！卒業時の希望てせう——貴婦人方の交際振り…などほんとうに嬉しいのです——立派な淑女となつて交際場裡の女王と呼ばれたいのてす…

けれども、實際に滿足を得る人は幾人あります、學科も通じて幾人あります——多くは、儘ならぬ浮世を喞つてせう、空想——理想も果敢ない——實際とは、あ

まりに距つた生活を悲しみます、それでも果敢ない夢は覺め得ないで拾られた戀、失戀の悲しみよりも、訴られぬ苦しみに蹂躙られたかの樣に嘆き悲しみます、斯くして多くは煩悶病の犧牲になります、情無いじや有りませんか！清い心の處女も狹い胸に華かな樣をえがいて泣きます嘆きます、悟ることのできない處女は儘ならぬ社會が厭になります、わづかに小さき虛榮の影を慕ひます――これは來るべき卒業後の悲しみです淡き濃の區別は有ませうが社會に出る最初の煩悶です――あゝ實行のできぬ女學校生活も憐なものです、女子教育に心をくだく先生方よ、どうぞこれより踏むべき少女の爲めに眞の路！正道をお開き下さいませぬかこれが我等のねがひです。（貞）

つまらぬと云ふ言葉に就いて

千とせ

よく物事を滿らない／＼と口癖のやうに云ふ人を見受けますが、一歩家を離れゝば即ち他人の世界で、階級の異つた、性質の異つた、容貌の異つた、幾多の人々が思ひ／＼に動いて居るのですもの、其の間に何等かの不滿が無いと云ふことは有りますまい、從令お腹を抱へて笑ふやうなことが無くとも、滿足する程の愉快なことが無くとも、何物かを印象する事が出來たならば決して滿らない筈は有りません「滿らぬと云ふは小さな智慧袋」と云ふ句が有ります、滿らぬと云ふ言葉は或る場合に遭遇して何事をも感受し能はざる時の不平なのでせう、物に觸れるに接して何等の感をも惹起す事の出來ない小さな知慧袋で有る事を告白する言葉と云つても差支へ有りません。夫を「私は些細な事に愉快がるやうな幼稚な人間では無い、もつと／＼大いなる事に觸れなくては滿足は出來ない」と云つたやうな意味を人に知らしめやうが爲めに、殊更此の語を多く用ゆる人がまゝ有りますがそれは全く滿らないと云ふ詞を誤解して居るのだと思ひます、然し是れは單に面白く無いと云ふ事を代表する時の言葉ですから、別に深い意味は有りませんが、尙ほ此の詞には今一種有ります夫は境遇を果敢なんだやうな時に發する嘆聲で、例へば幼にして親に別れた人、落魄した人、失望した人、不具者等何れ逆境に陷つて世を恨み、身を悲しんで、心の心の底から、あゝ滿らない、と熟々薄倖を歎く時の滿らない、裏には屹度、凶器や劇藥や華嚴の瀧が付き纏ふて居るのですから、此の種の滿らないは甚だ危險で又大いに同情すべき哀むべき言葉です。併し貧賤に素しては貧賤を行ひ、夷狄に素しては夷狄に行ひ、患難に素しては患難を行ふ他に途は無いのですから斯る塲合には成可く頭を冷靜に持つて、而して己れの知慧袋を有らん限りに絞つて逆流と戰ふ位の勇氣が無くては到底この生存競走の激しい世の中に立つて行く事は出來ません、夫を一圖に悲觀して了つて、荒浪の揉むに任せて、あゝ滿らないなどと云つて居る人は矢張り小さな知慧袋なのです。

若し、やたらに滿らない／＼と云ひ度い方が有りますなら此の「滿らぬと云ふは小さな知慧袋」の句をよく／＼味つて御覧なさい、屹度猥りに口にする事を恥るで有らうと私は考へます。

緑の沈默

野の花

女の眼をみるやうな
緑の沈默――
ほろ〳〵と落ちる
白蓮の花びら……

ほのかに、かすかに、
ヸオロンの、音波のみだれ
何となくうらさみしい、森の靜寂
うつろな午後の光線――

うつら〳〵に、ゆれるハンモック
疲れた神經をさまよう
ヸオロンの緑の音いろ、

花言葉

羞かしさうに、密と
襟へ挿してくれた

薔薇の花。
熔けるやうなほゝゑみと、
青い眼の狂瀾と
……默つて
美しい……
おまへの唇のやうな
薔薇のくれない。（貞）

枯れたる白楊

晋子

わなゝける灯の
貧しき光の一すぢ
あゝその悲哀をとざせる黒き窓よりひそかにし
のび洩れて
わが耽溺の青き額に照り
黒き溝渠には腐水の重苦しき香のみ漂ひみちて
夜々月見る白き閃きもなし。
わだかまりすゝり泣ける鬱憂のいかにいかにに
がき神經よ

かなしみの夜をぞ

せゝらぎ

わたの如く疲れはてたる弱き瞳には
あゝ色もなしまた光りも影も…・

ああ、ああ、獨り青ざめたる夜の想――
かなしく枯れはてたる白楊
やはらかなる緑にもつれて夢みし過去の楽しき
ああ、追想は若くさめゆき今はただ悲しく暗し

見よ一すぢに愁ひつゝ
ちぎれゆく細き葉のひらめきを
枯れたる白楊のかなしみうなだるゝを…・

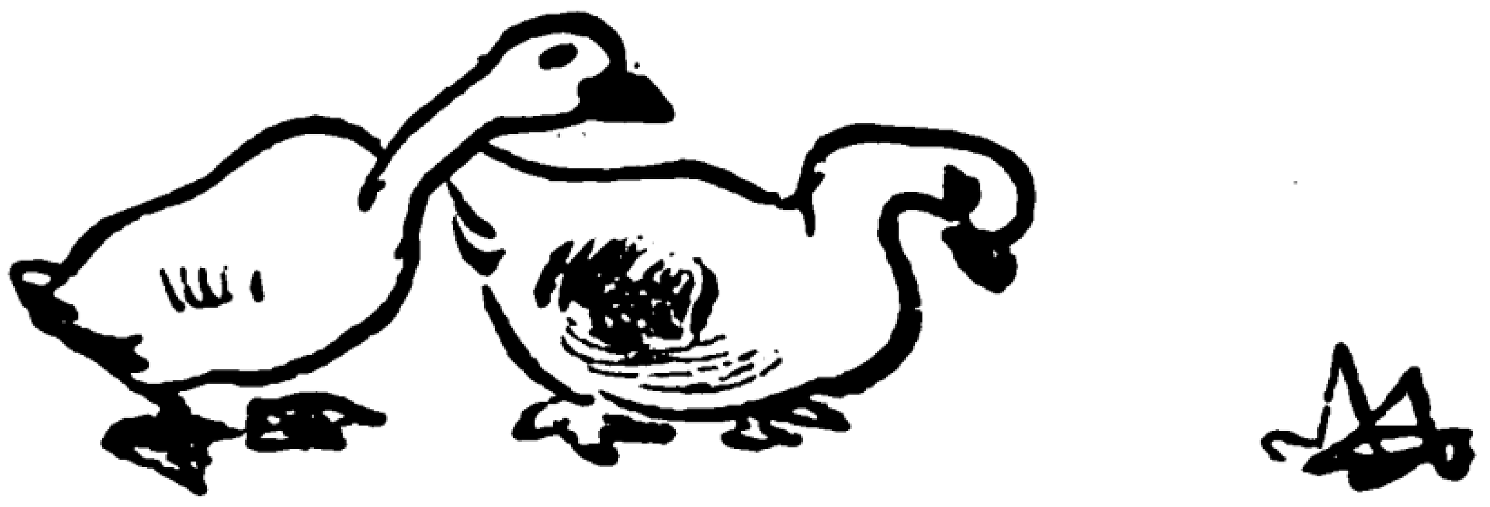
あはれやみ夜のかなしき暗示よ
貧しき灯の光はかすかにうたふ。

光明しづみて
わが生は暮れぬ
煩悶の石のまろぶのみ

苔の花すら
胸に咲かず
よどめる水なげきにも似て
聲もなき深きかなしみ。

波たゝず水脈もひゞかず
眞闇なる心の沼に
驚きの石を投ぐれば
圓を捲いて又も沈みぬ
生きながら墓を行くごと
さびしさの身には迫れど
縋らむに人の手もなく
泣かむには涙が冷えて。

寂寞は胸の血汐を吸ひ
徒に靈を荒しぬ
めぐりくる年はいく度
かくてわが春も闌くるに、
せめては靈魂は身をはなれて
自由ひろき天地に入り
かなしみの夜をぞ領さむ。



青白い光

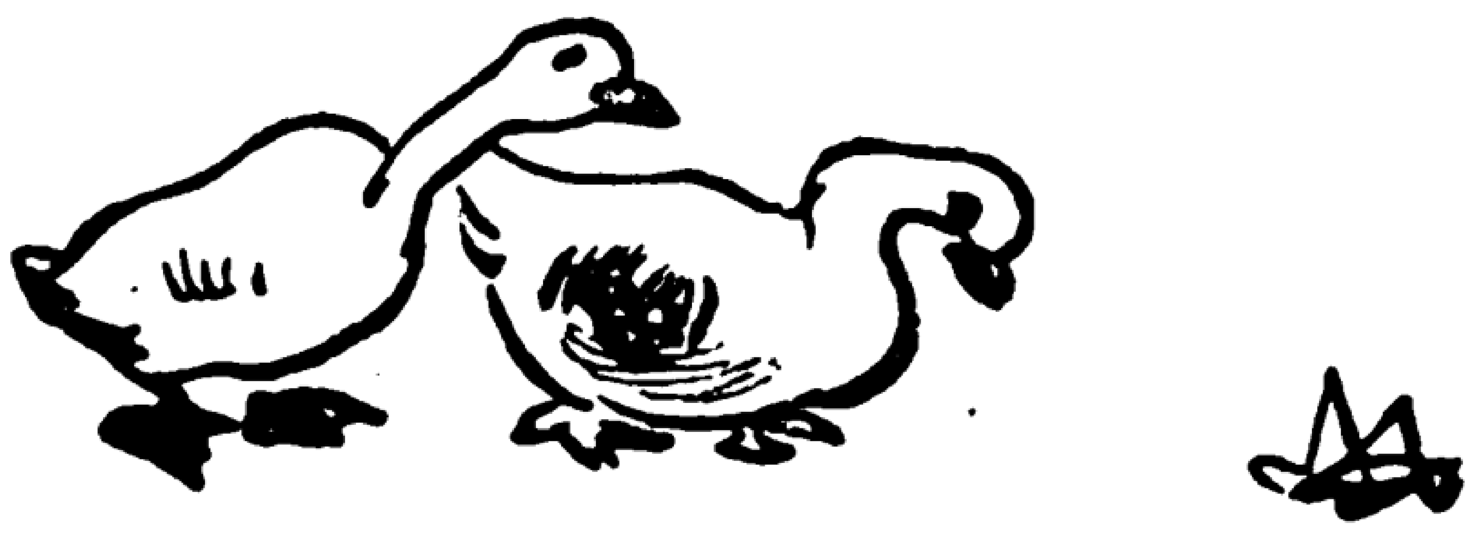
金田香雲子

さら〳〵と、寂しい音を立てゝ落ちて來た木の
葉が、
目をつぶつて、夢の樣に佇んで居る私の頰を、ひ
やりとなぜた。
ハツと驚いて目を開く。
夕闇に、あたりがもう薄暗い。
只、村はづれの病院の窓から、
青白い光が、木の間ごしにもれて來る、
青白い光は、私の胸に、ふと、悲しみを喚び起
した。
（あの窓の下には、多の病人は、あのいやな〳〵
光りをあび乍ら、果敢ない思ひに横たはつて居
るのだらう而も其の人らは、尚「生を續けたい」
と、心細く祈つて居るのだ。）
と思ふと、頭は知らず〳〵俯首れる。
木の葉がまた、淋しく散つて來た。
あゝ、こうして木の葉が散るたびに
彼の病人らの、生の葉が散り、
あの窓から、あの光りがもれるたびに
命の光が薄れて行つて、
遂には消えて了ふのだ。
あゝまた淋しい音をたてゝ、木の葉が散る。
青白い光も、まだ木の間ごしに、
見えて居る。

室の夢

かすみ

あゆめばかろきスリッパの音、
まばゆげにかゞやける電燈
絨氈の黄に赤にはた青に織り出せしばら模樣、
レースの窓掛はこと〳〵くおほはれて、
大なる彩繪の少女、
うなじかしげてほゝゑめり、
卓上の盛りたる花の香こそ室にこもれ、
待てど〳〵人くる氣配なきに、
緋緞子のアームチエーヤに、
なぐるが如く身を倚すれば、



キラ〳〵と右手に輝けるダイヤの光
あゝ此光に憂ぞこもる、
されど捨てがたき光よ、
彼女は我を惡魔よと呼べり、
あゝ十八の少女がうけし恥辱の言葉、
此光捨なば清し、
捨てんかな
如何にせん、
靜かに目を閉づれば、
幻想のかげにぞ魂は入る、
暫時も胸をはなれざる、
少女がうけし恥辱の言葉よ、
たゞいたづらに涙わくのみ、
たちまち荒き足音に
指輪返せとたけり立つ、
いなみ〳〵てにげんとすれば
やらじと叫びずる〳〵と、
かよわき身をばねぢ伏するに、
あらそひつれど力たらずや、
終にうばはれて君が紀念の指輪、
から〳〵と物凄き女の笑聲に、
はつと我にかへりて瞳みはれば、
人影はあらず、
輝やける光あびて、
もとのまゝなる椅子に倚れり、
今宵は君に返すべき、
指輪の光見入りつゝ、
又咽びいる悲しみの、
熱き涙を袖に秘め、
面うちふせぬ君待つ間。

獸の皮

なのりそ

かちいろの獸の皮を首にして戀をよくいふ男をにくむ

大都府のどよみは耳のほとりにてするらし我は泥道をゆく

何も彼も忘れて君が膝の上にたゞ一時をいねましものを

よく手紙書く子となりぬ戀すてゝ一人ある身の人なつかしく

おしろいをときぬせはしくあなやふと淋しくなりぬいかにかはせん

○　信濃　吉川多美子

柑子色に入日の海のはてに浮く淫樂の如き春の夕雲。
逢ふ日のおん眼に似たり夕づゝは春の樹の間にうるほひて見ゆ
橋ばしら宮居のごとう影ひたす翡翠色の夏の加茂川

○　上毛　深雪の人

白雪のふすま被ぎて伏さまに大野にありぬ冬の赤城嶽
小兎の耳ばかりなる夕月に里の七丘ふみて來しかな
春の雪かきあつめても小兎のつくる料にも足らぬうらみや

○　丹後　蠶内若葉子

稚き日雪に凍へて歸りては溫められし母にわかれき
よき容面の子は皆人に妬まれてはやく死すなど素氣に言ふ人
われなくも戀しき人を戀はざるを正しと云へる愛しき掟よ

○　美作　光成啓子

あはただしく心かなしむ過し日のうれしきふしに思ひいたりて
淚なき人を幸よとをのづから信じさせつる日の寂しさよ
死の如き夜は來りぬ禁なき樹の影はさびしき闇にまぎれて

○　岐阜市　篠田華水子

横文を讀む眼つきする彼の人は心の憂ひよまれぬ風情
時計とめて二三日あれば經つ月日優に過しつ太平の我
男の子等は鳴りを靜めて叩けども鐵の扉かたし我が戀の家

○　神奈川　齋藤えい子

春雨の糸もて縫ひし七重八重九重染の京の町かな
たれがきてわが眼をおほへかゞやかに物みな照れる春の夜の室
何となきある悲哀にとらはれてあるなり春のひかりの中に

○　相模　はる子

附き纏ふ乞食の如く男の子等を蔑せし十九の心おごりよ
醉ふ程の御酒ならぬに諸々の秘密あかしぬいと弱き我れ
わか賴る大磐石の心もつ男子に逢はぬかなしみに泣く

○　麴町　淺井ゆき子

我れは生く悲しみもなく嬉しみもはた悔ひもなく安らかに生く
いさゝかの僞り言のやすらかに過ぎ來しあるを少し恐れぬ
新しきかし家つゞける山の手の街はさびしう初雪のして

○　堺市　青柳糸子

火となりて戀へるを知らずのどかにも釣垂れ給ふ故に悲しき
夕されば花園橋のおばしまに月の出を待つ否君を待つ
妹としてめでたもふ趣とたがふと知りし恐ろしき日よ

○　尾張　岡田明子

ゑび色のカーテンひきし病室の窓の下なるコスモスの花
こゝろみに去ぬとのたまふおん袖にすがりてなきし我なりし哉
あひあはゞ何を語らんかく思ひかくまどひつゝ今日もあひ見ず

○　福島　春子

百人の男子になりて君もまたいつはりことをいひにきしかな
白椿ほろ／＼と散る雨の日やかごの禽しめやかになく

○　埼玉縣　長澤せつ子

黃金を山ほどつみて乞ふ人をするどくはれて嬉しかりけり
いく重にも鍍金かけたる美き人に我が兄君をうばわれにける

○　山口　酒向敏子

月蝕の夜のくらがりの戶によりて逢はれぬ君をえがきて泣きぬ
あゝ泣きぬ泣きぬ御文千々にさきやきて煙の室にみちし時

○　讃岐　衣輪すゑ子

このおそれ心靜かに法きゝし地獄繪を見し日よりおぼゆる
目さむれば柱に懸けし古羽織裏の破れしが先づ寒く見ゆ

○　信濃　花園嵯峨子

神さびし朱色に塗れる欄干の威に劣らざる此戀衣
僞の淚なりとは知りつゝも淚目を見れば貰ひ泣く哉

○　京都　伊志子

いさゝかの喜こびを盛るうつはものもちてわなゝく弱き我が胸
後の世は知らず我がゆく近ごろの道のやすきを祈りてたまへ

○　信濃　紅百合

處女てふ強き誇りと寂しさと覺ゆる心あなづりて見ぬ



死ぬばかり戀へる我をば知らず顔に高わらひする君いと憎し

○　上毛　柳　夕里子

われをとめみにくゝ黒く生れ來て紫も緋もふさふ色なし

つるし柿赤く透けるが似て戀し我眼掩へるおん手の色と

○　和泉　金田代志子

よく笑ひよく泣く性をもてる故たけき男の子愛でらるゝかな

春の夜に目をとぢて見るまぼろしの中には母も君もまじれり

○　伊勢　岩崎ふく子

いつの世かわれに生きける戀人のやうにも覺ゆコスモスの花

南の窓にすゞめの打ちむれて障子にうつる冬ばらのはな

○　若狹　前川蝶夢子

我胸のよろこび溢れたく〳〵と流るゝ如き谷の川見る

罪の子等聖者の啓示えたる如野は春風に草蘇る

○　上総　星野　女史

花あやめ水に匂ひてそこかしこ若葉に夜の早明くるかも

たちばなの木立の下の朝川に衣洗ひぬ初夏の人

○　德島縣　野　菫

桑畑秋にいためる寂しらのらぎようの道を人急ぎ行く

此の川に船を送りて別れたる君の香慕ひ川原を歩む

○　京都　折　楽　子

羊かふ野人いづらと雅歌唄ふ王の果園のおぼろ月夜や

蝦涙は五彩にこりよ感興のはなぞ散りかへ鍵盤のうみ

○　熊本　眞崎　幸子

粧飾なき冷めたき室にひとり居るこの淋しさを今日もつゝけぬ

君來ぬと思ひぬ竹の葉につみし雪のしづるゝかすけきひゞき

○　長野　加藤二葉子

いと輕き事のやうにもわがこころ死なばやなどゝ思ひ見る日よ

○　京都　楠田　信子

水仙は一ひら散りぬとぶ鳥の翼疲れて地におつるごと

○　上総　森　婉美子

千代までもとちかひし君は世の中のうはさの如く聞き流しゆく

○　越後　桑本きさ子

悲しみも寂しみもなくとある日に泥濘道を歩みてありぬ

○　呉市　碓井くれ竹

朝かすみ魚舟の灯四つ五つかすみて見ゆる吉浦の沖

○　長野　津金　泣月

別るれどあたふたとして群集の中にまぎれてまた君を見ず

○　下総　伊藤　やす

夕餐する伏屋に匂ふ汁の香を嗅ぎつゝ行きぬ冬の村里

○　沼津　入代美代子

何となく悲しくなりて思ふさま泣いてもみんと夜を早く寢ぬ

○　愛知縣　梶田　久子

遂になく淋しさ胸にせまり來ぬ今正に盡く燈火のごと

○　近江　小倉　蒔榮

うらなひをふるふ手先に操りひろげつと紅さしぬ君のおもひに

○　靜岡市　さ　ち　子

疑みだしえん魔のやうな恐い顔包みかれたる想ひのあるらし

○　京都　寺井　芥子

わが家を暗きものとし出てゆきし兄の歸らず年暮れんとす

○　岩代　五十嵐久良子

胸の扉をたゝく男の子はあまたあれど鍵與ふるは君ひとりのみ

○　富山　むらむき

暗室の底に二人は外を吹く風音ききつ三日を過ぎぬ

○　備中　篠原しげ子

食鹽と砂糖と雪を皿に入れ謎かけ給ふ面白き君

○　兵庫　松岡しき子

暗き儘さぐり〳〵しそのはずみ偶としたとこに落ちてかなしき

○　靜岡　壽賀子

他の事を思ふひまなく君思ふうするゝ頃の鐘をきゝつゝ

○　京都　白百合

死ぬといふ人は死なずも戀ふと云ふ人の情のうすきをしりぬ



春の家（賞）

こう女

名忘れの宿も柳に覺えけり
春の風家近うして疲れけり
洗濯のひたり加減や松の花
藏經も蝕むまゝや蚊喰鳥
曉星は消つゝ瓜をもぎにけり
貰ひ瓜包みあまりて戻しけり
畑方を負けしに芋を貰ひけり
晩學の灯下に蠅の迷ひけり

春曙抄（賞）

鈴木矢壽子

春曙抄草に伏せけり蝶の舞
架橋工事杭打つ音や水長閑
醉眼に輝く燭や宵の春
書窓閑に蟲も來鳴く日午也
僧に問襖の文字や日の永き
朧夜や相初め橋に水を聽く

檣頭の王旗を吹くや春の風
蠶飼して愁ふる雨や梨の花　羽後　幻の人
初雷の江差は鰊ぐもりかな
牧の子の飯喰ひこぼす土筆哉
琴爪をはづす机上や福壽草
織殿に宵の灯や春隣り
歌の意も遊女や小夜千鳥　京橋　深山女
句寧ろ歌に適ふや小夜千鳥
在りて江の島へもや磯千鳥
愛ふると爐の主に猫も哉
祇園京し雪に灯ともりぬ
公達の馬練る花の廣野かな　若狭　前川蝶夢子
春の水胡蝶の箔の浮びけり
城跡に吹く風さむし韮の花
霞む日や畑に茶を煮る〱火　三島　遠山雪子
人知れず霞喰ふ杣太りけり
牛吼て松に霞をおとしけり
廓の灯橋に見かへる寒さ哉　香川　藤本愛女
配膳や絹足袋かるき女衆
君酔へば海鼠の如く他愛なし
文机のうるしに寫る黄菊哉　千葉　峯島よし子
こつ〱と石切寺の黄菊哉
燈火に雨の黄菊の大きさよ
居酒屋に端居して聞く雲雀哉　名古屋　吉村智子

まぶしゅに雲雀見上ゆ凫蓮英摘　千葉　鈴木君子
髪結ふてかろき頭や春の風
鬚そりて春を寒がる囚人哉　静岡　大塚さん子
唇にしみる蛤や梅のはな
立枯の木の皮白し冬の月　相模　澤田はる子
霜の夜や町湯の溝の垢臭き
朝寒や地藏の膝のたまり水　上毛　紫城
雉子鳴くや東雲寒き雑木山
朝寒や流れに白きこぼれ米　秋田　大越のぶ子
此子賢に御する悍馬や玉蔵
大凧のうなり見上ぐる子供哉　廣島縣　柿廼舎
堅炭の火鉢に燃ゆる十夜哉
袴着て乳母の膝をはなれ凫　秋田　紅雲女
侘しさや足袋干してある自在鍵　越後　八田敏子
鳥籠の耕房にとまる蝶々哉　大阪　高山米子
灯をよせて籠の鶯鳴せけり　相模　齋藤えい子
羽子板につくす都の名所哉　秋田　幸代
松杉や天臺山の春寒し　京都　楠田信子
伏籠明て鶏はなつ背戸の霜　大津　佐々木すみれ
灯ともして牡丹驕れり大廣間　美作　山本風外子
星一つ我前に光る夜寒かな　愛知　秋月
わが袖に夕日のこる枯野哉　伊豫　篠原由美子
木に上る猫の黒さや冬の月　高知縣　山脇美那尾
墓石の崩れし野路や雉子の聲　兵庫　祥子
春水や石垣に這ふ紅の蟹　呉市　山本浪子

死期近き人に寝ぬ夜や遠水鶏　長野　津金春枝
双六や平安朝の夢の跡　石川縣　館そよ
皆默す運座の人やの鹿の聲　千葉縣　白つる
とざされし小梅の寮や秋の雨　下谷　平野柳子
乳足らぬ子も寝沈みて虫の聲　岩代　五十嵐久良子
千代川の水汲み入れて初湯哉　鳥取市　粂澤しのぶ
蓬萊の銀屏さむき廣間かな　愛知　宮地國子
宮島は鹿の鳴く音に時雨凫　秋田縣　本間てい子
草摘みの濡れて戻りぬ春の雨　福井縣　片山千里
提灯に我が息白き夜寒かな　秋田縣　加藤うん子
猿曳や猿は無心に虱捕る　備中　小見山春子
春の川竹の筏の流れけり　呉市　碓井呉竹
秋風や留守居淋しき戸を鎖る　臺灣　富美子
冬の月枯蘆の中に水光る　千葉　鶴岡一枝子
冬の川空家の裏を流れけり　下総　伊藤やす子
焼芋の香りに町の暖かさ　山口　酒向敏子
霧こめて見送る姉の蔭れけり　有馬　丸岡正枝
下町の霜夜に響く電車哉　大阪　高田明子
つめたさを忍んで食ふ蜜柑哉　紀伊　ゆう子
飼鳥の初めて鳴きぬ梅日和　名古屋　板澤とし子
炭焼の煙殘りて冬の月　福井　北利子
新築の百畳敷や琴の會　備中　篠原しげ子
梨悉く嵐に落ちて棚低し　京都　野の花
傘さして雨の櫻を賞しけり　秋田　小原あき子
霜とけて花壇の菊の雫かな　秋田　萩原とよ子

隣の人

松田うめ

相模のKM様！

私も望み通り都會とは絶縁して、しんみりした郊外生活を送る事五旬、大分四邊の空氣にも親しみました。今日は小雨するわびしい日、何か書いても見たい樣な氣がしますので、折があつたら咄そうと思つてゐた、周圍に就て、書ける處までと、筆かみました。

××寺の墓地の生垣に沿て、右に折れると、暗いじめ〳〵した汚葉の匂ひのする徑、其處を眞直に行て、汽車の踏切り一つ越えると、もうぱつと明るい、田圃の埋立地になる。さまで廣くもないのだが、其處へ出ると、何となく上の色日の光り迄も新らしく、如何にも生々して見えるのが嬉しひ。新建ての家が三四軒疎らに點在してゐる。それ等を搆わず通過ぎて、可成りへだたつた、もう埋立ての端れと云ふ處に、小じんまりした。南向きの暖かそうな平家が三軒並んでゐる其眞中が私の家だ。まだなつかしい木の香の殘た、靜かな氣に入た住居。庭と云てくぎつては無かつたが、此處へ來てから、お隣の横がわの垣を共通にして貫て、同じ樣に窓の前へ竹の垣を結た、其當時盛りだつたコスモスも今日此頃はすがれて了て、只一本、さや〳〵と風の吹く毎に、白い葉裏を返す椎の木が、淋し相に戰へて立てる外は何にもない、庭と云ても本の猫額程だが、前の空地が素的に廣いので、何となく餘裕があつて晴々して居る。裏は直ぐ芋を作た畑が續いてゐる。其畑の中に、軒の低い暗いくすぶつた樣な百姓家――それでも草鞋や駄菓子等を並べた賣物屋だ――がある、其處には眉を剃た後の青い、嫁さんと云ひ度い樣な……と云つてもう三十女だが、白い手拭かぶつて、淺黄の湯巻を出して、井戸端でコセ〳〵よく働ひてゐる。時々ずつと

在の方から、肥料車を挽て來る男等が、休み乍ら菓子をつまんでゐるのも見る。

私の家の隣りは林さんと云て、老人の夫婦者が住んでゐる。其頃まだ右隣りが空いてゐたので、自然の勢ひ林さんと親しくなる。お爺さんは、身體のがつしりした、人の好さそうな人だ。六十五だ相だ。お婆さんは、瘦せた骨ばつた、曲げたらポキリとなつて了ひ相な身體だ。前齒が缺けてるので、物言ひが洩れて不明らぬ事がある。毎日日當りのいゝ、椽側の傍で、馬鹿らしく大きい、眼鏡をかけて、美しいお小袖等を縫てゐる中々手が利いて居る樣だと母が云ふので、私も此處へ來てから仕事の稽古にゆく處がなくて困てゐた處だから、是非お婆さんに願い度いと思たので、其事を云ふと「よう御ざいますとも、私も若い時、一切りは隨分お針子もあつたんですがねえ」と、それから今縫てるのも他人仕事だと云ふ事も咄した。こうして私は毎日お隣へ通ふ事にした。お婆さんは熱心によく敎へてくれる、非常に咄し好きて、お國言葉の泌んみりした調子て、一日何か喋つてゐる。爺さんは別に何もしない。一日ポカンと火鉢の前へ座て、お經の本等をよんでゐる。そして思ひ出した樣に時々立て庭へ下りて、眞中に突立た桐の木を强くゆするのが癖だ、すると眞黃な病葉がガサ〳〵落ちる。此頃ではもう大分坊主になつて了た。それがすむと此度は押入から、刀を三四本出して來て、樂し相に拔いて見る。お婆さんは又始つたと云ふ風に、眼鏡ごしにそれを見て「家の爺さんは妙な風で若い時から學問が大嫌な代り、武術が好きて〳〵、さア：：二十歲だつつらか、馬術と柔道は免許皆傳だつたぞね。」とそれでも私が大して驚かぬのを慊らない樣に「皆傳と云やア、貴女現今の：：まア博士とでも云ふづらけど、世が變つたで何の役にも立ちやせんですよ。」

それからお爺さんは、其刀を振り廻して、これが上段の構へだとか何とか云てゐる。大方其刀を連鎖として、若い華々しかつた時代を追憶するのであろうと思た。お婆さんは一日に一度位屹度此春死んだ伜の事を咄さぬ事はない。廿七才だつた相な。其上の兄があつたのだが仕方のない極道者て、世が世なら手打ちにもしてやり度い位だつた。て廿三の時に勘當同樣にして了た後は、弟一人ぎりだから、不似合な位學問をさせたのに、「ねーさう申しちや何ですが、兄の方とは反對な、誠に氣分も優しくて、始終今に樂にして上る〳〵

つちや申してね、て漸く少々ばかても、月給もとれるし、嫁の咄し等もあつて、えゝあんばいだと喜んで居たんてすに、ボキリと逝かれて了たんて：：それもあんた、不圖風邪を引たが原因てね、僅かなんぢや、床にも就きませなんだに、本に〳〵いくら因緣づくだと思ても、諦められんてすよ。」と小さいしよぼ〳〵した眼をうるませて、まだ泪聲て長い事愚痴ぽく云てゐた。

暫く經てから思出した樣に、立ち上て佛壇の抽出の樣な處から、紫のふくさに包んだ物を私の前へ默て置いた。而して「ねあんた、これが伜の寫眞だぞね。」と出してくれたのを私は靜と取り上げて見た。肩の痩せた、顏の細い鼻の高い、眼鏡をかけた、一軀に弱々し相な：：併し情のあり相な書生肌の男だ。其顏をじつと見入てゐると、何だか此世て始めて見る顏ぢやない樣な氣がして來る。實際今其人が此處にゐたら、思ひ出せる人かもしれない。こう思ふと、堪らぬ程、一寸てもいゝ此人の生きた顏に接して見たい樣な氣がした「惜しいのね、こんなにお立派におなりなすつて、」と下へ置くと、今一枚小形な寫眞が眼についた。しかも仇ぽい、美しい女の：：私は急いてそれをとり上げ乍ら、「この方は？」「それは私も、ようく知らんてすがね、伜が自分のと一緒に紙へ包んて机の抽出に入れてあつたて、大方何づらと思つて、はア、」とお婆さんは又大事相にふくさへ包んて仕舞た。それから伜は學問が好きだつたて餘程重體になる迄書物を離さなかつた事や見舞にくれた西洋菓子の箱を枕元へおいたら、横文字だつたが、すら〳〵讀だ事や、死際には氣が變になつて了たから、樂に往生した、あんな後生のいゝ者も少なかろう等と云ふ事を、繰り返し咄した。

お爺さんは、別に口も入れず膝をかゝへて、俛れて居睡りでもしてゐるのかと、思ふ樣な樣子てきいてゐたが、「俺は思ふた。」と、一寸首を傾げて餘程何か感したらしくこう云た。するとお婆さんが、「又、何づら、樂に往生せんてもえゝて、氣を確然として何もかも解せて、死なせ度かつたと、思ふちふのづら？」「然うよ。」とお爺さんは大きくうなづいて見せた。「何のそんな事があるもんてア、私は矢張り苦しません方がえい。」

私は思た。親と云ふものは、こんな返らぬ、他人がきくと下らぬ樣な事を、眞面目くさつて、論ずるほど

我子の上を思ふのかと。

私は四時が打つと同時に、ずん〳〵仕舞て歸る。

灯がともる頃になると、裏の家でもお隣でも、がたぴし〳〵戶を閉めて了ふ。家でも女許りだからとて、成可く早く戶じまりをする事にした。こうした後の周圍は全く靜かになる。私等は四疊の間へ、空氣ランプをつけて銘々に仕度い事をする。而して時々サア〳〵と儚い樣な葉づれの音をきくと、淋しい感じが胸に泌む樣だ、お隣りでは朝が早い、私等がまだ知らぬ中に、お爺さんが私の家の前まで奇麗に、はいておいてくれる。或朝常の通り庭の木戶から、這入て行くと、お婆さんはお爺さんにお灸をすゑてもらつてゐる。

十一月の日光が、カサ〳〵乾いた樣に婆さんの顏から、兩手でひろげてる胸の邊りをてらしてゐる。

お爺さんは、右手に線香を持て、左に持たもぐさを一寸なめてはお婆さんの。すひついた樣な、兩乳の間へすゑてゆく。私はかまはず上り込んで、珍らしそうに見てゐた。「何のお灸ですの？」と暫く經てきくと、「ぜんそくだわね、何うもこう寒くなつて來ると、持病の樣に起てね。」「お灸がきくんですか」お婆さんは顏を熱つさうにしたなりうなづいた。

火が肉體へつく時に、お爺さんが二本の指で强くおさへる。それを離しても跡もつかぬ。私は、これでも異性と。けれどこうした場合、何の感じもなくなつた、夫婦と云ふ者に慣れきつたとても云ふのだらうか、とこんな事を考へられて、改めて二人の顏を見た。

相變らず平氣な顏をしてゐる。

其日お婆さんは、色々と咄しの末、もうこちらに居ても、仕方がないから思ひ切て、寧そ故國へ歸ろうと思てゐると云ふ事を咄した。私は突然なので「まア、餘り急ですね、折角こうして敎へて頂いたのに……何うしてもお歸りになるのですか？而して何時頃？」と、自分に思た事をどし〳〵進行さして行くと、

「まだ確然と決た譯でもないがね、お爺さんとも、いろ〳〵行末等も考へて見ると、倅……僅た一人きしの掛り子には、逝かれるし身體は追々弱くなつて來る、て、何時何んな病ひせまひものでもなし、こんな身內

に遠く離れた處に住まつて居るのは心細いてねえ。」

「全くですわね。而してまだお歸國の日は何時頃になるか、おきまりになりませんの？」私は、何だか其事がきゝ度かつた。「はア、出來る事なら、一日も早い方が氣がとめんて、えゝそれがねえ、いざとなると、何だ知らんが、去りともない樣な……オホヽヽそれに一旦歸たら最後、もう今の世て二度たア、此處へ來られませんてね、私もさう思ちや、街を歩いても忘れん樣に、ようく見ておきますわね。」

私は其れをきいて、云はれぬ淋しさと哀愁をおぼへた。敢て離別を悲しむと云ふ譯てはないが、此人も一旦歸國した以上、再び此世の中て、こう云ふお婆さんと云ふ人の顏に接する日はないのだと、こんな事を思つた。て此日は二人共故鄉の事のみ語てゐる。某街はあの儘づらかの、お筆さアは御家中一の、美人だつたが、俺といくらも違やせんて、生きとるとすれば可成りの年だのと、夢中になつて咄してゐる。若い者なら見えぬ乍ら、何となく期待する未來もあるが、こうした死を待つ計りと云ふ樣な老人夫婦に、何て現在が面白からう、それだから何もかも忘れて、こうして樂しかつた過去を語り合ふ時が最も愉快なのてあらうと思た。お爺さんは、「今國に安い土地があるかしら？あつても駄めだナ、もう廿年、否十五年てもえゝて、若いと巧い事を思ひついたゞがな。」

「えゝ加減な事お言んさい。貴方が巧い事等考へるためしがないぢやないかね。」「處があるんだからつまらんと云ふんさ。」「そんなら、云てお見んさいやれ。」

さア何だと云ふ風に、お婆さんは仕事の手を止めて、お爺さんに對した。とお爺さんの咄す處は、何でも安い土地を買て、それに松ても桐てもさう云ふものを小さい中に、したゝか買て植えておく、すると廿年も經つ中に役にたつ樣に成長する。それを賣て金を儲けるのだと云ふ。何だかきいてゝ其眞面目さ加減がお可笑い位だつた。お婆さんも可成り一生懸命にきいてゐたが、「然う咄しの樣に巧くゆきアえゝだがね。想て見るばつかの事さアね。何にせ忰が生きとつたらよからアけど……」又しても忰の事だ。「何もかも此度の世の事さア」と、お爺さんも投げる樣に云つて、ウ！ンと大きく伸びをして立ち上つた。

其夜お婆さんは家へ來て、長い事母に咄して行た。
矢張り歸國の事や、伜の事等であつたらしい。
裏の家に靑い不熟な蜜柑が、駄菓子と一緒に店に並んだ頃、お隣りでは歸國の仕度にとりかゝつた。それて私も仕事に行くのをやめた。二三日前に右隣りを、粋なお神さんが見に來たが、越して來るか何うだか、お隣で空かぬ中に、早くふさがればいゝと思つてゐる。(貧)



繼母

優梨子

「へイ／＼其位ゐのお色氣は少しもお華美じや御座いません」茶の間で例の呉服やの番頭が、繼母の氣に合ふ樣な事を云つて居る。

「又繼母樣は一寸眉を顰めた光江は、見て居た新刊の雜誌をピタリと閉ぢて机の上に置いた。而して傍の火鉢をぐいと寄せて、白くなつた櫻炭をかき立てた。

「什麼してあゝ華美なんだらう」と思ふと、例の樣にむら／＼と嫌な氣がして、理由も無く繼母の仕向に反抗して見たい樣な氣がした。

「光江、光江さんは居ないかえ」と角も無ければ、優しくも無い繼母の聲がした。

「ハイ」とすぐ返事をしたが、何故默つて居なかつたらうと悔んだ。がたん／＼と音をさせて、工合の惡い茶の間の障子を明けると

「お寒う御座います、毎度有難う存じます」と、すかさず番頭が、分けた頭をペタリと下げた。それには碌々挨拶もしないで、

「何か御用？」と白々しく云つて、繼母の傍へ座つた。

「是をね、私の長襦袢に仕樣と思ふんだが、華美じや無いか知らん？」と繼母は、紅無し友禪の縮緬を、右の腕に掛けて、ずつと擴げて見せた。

「華美じやありませんわ」とだけ無愛想に云ふと

「まア繻袢は少々位ゐ華美な方が引立つからネ」と繼母はもう、それが氣に入つて堪らない樣に昵と見入つて居る。

光江は自分の前に一杯擴げてある友禪を、見樣ともしない。
「じや是に仕樣かね」其縮緬をくる〳〵と捲き作ら
「お前何かいらないかい」と通り一ぺんの事を云ふ。
「否」と光江は笑ひ顏もしないで云つたが
「もう御用は無くて？」と繼母の顏を見て立膝になつた、
「あゝ別に用は無いけれども、こんなに澤山有るんだから、何か襦袢の袖ても見立つたら」と上べ許りで云ふ繼母の聲を皆迄聞かず
「私何も欲しかありませんの」斯う云つてもう光江は茶の間を出た。
前の火鉢の傍へ座ると、繼母に對する反抗心よりも、優しい生みの母を思ひ出して泣いた。
華美好な繼母を見る度、質素で自分の事など少しも構はず、只光江の爲計り思つて呉れた生母を思ひ出さずには居られない。
綺麗にならした灰の中に、ぽたりと熱い涙が落ちた。
留度なく出る涙に眼が曇つて、眞紅な櫻炭が、ぽーつとなる。光江は其眼をしばたゝきもしない。
光江の七歳の時、實母は心臟病で死んだ。父は只一人の可愛い光江を繼しい人の手に掛けるのは可哀想だと云つて、後妻を貰はなかつた。がそれから四年目の夏今の母を貰つた。什麽しても逃がれられない義理に迫つてだと云ふ。光江には其義理が、甚麽義理かわからない。又それを父に聞く程の勇氣も無いのである。
父は繼母のする事に餘り干渉しない。それが光江は歯痒ゆくてならない。何故もつと思ふ事をばき〳〵云はないんだらう、と始終思つて居る。
繼母は父の留守に何でも欲しいと思ふ物を買ふ、而して、夕方父が銀行から歸ると、
「良人、今日ね是買つて戴きましたよ、私もう前から欲しいと思つて居たんですから」と碌に禮も云はないで、普通の樣な顏をして居る。父はそれを見て別に、嫌な顏もしなければ、小言も云はないで、

「フン左様か」位ゐな事を云つて居る。
何故か光江には什麽してもわからない。其「義理」と云ふ中に屹度其理由が潜んで居るのだとは思つて居る。
「光江、繼母さんが今日ショールを買つたな」繼母が錢湯へ行つた留守になど、光江に斯う聞く、父の顔は屹度曇つて居る。其時は理由も無く父が氣の毒になる。それでも繼母の事は深く聞きもしない。云ひもしない。
「前の母様はこんなじや無かつた」など父が溜息をつく時がある。光江も一所に泣く事がある。
光江は眤と火鉢の中を見詰めたまゝ色々の事を思つて泣いた。
「ハイ明後日迄には、屹度お仕立上げ致しますて御座います。お嬢様のものは何か如何樣で御座いますか」
と番頭の調子の好い聲がすると、
「え、光江は什麽してか、若い者の樣でも無い、何にも欲がりませんから、別に」と繼母が云つた。
光江だつて女である。美しい品が欲しく無い事は無い、けれど、繼母への當附に意地でも欲しく無いと云つて居る。尤も父にも頼むのが氣の毒な樣な氣もするので。
番頭は、幾つも頭を下げて歸つた。繼母は奥座敷で、簞笥の抽出を明けたりしめたりし居る。光江は未だ茫然と火鉢の前に座つて居る。
夕方、例の時間に父は銀行から歸つた。
「良人、今日ね」と又繼母が云ふのだ、と思ふとすぐむら／＼と嫌な氣がした。（賞）

薄雪

なのりそ

いとせちに悲しけれども何物を悲しむなるや現はしえざり
わがめづる枯葉あつめてめら／＼と火を焚く人よ枯木に似たり
枯木山常盤木の山雪の山三重にかこまれ諏訪は晴れわたる
秋深し山にして見る町の家の彼の古窓はわが古き戀
けなしつゝも君にかたんとさま／＼の歎きを言ひ寂しさにゐぬ

汽車の音

赤崎あい子

枯葉一枚無い木の枝が、網の目のやうに月の光線の道を遮ッた。幹は皆黒かッた。その木立の下に家があッたが、それも唯黒い物體と見えた。月は幾分明るみを混じたインヂゴー色の空に、白ッぽく懸ッてゐる。その光線は地面を一樣に照した。電信柱の影が長く道路を横切ッてゐる。お京はガタ馬車の窓から、移ッて行く外の景色を眺めてゐたが、不圖思ひ出したやうに母の横顔に眼を轉じた。母は靜かに眼を閉ぢて、何か深く考へに沈んでゐられる。暗い車内のランプに照されて、その顔は青白かッた。

寒い、空氣の乾いた晩であッた。ガタ馬車は石のやうに凍ッた道を、ガラゴロ音をさせながら走ッて行ッた。外の寒さがヒシ／＼と車内に襲ッて來る。

「おゝ寒い！」

お京はうす暗い車内を見まはした。豆ランプのぼうッと點ッてゐる下の所に、「乘車賃表」と記した木の札が貼ッてある。お京は一寸それを見つめたが、又母の顔を見た。

その道路は濱邊に近いので海の音が聞える。冬の冷え切ッた砂濱にドゥーンと打突かッては碎ける波の音が聞えて來る。月の光に透して見ると、波の頭が白く現れたり又消えたりしてゐる。

「おゝ寒い！」とお京は再び呟いた。「阿母さん、寒かなくッて？」

「寒いね。」母は慄へ聲で言ッた。

海を除いた外、四圍の景色はまるで死んだやうであッた。風もない、音もない、唯寂然としてゐる——右方には、海岸地特有の小山が屛風のやうに長く聳えてゐる。月は今その背後に隱れた。

そして馬車の走ッてゐる近邊は暗くなつた。左方は海である。轟々と荒れ狂ふ波の音が響いて來る。遙か鎌倉から江の島にかけた海岸線が黒々と見える。そしてその黒々とした中に、長谷あたりの漁家の燈火がポッりと浮んでゐる。

「もッとね、身躰を此方にお寄せよ……」と母はお京の肩に手を掛けながら呟いて、自分のしてゐる肩掛の半分を、娘の脊中の所にかけた。

「阿母さん、好くッてよ。」

「いゝよ〳〵、お前もさぞ寒いだらうから……」

二人は暗い心になッた。

* * * * * * * * * *

お京の頭には、姉の姿が悲しく浮んだ。

丁度二年前の二月、妹が初々しい花嫁姿で嫁いて行ッた時の光景が浮んだ。

簞笥、長持、それ等の道具は未だ晝間の中から運んで行かれた。姉は母と語ッては泣き、お京の手を握ッては泣いた。

未だその頃は家は麻布にあッた。その暗い六疊の部屋で母娘三人向ひ合ッた時、お京は泣いてゐる姉の顔を見て、「何んだッて泣くの、嬉しくつて堪らない癖に！」と言ッて、母に叱られた事を記憶してゐる。

母だの伯父だの伯母だの、それから親類の人々が車を連ねて、夕方から飯倉の町を走ッて行ッた。お京もその車の一つに乘ッてゐた。雪の降ッた翌日で、家々の軒は未だ白々してゐる。空が薄墨色に暗く、風は無かッたが厭に底寒い日であッた。道行く人は立止つて車の後を見送ッてゐた。

〇〇館といふ料理屋の前で車が止つた時、母は「かへる」「さる」と言ふ言葉を使ッてはいかぬとお京に私語いた。お京は默ッて點頭いた。

光澤々々しく拭きこまれた廣い廊下を通つて、廣々とした座敷に導かれた。天井に電燈が眩い程點いて

ゐる。

お京には、美しく着飾つた姉の姿が最も好く眼についた。姉は赤い顔をして盃を持つた。姉の傍らに近寄つた時も、最早先刻のやうに「嬉しいだらう」と言つて冷かす氣も出なかッた。

姉は恥しさうに伏目勝ちにしてゐる。そして、

「お京ちやん、お前さんは好く溫和しくしてね、阿母さんに孝行して上げなければいけませんよ。」と言ッた。その聲はシンミリしてゐた。

お京は默ッて點頭いて、そして疊の目を見てゐると、何んとも言はれぬ悲しさが込み上げた。泣くまいとして一生懸命眼をふさぐけれど、矢張り涙は頰に傳はッて來る。姉はハンケチを出して、「さアお拭き。」と言ッた。お京はそのハンケチを受取ッて、そッと姉の顏を見上げると、姉も眼に淚を一ぱい湛へてゐた。

「お京ちやん。」

「姉さん。」

恁う言ッて二人は手を強く握り締めた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「お前の妹さんは不幸な人だね。」と母はシミ〳〵言ッた、お京は何んとも答へないで默つてゐたが、暫くして、

「汽車は何時に着くんてしたらうか？」

「九時五分だらう。」

母の頭にも種々の思ひ出があッた。夫に死別れてから女の瘠腕一ッで二人の娘を仕立上げるのには、隨分心配もした、苦心もした。そしてその姉の方を緣付けて、やつと一安心と思ふと、僅か二年立つか立たぬ中に、姉は離緣となつて了つたのだ。

「田中も酷い家さ、」恁う母は言つて、姉の嫁つてゐた家を罵ッた。「ねえお京、妾の身になッて御覽な、眞個

に高い所から突落されたやうな氣がするよ。」
お京は淋しく聞いた。そして自分に親切にして異れた姉の夫が、それ程慘酷な男とは思はれなかッた。
「ですれど、阿母さん、善夫さんがそんな酷い方では無いんでしやう、あのお婆さんが良くない方ぢやないの？」
「何方でも同じ事さ……眞個にお前の姉さんは不幸な人だよ。」
水鳥が馬車の上を羽叩きして飛んだ。ガアと一聲鳴くと、海の方にもそれに應ずる聲がする。道路の凹凸が酷いので馬車は激しく搖れる。車の轍が岩石か何かに乘上げた時には、母娘の腰は二寸も飛上ッた。
「酷いわねえ！」
「酷いねえ！」
暫らく無言――そして二人は思ひ思ひの想像に耽る。
馬車は切通しに這入ッて行ッた。少しく下り坂なので、車體は倘の事搖れる。轍の石に打突かる音が兩側の崖に響いて、何んとも知れぬ物凄い反響を起す。
「怖い音だわねえ！」とお京は身をふるはした。
「あゝ――」と母は消えて行くやうな幽かな聲を出して、未だ默ッて考へてゐる。お京は情ない感じにシミ打れた。
切通しを出ると、逗子の町が一目に見られる、家根といふ屋根は月の光を受けて白ッぽく輝き、そして河の流れに映ッた月が、幾つにも黃ろい破片に碎けるのが美しかッた。馬車は河の右岸の細い道を傳はッて暫らく走ッたが、やがて喇叭を吹いて橋を渡ッた。
細い町の角を幾ッか曲ッた。夏の頃になると避暑客で充される町も、冬は寂れてゐた。軒並の低い家々の戶は最早大槪閉されてゐる。母もお京も共に窓の外を見るでもなく、下を向いてポンヤリと考へてゐた。馬車が停車塲に着くと、母を先にして母娘は無言で降りた。月は青白い光を投げてゐる。二個の影が砂利を敷

かれた停車場前の廣場に長く横はる。

天井に釣るされたランプの光が幽かなので、構内はうす暗くそして陰氣であつた。十二月末の海岸の停車場には、汽車を待ッてゐる客は一人もない。懸時計が八時四十分を指してゐた。

「九時五分……と、未だ二十分以上も間があるわね。」とお京は母の顔を見上げた。母は靜かに點頭いた。そして二人は待合室の壁に近い所に、身躰を接近させ乍ら腰を下して。

「お前の姉さんは、眞個に可哀相な人だよ。」と母は又繰返した。「お前よく慰めて上げなければ不可せんよ。お前の姉妹は世の中に僅た一人しかゐないんだからね……あの姉さん一人なんだからね、いゝかい。母さんはもう、眞個に悲しくなつてね。」

お京は身をぐッと締められるやうな氣がして、溫和しく聞いてゐた。母は尙も言ひつゞける——

「溫和しい人なんだからね、自分の子を賞めるんぢやないけれども、妾は隨分一生懸命になつて育てゝやつた積りなんだよ。學校にゐた時分の成績も好かッたし……だけれどもね、一寸聞くと世間の人はさう思ッて呉れないからね、もう一生疵物になッて了うんだから不幸だよ、母さんはあの娘が可哀相で〱……。」

母は袂からハンケチを出して眼に當てた。お京もそれを見ると急に堪らなくなつて、母の胸に顔を押しつけて泣いた。そして姉の不幸が自分の身に思及ぼされて、「妾や死んだッてお嫁になんか行くものか!」と心の中で呟いた。

外に車の石の嚙む音がしたと思ふと、やがて止ッて、一人の商人體の男が鞄を持ッて待合室に入ッて來た。母は急いでハンケチで眼を拭いた。お京も急いで母の胸から顔を擧げた。

「お寒うございます。」と男は二人に挨拶して、「上りは未だでございましやうか?」と聞いた。

「さア、未だでございましやうよ。」母は落付いた聲で答へた。

男は二間ばかり離れた所に腰を下して、袂から煙草を出してマッチを擦ッた。四邊がパッと明るくなッたが直ぐ消えた。その光を母娘は思ひ〱に見てゐた。

「寒かないかい？」
「いゝえ。」
懸時計が九時を打ッた。驛夫が鳴らす鈴の音が、カランカランと人氣の少い停車場内に響き渡ッた。
暫くたつた…………
「もうソロ／＼向へ行つてましやう。」と母が立ッたのでお京も立上ッた。そして二人は改札口の方へ歩いて行ッた。
「寒かないかい？」と母は又尋ねた。
「いゝえ。」
お京は時計の針が五分過ぎの所に次第に近づくのを見てゐると、冬の夜に、一人で汽車に乗ッて歸つて來られる姉の身の上がツク／＼考へられた。
遠くから地響きのやうな音が聞え初めた。そして漸々近づくに從つてその音は大きくなッた。
母娘は顔を見合せた。
「汽車が來たんでしやうか？」
「さうだらう。」
二人は又顔を見合せた。（黄）

女の歌

女子文壇　若き婦人

夜の森の深き吐息に疲おびれて啼く鳥あらむ初秋の風　てる子
少女とは苦しきものよさゝやかに笑ふをさへも人の咎むる　たつ子
燃えく／＼て焼きつくるまで戀ふといふ心しあらば抱きたまへな　まさ子
君が庭に移されしより朝毎に花びら落つる紅薔薇かな　よし子
よろこびの失せたる胸とよろこびを得ざりし胸といづれ淋しき　まつ子
少女子の命のあたひ一人に思はるゝより大いなるなし　こと子

歸途

むらさき女

三人とも足並を揃へて、俯むいて歩いてる。——雨上りの畦道だ——。各自に今いつてきた、火葬場について異つた事を考へてる。泰さんは。人間も一度はあんな所へ行かねばならんかなあと、只考へた計りで、別に大した悲しい氣も起らず、茫然して白けた晩秋の野を見廻してゐる。けれど嘔吐を催し相な、あの火葬場の樣子を思ひ出すと……思ひ出した樣にぺつ〳〵と唾を吐いて、ぐつと反りかへつて、俯いてる右と左の二人の頸筋を見下した。道の兩側には、里芋や、きやべつが澤山植つてゐる。

「あ昨日の市では里芋が二貫だつたつけ。蓮は少し强氣味だつたが、何もう下る事は、わかり切つてるから買はずにおいた。まだ家には、相當にあつたから……それからコーッと……。」と考へ出した。泰さんは新倉町の角に店を出してる、相應な八百物屋なのである。四十二三位で苦勞したせいか、頭はひどい胡麻鹽だ。

「泰さん。貴方はどう思つて、火葬場を見てきたんですか。僕は一種云はれぬ感に打たれて、厭になつちまひました……。」

唐突にこう云つたのは、泰さんの左の方にゐる、親類の息子。學生だ。弱々しい神經質らしい目の色。いつても始終口の中で、何か呟いてゐるのが癖だ。

ごり〳〵の袴を窮屈そうにはき乍ら、思ひ出した樣にほつと吐息して、やつぱし俯むいてる。

泰さんは唯何氣なく、相鎚を打つ積りて、

「ほんとになあ。思ひ出してもぞつとする……胸糞がわるくて仕方がない……ゲーッ飯の時に思

出さねばよいがなあ……。」とチョッと眉をひそめる。
息子は吃驚したやうに、顔をあげて泰さんを見たが……こう弱者の嘲……と云つたやうな笑を見せて、
「泰さんはそんな方面に、厭な氣持になつたんですか……じや僕のとは全然ちがふ……。」
泰さんは意外の事をと云ふやうに……併し心では明日の市で買ふものを、考へ乍ら……。
「ふむ。そんなら美喜さんは、どう思ひましたい。」
「僕かへ……。」と險しい目附をして、今迄二人の話を唯だんまりで聞いてた、泰さんの右の三十二三の男に
「白山君。君は泰さんの心持以外に、何か思つたでせう……。」
白山君は烈しく瞬をしながら
「私や別に……何といふ事なしに、氣持の惡いと云ふ外に、何だか哀れの感を催しました……。」
三人はもう畦道がつきて、町の方に歩を運んでゐる。
泰さんは何だつまらない、と、思つて、町の景氣でも見やうと、あちこちの町に氣をつけてゐる。
美喜は白山君がそう云つたので、やはり泰さんより若くて、學問も想應にしたゞけあると、味方を得たやうに思つて、泰さんの横から放れて、白山君によりそひ乍ら、
「君はそんなに思つたんですか。僕もね……。」とじつと顔を見つめていふ。白山君は得たりと、
「そうじやありませんか。こゝいら邊の樣子を見てゐると、あの町はなれた所に、あんな厭な所があろうとは思はれませんさ。あそこへ行くものは、皆丸裸にされて燒かれるんですよ。私は何ぼ死人でも、燒くのは少し殘酷だと思ひますね。私はあれを見たら、土葬にしてほしいと考へましたよ……。」
美喜はじつときいてゐたが、眉がぴりゝつと烈しく動くのを片手で抑へながら、
「フーン。」と云つた。
頭の中で今白山君の云つた事に、符合する考へがないかと、あれこれと合して見る。がつちり合つたものは一つもなかつた。こう烈しい憧憬を覺えて、ぽつと頰に紅を潮して、

「そして……君はそれだけ……。」

白山君は意外の言に少しどぎまぎし乍ら

「それだけつて？まだいろんな事を考へましたよ。」

美喜は駄目だ〳〵。面を被つてる人達だ。今の若い者に先を越されるのが厭さに、よい加減の事を云つてるのだ、そんなて云つてるものが、何て私の心を滿すことが出來やう。あの竈がづらりと並んでる所へはいつた刹那の我驚き！逡巡がす程の死の匂！恨みに光つてるあのぎら〳〵の人の脂！青く光つた光！胸の底まて響き渡つた扉の音！

あゝ誰れか私のわかるやうに解釋して呉れる人はないのかなあ。あゝ情けない！この求めてる心に、滿足を與へて呉れる者はないのかなあ……とぐらぐらと體を左右にゆすぶつた。

白山君は氣もつかぬらしく

「美喜君はどんな感をせられたか、きかして下さい。定めし何てせう……。」

と笑つていふ。

美喜はむんずり笑もしないで

「何。駄目てすよ。併しあの時位、僕の眞面目にかへつた事はありませんてしたてせう。僕は死が人間最大の目的てある事を痛切に、感じた迄てす……。」

とよい位の事をいつて、思ひ出したやうに、さつさと足早に歩いた。（貢）

黄色

せめて今貝の一葉に盛るほどの言葉も聞かば死なんとぞ思ふ　みゆき

ふところに手をさし入れてうつむきて歸るゝ町ゆく淋しき人よ　たゞ子

わが心　く知るといふ乳母なれど押花すてし罪かろからず　とみ子

春の海　う凪ぎたる靜けさの中にれむれり白鳥の群　えい子

紫の無花果のつゆ吸ふごとき戀しぬ我は十八にして　はる子

古傷

みやま

五ヶ月程、郷里である山形の、何とか云ふ溫泉へ行くと云つて東京を出たきり、何の音信もなかつた友から、秋子は思ひ掛けなく手紙を受取つた。それも三錢切手を三枚貼られてあつた程、厚いのであつた。秋子は好奇心に驅られて大急ぎて封を切つた。が、讀んで行くまゝに寒氣のする程の恐怖に襲はれた。その手先きは微に顫へた。そして今度は腹立しくなつて來た。こんな馬鹿な人間だつたか、と思ふと、女の體面へ泥を塗られた氣持ちがするのてあつた。讀終つたまゝ、秋子は暫時、茫然とそれを眺めてゐた。そして自分の罪の報いだ、とも叫んて見た。

三十分も經つてから、秋子は氣拔けのした樣な顏をしてふら／＼と立ち上つた。家の人へは「一寸お友達の家まて行つて參ります、」と云つて置いて、着物も羽織も平常のまゝ電車へ乘つた。

薄曇りのした寒い日てあつた。本鄉の三丁目て降りて、臺町の方へ、手紙の中へ書いてあつた道筋を、考へ／＼歩いて行く。何とか云ふ產婆の家だと云つてあつたが、道筋を書いたのが間違つてゐたと見えて、なか／＼その番地へ出て來ない。同じ處を幾度かうろうろして、やつと內藤と云ふ表札を探しあてた。餘り奇麗てない、小さい潛戶を這入つて、案內を乞ふと三十五六の人の好ささうな女の人が出て來た。

「太田さんの被居るお宅は……」と、皆まて云はせず

「一寸お待ち下さい、」と云つて這入つて行つた。あれがその產婆なのかしら、と秋子は密かに考へた。

次ぎの間て、何かどさくさする樣子てあつたが、五分間も待せたかと思ふ頃、

「被入い、よく被入つてね、」

と、手紙の出し主てある友の芳江は玄關に立つた。久しぶりに逢つた人とも見えぬ、到つてそつけない、而も何處やら周章てた樣な、落付きのない態度てある。

秋子は少し異しいと思つたが、勉めて笑顏て

「久濶！」と云つて向ふの顏をうかゞつた。芳江は

「ちよいとね、」と、聲を低めた。

「田村がゐるのよ、だけどいゝわ、お上んなさい、」

秋子は、すべての誠心を採み苦茶にして仕舞はれた樣な不愉快を感じた。けれども秋子は、柔順に上つて

行つた。驚くてはあるまいか、芳江の腹はもう臨月かと思はるゝ程脹れてゐた。秋子はそれを見るのが、慘酷な樣な氣がして、成るべく見ない樣に勉めた。

「隣りに田村がゐるの、だけど今出て行くから、それから話しませう、」と、低聲で云つた。

隣りの部屋で、頁を繰る音がさら〳〵と聞えた。芳江は何物にか心を奪はれてゐる樣な、落ち付かぬ樣子をしてゐる。眼には不安の色が動いてゐる。秋子は勉めてその眼を避ける樣にした。そして何か話の緒を探し出さうとあせつた。秋子は微な苦痛を感じて、唇を噛んでゐた。

「よく分つてね、一寸分りにくい處でせう、」

芳江は白粉垢の付いた襟を、一寸引き合せて、てれかくしの樣にかう云つた。左の手は、大きな腹を隱すかの樣に、斜に膝の上に置いてゐる。相變らずよく肥つて、是れて苦勞のある人とは、どうしても見えぬ。

「一寸まごついてよ、あなたの書き方が惡いから、」

「あらさう、惡かつたわねえ、…………鳥渡、私失禮してよ、御免なさい。」

芳江は思ひ付いた樣にかう云つて坐を立つた。

秋子は狐にでもつまゝれた樣な、心許なさを感じてそつと邊りを見廻した。南向きの可成日當りは好ささうな部屋であるが、裝飾と云つては額一つない、切り貼りした障子が處々破れて、冷めたい風がヒユー〳〵吹き入る。「一體どんな生活をしてゐるのであらう、」と秋子は少し薄氣味惡くなつて來た。

隣りの部屋から誰れやら、足音あらく出て行つた。と、一緒に間の唐紙を開けて、

「秋子さん、此方へ被入いな、」と芳江が云つた。

六疊の座敷の床の間へ、ノートと「刑法……」とか云ふ四五冊の法律書を積み上げてある外、何一つない殺風景な部屋の片隅へ、粗末な机が置いてある。芳江はその前へあつた座蒲團を取つて秋子に進めた。

「今ね、無理に出して遣つたの。仕樣がないのよ、秋子さんに何を話すか聞いてるんだつて動かないの、」

と愚痴らしく云つた。

「まあそんな事をしていゝの？ また後で困るんぢやないの？」

「大丈夫よ、千駄木の方にも下宿があるんだから、」

と云ひ〳〵一寸心許なささうな顏をした。が直ぐ又

「どうして田村はあゝ廻り氣が強いのだらう、ほんとにもう、嫉妬にも懲り〳〵だわ、」

半分は獨り言の樣に云つたその顏の、何處となう、得意の色が漂つて見えた。

　秋子は心持ち眉根を寄せた。そしてあざける樣に「墮落！墮落！」と心の底の方て叫んだ。

「あんな手紙を上げて驚いたてせう、けども誰れにも云はないて頂戴！、全くあなた一人なんだから、」

「そんな事大丈夫よ、それより、是れからどうするおつもり、」秋子はぢれた樣な調子て云つた。

「だからどうすればいゝかと思つてるのよ、」

「ぢやあなたのお母樣は何う被仰るの、」

「それがね、田村の仕方が餘り男らしくないつてね、そんな人には意地てもやれないて云ふの、そりや、お母さんだつて無理はないわ、ねえ、」

　と、芳江は全然、人の噂てもしてゐる樣な調子てある、

「ぢや田村さんの方は？」

「田村はね、こんな躰になつたのも合意の上だから、自分に罪はないつて云ふのよ、だつてそりや實際、田村が卑怯だわ、人をあんな非道い目に遇せて置いて、」

　と、何か思出したらしく芳江は急に伏向いて、火箸て灰の中を、コツ〳〵と突いた。

「ぢやもうあなたのお心一つだわ、」

「そりやそうだけど私だつて苦しいわ、こんな躰になつて仕舞つて……、田村だつて實際困つてるのよ、苦學生だから。學校の方だつて出たり出なかつたりよ、」

　隔ての唐紙ががく〳〵と鳴つた。芳江は驚いて顏をあげた。不安らしい眼付きをしてそつと唐紙の方を見た。が、つと立つて唐紙をあけて邊りを見廻した。勝手の方で、わつと子供の泣く聲が聞えた。芳江はやつと安心したらしく、がつかりした樣な顏をして、

「吃驚したわ、田村はよくあんな事をするのよ、そつと歸つて來て立聞なんかして、あとで散々怒るのよ、油斷もすきもなりやしない！」

「まあさう？」と云つたが、秋子は何うしてか、ちつとも同情の念が起らない、起らない許りか既に我々とは階級の違ふ下の人間の樣に思はれて、何んだか厭やてたまらなくなつた。是れが昔し同窓の友てあつたと云ふ事が、寧ろ疑しい氣持ちがした、

「ね、何うしたらいゝてせう、私、間に狹まれて全く苦しいのよ、此の樣子だつて見て頂戴、全く是れつ切りしかありやしないの、」と、訴へる樣に秋子の顏を見

た。

秋子は、「ふと私は欺されてゐるのではないか、何かの道具に使はれて居るのではあるまいか、」と云ふ考へが、むらくと沸いて出た。と、驚いた樣にそれを否定しやうとした。がそれと一緒に取り返しの付かぬ事をした樣な、不快と不安が伴つて起つた。

秋子は默つて下を向いて仕舞つた。

「どうかなすつたの？」芳江は心配らしく訊いた。

「いゝえ、」と、秋子は矢張り默つてゐた。

「ちよいとね、私全くあなた一人なのよ、こんな事を打明けるのは。田村が聞いたらどんなに怒るでせう、」と芳江はおろくした聲で鼻をつまらせた。

秋子はふとすまぬ事をしたと思つた。て直ぐ氣を取り直した。そして勉めて平氣に、賴しげに、

「なあに、一寸外の事を考へてゐたの……、何にしてもお心一つよ、あなたのお心が定まつてからまた御相談に載りませうよ、」と云つた。

間もなく秋子は罪人を見舞ひにでも行つた樣な氣持がして、其の家の門を出た。そして、何だか肩身の狹まるのを覺えた。

芳江からは以前と違つてしきりに手紙が來た。それには皆自分の悲境を訴へる樣な事許り並べてあつた。而も秋子は何と云ふ事なしにだんく可愛さうだと思へなくなつて來た。たまに慰めの手紙を出す位で、ついぞ訪ねても見なかつた。

一月許り經つた頃、また芳江から大至急親展と云ふ手紙が舞込んだ。急に八圓許り金が入るから何とか都合して吳れないか、八圓が出來なければ五圓でいゝ。それも駄目なら三圓でも二圓でもいゝとしてあつた。そして是非くお目にかゝりたいから、何とか繰り合せて來て吳れ、こんな躰でなければ此方から伺ふ處であるがと、書き添へてあつた。

秋子は豫期した事が、とうく玆まで運んだなと、云ふ樣な感じがした。そして自分が何んでもそのお金を工面して遣らねばならぬ約束がある樣な氣持ちもして、殆んと無意識に財布を調べた。財布の中には現金で六圓と少し許り這入つてゐた。

「是れでいゝ、」

秋子は五圓札一枚、拔取つて紙に包んだ。

あくる日秋子が、再び本郷臺町の産婆の家を訪ふた

時には芳江は陣痛に苦しんでゐる處であつた。
それと聞いて直ぐ玄關から引き返さうとするのを、「一寸でいゝから是非逢ひたい、」と云つて引き戻された。

「あの手紙見て下すつて？」

と苦しい中にも顔色をうかゞふ樣に芳江は云つた。

「え、でも皆は駄目よ、五枚だけ！」

と、秋子は產婆の手前を憚つて、耳の傍で小さく云つた。

「どうも有難う、机の中に入れといて頂戴！」

机の上には、脫脂綿と「ガーゼ」が積んであつた。引き出しの中には大學の試驗用紙と束髮の飾りピンがころがつてゐる外、何んにもなかつた。

次の間には田村が仰向けに寢轉んでゐた。

其日の夕ぐれ田村の手續で安產のしらせが來た。

秋子はそれつきり芳江を訪はなかつた。二十日許りも經つたかと思ふ頃、芳江から手紙が來た。幼兒は或會社員の家へ養女にやる事にきめたから、その前に是非一度見に來て吳れといつてあつた。

けれども秋子は何とも返事を出さなかつた。それからまた一月も經つた頃、いよいよ田村と別れて牛込の實家へ歸つて來たから遊びに來て吳れと云つて來た。

それにも秋子は返事を出さなかつた。

半年目に秋子は途中で芳江の母に逢つた。

「芳江さんは？」と聞くと、

「あれの馬鹿にも困つて仕舞ひますよ、又田村に欺されて夜逃げをして仕舞ひましたよ、」

とあざける樣に低聲で云つた。

家族

野の花

停車場の詰處を出た藤吉は線路傳ひに我家へ向つた。

十一月の末、風の吹く夕である。空は一面に低く曇つて、國境の連山さへ今日は見えない。町はずれに廣く塀を圍ぐらした製絲場の煙突からは毒々しい煤煙が吐き出されて、それが又、直ぐ風に吹き飛ばされて、畑の上を低う匍ふて行く。電線は絕間なく風に鳴つた。

藤吉は此處の停車場に線路工夫として十年餘りも勤めて來た、女房お源との間に子の無いところから七年前其の頃十四であつたお梅といふ娘を貰つてきた、手

足の丸々と肥えた色の白い丸顔の娘であつた。以前から町の製絲場に通つて居たので、此方に來てからも矢張續いて通勤させる事にした。

去年の夏の事であつた。例日のやうに藤吉は夕方仕事から歸つて來た、蚊のブン／＼顔に集かる裏戸口から這入つて來たが最う暗くなつてゐるのに、ランプさへ點けてない。

「お源」と呼んで見た、返事がない。

「お梅」これも返事はない、

「二人共何處へ行きやがつたんだ」とぶつ／＼、言ひながら足を洗つて上つた、臺所を搜してランプを持出した。

其處へお梅が手に味噌漉しを提げて歸つて來た、藤吉は見るより聲を怒らして、

「どこへ行つて居たんだ」

お梅はほつれ毛を掻き上げながら、「何處へも行くものかね、今製絲場から歸つたばかりでお豆腐を買いに行つたんだァね」

「お源は何處へ行つた、」

「どこへ行つたか、妾の歸つた時から居ないよ」

藤吉は默つてランプを點けた、やがて二人が夕飯を濟まして了つても、未だお源の姿は見えなかつた。

「オヤ」と暫くしてお梅が突然聲を立てた、「こゝにあつた行李が一つ無いやうだよ」

藤吉も驚いて立つて二人でよく調べて見た、襤褸切れの入つて居た中形の古行李と貧しい中でお源が造へた四五枚の着物に、藤吉とお梅の他處行の着物迄が無かつた、行李の中の襤褸切れは後で見たら臺處の隅に放り出してあつた。

お梅は自分の着物迄が無いと知ると泣いて母を罵つた、而して畢竟藤吉が意氣地が無いから、這んなとされるのだと藤吉に迄毒づいた。

その二三箇月後からはお梅と藤吉との間柄が普通ではなかつた、然し彼等の仲間に有りがちな事で誰も兎や角云ふものはなかつた。

裏の井戸に足を洗つて藤吉は建附の惡い戸を開けて入つて來た、見ると、茶の間の長火鉢を中に藤吉と同じ驛に勤めて居る驛夫の加藤と云ふ若い男と、お梅とが何かヒソ／＼話して居る。紙袋の儘駄菓子が其處等に放り出してある。

「ヤお歸りか。」と加藤は居坐ひを直した、左倚りに分けた頭の髪が美麗に波を打つて居る、お梅は言葉を掛

けやうともせず加藤のらしい朝日の煙を吹いて居る。

藤吉はジロリと二人を見たきり直ぐ奥の四疊半に這入つて了つた、「お梅。」と暫くしてから藤吉は聲を掛けた、「何んだよ」二人は未だ聲を秘めて續けて居たのだ、時々は調子外れに大きな聲で笑ひ轉げる。

「夕飯は何うしたんだ。早く食はせねえか」

「勝手に出して喰つたら好いぢやないか」

「なにッ」と藤吉は四疊半を出て來たが、直ぐ思ひ返して臺處の方へ行つた、戸棚を開けてゴト／＼と膳など探すやうてあつたが、やがて裏口から何處へか出て行つた。

「最う少し可愛がつて遣つたら何うだね。あれでもお前の亭主ぢやねえか、一度は可愛がつた時もあつたらう」と加藤は眼元に笑つてゐる。

「何を云つてるんだアね那麽奴ア何うしたつて關ふもんか」

「呆れた薄情ものだなア」

「那奴ア畜生だ」

「俺等も些つと氣を付けなきア矢張那麽目に會ふんだね」

「厭だよ此人ア」

加藤は矢張りニヤ／＼笑つて居たが長持の上の枕時計を見て、「最う六時だ、ソロ／＼歸りませう」と帽子を取つて立ち上つた。

「最う歸るの、未だ好いぢやないか」

「いや歸りませうこれでも待つてる人があるんだからね」

「莫迦にしてらア」とこれも立ち上つて「それからね今度來る時あれを忘れちや厭だよ」

「好いゝだらね、承知してらア」と加藤は雪駄をチラつかせながら歸つて行つた。

お梅は又火鉢の前に座つたが傍らの紙袋から駄菓子を一つ掴み出してポリ／＼と前齒で咬み初めた、身體が萎え切つたやうて、何一つするにも憶劫で耐らないやがて夜具を一枚引掛けて、ランプも點さず暗い中に轉寢をして了つた。

其の夜晩く藤吉が少し酒氣を帶びて外から歸つて來た時にはお梅はもう本當に床を取つて寢て居た、油煙の上つた、三分心の釣ランプの下に藤吉は暫く身じろぎもせず座つて居た、風は夜に入つて益々荒れて此の小さな家を搖かしてゐる。

落し物

山脇美那尾

西山の櫻は、盛りだと云ふので、殊に日曜の事だから、大分人も出たらしい。
暖い日だ。
妾は花見なんかと浮れ廻るのも余り好ましく無いので、祖母樣と、お母樣と、兄上と妹とが出懸けた後の留守居をしながら、椽先で新聞や雑誌を彼方彼處と眺め初めた。これでも昨年遊びに行つて樂しかつた事が心の中で彷徨する。
　庭先の、平ラ目な苔の生へた石からは夢の樣な陽炎が立つて居る。脊はホカ〳〵として陽炎が立つて居やし無いか知らと思はるゝ位。椽の下では、此間產きたまだ目の間かぬ子犬が三匹クウ〳〵と、うごめいて居る。
　納屋續の厩からは、馬が首を伸べて、痒相に鼻を柱にコスリつけて居るのが、起つた拍子に見えた。
　妾は色鉛筆を取つて來て女子文壇の面白いと思つた所へ圏點を付し初めた。

と、玄關先で「チリン〳〵」と鈴の音、妾は直ぐお遍路さんだと知つた。
「南無大師ヘンショーヲー金剛……チンパラ、ハラバリタ……」
「空海の――心の中に咲く花は――彌陀より外に散らす者無し――……人間の心の中に咲く花は……」
　妾は驚いた。何と云ふ美しい――優しい――若々しい聲音。妾は妙奇心に驅られたと云ふよりか、急になつかしい樣な感じがしたので、失禮な樣にも思つたが椽の端から庭口の折戸を開けて
「濟まないが此方へ……」と招じた。
　三十路に足るか足らぬかの、痩せ方な少し頬の落ちた面長な顏、クッキリ白い表情に富んだ顏。眉は少し薄いけれども三日月形、眩し相な瞳が澤々しく光つて如何見ても美しい。着裝は左程汚なく無いが、破れた白い脚袢から脛が少し顯れて居るのが痛々しい。
「御免なさい……」と這入て來て、雨垂へ植てある、――妾も名を知らぬが、柔い髯草の上へ脛を突いて頭を下げた。妾は勿體無い樣な感じがした。
　と、其後へ、六歳か七歳位の女の子が、甲斐〳〵しく脚袢を穿いて、ポカンと停つて妾をジッと見詰めた。

妾は初めから一人だと思つて居たに……お母さんに似た本當に愛らしい子、妾は五錢銀貨を二枚取出して、

『一枚はお子供に……』と與へて

『失禮だがお國は何處？』と問ふた。

『私は伊勢の桑名の者ンてして……』

『マア如何してお遍路やなんかにお出成さるの。』

『少し……。』

女は俯向いて言ひ淀んだ。と停つて居る子供の後の折戸口から、勢込てエスが飛込んで來たが、子犬の居る椽下へ入つたかと思ふと、椽端迄出て來てウー、ウーと怒り始めた。

子供は急に色を變へてワッと泣き出した。母親は振向いて子供を抱いた。妾はエスを叱つたけれども益々怒つて、早も喰て掛り相に狂ひ廻る。

『御免なさい……有難ふ樣て御坐いました……。』

女は狼狽しく去つた。妾は氣の毒とも何とも云はなかつか。

其夕方てあつた。一同が歸つたので、お庭の掃除てもと思つて箒を持て庭へ出ると、驚いた。縞目も分らぬ程汚れた小形な蟇口が落してある。無論先刻の女遍路が落して行つたものだ。妾は濟まぬと思つたけれども取上げて中を改めると、五錢銀貨が二枚と一錢銅貨が四枚ぎり、別に小さな奇麗に疊んだ折紙が入つて居るので、つい姓名ても書いて有りはすまいかと思つて取出して見ると、再驚いた。離縁狀てある。男の名は安藤清、女の名は隅田まさ子としてある。

妾は直車夫を雇つて女遍路を索させたけれども明ら無かつたので、警察へ届けて出た。

ひる前

小栗ますみ

「姉樣はいつもお若いですわねえ。」と一番末の子に乳を呑ませながら上り框に腰をかけて、どんよりと疲れた目におせき樣はじつと私を見る。

「そふても無いわ、もふ可いお婆樣になつてよ。」と私は何だか濟まない樣な氣になつてこう言つた、實際私はおせき樣よりは二つの歳上ながら親の傍て我まゝばかり言つて暮して居る所爲かおせき樣と二人並ぶと、誰れが見てもあべこべに私の方を妹と見られるのである。

鏡臺の前てとかして居た髮をサラリと、ゆすつて、

「ホラ、御覽なさいな、髮だつてもこんなに少なくなつて。」
「まあ、それて少ないなんて被仰ると罰が當りますよ、私なんか。」と煩さそふに前からも後からもお河童の樣に垂れ下つたおくれ毛を邪けんに、かき上げながら。
「子供を持つたんびに脫けつちまつて。」「子供を持つとぬけるつてねえ。」「エヽ、それは姉樣、ひどいですよ。」「可い毛てあつたのにねえ。」「惜しいことねえ、だけどすぐ又元の樣になるてせふ。」「さあ、どふですか。」と氣にも留めぬ風て、チユ〳〵とうまそふに吸つて居る乳を子供の口からボツリとはなして、「さあもふ可いよ、澤山、お腹が大きくなつたてせふ、ホーラね。」と膝の上に立たせる、子供は腹がふくれたのかにこにこして居る。
「母ちやん、うまいつ子。」と言ひながら父親の下駄をパタリパタリ引きずりながら上の方の子が這入つて來た、さあちやんと言つてことし六つ、父親に似て目のクリ〳〵とした可愛いゝ子だ、顏にも手にも前掛にも土を一ぱいつけて、それて平氣て居る、
「ねえ。」と頭を傾げてねだる。
「まあ、この子は……。」とおせき樣は思ひつきり眉をひそめて、
「何てすねえその土は、今朝仕變えたばかしぢや無いか、どうしてお前はそんなに惡戯ばかりするんだらふね、お隣のはあちやんなんか御覽一度仕變えたら五日も六日も、きれいなのをしてお出てだ、お前なんか半日と持たないんだから本統に。」と一寸息をついて。
「そんなに汚してばかし居るんなら、着物だつて何だつて母ちやんはかまつてやらないから、勝手におし、本統に可いものを着せたつて何したつて、張り合も何もあつたものぢや無い。」と、やけ氣味に火鉢の傍にあつた、煙草の箱を煙管の先て引きよせて、一服吸つては邪けんに煙管の先を叩きつける。
前掛を汚して來た爲に母樣の御機嫌甚だ斜めてあつて、うまいつ子どころのさわぎて無い、今にも頭へ手の御見舞が來そふなので可哀そふに、さあちやんは庭の隅の方に小さくなつて居る、私もハラ〳〵する、しかし幸とさあちやんが、おとなしくして居てくれたので何事もなく濟んだ。
「さあ、自分一人て遊んてばかし居ずに、春夫をおんぶするんてす、今お乳を呑んだばかしだから長く、お晝まて行つて來るんだよ。」とつい後にあつた男帶の、

なわの樣になつたのを取つて、しつかりと背中に結ひつけて、「さあ。」とつきやる。

六つやそこらで、私でさへ半時間とは抱いて居られぬあの重い子背負されて馴れて居るからとは言ひながら、よくまあ泣きもせずに平氣て遊びにゆく、おせき樣もよく心づよく、と私は呆氣にとられて見て居た。

「アヽ――。」とおせき樣は大きなあくびをして。

「隨分煩いでせふ姉さん、私なんかわが子でさへもふ煩くつて煩さくつて泣きたいことが始終ありますよ。」

「まあ、飛んでも無い。」と私はおどろいて。

「そんな事を言ふものでは無いわ、その代りに年をとつて早くらくが出來るわ。」

「どふですか、知れたものぢやありません。アヽそれはそのまゝに置いて下さい、私も一寸とき上げますから。」と私が鏡臺を片つけよふとするのを止める。

「梳いて上げませふよ。」「イヽエいゝんですよ、どふせこんなですもの、ぐる／＼卷き上げて置けば可いんです。」とにじり上つて髮をときはじめた。

私は手を洗つて來て火鉢のそばでお茶を呑みながら今度はおせき樣の横貌をつく／＼と見入る。

まあ、あのやつれたこと、お嫁になる前は、肥つて肥つて次亞燐の廣告だつてよく叔父樣が笑はれた位、自分でもおそろしく可厭がつて瘠せる藥なんか、ひそかに買つて來て呑んで居たといふ、あのおせきさんとはまるで別人の樣な變りよふ。

げつそりと削つた樣な頰、些かのうるみも持たぬ目、血の氣の無いうすい脣、二十二の女盛りの美しさが何所に見られよふ、人の子の母てふ溫みが何所に求められよふ、女といふものはその境遇によつてかくまでに姿形の變りはてるものか、と思ふと或る心細い寂しい感じがひし／＼と押しよせて來る。

今のこの若々しいおせき樣に羨まれる私の姿もこいくばくの命があらふ、やがては、と覺えず身ぶるいして可厭ないやな思ひに閉されて。オヽ早く明日は用事を片づけて母樣の傍へ歸りませふ。私はついと立ち上つて表へ出て見た。

場末の町の晝の間はみな稼ぎに出て割合に靜かだ、向ふ側の普請をして居る塀のそばで、どれほど面白いのか二三人の友達と何やら興じあいながら、一生懸命に土いぢりをして居るさあちやんは今前掛をよごして叱れたのも、背に負つて居る子の重いのもわすれたかのよふに、背の子供も亦快よさそふにねむつて居る。

『若き婦人』の後に

記者

▲總評 『若き婦人』一部は名の示す如く、現代の若き婦人の代表者である、今の若き婦人は何んな境遇に居り、何んな思想を抱き、何んな才力を持て居るかと云ふことは、少くも本誌一部を讀破すれば窺ふことが出來る。記者は其告白なり、感想なりを一讀して、現代の女性を通じて、或る壓迫を感じつゝあることを最も痛切に感じた。中には迎合主義の從順なる婦人もあり、極端なる破壞主義の反抗者もあるが、要するに青春の婦人が動搖して居ることは確實て、其現象は最も歷然と本誌に表はれてゐる。就中結婚に對する不滿矛盾、空虛を訴へて來たものゝ甚だ多いことは、注意すべき現象てあらうと思ふ。只單に漠然と結婚に反對すると云へば根抵も何もない處の、一種の流行的反感の口眞似に過ぎないかも知れぬが、多少の識見と、才能と、正しき人格とを具備したものが、結婚の不安を唱ふる所以は、一に個人性を重んずる時代思想の反映とも見ることが出來やう、此事は一個の婦人問題として、關聯する處も甚だ廣いから他日機を見て、記者の意見なり、識者の說なりを發表したいと思つてゐる。

▲創作 第一等に當選した鈴木春子さんの「夜の淺草公園」は立派な創作である、其他の散文中にも創作ともつかず、感想ともつかず一種の告白文が多く、純乎たる創作の少いやうに見えるのは、本誌編輯の體裁上餘儀ない次第だが、それらの區別は一に讀者の眼底に映るまゝに任せて置く。

▲等位 入賞者五十名を選評して更に等位を極めるの困難なるは云ふまでもない、詩歌の類にして五等六等にあるものが、必ずしも五等六等と云ふ譯てはない、詩歌中の一等二等と稱しても可いので、本號全體の性質が、一種の告白文に重きを置いてあるから、自然創作の等位が降るけれど、之を以て直ちに優劣を云々する譯にはゆかない、此の點は讀者及び寄稿者に於ても諒とされたい。偖て其等級は左の通りてある。

一等

夜の淺草公園　鈴木春子（府下）

二等

二十才の聲　加藤箠子（本郷）

三等

ひとりごと　さつき（麹町）

デヤレスト　下枝子（府下）

時代に覺まされたる一人　なのりそ（府下）

四等

隣の人（小說）　松田うめ子（相摸）

富士の裾野に於ける外國人一家の夏期生活　野ばら（府下）

戀を捨てゝ運命に服從せんとする心の渦捲　霞子（下谷）

破りし柵　若杉小夜子（下谷）

迷ひ過ぎて婚期を逸したる政治家のお孃さん　雪輪（東京）

五等

繼母（小說）　前島優梨子（信濃）

成るは嫌なり想ふは成らず　白浪女（伊勢）

樂に受けたる文部省檢定試驗　つゆくさ（小石川）

お才さん　蒲原早蕨（越後）

若い女　川松はまじ（東京）

六等

結婚後に發揮すべき女性の權威　和泉花葉（陸中）

暗中の文字（詩）　夢殿（府下）

若き憂ひ（歌）　伊達まつ子（羽前）

男の世（歌）　石上照子（信濃）

若き夫と共に味はふ生活の苦痛　若き妻（四谷）

子爵家に乳母を世話す　細野鈴蘭（近江）

肺病に罹りし實驗談　みちえ（日本橋）

晴着の見立　なゝしくさ（東京）

兄を氣遣ふ　朝井千とせ（本郷）

秘密の頁　千鶴子（横濱）

憐なる女中の身の上話　白菊子（神田）

賞金の鉢卷　長曾我部菊子（阿波）

夢　江森美子（麻布）

汽車の音（小說）　赤崎あい子（麻布）

歸途（小說）　むらさき（

七等

快樂（歌）　山村龍子（伊賀）

手枕（歌）　原田寧子（名古屋）

織女の行方　草　香（上總）
夕の星の冷たき笑ひ　夕　ほ　し（麻布）
新　葉（詩）　田中落葉子（兵庫）
靜なる霜月の一夜（詩）　山田かめ（丹波）
つながれたる女　紅　芙　蓉（本郷）
土佐女學校の現在　寂　靜　子（土佐）
伊豆の温泉　平塚白百合（牛込）
緑の沈默（詩）　野　の　花（丹波）
女學生と新聞紙　春　　鳥（東京）
女學生氣質　櫻　　草（伊豆）
獨身の私が媒酌をした記　篠田華水（岐阜）
家事實習會　子（山形）
桃太郎の感化　玉島せき子（播磨）
卒業後の悔　花　子（麻布）
わが決心を姉様に（書簡）　深山の櫻（因幡）
心あかせし友の許に（書簡）　ちくさ子（京都）
春の家（俳句）　普門こう子（下總）
春曙抄（俳句）　鈴木やす子（伊豆）

等級は右の通り、但し順序は不同てある（豫定の賞品發送は三月下旬のこと）

▲繪畫　スケッチは例の山中古洞氏に選拔を煩はして、本誌に發表してある通り一等以下十人あり。

表紙並に口繪も多數に集りましたから、竹久夢二氏に選拔を乞ひ、其結果は左の二人になりました、最も何れも一等と云ふ譯にゆきかねたので、二等以下の報酬を呈します

表紙　玉川すゞ子（水戸）
口繪（早春）　三好とみ子（讃岐）

▲寫眞　入選者の寫眞も再度の入選作家には、別に請求しなかつた、今回新しく入選した人の中でも、いろ〱差支あつて、寄送されたのは卷頭掲出の『花冠』の十一人である。

第二增刊　**都會の婦人**

▲次の增刊は『都會の婦人』と題す
▲正しき都會趣味を鼓吹せんとす
▲一般の投稿は例の如く自由
▲編輯の方法は面目一新
▲別項の廣告に就いて詳細を見よ

投稿規定

▲原稿は一切女子文壇社宛に送ること▲原稿には女子文壇原稿の文字を書添えて下さい▲文字は能く分るやうに書くこと▲小說と詩と短文には振假名をつけること▲小說は二十四字詰八十行以內、散文は同字詰三十行以內、日記、論文も同上、書簡文は同字詰二十行以內、詩は行數制限なし、和歌と俳句とは一人一首限り、短文は十六字詰七行限りとす▲誌友くらぶの外はハガキの投稿を許さず、凡て半紙、原稿紙、罫紙等に限る▲圖畫は二寸に三寸の大きさにて薄き日本紙に限る▲投稿は凡て女子に限る▲投稿は每月十五日堅く締切る

○女子文壇投稿各種 懸賞定額

（甲乙丙の各欄を通じて最も優秀と認むる作物ある場合に之を呈す）

▲特別賞金五圓

▲甲種（短篇小說、散文）
天賞金參圓。　地賞金壹圓五拾錢。　人賞金七拾錢。

▲乙種（家庭日記、新論文、書簡文、詩）
天賞金貳圓。　地賞金八拾錢。　人賞金四拾錢。

▲丙種（和歌、俳句、短文、餘興、圖畫）
天賞金壹圓。　地賞金五拾錢。　人賞金貳拾錢。

◉各種とも金壹圓以上の價格當選者には相當の呉服物。小間物。文房具。日用具等凡て物品にて贈呈す壹圓以下は便利圖書切符を以て贈呈す

◉賞品發送は作物發表の翌月末日に贈呈す、（但他人の作物を剽窃したるものは無効とす）

社告

女子文壇定價明細表

振替貯金口座　東京第壹七貳九番

○定期發行分　▲▲▲▲每月一回（一日定期發行）

一册（一回分）	定價金拾五錢	郵稅一錢五厘	計金拾六錢五厘
三册（三月分）	同前金四拾三錢五厘	同四錢五厘	計金四拾八錢
六册（半年分）	同前金八拾四錢	同九錢	計金九拾三錢
十二册（壹年分）	同前金壹圓五拾六錢	同拾八錢	計金壹圓七拾四錢

○臨時增刊分　▲▲▲年四回（二月、五月、八月、十一月臨時增刊）

一册（一回分）	定價金貳拾錢	郵稅一錢五厘	計金貳拾一錢五厘
二册（半年分）	同前金三拾八錢	同三錢	計金四拾壹錢
四册（壹年分）	同前金七拾貳錢	同六錢	計金七拾八錢

○定期發行及び臨時增刊とも全部　▲▲——十六回▲▲▲

四册（三月分）	定價金六拾三錢五厘	郵稅六錢	計金六拾九錢五厘
八册（半年分）	同前金壹圓二拾二錢	同拾貳錢	計金壹圓三拾四錢
十六册（壹年分）	同前金貳圓二拾八錢	同二拾四錢	計金貳圓五拾二錢

▼申込注意　振替にて拂込む時は誌代の外に貳錢登記料增すと、郵便爲替は中橋和泉町局、郵便切手代用は必ず壹割增（收入印紙謝絕）、凡て前金拂込に限る

廣告料金

特等	上等	普通
一頁三十圓	一頁廿五圓	一頁廿三圓
半頁……	半頁……	半頁十二圓
部數多く有効に比し無類の割安		一行四拾錢
〆切 每號十五日前		

特約取扱○日本電報通信社○明治廣告社○弘報堂○博報堂○東京勉强社

明治四十三年二月十三日印刷
明治四十三年二月十五日發行

若き婦人　定價金貳拾錢

東京市京橋區大鋸町十一番地
編輯兼發行者　野口竹次郎
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
印刷者　石川金太郎
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
印刷所　株式會社秀英舍

不許轉載

東京市京橋區大鋸町十、十一番地
電話（本局六〇七番）
發行所　女子文壇社

特約賣捌元　○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂

（明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可）

本號に限り 定價金貳拾錢 郵税壹錢五厘